

金沢城史料叢書 40

金沢城公園整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書 15

金 沢 城 跡

—鼠多門・鼠多門橋Ⅱ—

2021

石川県金沢城調査研究所

金沢城史料叢書 40

金沢城公園整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書 15

金 沢 城 跡

— 鼠多門・鼠多門橋 II —

2 0 2 1

石川県金沢城調査研究所

例 言

- 1 本書は、石川県金沢市丸の内地区内に所在する史跡金沢城跡の埋蔵文化財確認調査報告書である。
- 2 調査原因は、金沢城公園整備事業(鼠多門・鼠多門橋復元整備)であり、事業を所管する石川県土木部公園緑地課から石川県教育委員会事務局文化財課への依頼に基づき、石川県金沢城調査研究所が文化財調査を実施した。
- 3 本書は、平成26年度(2014)～30年度(2018)の発掘調査の成果を取録したものである。先に刊行した「鼠多門・鼠多門橋1」では、鼠多門復元整備に係る遺構を中心に報告した。本報告は第2分冊にあたり、出土遺物や下層遺構及び鼠多門橋について報告する。
- 4 現地調査の期間(発掘作業)と担当職員は次のとおりである。

平成26年度(2014)

期 間 平成26年(2014)年9月1日～10月31日

担当者 柿田祐司(主幹)、荒木麻理子(所主査)

平成27年度(2015)

期 間 平成27年(2015)5月21日～12月18日

担当者 柿田祐司(主幹)、加藤克郎(調査研究専門員)、佐藤神武(嘱託)

平成28年度(2016)

期 間 平成28年(2016)5月16日～12月16日

担当者 柿田祐司(主幹)、加藤克郎(調査研究専門員)、荒木麻理子(調査研究専門員)
佐藤神武(嘱託)、坂本俊(嘱託)

平成29年度(2017)

期 間 平成29年(2017)4月26日～12月15日

担当者 柿田祐司(主幹)、大西 颯(調査研究専門員)、加藤克郎(調査研究専門員)
矢部史朗(嘱託)、大川拓也(嘱託)、北島 俊(嘱託)

平成30年度(2018)

期 間 平成30年(2018)4月26日～8月31日

担当者 柿田祐司(主幹)、大西 颯(主幹)、加藤克郎(調査研究専門員)
矢部史朗(嘱託)、大川拓也(嘱託)、北島 俊(嘱託)

- 5 出土品整理は、平成28～令和元年度に公益財団法人石川県埋蔵文化財センターに委託して実施したほか、直営で遺物の写真撮影及び遺物の補足実測を行った。
- 6 報告書の作成は、柿田祐司(担当課長)、大西 颯(主幹)、荒木麻理子(調査研究専門員)、加藤克郎(調査研究専門員)が担当し、第4章第5節(6)レンガは大西、第5章第2・5節は荒木、同章第3節・第4節7は加藤が執筆した。第6章第2節は、(株)パレオ・ラボによる分析報告であり、文書中に執筆者を記した。それ以外の執筆と編集は柿田が行った。
また、遺物写真撮影、遺物実測、図版等作成については、矢部史朗(非常勤職員)、笠松一美(非常勤職員)、供田奈津子(非常勤職員)が補助した。
- 7 調査に関する記録・出土品は石川県金沢城調査研究所で保管している。
- 8 調査・報告にあたり、以下の機関・個人の指導・助言、協力を得た。

文化庁文化財第二課 石川県立図書館 石川県立歴史博物館 金沢市立玉川図書館

(宗)尾山神社 東京大学総合図書館、公益財団法人前田育徳会、防衛研究所戦史研究センター

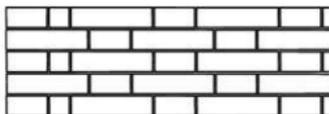
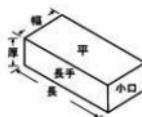
市川浩文 市村慎太郎 小野健吉 金田明大 北垣聡一郎 北野博司 楠正勝 久保智康
近藤真佐夫 坂井秀弥 澤田正昭 嶋崎 丞 千田嘉博 中村利則 龍和善 成瀬晃司 西形達明
飛田範夫 藤田若菜 平井 聖 堀内秀樹 松井広信 宮里 学 森島康雄 矢野江美子 吉岡康暢
(敬称略)

凡 例

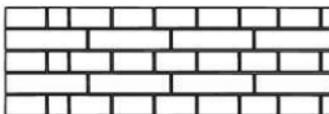
- 1 本書中に示した水平基準は海拔高であり、東京湾平均海面標高(T.P.)による。
- 2 方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の日本測地系第Ⅶ系に準拠した。
- 3 土層注記の色調に関しては、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」を使用している。
- 4 遺構図中のケバ種や線種は下記の「平面図線種表」とおりである。
- 5 遺構図・遺物図等の縮尺については、各図中に示した。
- 6 近代の遺構について本文中に使用するレンガの種類と積み方については下記のとおりである。
- 7 本文中で使用する石垣用語については、「石垣用語表」及び「石垣名称凡例図」とおりである。
- 8 遺物についての凡例は、第4章の遺物観察表の前に記載した。
- 9 引用・参考文献については、第6章は章末に、その他は一括して巻末に記載した。

平面図線種表

	ケバ種	上端線/下端線		ケバ種	上端線/下端線		ケバ種	上端線/下端線
トレンチ		崖ケバ 実線	遺構(未完部)		長・短ケバ 一点鎖線	遺構壁の 傾斜変換線		長・短ケバ (下端線なし)
近代以後		短・短ケバ 実線	遺構(検出のみ)		長・短ケバ (下端線なし)	遺構以外 (土質境)	———	実線・ケバなし
近世以前		長・短ケバ 実線	(壁のみで確認 された遺構)		長・短ケバ (下端線なし)	石(埋没部分)	— — —	一点鎖線

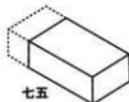


フランス積み

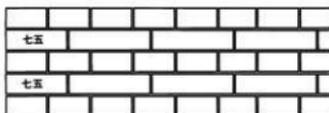


羊羹

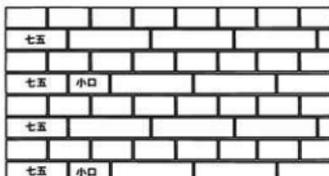
イギリス積み（羊羹角）



七五



イギリス積み（七五追出し）・オランダ積み



オランダ積み

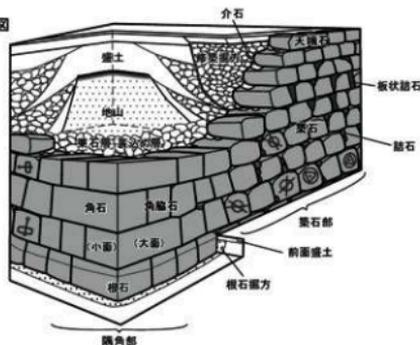
レンガの種類と積み方

*右下のオランダ積みについては「煉瓦及石構造」（八木 1934）を、それ以外は「日本煉瓦史の研究」（水野 2013）を参考とした。

石垣用語表

用語	読み	解説
築石部	つきいしぶ	石垣の面部分
隅角部	ぐうかくぶ	石垣の折れ部分、外側に折れるものを出角(すみ)、内側に折れるものを入角(いりすみ)と呼ぶ
シノ平角	しのびすみ	出角の一つで、鈍角に組まれる
輪どり	わどり	石垣の壁面を弧状に湾曲させる構築方法
天端	てんぱ	石垣の上面
天端石	てんぱいし	石垣の最上層の石材
裾部	すそぶ	石垣が地面と接する部分
根石	ねいし	石垣の最下部の石
築石	つきいし	石垣を構築する石材、平石(ひらいし)とも言う
詰石	つめいし	築石の隙間に詰める小振り石
板状詰石	いたじょうつめいし	石垣面を平滑に見せるため、石材の隙間に合わせて加工された板状の石材を詰石とする技法
角石	すみいし	隅角部に使用する石材
角脇石	すみわきいし	角石の側に位置する石材
築石	ぐりいし	築石の裏込めなどに用いられる円礫
押さえ石	おさえいし	石垣を補強するために裏込めに入れた石材
介石	からいし	石材の固定及び角度調整のため据え置く石材
捨石	すていし	築石の内部に押さえ石・介石に適さない状態で置かれた石材
盛土	もりど	本来の地面の上に盛られた土
目地	めじ	石材同士の隙間
勾配	こうばい	石垣の角度、直線のノリと曲線のゾリからなる
丁張	ちょうはり	石垣普請時に石種の通りや勾配を示すために張る水糸や板
鉢巻石垣	はちまきいしがき	斜面上部だけに鉢巻状に石垣を築いたもの、斜面下部だけに築いた石垣を懸巻石垣という
面	つら	石材の表面のうち、石垣の表面に位置する部分
大面	おおつら	角石の算木積みで使用した石材の表面のうち、枠が大きい面
小面	こつら	角石の算木積みで使用した石材の表面のうち、枠が小さい面
控	ひかえ	石材の奥行き
石尻	いしじり	石材の後ろ側
側	どう	石材の面と反の間
合端	あいば	石同士の接点
自然石	しぜんいし	加工していない石、野面石・河川転石とも言う
削石	わりいし	削って、大きさを整えたり、面を作ったもの
粗加工石	あらかこういし	削石をノミ等で粗く加工した石材
切石	きりいし	面や合端までを加工した石材
周囲加工	しゅういかこう	切石の石面の四方を一定幅で平滑にならす加工。周囲はつりとも言う
縦積み	ねりづみ	コンクリート等を石積みの接合面や裏込めに使用して固めた工法
空積み	からづみ	石材を緊結・接着しないで積んだ工法
布積み	ぬのづみ	石材を横方向に並べながら積む積み方
乱積み	らんづみ	横目地が通らず、不規則に積む積み方
谷積み	たにづみ	石材の長軸を交互に斜めにして積む積み方
落とし積み	おとしづみ	下の石の谷(くぼみ)へ石を落していく積み方
算木積み	さんぎづみ	出隅を構成する2面に長い石材の長辺を交互に向けて積み上げる積み方
孕み出し	はらみだし	変形の一つ。膨らんで裏り出した状態
迫出し	せりだし	単体の石材が石垣面から飛び出した状態

石垣名称凡例図



目次

第1章	経緯と経過	1
第1節	概要	1
第2節	調査に至る経緯	1
第3節	調査の経過	2
第2章	位置と環境	5
第1節	金沢城と周辺の歴史的環境	5
第2節	金沢城の沿革	11
第3節	鼠多門(玉泉院丸)の沿革	12
第4節	既往の調査成果	13
第3章	調査の概要	17
第1節	調査の目的と対象区域	17
第2節	調査の方法	17
第4章	鼠多門の調査	21
第1節	概要	21
第2節	下層遺構	23
第3節	鼠多門周辺の遺構	34
第4節	近代の遺構	34
第5節	出土遺物	41
第5章	鼠多門橋の調査	313
第1節	概要	313
第2節	橋脚遺構	315
第3節	玉泉院丸西法面石垣	341
第4節	出土遺物	377
第5節	鼠多門橋の変遷	427
第6章	自然科学的調査	429
第1節	概要	429
第2節	分析結果	430

第7章 地質調査	475
第1節 概要	475
第2節 調査の成果	475
第8章 総括	477
第1節 鼠多門について	477
第2節 鼠多門橋について	479
第3節 玉泉院丸について	480
引用参考文献	481

図版目次

第1図	平成28年度現地説明会の様子……………2	石1~25……………217~241	
第2図	試料採取の様子……………3	第226・227図	鼠多門調査区出土遺物
第3図	黒漆喰仕上げの海鼠漆喰……………4	その他1・2……………242・243	
第4図	整備完成後の鼠多門と鼠多門橋……………4	第228図	レンガ基礎 全体図 (S=1/200)……………290
第5図	金沢城跡の位置と周辺の近世遺跡……………6	第229図	レンガに見られる痕跡……………291
第6図	近世後期の金沢城全体図……………9	第230図	レンガ(文字)……………292
第7図	近世初期の金沢城……………11	第231図	レンガ(文字・刻印)……………293
第8図	金沢城跡発掘調査位置図(〜令和2年度)……………14	第232図	レンガ(刻印ほか)……………294
第9図	鼠多門調査区等遠景(北東から)……………17	第233図	レンガ(線状凹み)……………295
第10図	調査地点位置図……………18	第234図	レンガ出土位置・分布図……………296
第11図	調査グリッド及び年度別調査範囲……………19	第235図	尾山神社レンガ調査位置図(S=1/1000)……………297
第12図	門部から坂道部の全景(東から)……………20	第236図	尾山神社レンガ……………298
第13図	鼠多門・鼠多門調査区遠景(西から)……………20	第237図	腰瓦の凹みの分類とサイズ……………301
第14図	近世遺構配置図……………21	第238図	土管オルン写真等……………303
第15図	近代以降遺構配置図……………22	第239図	算用数字染付磁器出土地点(S=1/400)……………305
第16図	下層検出遺構平面図(S=1/200)……………23	第240図	玉泉院丸から出土した算用数字を上絵付 ないし染付した磁器……………306
第17図	監獄署基礎下で検出した下層建物礎石平面図 ・オルン写真(S=1/60)……………24	第241図	算用数字染付磁器1……………307
第18図	下層検出礎石1……………25	第242図	算用数字染付磁器2……………308
第19図	下層検出礎石2……………26	第243図	算用数字染付磁器3……………309
第20図	罪書き縄のある礎石……………27	第244図	算用数字染付磁器4……………310
第21図	造成土及び坂道南土羽土層断面1(S=1/40)……………28	第245図	算用数字染付磁器5……………311
第22図	造成土及び坂道南土羽土層断面2(S=1/40)……………30	第246図	明治初年の鼠多門・鼠多門橋「金沢城古写真 明治初期の鼠多門」(金沢大学附属図書館蔵) ……………313
第23図	造成土及び坂道南土羽土層断面3(S=1/40)……………31	第247図	明治初年の鼠多門・鼠多門橋「金沢城門等 写真」(鼠多門)部分(金沢市立玉川図書館蔵) ……………313
第24図	坂道南・坂道北土層断面図(S=1/40)・写真……………32	第248図	「金沢城絵図幅」(部分)(石川県立歴史博物館蔵) ……………314
第25図	近代建物基礎下で検出した下層遺構……………33	第249図	鼠多門橋調査区(橋東)全景(北西から)……………314
第26図	北側土蔵平面図(S=1/200)……………35	第250図	鼠多門橋調査区 平面図(S=1/150)……………316
第27図	南側土蔵平面図(S=1/200)……………36	第251図	鼠多門橋調査区 土層断面位置図(S=1/200) ……………317
第28図	瓦敷遺構全体図……………37	第252図	橋東調査区土層断面図1(S=1/50)……………318
第29図	瓦敷遺構平面図(S=1/40)・オルン写真等……………38	第253図	橋東調査区土層断面図2(S=1/50)……………320
第30図	近代暗渠全体図(S=1/400)・暗渠吐水口(近代 転用)平面図(S=1/40)……………39	第254図	橋東調査区土層断面図3(S=1/50)……………322
第31図	排水開通遺構写真……………40	第255図	橋東調査区土層断面図4(S=1/40)……………324
第32図	海鼠漆喰出土位置……………44	第256図	橋東調査区土層断面図5(S=1/40)……………325
第33図	軒丸瓦 瓦当文様分類……………49	第257図	橋東調査区土層断面図6(S=1/40)……………326
第34~37図	軒平・軒杖瓦 瓦当文様1~4……………50~53	第258図	橋東調査区土層断面図7(S=1/50)……………327
第38図	瓦胎土分類……………54	第259図	橋東調査区土層断面図8(S=1/40)……………328
第39図	遺物観察表凡例……………55	第260図	橋東調査区 写真1……………329
第40~136図	鼠多門調査区出土遺物	第261図	橋東調査区 写真2……………330
陶磁器・土器1~97……………56~152	第262図	橋東調査区 写真3……………331	
第137~182図	鼠多門調査区出土遺物		
瓦1~46……………153~198			
第183~200図	鼠多門調査区出土遺物		
金属1~18……………199~216			
第201~225図	鼠多門調査区出土遺物		

第263図	橋東調査区 写真4	332	第320図	石材カード2 (4098, 4099)	416
第264図	橋東調査区 写真5	333	第321図	石材カード3 (4100, 4077)	417
第265図	橋東調査区 写真6	334	第322図	石材カード4 (4101, 4102)	418
第266図	橋西調査区土層断面図1 (S=1/50)	335	第323図	石材カード5 (4103, 4104)	419
第267図	橋西調査区土層断面図2 (S=1/50)	336	第324図	石材カード6 (4105, 4106)	420
第268図	橋西調査区土層断面図3 (S=1/40)	337	第325図	石材カード7 (4107, 4108)	421
第269図	橋西調査区 写真1	338	第326図	石材カード8 (4109, 4110)	422
第270図	橋西調査区 写真2	339	第327図	石材カード9 (4111, 4112)	423
第271図	橋西調査区 写真3	340	第328図	石材カード10 (4113, 4114)	424
第272図	玉泉院丸西法面石垣 平面図 (S=1/100)	346	第329図	石材カード11 (4115, 4116)	425
第273図	玉泉院丸西法面石垣 立面図 (S=1/100)	347	第330図	鼠多門橋の変遷概念図	428
第274図	玉泉院丸西法面石垣 立面写真 (S=1/100)	348	第331図	元素マッピング図と赤外分光スペクトル図	432
第275図	玉泉院丸西法面石垣 垂直断面図① (S=1/100)	349	第332図	漆喰塊と実態顕微鏡写真	433
第276図	玉泉院丸西法面石垣 垂直断面図② (S=1/100)	350	第333図	漆喰塊中の粒子の偏光顕微鏡写真	434
第277図	玉泉院丸西法面石垣 垂直断面図③ (S=1/100)	351	第334図	金沢城跡鼠多門橋出土橋脚の光学顕微鏡 写真	436
第278図	玉泉院丸西法面石垣 石垣1・2立面図 (S=1/50)	352	第335図	年輪計測・ウィグルマッピング・暦年校正 結果	441
第279図	玉泉院丸西法面石垣 石垣3・4・5立面図 (S=1/50)	353	第336図	暦年校正結果	444
第280図	玉泉院丸西法面石垣 石垣6立面図 (S=1/50)	354	第337図	金沢城跡鼠多門出土木材の光学顕微鏡・走査 型電子顕微鏡写真(1)	448
第281図	玉泉院丸西法面石垣 石垣2 (南面) 立面図・立面写真 (S=1/50)	355	第338図	金沢城跡鼠多門出土木材の光学顕微鏡・走査 型電子顕微鏡写真(2)	449
第282図	玉泉院丸西法面石垣 石垣6 (北面) 立面図・立面写真 (S=1/50)	356	第339図	金沢城跡鼠多門出土木材の光学顕微鏡・走査 型電子顕微鏡写真(3)	450
第283図	玉泉院丸西法面石垣写真①	357	第340図	地覆石に記された記号の黒色物および容器内面に 付着する黒色物の赤外分光スペクトル図	452
第284図	玉泉院丸西法面石垣写真②	358	第341図	地覆石に記された記号の黒色物および容器内面に 付着する黒色物とクロロホルム溶融試験	453
第285図	玉泉院丸西法面石垣写真③	359	第342図	黒色塗膜の赤外分光スペクトル	455
第286図	玉泉院丸西法面石垣写真④	360	第343図	分析対象(a)、塗膜構造の生物顕微鏡写真(b)、 SEM反射電子像(c)	456
第287図	玉泉院丸西法面石垣写真⑤	361	第344図	X線回折分析結果	458
第288図	玉泉院丸西法面石垣写真⑥	362	第345図	分析対象	458
第289図	玉泉院丸西法面石垣写真⑦	363	第346図	各元素分布図	465
第290図	玉泉院丸西法面石垣写真⑧	364	第347図	SiO ₂ -Al ₂ O ₃ 分布図	466
第291~295図	鼠多門橋調査区出土遺物 陶磁器・土器1~5	380~384	第348図	Sr-Rb分布図	466
第296~302図	鼠多門橋調査区出土遺物 瓦1~7	385~391	第349図	分析対象レンガ写真	467
第303~308図	鼠多門橋調査区出土遺物 金属1~6	391~396	第350図	分析試料と胎土の偏光顕微鏡写真(1)	468
第309~313図	鼠多門橋調査区出土遺物 石1~5	397~401	第351図	分析試料と胎土の偏光顕微鏡写真(2)	469
第314~317図	鼠多門橋調査区出土遺物 木1~4	402~405	第352図	分析試料と胎土の偏光顕微鏡写真(3)	470
第318図	石材カード凡例	414	第353図	分析対象目地材(a)および元素マッピング分析 結果(b)	473
第319図	石材カード1 (4096, 4097)	415	第354図	ポーリング位置	475
			第355図	ポーリング結果断面	476

表目次

第1表	近世遺跡一覧表	7	第86表	分析を行った漆喰境	430
第2表	金沢城の沿革	10	第87表	漆喰中の微化石類と砂粒物の特徴	431
第3表	鼠多門(玉泉院丸)年表	12	第88表	元素マッピングに基づく特徴的な部分の 半定量分析結果(重量%)	431
第4表	金沢城発掘調査一覧(1)	15	第89表	膠の赤外吸収位置とその強度	431
第5表	金沢城発掘調査一覧(2)	16	第90表	金沢城跡鼠多門橋出土土橋脚の樹種同定結果	435
第6表	鼠多門・鼠多門橋出土瓦計測表	43	第91表	ウイグルマッピング測定試料および処理	439
第7~33表	鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器観察表1~27	244~270	第92表	単体測定試料および処理	439
第34~45表	鼠多門調査区出土遺物 瓦観察表1~12	271~282	第93表	試料No.1の放射性炭素年代測定、暦年較正、 ウイグルマッピングの結果	440
第46~49表	鼠多門調査区出土遺物 金属観察表1~4	283~286	第94表	試料No.2の放射性炭素年代測定、暦年較正、 ウイグルマッピングの結果	440
第50表	鼠多門調査区出土遺物 金属(銭貨)観察表	286	第95表	試料No.3の放射性炭素年代測定、暦年較正、 ウイグルマッピングの結果	440
第51~53表	鼠多門調査区出土遺物 石製品観察表1~3	287~289	第96表	単体試料の放射性炭素年代測定および暦年 較正の結果	440
第54表	鼠多門調査区出土遺物 ガラス観察表	289	第97表	測定試料および処理	442
第55表	鼠多門調査区出土遺物 海鼠漆喰観察表	289	第98表	放射性炭素年代測定および暦年較正の結果	443
第56表	鼠多門調査区出土遺物 ボタン観察表	289	第99表	金沢城鼠多門出土木材の樹種同定結果一覧	445
第57表	レンガ集計表	296	第100表	金沢城跡鼠多門出土土製品の樹種同定結果	447
第58表	レンガ総括表	299	第101表	金沢城跡鼠多門出土炭化材の樹種同定結果	447
第59表	レンガ観察表	299	第102表	分析試料とその詳細	451
第60表	腰瓦計測表	300	第103表	天然アスファルトの赤外吸収位置と その強度	452
第61表	玉泉院丸広場整備立会調査出土遺物 算用数字染付磁器観察表	312	第104表	分析対象	454
第62表	土層断面番号と断面図名称及び図版番号との 対応一覧	317	第105表	アスファルト(新潟県鎌倉新田産)の赤外 吸収位置とその強度	454
第63~74表	玉泉院丸西法面石垣 石材一覧表1~12	365~376	第106表	塗膜分析結果	455
第75表	石材種別一覧表	376	第107表	分析対象	457
第76表	石材加工状況別一覧表	376	第108表	蛍光X線半定量分析結果(mass%)	457
第77・78表	鼠多門橋調査区出土遺物 陶磁器・土器観察表1・2	406・407	第109表	検出鉱物	458
第79・80表	鼠多門橋調査区出土遺物 瓦観察表1・2	408・409	第110表	分析試料の詳細	459
第81・82表	鼠多門橋調査区出土遺物 金属製品観察表1・2	410・411	第111表	煉瓦胎土の粘土中の微化石類と砂粒組成の 特徴記載	462
第83表	鼠多門橋調査区出土遺物 石製品観察表	411	第112表	煉瓦胎土中の粘土および砂粒の特徴一覧表	462
第84表	鼠多門橋調査区出土遺物 木製品観察表	411	第113表	岩石片の起源と組み合わせ	463
第85表	閉塞石垣解体石材等観察表	426	第114表	蛍光X線分析結果(重量%)	464
			第115表	分析対象	471
			第116表	各ポイントの半定量分析結果(mass%)	472

第1章 第1章 経緯と経過

第1節 概要

本報告は、令和元年度に刊行した「鼠多門・鼠多門1」の第2分冊にあたり、第1分冊では鼠多門復元に係る遺構を中心に報告した。経緯と経過の詳細については既報告書に譲り、本章では調査に至る経緯について、金沢城公園整備の概略と鼠多門と鼠多門橋の復元整備が位置付けられた第三期整備計画について触れることとする。調査の経過については、既報告以後の令和2年度に実施したものや前回報告していないもの等について記述する。

第2節 調査に至る経緯

1. 金沢城公園整備

金沢城公園は、平成8年に金沢大学跡地を県が取得した後、公園整備事業に着手し菱櫓・五十間長屋や内堀等の復元整備を進め、平成13年に一部を開園した。その後、平成16年に「金沢城復元基本方針検討委員会」を設置し、金沢城公園の復元整備の基本的な考え方、復元に際しての留意点等について検討を加え、①復元にあたっては史実の十分な調査と検証を行い、史実性の高い整備を行うこと、②復元に際しての時代設定は基本的に江戸時代後期に統一すること、③多様な公園機能にも配慮すること、④復元はゾーン別の保全・整備や活用方針等を踏まえて長期的視点も含めた段階的な取り組みを進めること、等の基本方針を示した。

この基本方針に基づき、平成18年には平成26年までとする第二期整備計画が策定され、①三御門(河北門・橋爪門・石川門)の整備、②いもり堀の段階的整備、③玉泉院丸庭園整備の方針が示され、平成27年3月の北陸新幹線金沢開業までに整備は完了している。また、保存目的として玉泉院丸南西石垣の保存修理も行っている。

第三期整備計画は、第二期整備が完了となることから、平成27年3月に「金沢城公園第三期整備計画策定懇話会」を設置、同年6月には来園者へのアンケート調査などを実施し、12月には平成27年度から平成33年度までを対象とした7カ年の第三期整備計画を策定した。そこでは①鼠多門・鼠多門橋の復元整備、②鶴ノ丸休憩所一帯の再整備、③石垣の保全を掲げている。②については、平成28年度中に鶴ノ丸休憩所とその一帯が整備された。③については、平成30年3月に石垣の計画的な「金沢城の石垣の保存管理及び保全対策に係る計画書」を作成、基本計画の策定やそれに基づく保全対策の実施を目指し、現在も事業を進めている。本報告書が対象としている鼠多門の復元整備と鼠多門橋の整備については、令和3年度中の完成を目指すこととされ、平成26年度から平成30年度にかけて確認調査を実施した。整備工事は期間の短縮が図られ、令和2年7月に鼠多門の復元と鼠多門橋の整備が完了した。

平成23年度には保存管理計画が策定され、現在それを見直して、保存活用計画を策定中であり、令和2年度中に策定することとなっている。

2. 金沢城の史跡指定

公園整備着手から12年後の平成20年(2008)1月11日に、金沢城跡の主要部分275,155.14㎡について、石川県が文部科学大臣に国史跡指定の申請を行い、平成20年5月16日に国の文化審議会の文部科学大臣への答申を得て、平成20年6月17日付け文部科学省告示第100号で国の史跡に指定され、同年12月24日には石川県が管理団体に指定された。

3. 金沢城の調査研究

石川県は、公園整備を進める一方で平成13年(2001)7月、金沢城の調査研究、関連資料の整理・収集、関連城郭の調査研究、調査成果の普及・啓発等を目的として、県教育委員会文化財課内に金沢城研究調査室を設置し(平成19年(2007)石川県金沢城調査研究所に改組)、金沢城に係る学術的な調査研究を推進することとした。

平成14年度からは、絵図・文献、埋蔵文化財、建造物、伝統技術(石垣)などを対象に金沢城の総合的な調査研究に着手した。埋蔵文化財では、金沢城跡の変遷と構造を探る目的で平成14年度から国庫補助を得て本丸・本丸附段・東ノ丸附段等の確認調査を継続的に実施し、初期金沢城の一端を明らかとした。平成24年度からは城郭に関連する庭園遺構の調査に取り組んでおり、平成29年度からは庭園の構成要素でもある切石積石垣の確認調査を進めている。

また、平成19年度から23年度にかけては、石川門の修理に伴う遺構確認調査も実施した。一方、金沢城公園整備事業に伴う埋蔵文化財確認調査も主幹部局である土木部の依頼により実施しており、先に述べた平成7年から平成16年度の第1期整備事業に伴う五十間長屋等の確認調査以降、第二期整備事業に伴う調査も数多く実施してきた。それらは、平成10年から平成21年度にかけて断続的に続きいもり堀の段階復元に至ったいもり堀の調査を始め、平成18年から平成20年度にかけて行われた河北門復元に係る調査、平成20年から平成25年度にかけて実施された玉泉院丸庭園の暫定整備に係る調査、平成22年から平成24年度にかけて行われた橋爪門復元に係る調査である。第三期整備では、鼠多門の復元整備に係る遺構確認調査を平成26年から平成30年度にかけて実施している。

第3節 調査の経過

1. 概要

鼠多門・鼠多門橋の埋蔵文化財確認調査は、県土木部公園緑地課からの依頼を受けて、金沢城調査研究所が実施した。平成26年度から発掘調査を開始し、金沢城公園側については、史跡として文化財保護法第125条の規定に基づく現状変更の許可を受け、平成30年度まで実施した。

鼠多門橋の整備に伴って調査を実施した尾山神社側の法面や歩道部分については、史跡指定地外であるため現状変更許可申請の対象外ではあるものの、追加指定地の候補として今後保護が必要な範囲とされていることから、近世の遺構を必要以上に解体しないように、近世の遺構あるいは近世の造成土を確認した時点で調査を完了した。

道路部分については、橋設計のための試掘調査や工事立会調査を実施し、遺構に影響がない範囲で工事を行うように確認や設計変更等を協議しながら進めた。

平成26年度に実施した調査では、鼠多門橋の橋台部分と堀縁の石垣部分に対してトレンチ調査を行った。平成27年度から本格的に鼠多門について調査を開始し、復元整備のために必要な鼠多門の規模についての遺構を確認したほか、外観の意匠に関する遺物として黒漆喰仕上げの海鼠漆喰が出土するなどの成果を得た。鼠多門橋の調査は、平成28年度から本格的に開始し、最終段階の橋脚遺構を確認したほか、それ以前にさかのぼる木柱等を確認するなどの成果を得て、鼠多門橋が幾度かの架け替えを実施



第1図 平成28年度現地説明会の様子

していることが明らかとなった。

2. 自然科学分析

鼠多門・鼠多門橋の調査では、多種多様な遺物が出土した。これまで形を残したままの海鼠漆喰はほとんど出していないが、今回の調査では、現存する三十間長屋や石川門の海鼠壁に使用されている白漆喰ではなく、黒漆喰で仕上げた海鼠漆喰が出土したことから、その黒色の成分について調べた。

そのほか、鼠多門橋調査で確認した橋脚の木柱の年代測定や堀の堆積土中から出土した木製品の樹種同定、旧金沢陸軍監獄署の建物に使用されたレンガの胎土分析などの自然科学分析を実施した。それら詳細については、第6章で報告する。



第2図 試料採取の様子

3. 地質調査（ボーリング調査）

地質調査は、機械ボーリングで86mmのオールコアを採取し、採取した土壌を分析して地山、近世盛土、堀堆積物、近代以降の盛土といったように分けて標高値を求め、地形の構成状況を把握するものであり、平成26・27年度に実施した。平成26年度は、玉泉院丸面から西側、堀の方向へ向かって4本実施した。平成27年度はいもり堀やその周辺に12本実施している。そのうち鼠多門前面のいもり堀に係る範囲では4本実施している。その結果、堀底の深さや堆積物の厚さ、近現代の堀を埋めた盛土の厚さ等の知見を得た。詳細については第7章で報告する。

4. 整備工事に伴う立会調査

立会調査については、整備工事に係る史跡の現状変更の許可条件として、「工事に際しては金沢城調査研究所職員の立会を求めること」とあることにより実施した。遺構に影響を与えるような箇所では設計変更をするよう協議をしながら進めた。

鼠多門橋の史跡指定地外についても整備に係る立会調査を実施した。その中で、平成30年12月6・7日には、鼠多門橋の下部工事に伴う立会調査を実施した。当初は掘削範囲がいもり堀の範囲内で掘削土は近代以降のものと考え、重機による掘削を確認するにとどまると考えていたが、実際には地山法面が確認され、橋脚の採取痕跡と考えられる遺構を検出し、図面等を作成した。

そのほか、工事立会は、令和2年度の鼠多門完成間際まで外構部分等を含めて実施した。

5. 出土品整理

出土した遺物については、平成28年度から令和元年度にかけて（公財）石川県埋蔵文化財センターに委託して実施した。委託の内容は、洗浄からトレースまでの出土品整理である。なお、洗浄については調査中に大半を洗浄していたことから、一部の未洗浄となった瓦(50箱)についてのみ委託した。

出土した遺物の中で、遺物実測を行い本報告書に掲載するものについては、直営で写真撮影を行った。出土品整理委託終了後の令和2年度には、直営で瓦や海鼠漆喰等、委託から漏れていたものについて実測等を行い本報告に含めた。

報告書については、令和元年度に遺構編として「鼠多門・鼠多門橋Ⅰ」を刊行した。鼠多門の復元整備に係る遺構検出状況について、門内部の側壁石垣の検出状況や復元に係る検討状況について、側壁石垣復元工事での調査について、旧金沢陸軍監獄署の遺構について、などの遺構を報告した。



第3図 黒漆喰仕上げの海鼠漆喰



第4図 整備完成後の鼠多門と鼠多門橋

第2章 位置と環境

第1節 金沢城と周辺の歴史的環境

金沢市街地のほぼ中央を占める金沢城跡は、南東の山地帯より流れ出す犀川・浅野川によって形成された、細長く伸びる小立野台地の先端部に位置する。城外との比高差は、低所に位置する新丸においては約10m、最高所である本丸で30m以上を測る。本丸からは、低地の金沢平野のみならず小立野台地方面へも眺望がきく。また、城のある台地先端部とその南東に続く台地本脈との間には、自然谷が形成されていたらしく〔藤1999〕、城付近の地形は、人の手が加わる以前から独立丘的な状況を呈していたようであり、城は自然地形を巧みに利用して築かれたことが推察される。

城下町は、金沢城を中心に小立野台地を含む河岸段丘から沖積平野に展開している。外堀としての内惣構堀、外惣構堀が城を遠巻きに二重に囲み、旧北国街道は金沢城を東に迂回するよう城下町を通る。それらを基幹として城下町と各地を繋ぐ街道や街路が整備された。これら城下町の基本的な構造は、現在の市街地に引き継がれ、城下町の町並を色濃く反映している様態は、歴史都市・金沢を特徴づける要素の一つになっている。

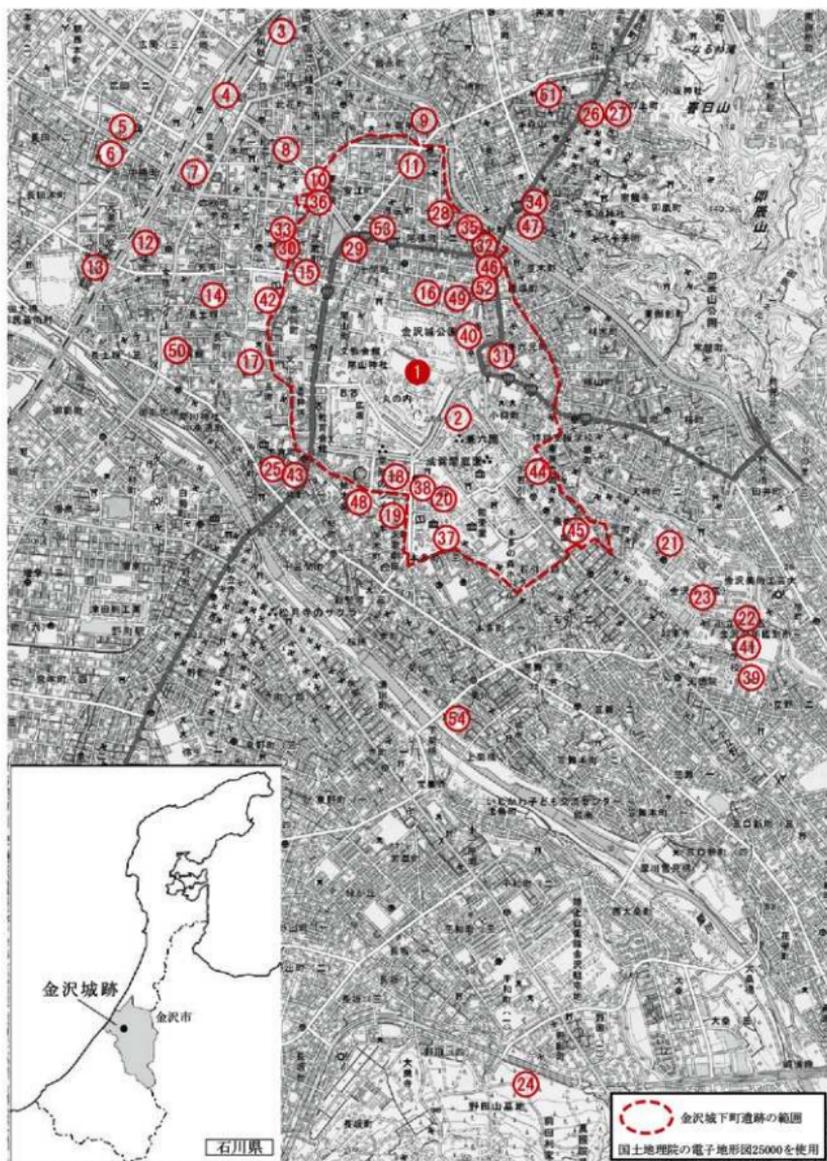
金沢城跡周辺は、絵図等の資料から近世以降の市街化が確認できるものの、それ以前の様相については文献等からの推定にとどまっていたが、城跡自体や城地に隣接する前田氏(長種系)屋敷跡地点〔石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター2002e〕、広坂1丁目遺跡〔金沢市(金沢市埋蔵文化財センター)2004a・2005c・2006a・2007a・2009a〕、丸の内7番地点〔石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター2014a・2015a〕の発掘調査、惣構堀復元整備に伴う確認調査〔金沢市(金沢市埋蔵文化財センター)2008b・2011b・2011c・2012d・2013b・2014c〕や市街地再開発等に伴う諸所の発掘調査等により、その姿を垣間見ることが可能となった。また平成23年4月1日には、第3図の赤破線内の範囲が金沢城下町遺跡として周知されている。

旧石器時代の遺跡は、城外縁の車橋、石川門前土橋、丸の内7番地点の調査で数点の石器が出土している。県内において数少ない当該期の遺跡のあり方を示すものとして注目される。

縄文時代の遺跡は、丸の内7番地点で草創期の有舌尖頭器が採取されている他、城内の幾つかの調査区で遺物の出土が確認されとともに、前田氏(長種系)屋敷跡地点で、後期の陥穴が検出されている。城下町の調査でも、まとまった面積の調査が実施された地点では遺物の出土がみられ、今後その実態が明らかになることを期待したい。

弥生時代は、前田氏(長種系)屋敷跡地点で弥生時代後期後半～終末期の墳丘墓が確認され、広坂1丁目遺跡では中期の土器が出土し、後期後半の竪穴建物等が検出されている。古墳時代は、高岡町地点〔石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター2002d、金沢市教育委員会(金沢市埋蔵文化財センター)2001a、金沢市(金沢市埋蔵文化財センター)2003a〕で前期の竪穴建物が確認され、下本多町遺跡〔金沢市埋蔵文化財センター1999〕や彦三町一丁目地点〔金沢市(金沢市埋蔵文化財センター)2007b〕では中期の遺構が、広坂1丁目遺跡では前期、後期の土器の他、車輪石や勾玉等の遺物が出土しており、後に隆盛となる集落の母体が出来上がっていたものと考えられる。

古代では、城内の平成9年度の調査において8～9世紀代の掘立柱建物跡が検出された他、断片的ではあるが、幾つかの調査区で遺構、遺物が確認されている。城下では高岡町地点で7世紀後半の竪穴建物や、半瓦当を含む古式瓦、奈良、平安時代の掘立柱建物と、円面硯、帯金具、奈良三彩等が確認されている。県庁跡地(堂形)〔石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター 2010・2012、石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター 2014c〕でも7世紀後半から10世紀初頭の遺物が出土し、竪穴建



第5図 金沢城跡の位置と周辺の近世遺跡

第1表 近世遺跡一覧表

No.	遺跡名	調査年度	遺跡の特徴		文献
			主要地種	特記事項	
1	倉沢遺跡	(1976)	雑居	(1976)	(1976)
2	蔵六遺跡	(1976)	貯蔵	(1976)	(1976)
3	木ノ俣保遺跡(丸島寺遺跡)	06(1990)・06(1995)	寺院(墓域)	近鉄墓 292 基	岡山 1997, 奈良市市域文化センター 2004b
4	木ノ俣保遺跡	05(1993)・06(1995)	寺域(「墓域」→近鉄墓地+下級武家地, 町人地, 百姓地)	近鉄墓, 木札遺構(菅井戸・竹筒), 溝(溝「がらご」), 雑居跡(土蔵基礎, 木柱)	(財)石川島精機文化センター 2002b 奈良市市域文化センター 2005c
5	醍→井井遺跡	07(1993)・08(1996)	百姓地→下級武家地	前田氏(「蔵」ご)下級雑居跡, 木柱, 木釘跡(「貯蔵」遺構)	奈良市市域文化センター 2001c 2011・2014
6	長町町遺跡	06(1994)	下級武家地		奈良市市域文化センター 1998
7	沼田町遺跡	05(1993)・07(1995)	町人地・中級武家地	延宝5年(1677)火災資料出土, 近鉄製刀 用土	奈良市市域文化センター 2001a・2003b・ 2004c
8	本町一丁目遺跡	02(1986)・06(1994)・ 09(1997)・03(2010)	町人地	堀敷土壇, 遺構本筋土基, 堀込遺構, 副道(掘削溝)1箇所(1), 掘削跡等	奈良市教育委員会 1995・1997a 奈良市市域文化センター 2002c・2006b
9	鶴堂町遺跡	06(1996)	上級武家地	前田氏(主筋土)土壇, 整理場から遺構 多数出土	奈良市教育委員会 1991
10	倉沢下町遺跡(安江町地区 安江町1 番地点)	03(1991)・03(1992)・ 03(2010)	町人地・中級武家地	堀敷土壇, 遺構本筋土基, 堀込遺構, 副道(掘削溝)1箇所(1), 掘削跡等	奈良市教育委員会 1997a・2010a
11	倉沢下町遺跡(寺三町地点)	03(1991)	中級武家地		奈良市市域文化センター 2002
12	三宮町遺跡	03(1991)・06(1997)	百姓地→町人地	遺跡・掘溝, 掘溝の縁, 掘人形小石	(財)石川島精機文化センター 2001b・2007
13	元町遺跡	06(1996)・01(1988)	百姓地→町人地		石川島精機文化センター 1990 (公開)石川島精機文化センター 2014d
14	穴水町遺跡	05(1996)	下級武家地	長尺下屋敷	奈良市市域文化センター 1998
15	倉沢下町遺跡(高岡町地点)	06(1996)・01(1990)・ 01(1999)・06(1997)	上級町人地, 木屐	遺構土壇, 堀込遺構, 堀敷土壇, 反扉石 (瓦土を埋め込で掘削), 石瓦基礎, 掘削跡 等	奈良市市域文化センター 2001a・2003a (財)石川島精機文化センター 2002d
16	倉沢下町遺跡 (新出川(長瀬橋)掘削跡地点)	06(1996)・02(2010)	町人地→上級武家地	堀敷土壇の掘削遺構	(財)石川島精機文化センター 2005a 奈良市市域文化センター 2010c
17	長町遺跡	06(1996)	中級武家地		奈良市市域文化センター 1998
18	広原一丁目遺跡	06(1996)・03(2000)・ 01(2002)・07(2006)	中→上級武家地	寛文の大火火災資料, 木型土壇 (堀敷土壇, 地下室), 変遷遺構, 土 物類跡, 軒下木屐等の基部資料出土	奈良市市域文化センター 2004a・2005c・2006a・2007c 2009
19	下本町遺跡	04(1997)	下級武家地→上級武家地	元暦の大火(1764)火災資料	奈良市市域文化センター 1999
20	倉沢下町遺跡(本多氏墓所跡地区)	02(1986)・03(2000)・ 02(2001)・03(2014)・ 02(2015)・03(2016)・ 02(2017)	上級武家地, 武家地	堀, 掘込(地下室等) 本筋土上層, 堀基礎石積, 門跡, 石瓦, 溝跡	石川島精機文化センター 1992 奈良市市域文化センター 2012b, 2016d (公開)石川島精機文化センター 2016c, 2019
21	倉沢大学町遺跡 (医学部附属施設地点) 掘溝 地点	09(1977)・04(2002) 02(2011)	下→中級武家地等	地下室多数	倉沢大学市域文化財調査センター 2000 →2003・2017
22	倉沢大学町遺跡 (医学部附属施設地点)	09(1977)・01(1999) 01(2001)	下→中級武家地等		倉沢大学市域文化財調査センター 2000 →2003・2017
23	越三町遺跡	09(1977)・01(1999)	寺院(墓域)・中級武家地	近鉄初期の塚域, 掘削遺構, 溝跡	(財)石川島精機文化センター 2002c
24	野洲山墓地	01(2000)・04(2002) 01(2004)・01(2007) 02(2008)・04(2012)	墓域	藩士家の墓所を中核とした近世墓域	奈良市市域文化センター 2004・2009a・2010a・2012a・2013a
25	芥町二丁目遺跡	01(2003)・03(2011)	武家地		奈良市市域文化センター 2005d
26	妙法寺前遺跡	01(2003)	寺院, 参道		奈良市市域文化センター 2006c
27	三交寺前遺跡	01(2004)	寺院, 参道		奈良市市域文化センター 2005a
28	倉沢下町遺跡(寺三町一丁目地点)	01(2004)	武家地		奈良市市域文化センター 2007b
29	倉沢下町遺跡(下道・青草町地点)	01(2005)	町人地		奈良市市域文化センター 2007c
30	倉沢下町遺跡 (倉沢東区内宮橋跡武蔵町地点)	01(2005)・01(2006)	惣構	堀込遺構の堀, 堀の成状況 土留遺土	奈良市市域文化センター 2008b・2011c
31	倉沢下町遺跡(兼六元町3番地点 兼六元町7番地点 兼六元町15番地点)	01(2005)・02(2011)・ 03(2013)	武家地	井戸, 土壇, 石組遺構, 石積, 石列	奈良市市域文化センター 2007b・2012b, 2019a・2020a
32	倉沢下町遺跡 (倉沢東区内宮橋跡本橋北池地点)	01(2006)	惣構	堀の成状況	奈良市市域文化センター 2008b
33	三井町遺跡	01(2006)	武家地	土壇, 溝	奈良市市域文化センター 2016a
34	嵐山一丁目遺跡	02(2006)	町人地	副道(掘削溝)・遺構(空堀, 掘削口, 掘削 跡等)	奈良市市域文化センター 2016b
35	倉沢下町遺跡 (倉沢東区内宮橋跡土台町地点)	02(2006)	惣構	溝跡の縁, 空堀→掘削跡の副道(掘削溝)	奈良市市域文化センター 2011b
36	倉沢下町遺跡 (倉沢東区内宮橋跡弁形地点)	02(2006)・02(2010) 03(2013)	惣構	堀, 弁形遺構, 遺構跡, 石瓦	奈良市市域文化センター 2012d・2013b, 2018a
37	倉沢下町遺跡(本多町三丁目地点)	02(2010)	武家地	溝跡, 木屐(掘削木屐)	奈良市市域文化センター 2012c
38	倉沢下町遺跡 (西内宮橋跡本多町三丁目地点)	02(2010)	惣構	堀, 土留基部	奈良市市域文化センター 2012b
39	小豆野内丁遺跡 (田代東区内宮橋跡土留南屋敷)	02(2010)	寺院, 墓域	堀	奈良市市域文化センター 2013c
40	倉沢下町遺跡(丸の内7番地点)	03(2009)・03(2011)	武家地(公事場, 堀敷)	伝道遺構(石組池状遺構, 長石等)	(公開)石川島精機文化センター 2014a, 2015a
41	小豆野内ミヅナ遺跡	02(2010)・04(2012)	武家地	掘削跡大型土壇	(公開)石川島精機文化センター 2014b, 2015b
42	倉沢下町遺跡(長尺掘削跡地区)	02(2012)・02(2013) 01(2019)	上級武家地, 武家地	長尺土壇, 柱穴, 建物基礎, 土塀基礎	奈良市市域文化センター 2015b・2019a
43	芥町二丁目遺跡(5番地点)	02(2013)	武家地	土壇(掘削溝, 木箱基礎)等, 石列(掘削溝)	奈良市市域文化センター 2014b
44	倉沢下町遺跡(兼六元町3番地点)	02(2013)・02(2015)	墓域	土壇(掘削溝, 木箱基礎)等, 石列(掘削溝)	(公開)石川島精機文化センター 2017
45	倉沢下町遺跡(堀町町3番地点)	02(2013)・02(2015)	武家地	前田氏(長瀬橋)・大宮氏下級雑 居跡(堀込遺構, 掘削溝), 井戸	奈良市市域文化センター 2019a・2019b
46	倉沢下町遺跡 (倉沢東区内宮橋跡本橋南池地点)	02(2012)	惣構	堀	奈良市市域文化センター 2014c
47	東山御本庫遺跡	02(2009)	本庫跡		奈良市市域文化センター 2016a
48	橋本遺跡	02(2010)・02(2017)	武家地	堀込遺構, 建物跡(土台, 礎石), 区画遺 跡(石組遺構), 土壇, 墓域, 土壇, 井戸	奈良市市域文化センター 2017・2018a
49	倉沢下町遺跡(大町町3番地点)	02(2017)	武家地(人持掘削跡(土留遺構))	石敷き, 井戸, 土壇	奈良市市域文化センター 2018c
50	森町三丁目遺跡	02(2017)	武家地	土留基礎, 井戸, 溝, 土壇	奈良市市域文化センター 2018a
51	長町三丁目遺跡	02(2017)	惣構(正統塚敷)	遺跡, 正統塚敷, 石瓦	奈良市市域文化センター 2018a
52	倉沢下町遺跡 (堀町町1丁目7番地点)	02(2018)	惣構(南内惣構)	石瓦, 土壇	奈良市市域文化センター 2019a
53	倉沢下町遺跡(跡町1丁目7番地点)	01(2019)	町人地	土壇, 溝, 石列	奈良市市域文化センター 2020a
54	堀川一丁目遺跡(2番地点)	02(2020)	町人地	堀敷跡, 遺跡, 井戸	奈良市市域文化センター 2020a

奈良市市域文化センター 2001 年以降は奈良市教育委員会(奈良市市域文化センター), 2002 年以降は奈良市(奈良市市域文化センター)

(財)石川島精機文化センター・石川島精機教育委員会・(財)石川島精機文化センター(2013 年度より)等の発行資料

物、掘立柱建物等の遺構が確認されている。広坂1丁目遺跡では7世紀初め頃から11世紀の遺物が確認されるとともに、藤原宮式、平城宮式に準拠した大量の瓦、「佛」刻書土器、「寺」刻書瓦、仏器等が出土し、矩形の区画溝、掘立柱建物、竪穴建物等が確認され、古代寺院が造営されたと考えられている。また、前田氏(長種系)屋敷跡地点、丸の内7番地点でも古代の土器が出土し、城跡周辺では兼六園のある小立野台地側や、反対の尾山神社側等にまだ空白部はあるが、律令初期から金沢城跡を取り囲むように遺跡が展開していたと想定され、地域の拠点となっていたと考えられる。

中世では、広坂1丁目遺跡で区画溝や礎石建物、墓地等が確認され、13世紀後半頃～14世紀代に盛期を持つ居館、室町末～17世紀初頭は寺内町内の有力者の居住域か施設が想定されている。また、西側の県庁跡地(堂形)では、16世紀後半の館ないし寺院の区画施設と推定される溝、土塁が確認されている。一方、城の反対側に位置する丸の内7番地点では遺構は不明であるが13世紀頃から17世紀初頭の遺物が出土し、隣接する石川橋白鳥堀調査区では16世紀第3四半期頃に築造されたと考えられる鍛冶関連遺構が確認されている。高岡町地点では葉研堀状の溝が確認され館跡の一部と考えられている。

文献資料からは14世紀には現在の久保市乙剣宮付近に「山崎窪市」が成立し、天文15年(1546)には現在の城地に金沢御堂(金沢坊舎)が創建され寺内町が展開し、加賀地域における政治・宗教・経済の拠点として発展したとされている。遺跡からはまだまだ当時の様相を具体的に述べるほどの資料は得られていないものの、古代から引き続き、それらのベースとなった集落の展開がうかがわれる。やがて金沢御堂(金沢坊舎)は織田政権の前に陥落し、佐久間氏・前田氏など織豊政権の大名による支配が始まるが、この段階を遺跡ではうまく捉えきれない。

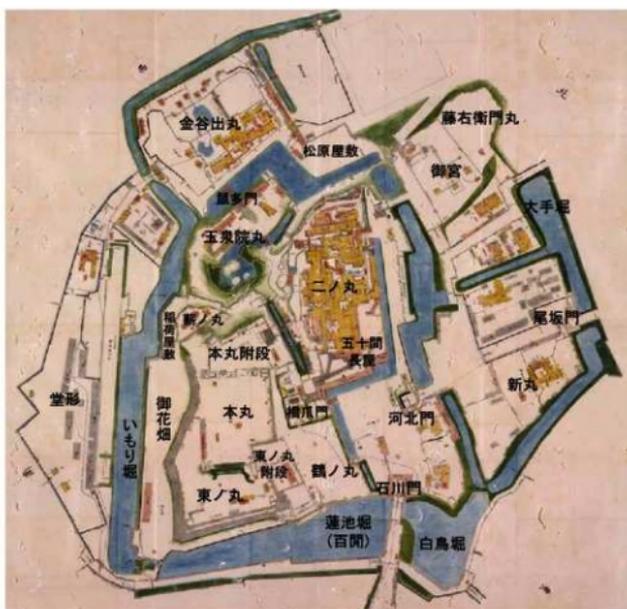
徳川氏が幕府を創出し、豊臣氏を滅ぼして名実ともに統一政権を確立した慶長・元和期頃、金沢城周辺では大名前田氏の支配の下、城下町の整備が進行する。現在、市街各所で調査された城下町の遺跡地点数は50か所を数えるが(第3図・第1表)、まとまった量の遺構・遺物が見られるようになるのは、この頃以後のことである。なお慶長年間に築造された内・外惣構の一部についても発掘調査が行われており、当初の構造や、規模を縮小しつつ存続・再生が図られる変遷過程が判明している[金沢市(金沢市埋蔵文化財センター)2008b・2011b・2011c・2012d・2013b・2014c、木越2013]。城下町はその後度重なる火災等の災害(寛永8年(1631)・同12年(1635)の大火等)に見舞われ、また一方で計画的整備を繰り返しながら、寛文年間(1661～1672)までにほぼ骨格が整い、以後明治時代の初めまで、三都に次ぐ大都市として発展する。

先にもあげたが、城下中枢に位置する遺跡として広坂1丁目遺跡、前田氏(長種系)屋敷跡地点、丸の内7番地点がある。広坂1丁目遺跡は、17世紀前半における性格はなお検討の余地はあるものの、陶磁器の優品が多く出土し、また17世紀中頃以降は高級武家の屋敷として、多様な遺構・遺物が検出されている。城下町遺跡として最大の面積が調査されており、火災の比定等、今後基準となる所見が蓄積されている点も大きく評価できよう。前田氏(長種系)屋敷跡地点は、寛永16年(1639)以後、標記の重臣屋敷となったところであるが、これ以前の遺構・遺物が充実しており、初期城下町の屋敷跡と考えられている。丸の内7番地点では、16世紀後半～17世紀初頭の町屋→17世紀初頭～寛永8年大火頃の町屋→大火以降から万治2年の武家屋敷→万治2年以降の公事場・武家屋敷という城下町遺跡の成立、変遷が捉えられている。

これらの外側に位置する安江町・本町一丁目遺跡の各遺跡は、性格を異にするが、城下町の一般的な在り方を示す。安江町遺跡[金沢市・金沢市教育委員会1997a]は中級藩士・町人居住地が対象となる調査であるが、町人の物質的な優位性が読み取れる、興味深いデータが得られた。本町一丁目遺跡[金沢市教育委員会1995]は町人の居住地に該当し、富籤の突札等、生活臭の強い遺物が目を引く一方、建物・井戸・土坑(粘土採取坑・廃棄土坑)等の遺構配置から、屋敷地の空間構造も追究されている。木ノ新保(久昌寺含む)・三社町の各遺跡は、城下縁辺に所在する。久昌寺遺跡[金沢市(金沢市埋蔵文化財センター)]

2004b]では同名の曹洞宗寺院の墓地に該当する約300基に達する墓が調査され、城下の墓制を考える上で重要な成果をあげている。木ノ新保遺跡[石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター2002b]では、墓地・農地から足軽・下級武士の屋敷地への変容をうかがうことができ、三社町遺跡[石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター2007]でも、農地から町人地への変化が遺構より捉えられている。いずれも城下縁辺における都市域の拡大を示す良好な事例である。

その他に城下町から離れるが、関連する遺跡として戸室石切丁場跡、野田山墓地、辰巳用水が挙げられる。戸室石切丁場跡[石川県金沢城調査研究所2008e・2013c]は金沢市東部の戸室山・キゴ山周辺に広がる採石関連遺跡群であり、城内石垣の9割強を占める石材産地である。悉皆踏査により丁場の分布範囲と保存状態が確認され、戸室石の特性を踏まえた総合的な調査研究により丁場の構造と変遷、戸室石の石割技術など様々な点が明らかになった。野田山墓地では、墓地移転に伴う山麓部分の調査や藩主前田家墓所の測量・試掘調査等が実施されている[金沢市(金沢市埋蔵文化財センター)2003d・2008a・2012e]。辰巳用水[金沢市(金沢市埋蔵文化財センター)2009b]は寛永9年(1632)に開削され、終着点である金沢城では堀や庭園の水源として利用された。調査でも導水管(木樋、石樋)が確認されている。上流部では用水法面を保護するための三段石垣や隧道など当時の土木技術を良好に留めた遺構が残る。



「御城中老分基絵図」(横山隆昭氏蔵)文政13年(1830)

第6図 近世後期の金沢城全体図

第2表 金沢城の沿革

時期	年号	西暦	出来事
初期金沢城	天文15年	1546	本願寺別院として金沢御坊(金沢坊舎)を設置、金沢城の前身
	天正8年	1580	佐久間盛政が入城、土塁や堀を整備
	天正11年	1583	賤ヶ岳の合戦において佐久間盛政が敗北、前田利家が入城し、これ以後前田家が14代にわたり金沢城主をつとめる
	天正14年	1586	天守構築、翌年に南部藩家臣北信愛が前田利家のもてなしを受け、天守をはじめ、城内の案内をされる
	天正15年	1587	石垣職人の穴太源介に知行100俵を与え召抱える
	文禄元年	1592	戸室石を利用した本格的な石垣構築を開始、東ノ丸東面・北面、本丸西面の石垣を構築
	慶長7年	1602	落雷により天守焼失
	慶長期		本丸南面・三ノ丸北面・尾坂門の石垣を構築
	元和期		東ノ丸附段・百間堀縁などの石垣を構築
	元和6年	1620	本丸焼失、翌年本丸御殿などを再建
寛永の大火後	寛永8年	1631	城下町から出火、辰巳櫓に飛び火し本丸御殿など城内も延焼【寛永の大火】大火後二ノ丸を造成拡張し御殿を造営。大規模な城普請でほぼ現在の縄張りに近い状態になる
	寛永9年	1632	厚川上流から取水する辰巳用水を施工、城内に引水され城内外の堀が水堀化
	寛永11年	1634	玉泉院丸に泉水や築山、御亭などを造成
	寛永17年	1640	
	}		20年間藩主不在、城内が荒廃
	万治3年	1660	
	寛文元年	1661	5代藩主綱紀をはじめて入国、城内及び城下町整備や新田開発、文化振興等をすすめる
	寛文2年	1662	城内の損傷著しい石垣箇所を修築。玉泉院丸色紙短冊積み石垣もこの頃に構築か鉛瓦が普及
	}		
	寛文11年	1671	
宝暦の大火後	宝暦9年	1759	城下町で一万軒以上が焼失、金沢城内でも本丸・二ノ丸・三ノ丸などの主要部が全焼する被害【宝暦の大火】
	宝暦10年	1760	幕府に城再建と石垣修築を願い出て、修築
	宝暦11年	1761	河北門石垣を修築
	宝暦12年	1762	橋爪門を再建
	宝暦13年	1763	五十間長屋石垣を修築、10代藩主重教二ノ丸御殿に入る
	明和2年	1765	石川門石垣を修築
	安永元年	1772	河北門を再建
	天明8年	1788	五十間長屋や石川門などを再建 橋爪門続櫓台修理
	文化5年	1808	二ノ丸火災
	文化6年	1809	橋爪門を再建、12代藩主斉広二ノ丸御殿に移徙
寛政11年	1799		
安政2年	1855	} 地震による石垣被害が大きく、石垣を修築	
安政5年	1858		
近代以降	明治4年	1871	兵部省(のち陸軍省)の所轄となり、多くの建物が払い下げ
	明治9年	1876	河北門二ノ門の渡櫓や櫓台石垣を撤去するよう進達
	明治14年	1881	二ノ丸御殿から出火し、御殿の他、菱櫓・五十間長屋・橋爪門なども焼失
	明治15年	1882	河北門一ノ門を解体、代わりに矢来門を設置
	明治17年	1884	鼠多門焼失
	明治40年	1907	辰巳櫓下の高石垣が崩落、石垣が幅200mに渡り上部2/3が取り壊され、現在残るように段を設けて改修
	昭和24年	1949	戦後、金沢大学の敷地として利用
	平成7年	1995	金沢大学の敷地を城外へ移転
	平成8年	1996	石川県が土地を取得し、金沢城公園として整備を開始
	平成13年	2001	菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓を復元
平成20年	2008	国史跡に指定	
平成22年	2010	河北門を復元、いもり堀の段階復元	
平成27年	2015	橋爪門を復元、玉泉院丸庭園を再現復元	
令和2年	2020	鼠多門を復元、鼠多門橋を整備	

第2節 金沢城の沿革

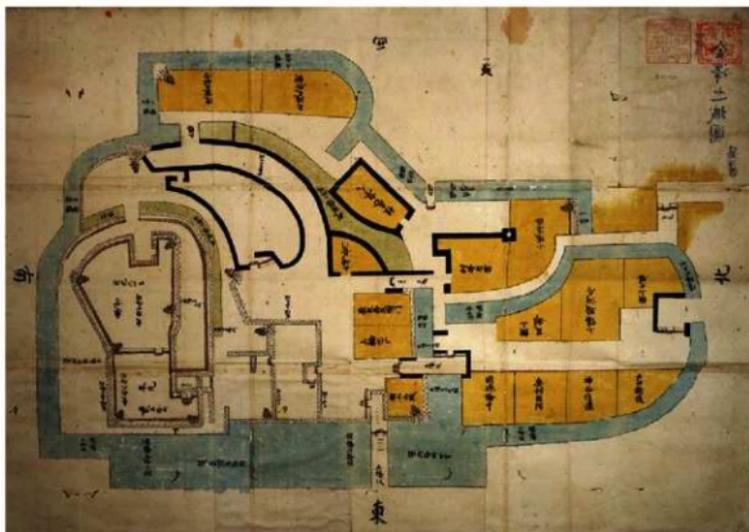
金沢城の沿革については既刊の『金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書1』[石川県金沢城調査研究所2008d]が詳しく、参照されたい。ここでは、次頁の年表(第2表)をもって代え、若干の補足を付加しておきたい。

年表では、金沢城の歴史を4期に区分し、造成・災害・修築等を中心に記載した4つの時期については、利家による城内整備から寛永の大火までを「初期金沢城」、寛永大火後の城内整備から宝暦の大火までを「寛永の大火後」、宝暦大火後の城内整備から廃藩までを「宝暦の大火後」、廃藩から現在までを「近代以降」とした。

初期金沢城とそれ以前については、その様相を窺うに足る絵図・文献は極めて少なく、埋蔵文化財調査の所見が重要となる。

画期となった災害のうち、寛永8年(1631)の大火は、金沢城の骨格を変える契機となった。それまでは本丸が中心であったが、大火を契機に二ノ丸が拡大され、ここに壮麗な御殿が営まれた。この二ノ丸を中心として定まった縄張りが、現在まで受け継がれることとなる。一方、宝暦9年(1759)の大火は、全盛期の終わりを象徴する災害で、三階櫓や辰巳櫓といった本丸の櫓群は、二度と再建されることなく、石川門・河北門・橋爪門のいわゆる三御門も、再建までに10～30年の長期を要した。

廃藩後は、明治14年(1881)に二ノ丸御殿が焼亡したほか、あらたに城地を管轄した陸軍の手により旧来の建物は次々に撤去された。また城の外堀・内堀の多くは埋め立てられ、松原屋敷・金谷出丸など縁辺が削平され往時の形状が失われた郭もある。戦後、金沢大学の敷地になってからも様々な改変を受けている。



「加州金沢之城図」(東京大学総合図書館蔵) 近世初期

第7図 近世初期の金沢城

第3節 鼠多門（玉泉院丸）の沿革

本節については、鼠多門・鼠多門Ⅰにおいて詳細を記述しているの、そちらを参照していただきたい。ここでは、玉泉院丸に係る年表を掲載する。

第3表 鼠多門（玉泉院丸）年表

【近世初期】		
年代	内容	出典
天正19年 (1591)頃	重臣村井長頼の屋敷が西ノ丸に置かれていた。	『三空閑書』（豊田森田）、 『楽報公役話』（加越能）、 『新山田野書』（加越能）
慶長5年 (1600)頃	関ヶ原合戦のち、重臣長連龍の屋敷が西ノ丸に置かれたと伝える。	『長谷部信連記』（加越能）、『金沢古蹟志』、「可観小説」 (加越能)
慶長後半期 (1605～14)	金沢城の絵図に、西ノ丸に近藤大相守・上坂又兵衛、三ノ丸に長連龍の屋敷が描かれる。	『加甲金沢之絵図』（東大園）ほか
元和元～3年(1615 ～17)	玉泉院（二代藩主前田利氏正室 永、織田信長娘）の屋敷が造営され、ここに移る。	『御歴代御書写』一（加越能）、 『本藩歴史』「金沢史」
元和9年(1623)	金沢城内で玉泉院没する。	『三空閑書』、「本藩歴史」
【近世前期】		
年代	内容	出典
寛永8年(1631)	大火を契機に二ノ丸御殿を造営する。	『加藤四初遺文』（加越能）
寛永9年(1632)	辰巳用水を開削し城内に引水する。	『金城深秘録』（豊田森田）
寛永11年(1634)	京都の庭師柳左衛門を招いて作庭する。	『三空閑書』 『資家見聞集』（加越能）
寛永元年(1661)	玉泉院丸に観を建設し、「池」を掘らせる。	『政略記』（加越能）、 『日帳』（豊田森田）
元禄元年(1688)	馬廻番所を撤去し、千宗室に御亭や農地の整備を指示する。 同年9月観を取り壊し、御亭を花畑を築く。	『葛巻昌興日記』（加越能）
宝暦8年(1758)	鼠多門周辺の石垣が崩れているのが確認される。	『御城御遠見御道筋』（加越能）
【近世中後期】		
年代	内容	出典
宝暦9年(1759)	玉泉院丸、大火による焼失をまぬがれる	『金沢城焼後普請等被仰付候絵図』 (加越能)
明和2年(1765)	鼠多門橋を架け替える。	『政略記』
文化9年(1812)	鼠多門長屋を修理する。	『御城御遠見御道筋』
文化13年(1816)	鼠多門を玉泉院様丸御門と改称する。	『御城御遠見御道筋』
文政4年(1821)	武具土蔵を新築する。	『資家氏採取文書』（金沢大）
天保3年(1832)	斉香、カラカサ亭の設置を命ずる。	『温敬公日記』（育徳会）
安政2年(1855)	地震で鼠多門土蔵に被害が及ぶ。	『御用方手摺』「加賀藩史料」
【近代】		
年代	内容	出典
明治4年(1871)頃	オランダ人医師スロイスの邸宅が置かれる（～明治8又は9年頃）	『金沢古蹟志』
明治10年(1877)	鼠多門橋、老朽化により撤去される。	『稿本金沢史』
明治13年(1880)	兼六園に設置された明治記念之際の土台石組みに玉泉院丸の礎石を転用する。	『稿本金沢史』
明治15年(1882)	金沢営所因獄（16年より金沢陸軍監獄と称す）を新築する。	国立公文書館文書
明治17年(1884)	落り土地盤沈下のため、新築した陸軍監獄が傾く。 鼠多門が焼失する。	『陸軍大日記』（防衛研究所）
明治31年(1898)	鼠多門修復めどが完成する。	『金沢の百年』
明治40年(1907)	玉泉院丸の南方斜面を傾平する。	『陸軍大日記』 (防衛研究所)
大正13年(1924)頃	玉泉院丸に馬車連施設を設置する。	『第9師団関係資料（建造物履歴表）』「金沢史」
【戦後】		
年代	内容	出典
昭和24年(1949)	金沢大学が開学、玉泉院丸跡に薬草園を設置。	『金沢大学五十年史 通史編』
昭和30年(1955)	県スポーツセンター竣工。40年県体育館竣工。	『石川県体育協会20年の歩み』
平成20年(2008)	県体育館閉館、解体撤去。	『玉泉院丸庭園』石川県史P
平成27年(2015)	暫定整備のもと玉泉院丸庭園復元。	『玉泉院丸庭園』石川県史P
令和2年(2020)	鼠多門、鼠多門橋完成。	

* 出典欄の略称は次のとおり

【史料蔵書機関】

豊田森田＝石川県立図書館豊田文庫、加越能＝金沢市玉川図書館加越能文庫、東大園＝東京大学総合図書館、玉園興村＝金沢市立玉川図書館興村文庫、防衛研究所＝防衛研究所戦史研究センター、育徳会＝(公財)前田育徳会、石川歴博＝石川県立歴史博物館、金沢大＝金沢大学文学部日本史研究室

【図書】

『金沢古蹟志』＝原史国書社(1976年)、『金沢史』＝『金沢史』資料編3 近世～「稿本金沢史文」(金沢市役所1973年複製版)、『金沢の百年』(金沢市史編さん室編1965)、『金沢大学五十年史 通史編』(金沢大学創立50周年記念事業後援会1999稿本編文章)、『石川県体育協会20年の歩み』(石川県体育協会1968)

第4節 既往の調査成果

1. 金沢城の発掘調査（第4図、第4・5表）

金沢城跡における埋蔵文化財調査は、昭和43年の金沢城学術調査委員会が実施した本丸・二ノ丸等の学術調査が端緒である。昭和50～61年には金沢大学が主体となり、大学施設設置工事に伴う調査を実施している。

平成4～6年には県土木部が所管する都市計画道路整備に伴い、石川県立埋蔵文化財センターが石川門前土橋、車橋門の一部で調査を実施している。平成8年に石川県が金沢城跡の用地を国から取得したことに始まる金沢城公園整備事業に伴い、平成9～13年にかけて石川県立埋蔵文化財センター（平成10年以降は（財）石川県埋蔵文化財センター）が二ノ丸内堀・菱櫓、本丸附段、三ノ丸等の調査を実施した。

平成13年、石川県教育委員会文化財課に金沢城研究調査室（平成19年度に石川県金沢城調査研究所に改組）が開設され、翌年より絵図・文献、埋蔵文化財、建造物、石垣等伝統技術の4分野から総合的な調査研究が開始された。埋蔵文化財確認調査事業は初期金沢城の解明を目的として平成14年度から継続的に実施されている。調査では本丸・東ノ丸を中心にして石垣の構築過程、本丸大手通路（虎口）の変遷過程、本丸の造成状況、庭園遺構の検出など多くの成果がある。

平成15年度以降は公園整備事業に係る調査が再開され、いもり堀・河北門・玉泉院丸庭園・橋爪門・鼠多門で復元整備にかかる確認調査が実施された。このほか、都心軸整備推進事業として（財）石川県埋蔵文化財センターが城の外郭部にあたる堂形で調査している。

令和2年度からは、二ノ丸の復元可能性を探るための確認調査が実施されている。

2. 玉泉院丸の調査

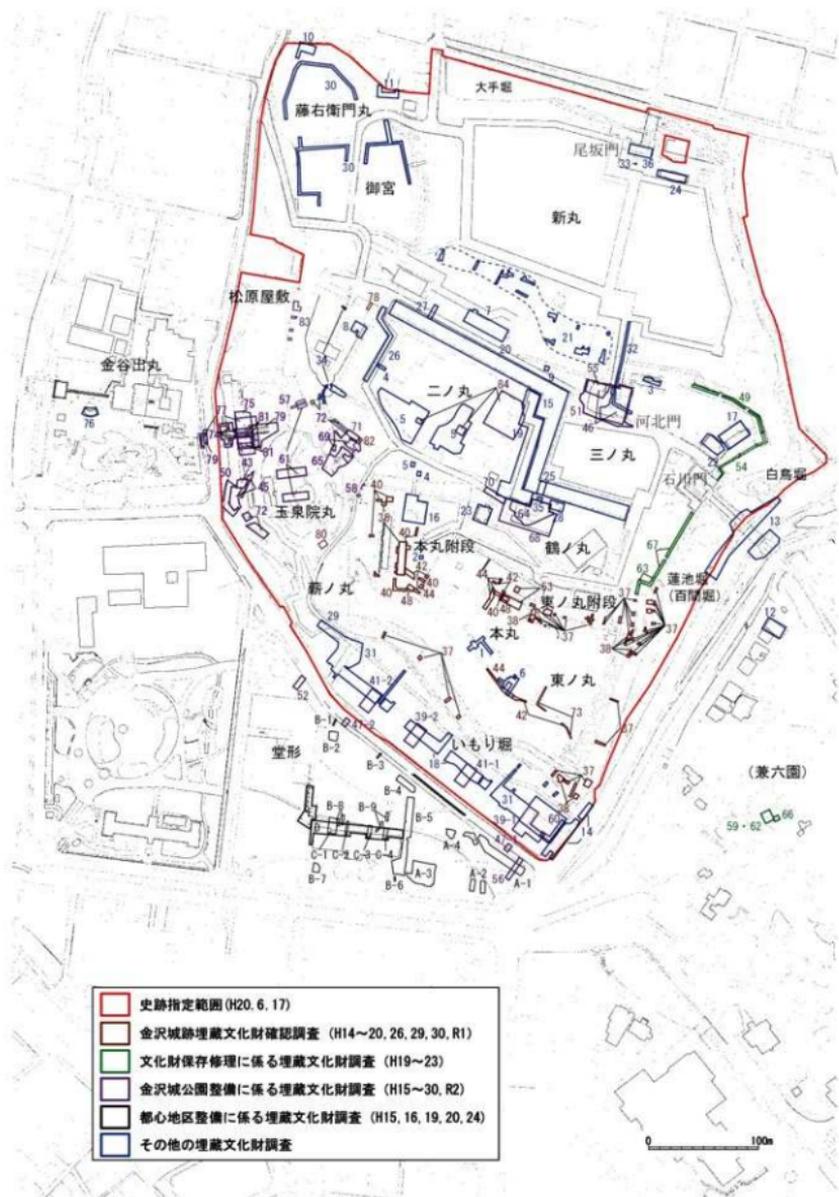
玉泉院丸での発掘調査については、平成17～19年度にかけて実施した、玉泉院丸南西石垣の調査が始まる。その調査では、今回報告する土蔵の基礎が確認されているほか、近世初期の自然石を積んだ石垣も検出されている。平成20～24年度にかけて実施された玉泉院丸庭園の調査では段落ちの滝や滝石組、色紙短冊積石垣下からは滝壺を検出し、玉泉院丸庭園の特徴を明らかとした。平成25年度は玉泉院丸庭園整備に伴い南石垣の調査を実施している。

平成26～30年度にかけては、鼠多門及び鼠多門橋の復元整備に伴い、埋蔵文化財確認調査を実施した。鼠多門では、門内に側壁石垣（下部）の遺存、そして中央大柱礎石及び鏡柱・脇柱・背面大柱礎石の抜取痕跡を確認し、門を構成する8本の柱位置を確定したほか、櫓の東柱礎石、中柱礎石の抜取痕跡、石垣に残る痕跡等から、その規模と構造を明らかとした。

また、鼠多門の東側にある紅葉橋へと至る坂道では、延石の抜取痕跡、西側にある金谷出丸へと繋がる鼠多門橋では、最終段階に属する橋脚を構成する木柱や前段階の橋脚痕跡等も確認した。

平成30～令和元年度にかけて、金沢城調査研究事業「城郭庭園等の総合研究」に係る切石積石垣確認調査*について、玉泉院丸では平成30年度に玉泉院丸庭園南東部の石垣を対象に調査を実施し、作庭初期の石垣を確認するなどの成果があった。また、令和元年度は色紙短冊積石垣周辺を対象に調査を実施し、色紙短冊積石垣の構築時期について所見等が得られた。〔石川県金沢城調査研究所2018e、2019d〕

*平成29年度は、教寄屋屋敷北で実施



第8図 金沢城跡発掘調査位置図 (～令和2年度)

第4表 金沢城発掘調査一覧(1)

No.	調査箇所	調査年度	調査主体	調査原因	備考	文献
1	本丸	昭和43(1968)	金大名城調査	学術調査	西園門・礎石建物跡	井上1969・吉岡1985・増山1999
2	本丸附設	昭和43(1968)	金大名城調査	学術調査		井上1969・吉岡1985・増山1999
3	三ノ丸	昭和43(1968)	金大名城調査	学術調査	川原石石積	井上1969・吉岡1985・増山1999
4	二ノ丸	昭和43(1968)	金大名城調査	学術調査	築港石路、西積、築家儀付土埴物跡	井上1969・吉岡1985・増山1999
5	二ノ丸	昭和44(1969)	新教大・金大	社会情態	簡倉跡、排水施設、用水路	新教大1970・吉岡1985・増山1999
6	本丸	昭和44(1969)	新教大・金大	学術調査	三輪櫓、三十間長尾櫓	新教大1970・吉岡1985・増山1999
7	四ノ丸長尾	昭和50(1975)	金大	学生企画別館建設	長尾建石・櫓石組	土井1976・吉岡1985・増山1999
8	二ノ丸	昭和52(1977)	金大	学術調査	明治14年地頭の跡跡	佐々木1981・吉岡1985・増山1999
9	二ノ丸～四ノ丸間長尾	昭和54(1979)	金大考古学研究室	無線アンテナ設置	大塙礎石	佐々木1980・吉岡1985・増山1999
10	露石森門北北側法面階段	昭和56(1981)	金大考古学研究室	擁壁設置	石垣列・瓦	宮々田ら1986・増山1999
11	禦門礎石側壁部	昭和61(1986)	金大考古学研究室	境界崖部崩落防止工事	石垣列・切石側壁、瓦	宮末ほか1989
12	第六圍(江戸町御定廻)	平成元(1989)	私理文センター	店舗改装	17世紀初期の遺構面(礎石建物等)	私理文センター1992
13	石川門南土塙(石川橋)	平成4・6(1992-94)	私理文センター	道路整備	土塙の形成過程 16世紀後半頃の掘削跡遺構等	私理文センター1997a・1998
14	車庫	平成6(1994)	私理文センター	道路整備	石垣	私理文センター1996
15	内庭第1次・巻橋	平成9(1997)	私理文センター	公園整備(復元整備)	礎石・礎石(埋没された刀・鏝・鏡)、巻橋礎石等	金沢城調査研究所2011a・2012a
16	本丸附設	平成10(1998)・12(2000)	(財)私理文センター	公園整備(復元整備)	簡倉跡	金沢城調査研究所2019c
17	三ノ丸第1次	平成10(1998)	(財)私理文センター	公園整備(施設建設)	船廻り櫓(竪石構造体)、船廻り部	金沢城調査研究所2006a
18	いもり堀第1次	平成10(1998)	(財)私理文センター	公園整備(復元整備)	天正～元和頃の堀・土塙、元和以後の堀・縁石	金沢城調査研究所2020a
19	五ノ丸長尾	平成10-11(1998-99)	(財)私理文センター	公園整備(復元整備)	石垣内部構造 櫓・長尾礎石、17世紀初期の遺構面	金沢城調査研究所2011c・2012a
20	内庭第2次	平成11(1999)	(財)私理文センター	公園整備(復元整備)	西平土塙石垣の構造把握	金沢城調査研究所2011b・2012a
21	新丸第1次	平成11(1999)	(財)私理文センター	公園整備(園路整備)	近代に建設した築の範囲確定	金沢城調査研究所2016c
22	三ノ丸第2次	平成11(1999)	(財)私理文センター	公園整備(施設建設)	礎石建物(番所跡)、石垣井戸	(財)私理文センター2002a
23	籠ノ丸第1次	平成11(1999)	(財)私理文センター	公園整備(施設建設)	礎石、石塙(浪已用水)	金沢城調査研究所2016c
24	新丸第2次	平成11(1999)	(財)私理文センター	公園整備(施設建設)	16世紀後半から末期頃の遺構面	(財)私理文センター2002a
25	櫓石門外塙壁跡瓦葺	平成11(1999)	(財)私理文センター	公園整備(復元整備)	礎石基礎の構造把握	金沢城調査研究所2011c・2012a
26	二ノ丸園路	平成11(1999)	(財)私理文センター	公園整備(園路整備)	礎石、石塙遺構	金沢城調査研究所2016c
27	三ノ丸第3次	平成11(1999)	(財)私理文センター	公園整備(設備設置)	土塙	金沢城調査研究所2011c・2012a
28	籠ノ丸第2次	平成12(2000)	(財)私理文センター	公園整備(復元整備)	16世紀末期頃の遺構面	金沢城調査研究所2015b
29	いもり堀第2次	平成12(2000)	(財)私理文センター	公園整備(園路整備)	慶長後半から元和年間の石垣	清和・土田2001・金沢城調査研究所2020b
30	籠ノ丸第1次	平成12(2000)	(財)私理文センター	公園整備(園路整備)	火堀遺構、空堀跡、石五等	金沢城調査研究所2019c
31	いもり堀第3次	平成12(2000)	(財)私理文センター	公園整備(園路整備)	元和以前の堀・土塙・土供違等 金田	清和・土田ら2001・金沢城調査研究所2020a
32	三ノ丸第4次	平成12(2000)	(財)私理文センター	公園整備(園路整備)	河北門石垣台・礎石、16世紀後半～末期頃の遺構面	金沢城調査研究所2015b
33	新丸第3次	平成12(2000)	(財)私理文センター	公園整備(園路整備)	尾坂門石段、16世紀後半～末期頃の遺構面と合わせて尾坂門調査として報告	金沢城調査研究所2016c
34	籠ノ丸門等	平成13(2001)	(財)私理文センター	公園整備(園路整備)	石段、石塙遺構 敷石基礎調査状況として報告	金沢城調査研究所2016c
35	籠ノ丸跡形	平成13(2001)	(財)私理文センター	公園整備(園路整備)	土塙、ピット	金沢城調査研究所2015b
36	尾坂門	平成13(2001)	(財)私理文センター	公園整備(植栽)	石垣塙、跡形 33と合わせて尾坂門調査として報告	金沢城調査研究所2016c
37	本丸周辺	平成14(2002)	金沢城調査研究所	保存目的調査	本丸瓦口遺構の把握	金沢城調査研究所2008a
38	本丸周辺	平成15(2003)	金沢城調査研究所	保存目的調査	三十間長尾礎石台石垣の調査等	金沢城調査研究所2008a
39	いもり堀	平成15(2003)	金沢城調査研究所	公園整備(復元整備)	輝煌台の構造	金沢城調査研究所2004a・2020a
40	いもり堀	平成16(2004)	金沢城調査研究所	保存目的調査	寛永大火以前の2面の遺構面	金沢城調査研究所2008a
41	いもり堀	平成16(2004)	金沢城調査研究所	公園整備(復元整備)	築城当初の堀の規模を確認	金沢城調査研究所2005a・2020a
42	本丸	平成17(2005)	金沢城調査研究所	保存目的調査	本丸二輪櫓石垣	金沢城調査研究所2014c
43	三ノ丸	平成17(2005)	金沢城調査研究所	公園整備(石垣修築)	近代の改修、石垣上部の二重櫓の基礎構造の把握	金沢城調査研究所2010a
44	本丸	平成18(2006)	金沢城調査研究所	保存目的調査	元和期の大規模造成、初期金沢城の礎石建物	金沢城調査研究所2014c
45	五ノ丸院丸(南西石垣)	平成18(2006)	金沢城調査研究所	公園整備(石垣修築)	部分修繕の把握、初期金沢城石垣	金沢城調査研究所2010a
46	河北門	平成18(2006)	金沢城調査研究所	公園整備(復元整備)	現状状況、規模、改修、創設時期の把握	金沢城調査研究所2011b
47	いもり堀	平成18(2006)	金沢城調査研究所	公園整備(復元整備)	南陣の位置確認	金沢城調査研究所2007a・2020a
48	本丸	平成19(2007)	金沢城調査研究所	保存目的調査	寛永8年大火以後の大型遺構	金沢城調査研究所2014c
49	石川門(右方土塙跡)	平成19(2007)	金沢城調査研究所	文化財修理(建造物)	跡形跡の確認	金沢城調査研究所2014b
50	五ノ丸院丸(南西石垣)	平成19(2007)	金沢城調査研究所	公園整備(石垣修築)	改修範囲と時期、初期金沢城石垣の史実の確認	金沢城調査研究所2010a

第5表 金沢城発掘調査一覧(2)

No.	調査箇所	調査年度	調査主体	調査原因	備考	文献
51	河北門	平成19(2007)	金沢城調査研究所	公園整備(復元整備)	林右門創建街(慶長末期以前)の遺構確認	金沢城調査研究所2011b
52	いもり堀	平成19(2007)	金沢城調査研究所	公園整備(復元整備)	南陣の位置確認	金沢城調査研究所2008a・2020a
53	本丸	平成20(2008)	金沢城調査研究所	保存目的調査	寛永8年大火以後の大聖遺構	金沢城調査研究所2014c
54	石川門(左方太鼓櫓)	平成20(2008)	金沢城調査研究所	文化財修理(建造物)	控右衛門の確認	金沢城調査研究所2014b
55	河北門	平成20(2008)	金沢城調査研究所	公園整備(復元整備)	石垣解体調査(ニノ門臺台、一ノ門櫓型)	金沢城調査研究所2011b
56	いもり堀	平成20(2008)	金沢城調査研究所	公園整備(復元整備)	堀の南岸、曾日用水石等、近世初期の石垣、石割等	金沢城調査研究所2009a・2020a
57	玉泉院丸(東本)	平成20(2008)	金沢城調査研究所	公園整備(遺構確認)	泉本北部の遺構確認	金沢城調査研究所2015c
58	玉泉院丸(いもり堀石割)	平成20(2008)	金沢城調査研究所	公園整備(遺構確認)	石垣支形箇所内の基底部試掘	金沢城調査研究所2009b
59	第六園楽橋山	平成21(2009)	金沢城調査研究所	文化財修理(石垣修築)	石垣解体調査	管理事務所・金沢城調査研究所2012
60	いもり堀	平成21(2009)	金沢城調査研究所	公園整備(復元整備)	懸崖橋石右丸東部の残存状況確認、一部解体	金沢城調査研究所2010a・2020a
61	玉泉院丸	平成21(2009)	金沢城調査研究所	公園整備(遺構確認)	泉水中央部、北部の遺構確認(中島、出島、重石等)	金沢城調査研究所2009c・2010d
62	第六園楽橋山	平成22(2010)	金沢城調査研究所	文化財修理(石垣修築)	石垣解体調査	金沢城調査研究所2014・管理事務所・調査研究所2012
63	石川門(左方太鼓櫓)	平成22(2010)	金沢城調査研究所	文化財修理(建造物)	控右衛門の確認	金沢城調査研究所2014b
64	横川門	平成22(2010)	金沢城調査研究所	公園整備(復元整備)	二ノ門礎石根回項、石組岸壁	金沢城調査研究所2014
65	玉泉院丸	平成22(2010)	金沢城調査研究所	公園整備(遺構確認)	泉本北東部の遺構確認(護岸石垣・重石等)	金沢城調査研究所2010c・2011d
66	第六園楽橋山	平成23(2011)	金沢城調査研究所	文化財修理(石垣修築)	石垣・石造物の解体調査	金沢城調査研究所2012b・管理事務所・調査研究所2012
67	石川門(左方太鼓櫓)	平成23(2011)	金沢城調査研究所	文化財修理(建造物)	控右衛門の確認	金沢城調査研究所2014b
68	横川門	平成23(2011)	金沢城調査研究所	公園整備(復元整備)	二ノ門礎石根回項、石組岸壁、近世初期遺構	金沢城調査研究所2015b
69	玉泉院丸	平成23(2011)	金沢城調査研究所	公園整備(遺構確認・復元整備)	色紙切縁石右下の遺構確認	金沢城調査研究所2011a・2012b
70	横川門	平成24(2012)	金沢城調査研究所	公園整備(復元整備)	石組岸壁、石垣台、林右衛門	金沢城調査研究所2015b
71	玉泉院丸	平成24(2012)	金沢城調査研究所	公園整備(復元整備)	色紙切縁石右丸周辺と堀石基部の遺構確認	金沢城調査研究所2012d・2013b
72	玉泉院丸(南石垣)	平成25(2013)	金沢城調査研究所	公園整備(石垣修築・復元整備)	石垣の解体調査、近世初期の土塁確認	金沢城調査研究所2014d
73	裏ノ丸	平成26(2014)	金沢城調査研究所	保存目的調査	東ノ丸庭園の遺構確認	金沢城調査研究所2015d
74	玉泉院丸	平成26(2014)	金沢城調査研究所	公園整備(遺構確認)	鼠多門・鼠多門礎の遺構確認	金沢城調査研究所2015c・2020b
75	玉泉院丸	平成27(2015)	金沢城調査研究所	公園整備(遺構確認)	鼠多門の遺構確認	金沢城調査研究所2015e・2020b
76	倉谷出丸	平成27(2015)	金沢市歴史センター	博物館築	堀または礎跡、五階東土筑、石組遺構	金沢市歴史文化センター2016a
77	玉泉院丸	平成28(2016)	金沢城調査研究所	公園整備(遺構確認)	鼠多門・鼠多門礎の遺構確認	金沢城調査研究所2016a・2017a・2020b
78	般若屋敷敷北	平成29(2017)	金沢城調査研究所	保存目的調査	切石積石垣確認調査	金沢城調査研究所2018a
79	玉泉院丸	平成29(2017)	金沢城調査研究所	公園整備(遺構確認)	鼠多門・鼠多門礎の遺構確認	金沢城調査研究所2018a・2020b
80	玉泉院丸(南東)	平成30(2018)	金沢城調査研究所	保存目的調査	切石積石垣確認調査	金沢城調査研究所2018a・2018a
81	玉泉院丸	平成30(2018)	金沢城調査研究所	公園整備(遺構確認)	鼠多門の遺構確認	金沢城調査研究所2019a・2020b
82	玉泉院丸(北)	令和元(2019)	金沢城調査研究所	保存目的調査	切石積石垣確認調査	金沢城調査研究所2019d
83	般若屋敷敷西	令和2(2020)	金沢城調査研究所	公園整備(遺構確認)	石垣保全に係る土壌調査	
84	二ノ丸	令和2(2020)	金沢城調査研究所	公園整備(遺構確認)	新殿建物の遺構確認	
A	横川跡地(安形)	平成15(2003)	(財) 泉理文センター	都心地区整備(確認調査)	橋本(安形南端築造遺構)、近世初期以前土塁遺構	(財) 泉理文センター2010
B	横川跡地(安形)	平成16(2004)	(財) 泉理文センター	都心地区整備(確認調査)	足軽番所、安形見築	(財) 泉理文センター2010
C	横川跡地(安形)	平成19(2007)	(財) 泉理文センター	都心地区整備(施設確認)	古代～近世の遺構面	(財) 泉理文センター2012
D	横川跡地(安形)	平成20(2008)	(財) 泉理文センター	都心地区整備(施設確認)	安形建物の、石垣、塼跡、古代～中世の遺構面	(財) 泉理文センター2012
E	横川跡地(安形)	平成24(2012)	(財) 泉理文センター	都心地区整備(施設確認)	石刊、石組遺構	(公財) 泉理文センター2016c

泉理文センター：石川県教育委員会
 泉理文センター：石川県立埋蔵文化財センター
 (財) 泉理文センター：石川県教育委員会(財) 石川県埋蔵文化財センター(2013年度から公益財団法人)
 金沢城研究調査室：石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室
 金沢城調査研究所：石川県金沢城調査研究所
 管理事務所・調査研究所：石川県金沢城、第六園管理事務所、石川県金沢城調査研究所
 公園緑地課・調査研究所：石川県土木部公園緑地課、石川県金沢城調査研究所
 金沢市歴史センター：金沢市埋蔵文化財センター
 金沢金沢城調査：金沢大学金沢城学術調査委員会
 金大：金沢大学

第3章 調査の概要

第1節 調査の目的と対象区域

1. 調査の目的

鼠多門及び鼠多門橋の遺構の遺存状況を確認するために調査を実施したものである。平成26年度から発掘調査は開始したが、当初は金沢城公園第三期整備計画を策定する基礎資料として予備的な調査を実施した。平成27年度からは同年度内に整備計画が策定されるとして、整備の基礎資料を得る目的に調査を実施した。

2. 対象区域

鼠多門復元整備のために発掘調査の対象としたのは、鼠多門及び門から玉泉院丸面へと至る坂道、そして周辺の遺構である番所及び土蔵が含まれる範囲である。そして鼠多門橋については、鼠多門側から歩道までの範囲と反対側の尾山神社境内の法面を調査範囲とした。合わせて1,450㎡で、累計2,300㎡を調査した。本報告では、鼠多門復元整備に係る調査範囲を鼠多門調査区とし、鼠多門橋整備に係る範囲は鼠多門橋調査区と呼称している。

第2節 調査の方法

調査区全体に、国土座標を基準とした10mグリッドを設定した(第11図)。グリッドは日本測地系に準拠している。グリッド名称は、北西杭を読むこととした。鼠多門橋調査区に関しては、橋台石垣からの



第9図 鼠多門調査区等遠景(北東から)

斜面部と堀内部についての遺物の取上げや遺構断面図等の作成に関しては、調査区中央に設定した土層観察用のセクションベルトを基準にさらに調査区を分けて遺物の取上げ等を行った。

鼠多門調査区の遺物の取上げはグリッドを基準とし、遺構名称等を付したのものには、さらにその名称、出土層位等をラベルに記載し取上げを行った。

調査時は随時写真撮影や土層断面図の作成を行った。遺構検出状況の平面図は委託により実施し、レーザー計測及び写真測量を行い、縮尺20分の1の精度で図化した。今回報告する下層遺構の平面図に関しては、写真計測を直営で実施した。

年度ごとの調査概要等やそのほか調査の詳細については、鼠多門・鼠多門橋Ⅰに記載してある。



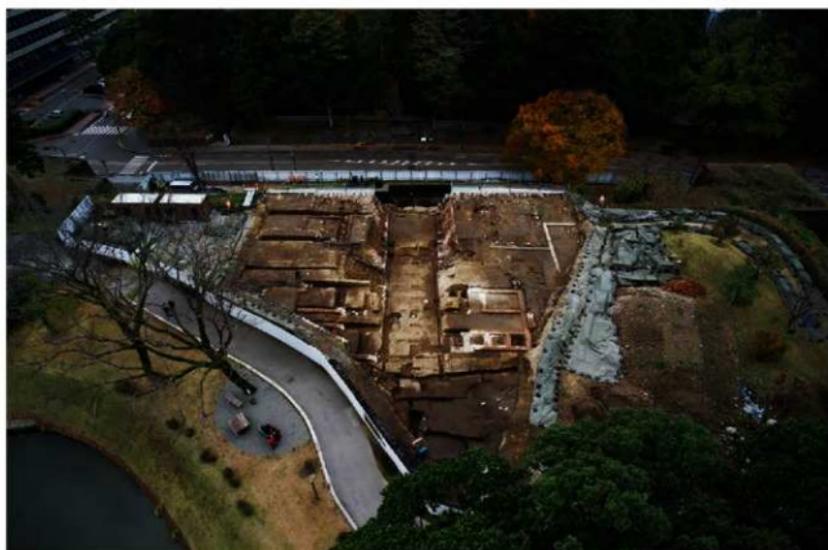
第10図 調査地点位置図



第11図 調査グリッド及びび年度別調査範囲



第12図 門部から坂道部の全景（東から）



第13図 鼠多門・鼠多門調査区遠景（西から）

第4章 鼠多門の調査

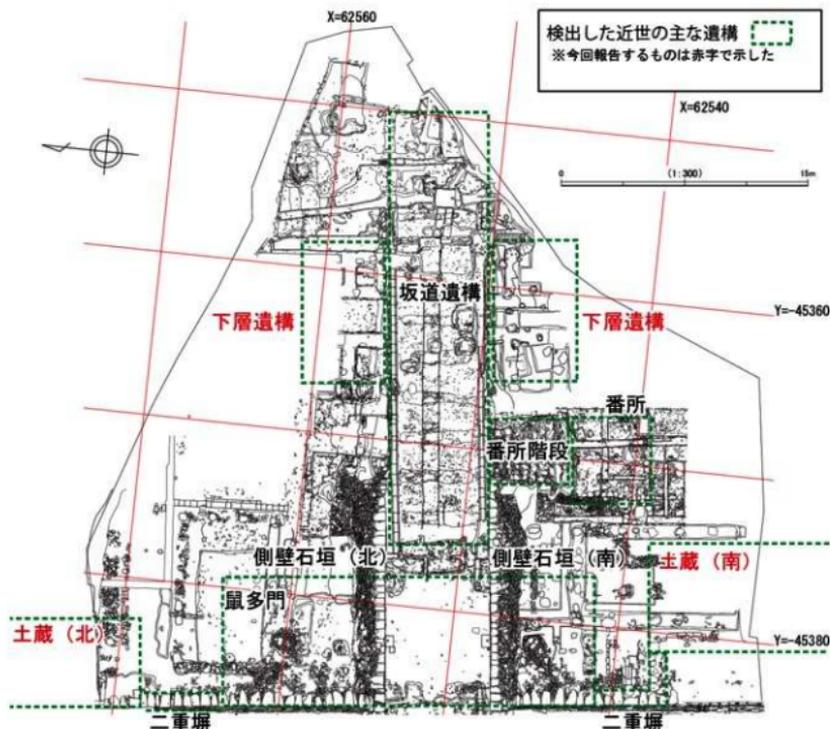
第1節 概要

1. 報告する主な遺構

報告書Ⅰでは、鼠多門復元整備に関する遺構を中心に記述したことから、復元整備に直接関係しない遺構については報告していないものがあった。本章ではそれらの遺構について、まず近世の遺構について記述し、近代の遺構についても触れることとする。

近世の遺構では、鼠多門創建以前の下層遺構が旧金沢陸軍監獄署の建物基礎を取り除いた下面から検出されている。建物礎石を多数検出しており、建物の規模等を復元するには至っていないが、出土した遺物や鼠多門創建に係る造成土の下から検出されていることから、近世初期に確実に遡る礎石建物で、金沢城内ではこれまであまり類例がない。

鼠多門創建以降に建てられたとみられる、鼠多門の南北にあった土蔵についても一部の基礎を検出

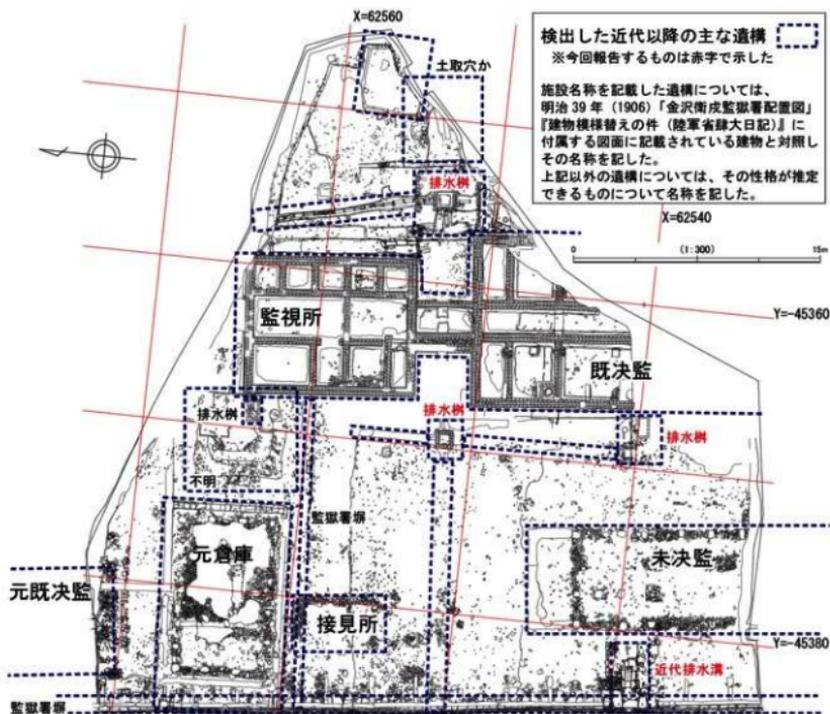


第14図 近世遺構配置図

している。建物の構造や規模を明らかとしたわけではないが、かつて報告された遺構と関連するなどの成果が得られたので、報告する。報告書Ⅰで報告した遺構についても、遺物の報告の中で関連するものについては適宜記述することとしたい。海鼠壁に使用されている腰瓦については、その四辺に入れられている「凹み」について分類し、破片数等を計測した。サイズについても3サイズに分類することができるなどの成果を得たので、その詳細について項を設けている。

近代の遺構については、建物遺構を中心に報告書Ⅰでは記述したが、本報告ではそれに付随する排水遺構や腰瓦を用いた通路遺構などの遺構が検出されているのでそれらについて報告をする。遺物については、明治32年に建てられた監獄署の建物に使用されていたレンガを整備の支障になる部分について1点ずつ取り上げた。そのレンガについて計測し分析等も実施しているので、その詳細については項を設けて記述した。監獄署に付随して設けられた排水施設に使用された土管についてもその一部を取り上げたので、報告する。

さらに、今回の調査で出土したものではないが、旧陸軍に関連する遺物として算用数字を染付ないし絵付した磁器の碗皿について詳細を記述した。鼠多門の調査でも出土しているが、報告するものは玉泉院丸庭園整備の際に併せて整備された広場工事の際に出土した。監獄署の設置に併せて廃棄された可能性の高いものであるため、年代等が推定できる資料となっている。



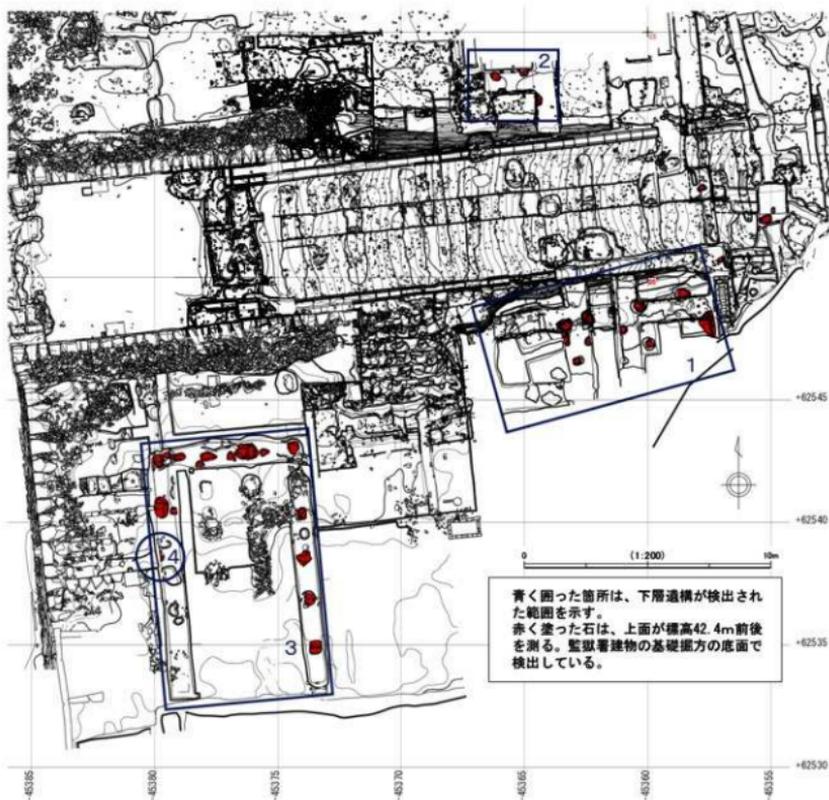
第15図 近代以降遺構配置図

第2節 下層遺構

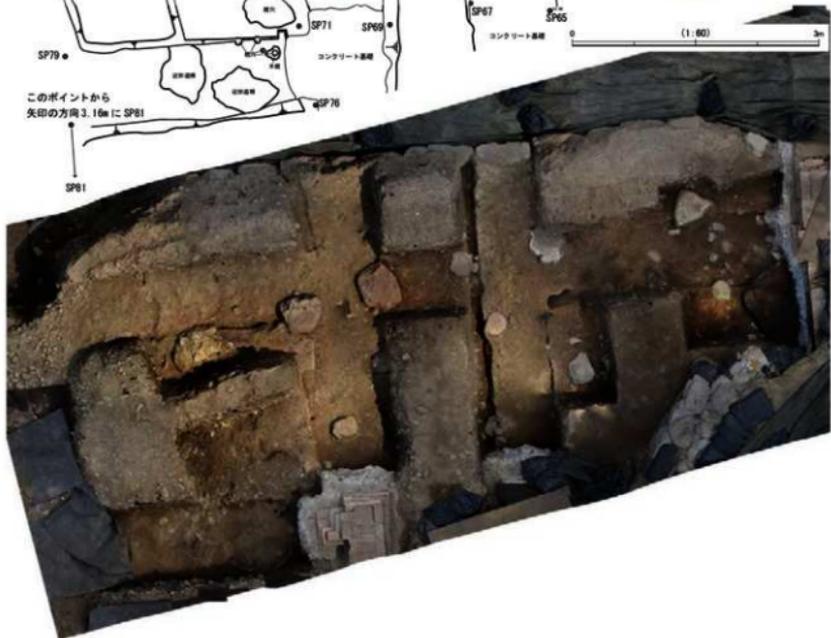
1. 概要

下層遺構としたものは、監獄署建物の基礎下から検出した礎石ないしは整地土面のことを指している。礎石は、監獄署建物の基礎を取り除いて確認したもので、当初は基礎を作る際に他所から搬入されたものという認識をしていたため、下層遺構の検討を十分にしていなかった。平成29年度調査で監獄署建物のうち、明治32年に建てられたレンガ積建物のコンクリート基礎を除去した際に、戸室石を含めた自然石が検出され(第16図1)、それらは焼土を含む造成土などによって埋められ、硬化面より掘方をもって据えられていることが判明し、礎石であると推定した。その後、2つの礎石に罫書線が入れていることなども確認し、建物礎石であると判断した。

焼土層あるいは焼土を含む土層は、鼠多門調査区のほぼ全域で確認することができる(第16図1~3など)。層の上面でそのレベルは約32.4~6m、下面で約32.3~4mとなっている。それよりも上層は暗褐色



第16図 下層検出遺構平面図 (S=1/200)



第17図 監獄署基礎下で検出した下層建物礎石平面図・オルソ写真 (S-1/60)



礎石1 検出状況 (南から)



礎石2 検出状況 (南から)



礎石3 検出状況 (東から)



礎石3 検出状況 (盛土層除去後、東から)



礎石4 検出状況 (西から)



礎石5 検出状況 (北から)



礎石6 検出状況 (南東から)



礎石5・6 検出状況 (盛土除去後、東から)

第18図 下層検出礎石1



礎石7検出状況（北から）



礎石8検出状況（西から）



礎石9検出状況（東から）



礎石10（根石カ）検出状況（北から）



礎石11検出状況（西から）



礎石12検出状況（北から）



踏石カ検出状況（北西から）



踏石カ検出状況（盛土除去後、北西から）

第19図 下層検出礎石2

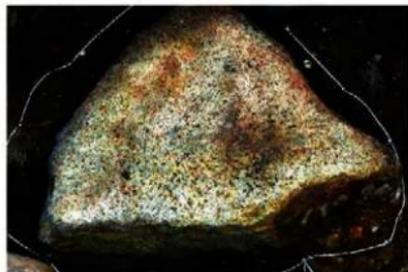
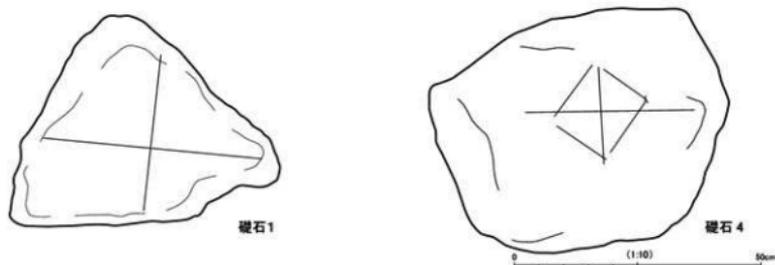
系の造成土で、鼠多門の遺構面(約32.8m前後)まで嵩上げされている。

今回の調査以外でも玉泉院丸南西石垣調査(石川県土木部公園緑地課・石川県金沢城調査研究所2010)で確認した焼土層は、ほぼ同一レベル(32.5~8m)に存在する。玉泉院丸一帯に焼土を伴う土層が広がっていたとみられる。鼠多門の調査では、この焼土層内から17世紀前半の遺物が出土し、玉泉院丸南西石垣の調査でも、17世紀前半を主体とする多数の遺物が出土している。

2. 検出した礎石

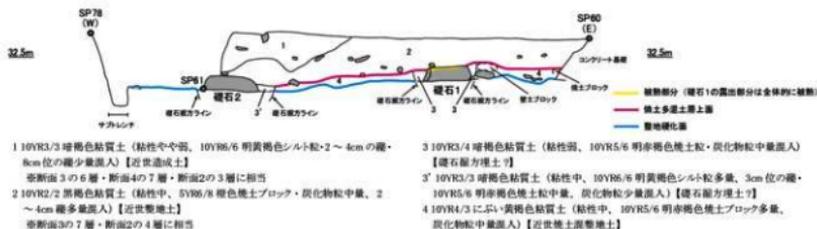
今回の調査で検出した下層遺構に伴う建物礎石とみられる石は、18基確認している。そのすべてが自然石である。第16図の1・2はレンガ積建物の基礎下で検出したもので15石、1の北東では3石を確認している。3の箇所でも多数の戸室石を検出しているが、監獄署建物と重なって検出されていることもあり、調査時においては、監獄署建物に伴う礎石の根固めではないかと判断し、詳細な調査を実施していないため、下層遺構に伴うものと判断されるが、建物礎石であるかどうかは不明とした。

第16図1の箇所で見出した礎石の中で、礎石1と礎石4には罫書き線が刻まれていた(第20図)。礎石1は「十」、礎石4には「十」とその中心部分に「◇」を刻んでいる。礎石1は戸室石ではなくやや軟質の自然石であり、罫書き線の断面は「U」字状になっている。礎石4は戸室石で、罫書き線の断面は「V」字状である。礎石1の罫書き線の長さは横(東西)方向に42.4cm、縦方向に32.4cmを測る。礎石1は割合と平坦で、石の端から端までまっすぐに伸びている。礎石4は「十」の罫書き線の長さは、横方向(南北)に32cm、縦方向に23cmを測る。上面は礎石1ほど平坦ではなく、罫書き線は少し歪んでいる。礎石4の「◇」の大きさは、欠けていない下方の2辺を測ると12.5cmと13.3cmとなり、約4寸ということになる。この「◇」の意味は不明だが、2つの礎石の「十」は同じ方向を向いており、その中心間の距離を測ると実測値で3.935mとなる。これは約13尺で、その中心である6.5尺の所に礎石2がある。礎石1・4は上面のレベルが32.4m

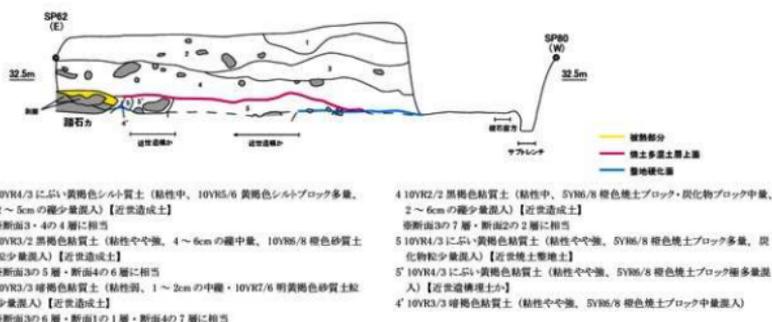


罫書き線に赤線を入れて撮影し画像処理実施

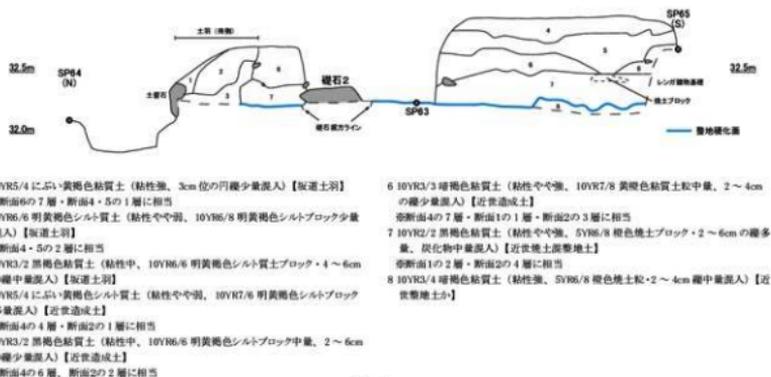
第20図 罫書き線のある礎石



断面1



断面2



断面3

第21図 造成土及び坂道南土羽土層断面1 (S=1/40)

を測るのに対して、礎石2は上面のレベルが32.35mと若干低くなっている。

礎石1～5まで東西に並んでいるが、礎石3も同じように若干低くなっている。礎石5は32.4m、礎石6・11・12は32.35m、礎石7・8・9は32.25mとさらに低くなっている。時期差がある複数棟を検出している可能性もあるが、最大で約10cmの違いであり、それら礎石は例外なく被熱していることを考えると、少なくとも同時期には露出していることから、本報告では同じ建物の礎石として考えている。礎石10としたものについては、被熱を受けていないが、レベルは32.1mとさらに低く、土層断面の観察から礎石は抜かれたと考えており、根固め石と推定している。石材種については、礎石11・12と後述する踏石カは戸室石で、それ以外は河原石ないし礎石1のような軟質の石材種となっている。

そして礎石12の右下に、大型の戸室石がある。これも加工痕跡等は確認できず自然石とみられる。礎石とは考えられないが、上面は平坦でそのレベルは32.4mとなっており、礎石1・4・5と変わらない。今回の報告では踏石カとしているが、検討を要する。石自体は炭の付着や赤い戸室石であるため目立たないが、全面的に被熱がみられるので他の礎石と同時期に存在していたものとみられる。

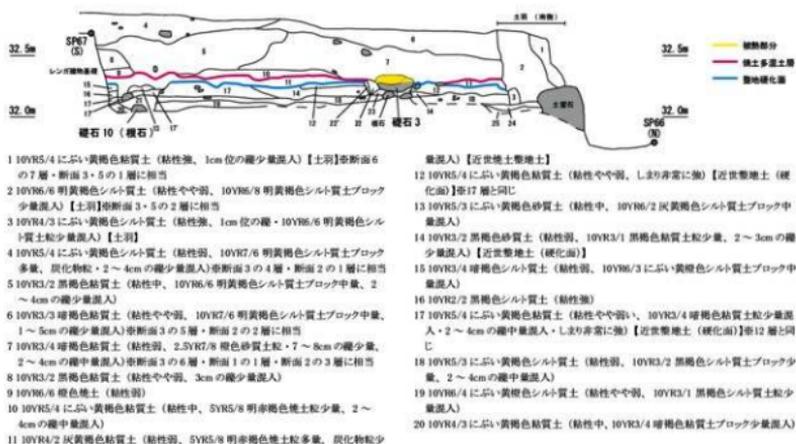
検出した建物の規模は、すべて礎石の中心部で測ると、礎石1から礎石5までは4.92mを測り、礎石5から南へ折れると礎石7があり、長さは1.56mを測る。これら検出した礎石の北側は、鼠多門への坂道で切られているため不明である。礎石1から東側へは、礎石とみられる石が3石検出されており、延びている可能性はある。南側へも礎石7からさらに延びている可能性があるので、かなり大型の建物が建っていたとみられる。

これら礎石を埋めた造成土中からは、第134図1648～1656の遺物が出土している。1648は志野で、1649は焼締陶器の壺と思われる。土師器皿は1650～1656が出土している。これらは、直接礎石建物につく遺物ではないが、C2 I 1類と分類されるもので17世紀前半の年代観が与えられている(滝川2019)。礎石12の掘方からは、第92図1383の土師器皿が1点出土している。これはC1類とみられ、造成土中のものより若干古い年代が考えられている。出土遺物からは、礎石建物の創建年代は17世紀初頭頃とみられ、その廃絶年代については造成土中の遺物から17世紀前半代と考えられよう。そこで、礎石群が被熱していることが問題となる。17世紀前半の段階で金沢城内の火事といえば、寛永8年(1631)の大火がある。その時に礎石建物が焼失したのだとすれば整合すると考えられる。

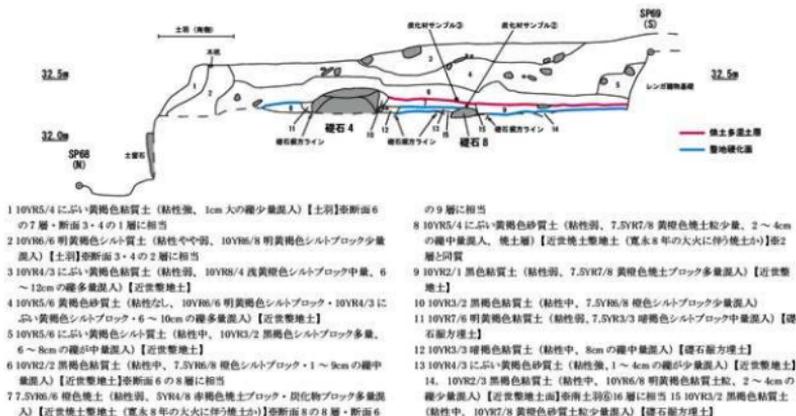
第16図2で確認した礎石4石については、その上面のレベルが32.25m前後を測り、いずれも川原石でこれらの礎石も被熱していることが確認できた(第24図)。礎石に伴う遺物は出土していないが、検出状況から上記の礎石建物と同時期の遺構として考えている。

第16図3とした箇所は、鼠多門が明治17年に焼失した後建てられた監獄署の施設があった場所で、基礎は布堀であったが、それを利用してトレンチ状に掘り下げたところ、戸室石が多数確認できた。確認した戸室石は、焼土層に覆われた状態で検出されるものが多く、それらの上面のレベルは32.5m弱を測る(第25図)。被熱の有無については、調査時に確認していないので不明である。また、遺物の出土もほとんど見られないが、戸室石の検出レベルと焼土層に覆われていることから、上記の建物遺構と同一時期とみられる。焼土層には比較的大きな炭化材が多く含まれ、分析を実施したなかには鉄釘を含んでいるものもあった(第6章)ことから、建物遺構が存在していたとみられる。南北トレンチ西壁とした土層断面に、矢穴のある赤戸室石製の加工石材が1点みられる(第25図下)。それより南側には厚さ約3～4cmのしまった粘土層が約3m確認でき、下層面の整地土と考えられる。

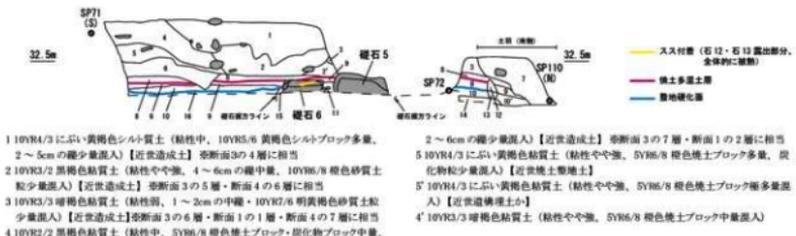
この屋敷地がいつから存在していたのかについては分からないが、慶長期の絵図に見られるような、西の丸と言われていた頃にはあったのではないかと考えらる。その後、慶長19年(1614)に越中高岡城に隠居していた二代藩主前田利長の正室である玉泉院が居住することになるが、その時に整備されて屋敷が建てられた可能性もあるかもしれない。いずれにせよ、寛永8年に焼失するまでに建てられたことは出土遺物からみても推定できる。



断面 4

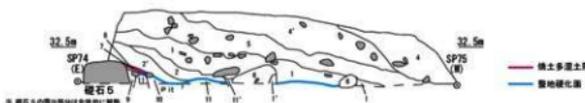


断面 5



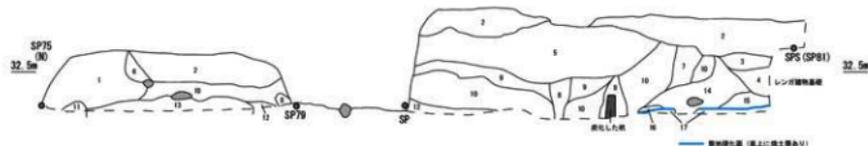
断面 6

第 22 図 造成土及び坂道南土羽土層断面 2 (S=1/40)



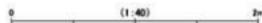
- 1 10YR4/3 に近い黄褐色砂質土 (粘性中、10YR5/6 黄褐色シルトブロック多量、2～5cm の縦少量混入) 断面面 6 の 2 層に相当
- 2 10YR3/2 黒褐色シルト質土 (粘性やや強、0.5～10cm の縦多量混入) 【近世整地土】
- 3 10YR5/4 に近い黄褐色砂質土 (粘性やや強、0.5cm～6cm の縦主体)
- 4 10YR5/4 に近い黄褐色砂質土 (粘性弱、粗砂～11cm の縦による砂礫層) 【近代造成土】断面面 9 の 1 層に相当
- 4' 10YR4/3 に近い黄褐色シルト質土 (粘性中、0.5～6cm の縦・細縦中量混入) 【近代造成土】断面面 9 の 2 層に相当
- 5 10YR3/3 暗褐色粘質土 (L.2) 中、2～10cm の縦多量混入) 【近世整地土】断面面 6 の 1 層に相当
- 6 2.5Y/2 灰黄色粘土 (粘性強、粘土塊・3cm 位の縦少量混入)
- 7 10YR3/2 黒褐色粘質土 (粘性やや強、10YR6/6 明黄褐色シルト粒・5YR5/6 明赤褐色粘土多量混入) 断面面 6 の 8 層に相当
- 8 5YR5/6 明赤褐色粘土 (粘性弱、10YR4/3 に近い黄褐色土多量・炭化物粒中量混入、機土層) 断面面 6 の 9 層に相当
- 9 10YR3/3 暗褐色粘質土 (粘性やや強、5YR5/6 明赤褐色粘土ブロック・10YR6/6 明黄褐色シルト質土・炭化物粒多量混入) 【埋石層方埋土】
- 10 10YR3/1 黒褐色シルト質土 (粘性やや強、5YR4/6 赤褐色粘土ブロック多量混入) 【% 埋土】
- 11 10YR4/2 灰黄褐色シルト質土 (粘性強、10YR6/6 明黄褐色シルト粒多量混入) 【近世整地土層】

断面 8



断面 9

- 1 10YR5/4 に近い黄褐色シルト (粘性中、2～6cm の円縦少量混入) 【土引】
- 1' 10YR4/2 灰黄褐色シルト質土 (粘性中、0.5～6cm の縦主体・8cm 位の縦中量混入) 塚ノ尾遺跡 W2 掘方内西壁土層断面 15 層に相当
- 2 10YR4/6 褐色粘質土 (粘性やや強、3～10cm の円縦多量、10YR6/6 明黄褐色シルト粒少量混入) 【近世整地土】
- 3 10YR3/3 暗褐色粘質土 (粘性強、2～6cm の円縦中量、10YR5/6 黄褐色シルト粒・10YR6/6 明黄褐色シルト粒多量混入)
- 4 10YR4/3 に近い黄褐色粘質土 (粘性強、2～4cm の円縦中量、10YR5/6 黄褐色シルト粒少量混入) 【近世整地土】
- 5 10YR2/3 黒褐色粘質土 (粘性強、2～5cm の円縦・角縦中量、10YR6/6 暗黄褐色シルト粒多量混入) 【近世整地土】
- 6 10YR3/4 暗褐色粘質土 (粘性やや強、3～6cm の円縦少量、10YR5/6 黄褐色シルト粒中量混入) 【近世整地土】
- 7 10YR3/3 暗褐色粘質土 (粘性強、1～9cm 位の円縦少量混入・10YR5/6 黄褐色シルト粒多量混入) 【近世整地土】
- 8 10YR4/6 褐色粘質土 (粘性強、2～3cm の円縦少量混入) 【近世整地土】
- 9 10YR3/4 暗褐色粘質土 (粘性強、5cm の円縦・10YR5/6 黄褐色シルトブロック多量混入) 【近世整地土】



断面 3 (西から)



断面 4 (東から)

第 23 図 造成土及び坂道南土羽土層断面 3 (S=1/40)



断面6 (東から)



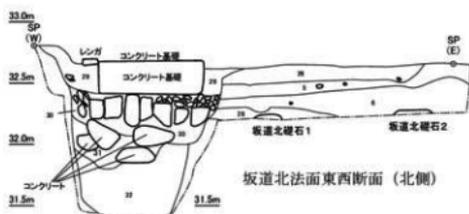
断面9 (坂道法面、西から)



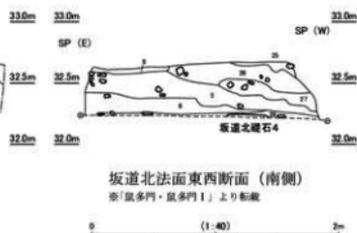
坂道南法面下層遺構検出状況 (東から)



坂道南法面下層遺構検出状況 (南東から)



坂道北法面東西断面 (北側)



坂道北法面東西断面 (南側)

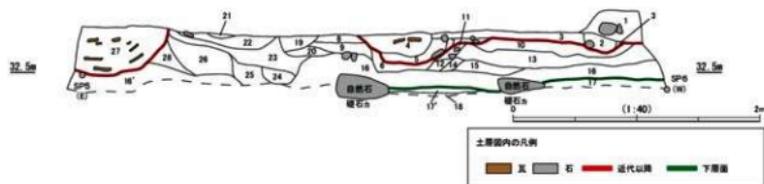


坂道北法面東西断面礎石及び下層面検出状況 (東から)



坂道北法面東西断面礎石下層面検出状況 (南から)

第24図 坂道南・坂道北土層断面図 (S=1/40)、写真



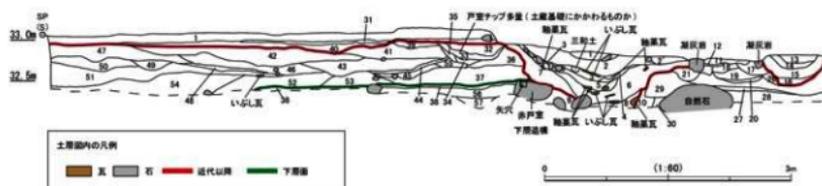
櫓部（南） 東西トレンチ南壁 土層断面図 (S=1/40)※「鼠多門・鼠多門1」より転載



東西トレンチ南壁中央 下層遺構検出状況（南東から）



東西トレンチ南壁 下層面検出状況（北から）



櫓部（南側） 南北トレンチ1西壁 土層断面図 (S=1/60)※「鼠多門・鼠多門1」より転載



下層整地面及び礎石検出状況（東から）



南北トレンチ1全景（南から）

第25図 近代建物基礎下で検出した下層遺構

第3節 鼠多門周辺の遺構

鼠多門の北側と南側には土蔵が建っており、その間には二重塀があった。二重塀の痕跡は、玉泉院丸西面石垣の天端石に方形のほぞ穴として残る。二重塀があった箇所のみほぞ穴は開けられていた。鼠多門の南西側には番所が建っており、その遺構については、報告書Ⅰで述べた。番所に伴うとみられる遺物については、第5章で述べる。

鼠多門の北側に建っていた土蔵(第26図)は、玉泉院丸西面石垣の天端石にその基礎の痕跡を見ることができた。その土蔵の南西隅については、その部分の石垣の天端石が他と違い方形に近い形状(70×58cm)となっている。その基礎石から、東側にもう1石確認できるが、それより東へは痕跡等確認できていない。北西隅については、石垣の天端石にほぞ穴が穿たれていた。そして、その石垣の面となる部分には「十」の刻みが入れられていた。ほぞ穴の中心とも合っており、柱の中心を示しているものかもしれない。この北西隅の石の東側にも1石確認できたが調査区外でありそれ以上は追及していない。北西と南西の土蔵の基礎の外側の長さを測ると26mとなり、玉泉院丸も描かれている江戸後期の絵図にある寸法(86尺)とほぼ変わらない。

南側の土蔵については、今回の調査で北西隅の基礎石を検出した(第27図)。その大きさは57×60cmで、東側へは基礎の延びを確認できなかった。監獄署の建物と重なるので、当初は土蔵の基礎を転用した可能性も考えていたが、土蔵の方が規模が大きいため、基礎石は抜き取られたか、土蔵がもともと四隅のみに基礎石を使用し、その間は掘方を持たない基礎石が置かれるなどの構造であったかは確認できなかった。

南西隅にあたる基礎石については、南西石垣の調査(石川県土木部公園緑地課・石川県金沢城調査研究所2010)で検出されている方形の石(55×55cm)がある。今回検出した基礎石とその石との距離はその外側で測ると33.4mとなる。これは江戸後期の絵図にある寸法(109尺9寸)とほぼ変わらない。その石のレベルについては、今回の調査で検出した北西隅の石が32.58mで、南西石垣調査時に検出された石は32.65mとほぼ変わらないので、距離とレベルから南西石垣調査時の石も土蔵の基礎として良いと思われる。この南西隅の基礎石も1石しか検出されず北側・東側どちらへも延びない。北側の土蔵もそうだが、近代になって四隅の基礎石のみ残すということも考えにくいので、その間の基礎石については、埋め込むのではなく、整地面に置くなどの基礎であった可能性も指摘しておきたい。

なお、この土蔵は旧陸軍の文書によると明治15年の監獄署完成以前に撤去されたことが知られる。

第4節 近代の遺構

1. 瓦敷遺構

旧金沢陸軍監獄署の建物遺構については、報告書Ⅰで述べたが、その際に触れなかった付帯施設である排水遺構等について報告する。まず年代的に古い瓦敷遺構について述べる。

検出した箇所は坂道より南側で、鼠多門の出入口より始まり、坂道と平行に延び約21mの所で坂道側に90度曲がり、坂道とぶつかるところで止まると推定している(第28図)。その構造は、幅約1mの両側に瓦を立て、その間を瓦で敷き詰めるというもので、使用されている瓦のほとんどは腰瓦である。おそらく通路として機能していたものと考えており、番所階段を埋めた後に設置されている。腰瓦には二次被熱の痕跡がないことから明治15年の監獄署設置と併せて作られたのではないかとみられる。

通路の目的としては、鼠多門は囚人の作業場として使用されていただけでなく、旧陸軍の倉庫としても使用されていたことから、監獄署の中を通らずに倉庫内に入出りするを目的としてつくられた

のではないだろうか。

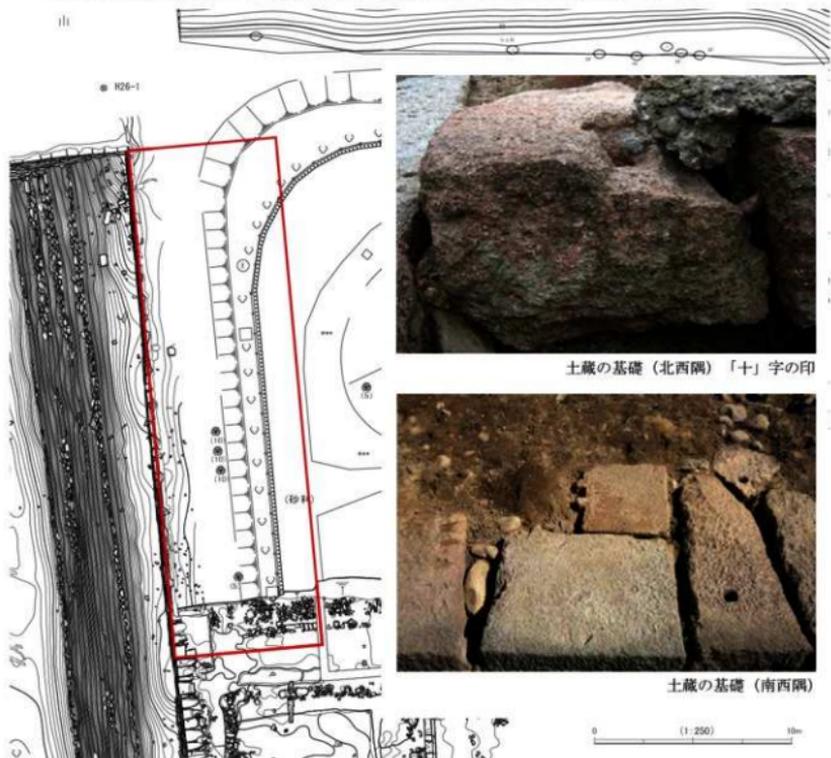
2. 排水遺構

明治32年に新たに造られた監獄署の建物に付随したレンガで構築した排水柵6基や陶製土管を使用した排水管を検出した(第30図上段)。排水柵6基のうち5基についてはレンガが残っていたが、柵5はすべて取り除かれ、柵4はその上部が取り壊されていた。柵1からは閉塞石垣まで土管が延びていたとみられ、閉塞石垣から柵1に向かって土管が途中まで接続している状況を確認した。柵6については、それにつながる土管を検出している。それらの土管については、第5節遺物で報告する。

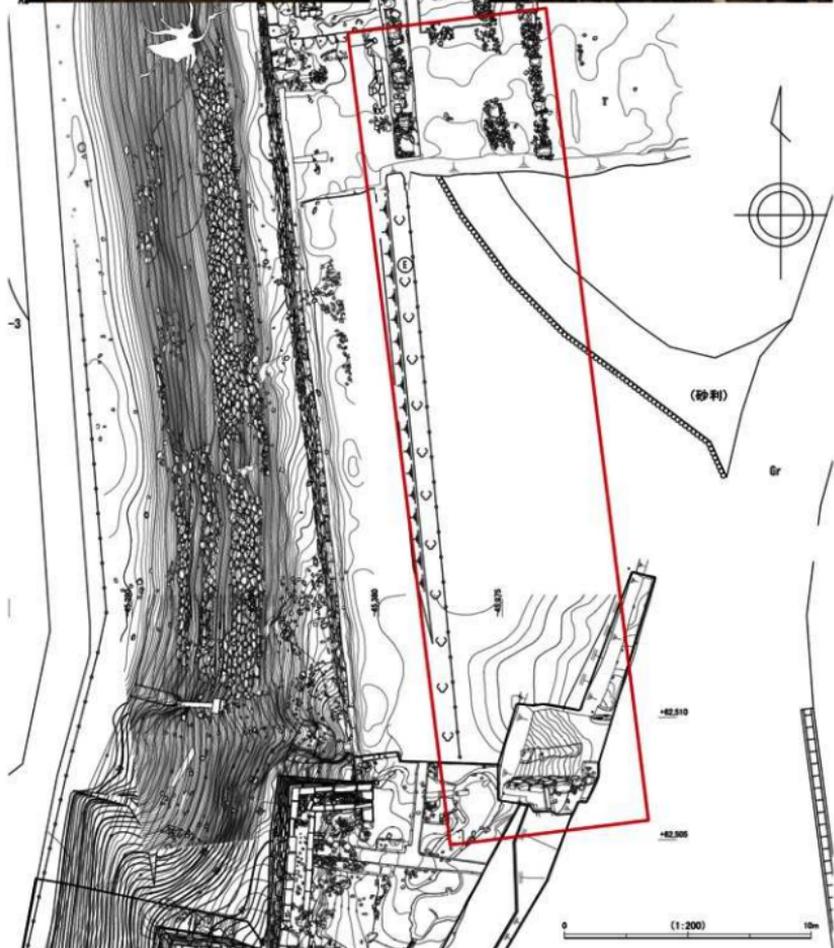
当初は、柵1から玉泉院丸の西面石垣の外へ排水していたが、昭和初期に道路となって廃止したとみられる。その後は柵2・3から監獄署の内部を通って柵5・6へと繋がっているものとみられ、そして玉泉院丸庭園の池の方へ排水していた。

第30図の下段で示した排水施設は、明治15年の監獄署とともに設置されたと考えている。玉泉院丸西面石垣から延びていた、もともとあった江戸期の暗渠を取り外したか、あるいは木樋が腐朽し崩壊したかは不明だが、石垣から突き出す石樋は残し、そこに上方から斜めに開渠を接続していた。

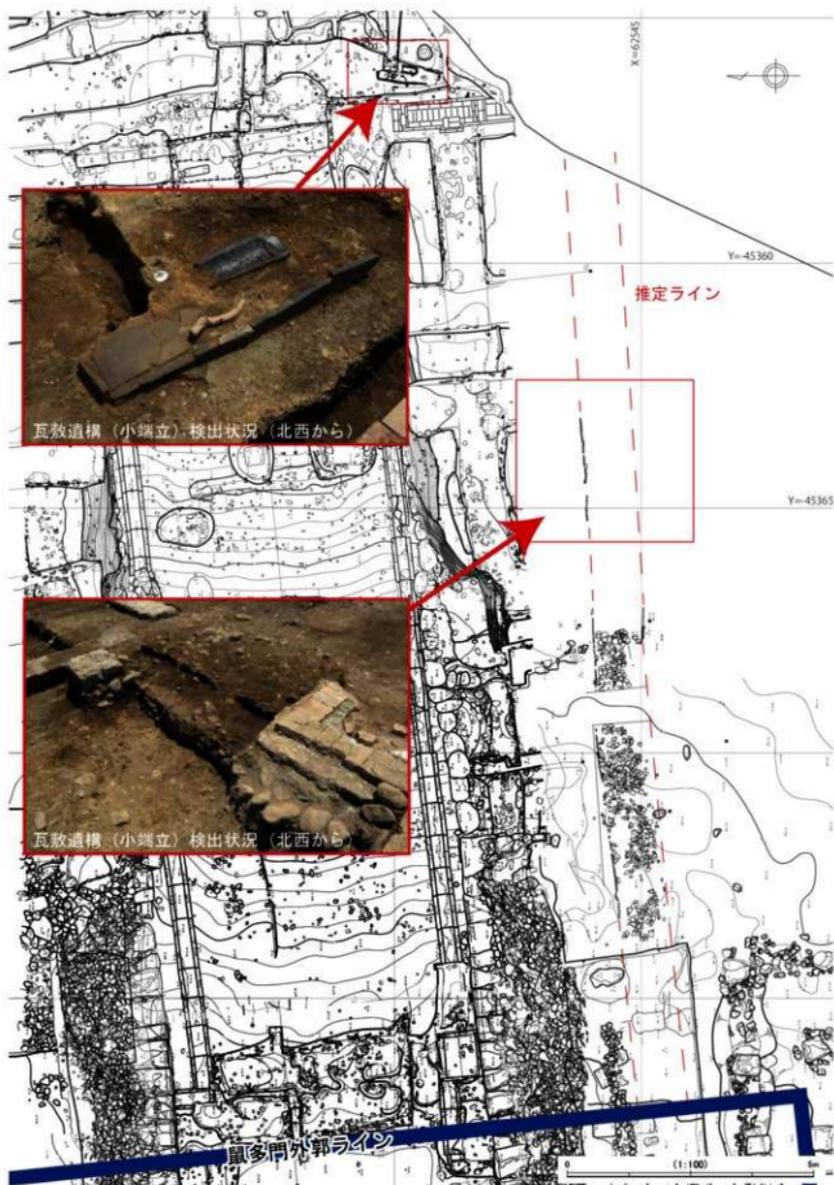
なお、江戸期の暗渠については、番所の西側まで延びていたことを確認している。



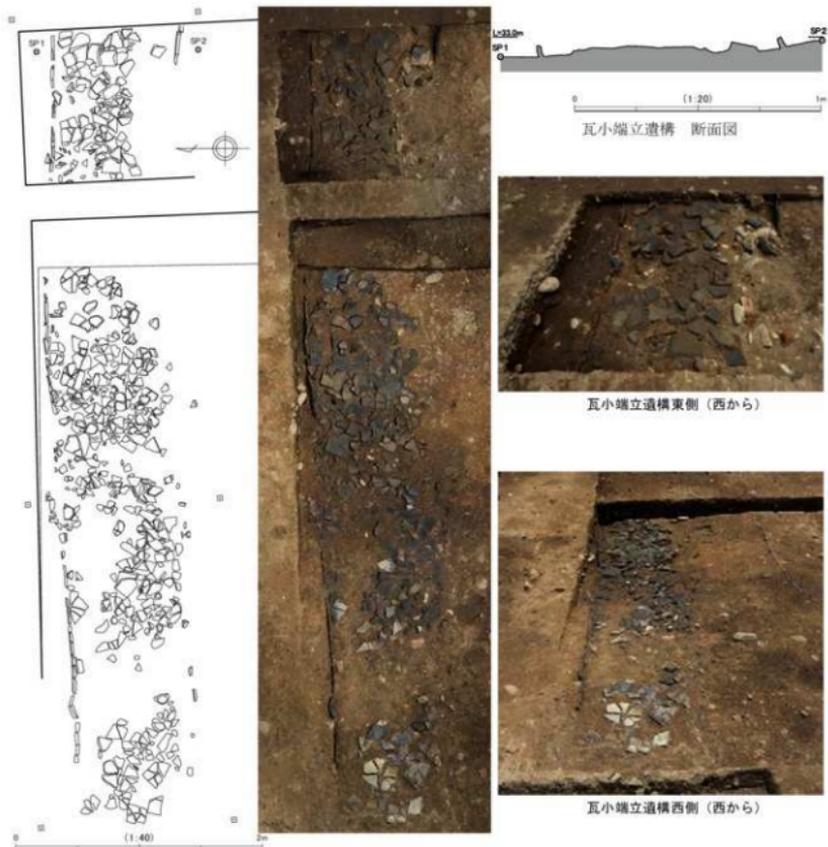
第26図 北側土蔵平面図 (S=1/250)



第27図 南側土蔵平面図 (S-1/200)



第28図 瓦敷遺構全体図



第29図 瓦敷遺構平面図 (S=1/40)・オルソ写真等



第 30 図 近代暗渠全体図 (S=1/400)、暗渠吐水口 (近代転用) 平面図 (S=1/40)



暗渠吐水口 (近代転用) (東から)



暗渠吐水口 (近代転用) (南から)



斜路内部柵1 検出状況 (南から)



柵1内部土管接続状況 (北から)



柵6 検出状況 (西から)



柵6内部土管接続状況 (南から)



斜路内部土管検出状況 (南東から)



斜路内部土管検出状況土層断面 (西から)

第31図 排水関連遺構写真

第5節 出土遺物

1. 概要

鼠多門調査区で出土した遺物のほとんどは、近代以降の埋土中から出土したものである。その中でも最も多く遺物が出土したのは、明治17年の鼠多門焼失以後に埋め立てが行われた鼠多門内部から玉泉院丸面へと至る坂道部分である。調査の結果、門内部の土間面に明治17年焼失の際と見られる焼土面を検出した。土間面と埋め立て土の間には厚い間層は存在せず、鼠多門の出入口部分に新たに構築された閉塞石垣を積むため、あるいは別の場所で使用するなどのために崩された側壁石垣を加工した際に出来たとみられる戸室石の薄片が多量に検出された。その直上は黒褐色土と黄褐色土の互層からなる埋め立て土で厚く覆われていた。

土層の観察から、埋め立ては番所階段の対面にあたる付近から一気に行われたとみられる。玉泉院丸面とほぼ同じ高さになる部分は、整地土となる固い粘質土で覆われていた。埋め立ての後に地盤が沈んだためか、閉塞石垣の背面には川原石や砂利層を埋め込んだ箇所もあった。

調査では、この埋め立て土を閉塞石垣から外して土間面を検出しながら、門部から坂道を上って行き地点名を「斜路」という名称として、上部から土層ごとに遺物を取り上げたが、一気に埋め立てられていることから、本報告では斜路一括として報告する。

門部分から坂道全体を埋めるには約470m³の土量が必要で、それを城内から運んできたことになるが、現状で最も想定しやすいのは、玉泉院丸の東側にある空堀となっている箇所からである。埋土を流し込んだとみられる箇所からも近く、監獄署の建物等の施設が邪魔にならない。

また、斜路から出土した陶磁器類の中には、これまで玉泉院丸ではあまり出土していない紅皿、段重といった、おおよそ玉泉院丸に置かれていた武具役所で使用されたと思われる遺物が出土している。色絵製品も一定量含まれ、二ノ丸で使用されていたものではないかとみられ、そうであれば空堀に廃棄されたものが土砂ごと埋め立てられた可能性もあろう。

番所階段部分の埋め立ては、明治15年の旧金沢陸軍監獄署の設置とほぼ同時期に行われたと考えている。土層観察からも、番所階段部分の埋め立ては、斜路の埋め立て以前に行われたことは明らかで、さらに先に報告した瓦敷遺構の基盤土になっていたため、明治17年以前であることは明らかである。

2. 鼠多門調査区出土遺物

報告する遺物は、陶磁器・土器、瓦、金属製品、石製品、その他(ガラス、海鼠漆喰、ボタン)の種別ごとに分け、次に監獄署建物基礎(レンガ建物基礎等)、斜路、番所周辺、番所階段等の出土地点に分けた。さらに器種ごとに分けて図示した。種別ごとに特徴的な遺物について取り上げて記述する。それ以外の遺物に関する詳細については、遺物観察表(第7表～第56表)を参照してもらいたい。

特筆すべきは、今回の調査で復元された鼠多門の外観の意匠を決定することとなった、黒漆喰仕上げの海鼠漆喰が出土したことである。海鼠漆喰は、海鼠壁に用いられる漆喰のことで、腰瓦と腰瓦の間に目地として用いられ、その形状が海鼠に似ていることから海鼠漆喰と言われる。これまで実施されてきた金沢城の調査では、漆喰自体の出土例があまりなく、しかも形態を保ったまま海鼠漆喰が出土した事は貴重な事例となった。

金沢城内では、江戸期からの現存する建物である三十間長屋や石川門の海鼠壁にもみられるが、白漆喰である。いずれも江戸後期に再建されていることから、鼠多門が江戸前期の古い様相を示しているとも考えられている。

(1) 陶磁器・土器 (第40図～第79図)

1007～1012は、レンガ積の監獄署建物の北東角から、1324～1331の火鉢類と共に出土した。遺物は出土地点周辺で検出された三和土の直上にあり、特に1326～1331の方形火鉢が大量に出土した。三和土は、明治4年から8ないし9年頃まで玉泉院丸に建っていた、明治の御雇外国人であるオランダ人医師スロイスの邸宅に伴うものと報告書I(P333)では推定されている。算用数字の染付がされた1008の碗や1009の皿、上絵付のされていない瀬戸・美濃の1007の碗や1011の皿が共存していることは、本書の304頁に報告する算用数字を染付した碗皿の出土状況と変わらない。明治15年の監獄署設立以前に埋められているとみられる。

出土した方形火鉢は、幅が25cm弱で器高は高いもので18.25cm(1328)、低いもので16.5cm(1327)となっている。いずれもタタラ粘土板を組み合わせて作られており、内面はヘラケズリとナデで仕上げられ、外面は丁寧なヘラケズリとなっている。底部外面は未調整である。1330は全形が分からないが、コーナー部が鈍角になっている。1324・1325の円筒形の火鉢も旧陸軍が初期に使用した暖房具であろう。

1018～1023、1332～1354はレンガ積建物の基礎掘方内から出土した。1339・1340は京・信楽系の色絵の碗、1345はロクロ成形の土師器皿、1347は17世紀前半の肥前陶器碗、1348は萩焼の碗、1349は肥前の胎土目の皿、1353の土人形などが出土している。17世紀代の遺物などは、下層の遺構や遺物包含層を掘り下げた際に入ったものとみられる。

1024～1027、1355～1365は、監獄署建物の基礎掘方や土管掘方などから出土したのものとなる。斜路の延石を取り除いた後の溝状遺構から出土したものも含む。

1355は、監獄署建物の布掘の掘方内から出土したもので、19世紀以降とみられる陶器の碗の高台内に中央に「宮崎」右に「主カ」左に「□シカ」の墨書がみられる。番所に近接した箇所であるので、そこに詰めていた者の可能性がある。1357は越前焼の播鉢とみられ、土坑内に大量に瓦が廃棄されていた方形土坑の瓦を取り除いた直下から出土した。下層遺構に伴うものとみられる。1359はミニチュアの鉢で六角形の形状をしている。

1028～1038、1366～1375、1380～1381は、閉塞石垣の栗石層から出土したもので、1037は肥前磁器の型作りの花瓶、1368はイギリス製の硬質陶器、1371は仏花瓶、1372・1373は肥前陶器の播鉢である。

1039、1376・1377は、側壁石垣の裏込めから出土している。1039は蓋で、B類(江戸後期)とした石垣の裏込めから出土した。1376・1377は、北側の側壁石垣東端で出土した。側壁石垣の東端部分は、栗石が坂道法面の土層の下に延びていることから、鼠多門創建期の側壁石垣は東側に延びていたと想定していた。土師器皿はC2 I類とみられ、年代観は17世紀初頭から前半と考えられている(滝川2019)ことから、創建期は側壁石垣が延びていたかもしれないが、すぐに埋められ隅角部を作ったとも想定可能である。1384は、鼠多門背面の溜枡から出土した、瀬戸・美濃の碗である。

1040～1291、1385～1618は、斜路埋土から出土したもので、1040～1067まで丸形器形の碗を図示した。これらは肥前系の磁器で1050は19世紀初め、1056・1057は18世紀前半頃のものともみられる。

1068～1091は腰張り器形の碗を図示した。これらは肥前系の磁器で18世紀末から19世紀前半代のものともみられる。1076は色絵の碗である。1092～1094は器形の大きな碗で、18世紀後半のものであろう。

1095～1102は筒形の碗である。見込みの文様が分かるものはすべて五弁花が描かれている。これらは肥前系の磁器で、18世紀末から19世紀初め頃のものともみられる。1104～1110は小広東形の碗で、18世紀後半から19世紀初め頃のころのものであろう。1117～1132は端反碗で、瀬戸・美濃の製品とみられる。19世紀後半の製品であろう。1128には焼継ぎをした際の赤上絵付のマークが高台内面に認められる。

1136～1140は算用数字が描かれた碗である。1136は瀬戸・美濃製品に縦2本線で、おそらく1を赤上絵付してある。1139・1140は2を高台内に1139は染付で、1140は赤上絵付で描いている。外側面には縦線

等は認められない。1141は圏線は描かれているが、算用数字等はない。

1142～1154は陶胎染付碗で、1153は鉄絵で18世紀末頃から19世紀初めころの製品とみられる。1154は瀬戸・美濃の製品で19世紀代のもつとみられる。そのほかのものについては、18世紀代であろう。

1155～1219は皿である。1155～1158・1163は中国製で、下層遺構に伴う時期のものである。1157・1158・1163は被熱している。1159は高台内にハリ目跡が見られる。17世紀後半のものであろう。1162は口縁部が輪花のものである。1176は大皿で、口縁端部が玉縁状になっている。高台内にハリ目跡が見られる。1179・1180は見込み蛇の目軸剥ぎで、17世紀末頃から18世紀前半頃のものであろう。1188・1189は蛇の目凹型高台で、いずれも見込みに型押しで楼閣を表している。1189には算用数字を赤上絵付で描いている。1192は型押し皿で、被熱により溶けた鉛が全体に付着している。1200～1205は蛇の目凹型高台の瀬戸・美濃の製品で、1202のみ見込みを蛇の目軸剥ぎしている。1206・1207は見込み蛇の目軸剥ぎで、「寿」の字を見込みに描いている。描く文様は違うが、同一器形で1216・1217がある。いずれも縦三本線を描き、1216は高台内にのみ「1」を、1217は高台内と外側面に「2」を描いている。1220～1225は鉢で、1220は蛇の目凹型高台である。18世紀後半頃のものであろう。1224は、蛇の目凹型高台の軸が掛かっている部分に「御用」とおそらく赤上絵付されていたものとみられる。1225は肥前の青磁で内面に片切り彫りで草文を表している。17世紀後半頃のものか。1227～1236は蓋物である。1237～1243は段重で、1239～1241はセットになると思われる。1244～1260は蓋である。1261～1264・1270は猪口、1265～1269は小杯、1271～1277は小碗である。1278～1280は紅猪口・紅皿である。小碗としたものの中には、紅猪口になるものと思われるが分類が難しい。1264・1271・1273・1278は色絵が施される。段重・紅猪口はこれまでの玉泉院丸の調査ではほとんど出土していないものである。1284・1285は仏飯器で、これも玉泉院丸ではあまり見られない器種である。1287は青磁の仏花瓶で、1291は香炉である。

1292～1298は番所西側の石組溝等から出土した。石組溝は明治15年より前に番所が改変されたと考えており、その際に埋められたとみている。

1299～1311は、番所階段の石段を抜き取った埋土中からの出土である。1299は広東碗で、18世紀末から19世紀前半頃のものである。1304は見込み蛇の目軸剥ぎの皿で、口縁部には油煙が全周して付着しているので、灯明皿として使用されていたらしい。18世紀後半から19世紀前半頃のもつとみられる。

1385～1414は碗である。1393・1394は小杉茶碗で、18世紀後半の信楽のものであろう。1398は肥前の京焼風陶器で、高台内に「木下弥」の印が入れられている。1408は三行書かれており、中心に「御□□」の三文字を、右に「四月□日」、左は欠けていることもあるがよく分らない。1409には高台内に墨書がされている。三行書かれており、中心に「松本」、右に「文政六年」の紀年銘を入れる。左は欠損していることもあり不明であるが、4文字程度書かれている。1410は高台の中心に「三の丸」を、左に「八カ十カ」を書いている。1411は中心に大きく「玄」と書いている。1412も高台内に墨書されており、「イソイ」のように見える。1413は底部に「寶山」の刻印が押されている。19世紀代の九谷の製品かもしれない。

1417～1430は皿である。1417～1419は肥前陶器で1418には砂目跡が、1417・1419には胎土目跡がみられる。1418は17世紀前半、1417・1419は16世紀末～17世紀初めころのものであろう。1420は瀬戸の灰軸ヒダ皿としたが、越中瀬戸の可能性もある。1424は越中瀬戸である。いずれも見込みは軸剥ぎされており、菊花が押されている。1426は白泥を象徴するもので、高台内に「春日山」の刻印が押されている。1429・1430は硬質陶器でおそらくいずれもヨーロッパを産地とするものであろう。

1432～1447は鉢である。1434は高台内に墨書が見られ、「用」という1字が確認できる。その上には2字程度あったと思われるが分からない。1437は片口鉢で、産地は須佐とみられる。

1448は土瓶の蓋で、内面に墨書があるが判読できない。ひらがなが書かれているようである。1455は合子の蓋で色絵製品である。1459は中水注で茶道具として使用したか。1469は水注である。1473・1474は三足の香炉である。いずれも鉛軸が掛けられ、菊の文様が捺されている。1475は行灯の皿とみられる。

内面に絵が描かれている。

1482～1490は挿鉢である。1482～1486は肥前、1487・1488は堺のものともみられる。1490は九谷の製品であろう。1491は湯たんぼである。灰釉の製品で、立てて焼成したのであろう、側面に3カ所釉を剥いである。1492～1497は甕である。1492は肥前かともみられるが、ほかは越前焼となる。1496の底部外面には「庄」の墨書が見られる。

1498～1543は土師器皿である。1507～1509には内面に墨書が見られ、1508は「せかま」とみられるひらがなが、1509には「御なん□」とみられる文字がある。1507は一文字目が「御カ」とみられるが、その下は判読不明である。

1528～1539・1542・1543はロクロ成形の土師器皿である。1542は17世紀前半ころのものか。そのほかの製品については、1534～1539の深身のタイプが近世前半までに遡るのか、近世後半になるのかは分からない。1532のような内面に圏線がきれいに回るタイプは1543や1544～1551の灯明皿と同じころのものとするれば、18世紀後半以降の製品であろうか。

1544～1564は灯明専用器具で、1566～1569は灰器ともみられる。1570は焙烙であろう。1576～1583は焼塩壺。1584～1598は火鉢、1602・1603は植木鉢である。1603には底部外面に墨書がある。1604～1610は土人形、土鈴である。1612・1613は陶鐘で、いずれも被熱により火ぶくれている。

1619～1646は番所周辺ないし番所階段の埋土中から出土したものである。1619・1620は番所の西側にあった石組溝から出土した。銅緑釉の碗と型作りの急須である。1631は片面に陽刻で文字が入られるが判読できない。箸置であろうか。1637・1638・1643・1644は碁石、1646は志野織部の向付である。

1648～1656は下層遺構を埋めた造成土中から出土したものである。

(2) 瓦 (第137図～第182図)

瓦は、斜路埋土中から出土するものについては細片になっており、実測できるものは少ない。軒丸・軒平瓦については細片であってもできるだけ実測を行った。腰瓦については、近代の遺構から大量に出土し、その詳細等について300・301頁に別途記述した。

2001～2015については、近代の建物遺構や排水桝の掘方等から出土したものである。2002の腰瓦には薄く「十」の墨痕が見え、割付線を入れていると思われる。

2016～2020は瓦小端立遺構として調査した箇所から出土した。2019は半分に割って使用されている。2020は櫓の隅に使用される腰瓦で、短いほうの破片に薄く「十」の墨痕が見える。

側壁石垣の栗石層から2点の軒丸瓦が出土している。2022はA類の、2023はB類と分類される箇所から出土した。いずれも三つ巴の軒丸瓦で、それほど時期差は無いと思われる。

2041～2063は斜路埋土中から出土した。2041・2042は燻瓦の軒丸瓦で、梅鉢文の花弁と花芯を軸で繋ぐものである。2043・2044は軸葉瓦で、2043は三つ巴文、2044は軸の間に突起があり、下半に釘穴が縦に2か所開いている。2045～2048は燻瓦で、2045・2046は軒平瓦、2047・2048は軒椽瓦になる。2047・2048の文様は宝文と分類されているが、燻瓦は初出となる。

2049は軸葉瓦の軒椽瓦である。釉は完全に溶け切っていないように見え、胎土も還元されており全体的に黒っぽい印象である。瓦当文様の中心は五弁花と分類されている。同様の文様は玉泉院丸庭園の調査で出土している(第34図)。

2055は軸葉瓦で、「太□」のへら書が見られる。2062は腰瓦で、凹み部分が四辺の中央ではなく四隅に穿孔されるタイプEである。破片であるので全形は不明だが、海鼠漆喰が扱っていた箇所からみると、海鼠壁に使用されていたと思われる。

2069～2098は、番所の東側で検出された近代の方形土坑中に廃棄されていたものである。完形率が高いことから、鼠多門や土蔵から外されたものとみられる。2077・2084・2086のような両面を使用した

ものがみられる。四辺の凹みはA～E類まで確認できるが、両面使用はA類とC類で、凹みをしっかり作っているもののほうが古いものであることを示している。2094～2098は隅に使用された腰瓦である。隅に使用される腰瓦には、今のところC類を確認していない。

第6表 鼠多門・鼠多門橋出土瓦計測表

器種	未実測				実測	
	煙瓦 (破片数)	重量 (g)	軸葉瓦 (破片数)	重量 (g)	煙瓦 (点数)	軸葉瓦 (点数)
軒丸瓦	1	66	10	964	4	6
丸瓦	88	6,863	161	17,352	8	11
軒平瓦	1	50	2	129	4	2
平瓦	161	14,538	451	48,357	3	15
軒棧瓦			2	311	2	12
棧瓦	4	414	50	8,392	4	5
腰瓦	10,539	1,465,525			104	
鬼瓦					8	
道具瓦ほか			76	11,417	4	15
不明	11,339	1,244,503	18,060	3,358,126		
合計	22,133	2,731,959	18,812	3,445,048	141	66
総計 ※未実測品のみ	40,945	6,177,007				

2100～2157は番所階段の埋土中から出土した。特徴としては軸葉瓦の比率が高いことである。2099は瓦当面に縦に釘穴が2つ開けられており、2044と共通する特徴である。軸葉瓦の軒棧瓦の2100・2101は平瓦の2112～2118と同じく、裏面に軸を掛けな

いものである。丸瓦の2105～2107も同様に内面に軸を掛けない。ほかにも2122の棧瓦、2124の袖瓦、2125の棟瓦、2128・2129の熨斗瓦は裏面に軸を掛けない。これらは胎土も似通ったものが多く、同一産地の可能性がある。番所階段に軸葉瓦が多く含まれているのは、明治初年に建っていた番所の屋根に瓦が葺かれていたことも関連している可能性はある。

煙瓦は腰瓦が多く、2103の丸瓦、2111の平瓦、2119・2220の棧瓦が見られる程度である。

2158～2169は、番所ないしその周囲から出土したものである。2158～2160は煙瓦の丸瓦で、番所の中央部から出土した。その先には近代に設置されたとみられる凝灰岩製の排水溝があったことから、それとの関係を想定するが、性格は不明である。

2172～2179は鬼瓦である。2172～2177は、これまで金沢城内で出土している2178・2179のような鬼瓦ではなく、鬼面をあしらったもの出土は、初出になるものと思われる。ほぼすべての破片を図化した。鬼面は立体的で極めて写実的な表現となっている。このようなタイプの鬼瓦は、時期的に新しいものとは考え難いが、下層遺構の江戸前期まで遡るかは不明である。城下町では、高岡町遺跡で同じように煙瓦の鬼面の鬼瓦が出土している(金沢市教育委員会2001a)。

鼠多門・鼠多門橋調査で出土した未実測品すべてについて、重量、破片数、煙瓦か軸葉瓦かということについて計測を実施した。その結果を第6表で示した。総重量は、約6.2tである。煙瓦と軸葉瓦の比率は約1:1.3、その中から腰瓦を除いて屋根瓦のみの総重量は、約4.7tで、比率は約1:2.7となり3倍近い差となる。不明としたものが圧倒的に多いが、軒瓦は実測したものを含めて46点になる。鉛瓦ではあるが、復元された鼠多門の大屋根には軒平瓦が230枚、軒丸瓦が234枚使用されている事を考えると、10%にも満たない出土量である。

一方、腰瓦については、隅に使用されたものも含めて1,290枚が鼠多門復元に使用された。計測した重量を腰瓦1枚が約2.5kgとして計算すると586枚で、実測した点数も足すと690枚となる。おおよそ鼠多門に使用されていた半分程度が出土したことになる。屋根瓦についても同じように計算すると約2,000枚となるが、鼠多門の大屋根に葺かれた鉛板の枚数約30,000枚には遠く及ばない。金沢城内の建物の数に比して瓦の出土量はかなり少ない。どの程度瓦が葺かれていたのか、金沢城の建物の屋根の構造がどのようになっていたのか、検討すべき課題であろう。

(3) 金属製品 (第183図～第200図)

まず筆すべき遺物として3004の五鈎杵がある。閉塞石垣の後ろから出土したが、それ以外にほかにもどのような遺物が相伴したのかなどの情報はない。近世のもので良いと思われるが、地鎮行為に用いら

れたとすれば、斜路を埋めた後の地鎮祭祀行為に用いられたという可能性もある。

3010は、水滴と思われる。レンガ積建物の基礎から出土した。3012は雷管の部品である。多数の葉莢が出土しているので、それらから外れたものであろう。

3015～3025は鼠多門の南側で、柱の根固めが検出された箇所の上の焼土と共に出土したものである。釘はすべて鉄製で、頭巻釘である。軸は方形で、3寸、2寸、1.5寸と3種類の釘とみられる。

3026～3028はホックで、鼠多門の櫓南辺の礎石を抜いて、瓦を充填した箇所から出土した。反対側の引っ掛ける部品は見えていない。

3045は刀子の鞘、3046～3048は煙管の雁首で、3049～3053は煙管の吸口になる。

3054は簪、3055は指輪、3056は和鉄、3057は飾り金具、3058は留め金具、3059は飾り金具、3060は蝶番とみられる。3061は鉛製品で、形状から何かの取っ手のように見える。3062・3063は留金具でリベットと思われる。3065～3069は葉莢である。3071は鉛で銃弾等の素材になるものだろうか。3072は碗形滓であろう。3077は飾り金具とみられる。

番所の西側の石組溝の埋土中からは、3079が出土している。蝶番が付いており開くようになっているが、錆ついて開かない。ペンダントかと思われるが、両方の蓋に穴が開いており紐等を通すとうまく開かないと思われる。3081は鉛玉である。

3082～3125は、番所階段の埋土中から出土した。3082～3086は鉛瓦で、軒平瓦であろう。3082・3083には唐草が認められる。3087～3098は銅製の貝折釘で、長さは14cm前後のものである。3099～3115は1寸、1.5寸の銅製の釘である。3118は釘隠しだろうか。3120～3123は銅製のリベットであろうか。3124はスナイデル銃の銃弾であろう。3125は銃滓である。銃滓は、番所階段や番所周辺の埋土からも出土する。何らかの鍛冶行為を行っているのは明らかで、周囲から鉛板や銃弾が出土しており、銃弾を製造していた可能性も指摘しておきたい。石製品で報告する4063はカマドとしているが、炉として鉛を溶かす用途も想定できる。近代の遺構面には、何か所か円い焼土面も存在した。

3133は馬の蹄鉄である。大正13年にレンガ積建物が厩舎となった以降の製品であろう。3134は刀の鐔、3135は煙管の吸口で羅字が一部残っていた。近代のものと思われる。

3136～3150は、瓦敷遺構の基盤となっている土層から出土した。3136～3141は銅釘で1寸と1.5寸のものであろう。3142～3145は銅製品であるが、器種は分からない。何かを切断した切れ端のようにも見える。3146～3148は葉莢で、スナイデル銃に用いられるものであろう。3152はスナイデル銃の銃弾であろう。3176～3205は出土した銭貨である。近代以前のものは寛永通寶に限られる。

(4) 石製品 (第201図～第225図)

4001・4002は鉢とした。いずれも凝灰岩製で4001は4足が残り、4002は半分になっている。閉塞石垣の栗石層中から出土した。4003は茶臼である。これも閉塞石垣の栗石層中から出土した。4006は硯の裏面に「□九月十八日」の線刻がある。4010は硯の裏面中央に「上々高嶋石」の線刻がある。4016～4018は滑石製の温石である。4021は砥石で裏面に「村カ」の線刻がある。

4022は人形である。蠟石で、寝そべった姿の唐子を表していると思われ、背中に線刻で花や渦巻きを表現する。玩具であろうか。4023・4024は石筆である。旧陸軍が使用したものであろう。4026・4027は凝灰岩製の石鉢である。4030は凝灰岩製の棒状の製品である。用途は不明である。

4031は、硯の陸部に「村松平太郎所持」と線刻されている。番所の西側にあった石組溝から出土した。「先祖由緒井一類附帳」(加越能文庫、金沢市立玉川図書館蔵)には、村松加久男が明治3年で23歳の時に父の名前で平太郎とある。禄は18俵扶持となっている。同一人物の可能性もある。4021の「村」線刻の砥石も関連しているかもしれない。4032・4036・4037は碁石である。

4039は戸室石製の礎石である。同様の形態の礎石が、鼠多門北側の櫓部分の出入口部で検出されてお

り、庇を支える柱の礎石とみられる。

4041は戸室石製の方形石材で、同様の石材(4068~4071・4080・4081)が今回の調査では多数出土している。それらに比べると4041はやや小ぶりで長さ25.4cm、幅18.4cm、厚さ14.9cm、重さ9.9kgを測る。ほかの実測した石材の寸法は、長さ24.8~26.4cmとほぼ変わらないが、幅は21.6~22.4cm、厚さ15.3~16.5cm、重さ13.45~14.9kgとなり、幅・厚さも差があるが重さの違いが大きい。

すべて赤戸室石製で、調整を見ると、いずれも上面の溝と平行となる側面は、底面付近まで調整をし平滑となっているが、直行する面については、下半部の調整が粗く突出している。底面については、平らになるように調整が施されている。これらの石材の用途については不明だが、建築部材として使用されたものと想定している。溝の幅は17~18cm程度あり、根太をその部分に設置した可能性もあろう。

4042~4045は、鼠多門背面の横断側溝の採取跡から出土した。4042は凝灰岩製の側溝で、4043は凝灰岩製の蓋石の可能性があり、4044は青戸室石製の延石とみられ、被熱している。

4045は青戸室石製で、横幅70.25cm、縦幅41.4cm、厚さ15.3cm、重さ70.45kgを測る方形の石材である。平滑な上面に55×35cmの煤によって黒変した箇所が見られる。下面と側面にはツルの痕跡が明瞭に残るが、側面の上面側5cm程度はその痕跡を完全ではないが消している。

4046は坂道の北側側溝の東端で検出した。出土状況からみると、検出された東端の北側側溝に土が流入しないよう抑えるような役割をしていた。おそらく近代に行われたものとみられる。縦幅が41.4cmと、ちょうど側溝(4060・4065)の上に見える大きさである。坂道の検出部分は開渠であるが、さらに東側の紅葉橋に至る箇所までは、絵図から見ると暗渠であった可能性があり、それに使用されたものか。

4049は、北側の鏡柱礎石の採取跡から出土した。青戸室石製で、縦幅26.8cm、横幅57.5cm、厚さ13.9cm、重さ34.7kgを測る。上面は平滑に調整されており、横方向に溝が1条彫られている。そこから約15cmの所に鉄錆が横方向に付着している。その間は煤が付着しており、木材が乗っていたものとみられる。長側面は、溝を彫ってある方は上3cm程度は角を取って、あるいは使用により摩滅したのか平滑となっている。反対の側面は上から5cm程度まで平滑となっている。裏面はおそらく割って持ち去られたか、失敗したため礎石の採取穴に放置されたとみられる。短い側面は両側とも平滑になっている。平面は台形状で、溝を入れてある側が長く、反対側が短いが欠損しているため正確な長さは不明である。この石材を鏡柱列に設置するとすれば、北側の脇柱採取跡と鏡柱礎石採取跡であれば取まる。

4052は青戸室石製の蓋石とみられる。表面は極めて平滑で、若干凹んでいるので、使用による摩滅とみられる。裏面には1条の彫り込みと、それを切るように方形の凹みが設けられている。側面は、長い方は平滑になっており、反対側面は工具の痕跡が明瞭に残る。鼠多門背面側に設けられた溜枡から出土していることから、拵ないし横断側溝等の蓋石であった可能性もある。

4053は鼠多門の北側の背面大柱礎石撤去後の攪乱内から出土した。凝灰岩製の側溝で、側面に他の側溝と組み合わせるための切込みがみられる。おそらく鼠多門背面の側溝に使用されていたもので、坂道北側側溝に直行して組み合わせ同じく凝灰岩製の側溝に接合するものとみられる。

4056・4057は礎石で、いずれも方形のほぞ穴が開いている。4056は水結凝灰岩で、黒灰色を呈している。坪野石とみられるが、レンガ積建物の基礎掘方に地固めとして入れられていた。

4058は赤戸室石で、かまぼこ型の突起を作り出している。被熱しており、溶けた鉛も付着していることから、鼠多門周辺で使用されていたと思われる。

4060・4065は戸室石製の側溝で、大きさから坂道の側溝とみられる。南側の側溝は、レンガ積建物の基礎で取り除かれているので、そちらに使用されていたものだろう。4060は、側面に「○」が彫られている。いずれも組合う端面と上端面は平滑に仕上げられている。4076には、裏面に「○」が彫られている。

4064は凝灰岩製のもので、カマドの可能性があり。いくつかの部品を組み合わせるとと思われるが、全形がよく分からない。組み合わせると丸い部分が中央に出来上がるので、そこに鍋等を置いたものか。

4061・4073は地覆石ではないかとした。いずれも平滑な面の四辺をさらに丁寧に仕上げている。きれいに調整した面を見せるためには、立てて使用することが想定できるが、不安定でもある。

4074は上面は摩滅しており、片方の側面もかなり摩滅している。門前面の框石としての使用も想定できる。4075は凝灰岩製の礎石である。

4077～4079には「傘」の文字が入られている。文字は分析の結果、アスファルトで書かれていることが明らかとなっている(第6章参照)。4077には三角矢穴の痕跡が明瞭に認められ、石材に残る調整等から石垣石とみられる。4079には、漆喰が付着しており、上から約7cmの部分にその痕跡が見える。片方の側面にも漆喰が付着している。おそらく海鼠壁の漆喰と考えられる。鼠多門の地覆石として使用されていたとみられる。表面には、4078・4079ともに方形の抉りがある。

4083は馬糧庫の礎石として使用されていた、江戸期の礎石である。馬糧庫の礎石としては、丸いほぞ穴の開いていない面を使用していた。江戸期はほぞ穴のある方が上で、下の丸い部分は座りを良くするために、根固め石の形状に合わせていると思われる。

(5) その他(第226・227図)

6001・6002はガラス製品で、内部には気泡が多く見られる。6001は乳棒、6002は玉状にするため、上下に折り取ったと見られる痕跡がある。

6004～6008は黒漆喰仕上げの海鼠漆喰である。海鼠漆喰は、鼠多門の周辺から出土する(第32図)。図示した以外にも細片となって取り上げできないものが多数あった。6004～6007は、鼠多門北側で出土したものである。白漆喰で形作った上に厚さ2～5mm程度の黒漆喰を仕上げとして塗る。6004は、長さ15.05cm、幅5.7cm、厚さ2.7cm、重さ12.5gを測る。裏面に、腰瓦と接した部分の痕跡が残る。6007は、幅が7.8cm以上あり、ほかのものとは比べ大きい。腰瓦と腰瓦の目地ではなく、窓や地覆石との間に用いられたものの可能性がある。海鼠漆喰は、紫外線による劣化なのか表面がすべて白くなっている。

6009～6012はボタンで、そのうち6012は貝製、ほかは磁器製のブロッカーボタンである。



第32図 海鼠漆喰出土位置

巴文 I



- ・珠文なし
- ・巴 左回り

200603-D097

巴文 II-1a



- ・珠文あり
- ・巴 左回り
- ・前の尾部が次の巴頭部まで

200703-0003

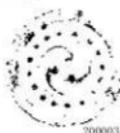
巴文 II-1b



- ・珠文あり
- ・巴 左回り
- ・前の尾部が次の尾部の中程まで

200703-0016

巴文 II-1c



- ・珠文あり
- ・巴 左回り
- ・前の尾部が2つ目の巴頭部まで

200003-D081

巴文 II-2a



- ・珠文あり
- ・巴 右回り
- ・前の尾部が次の巴頭部まで

199801-D122

巴文 II-2b



- ・珠文あり
- ・巴 右回り
- ・前の尾部が次の尾部の中程まで

200703-D011

巴文 II-2c



- ・珠文あり
- ・巴 右回り
- ・前の尾部が2つ目の巴頭部まで

200703-D010

梅鉢文 I-1a



- ・軸なし
- ・花卉と花芯が同じ大きさ
- ・花卉から花芯までの距離短い

200703-0018

梅鉢文 I-1b



- ・軸なし
- ・花卉と花芯が同じ大きさ
- ・花卉から花芯までの距離長い

200703-0013

梅鉢文 I-2



- ・軸なし
- ・花卉より花芯が小さい

200703-D019

梅鉢文 II-1



- ・軸あり
- ・花卉と花芯が同じ大きさ

200703-0001

梅鉢文 II-2



- ・軸あり
- ・花卉より花芯が小さい

200703-D017

梅鉢文 III



- ・軸あり
- ・花芯側軸間に突起(銅)あり

201204-T011

※瓦の文様分類については、石川県金沢調査研究所 2019c から転載した。

第 33 図 軒丸瓦 瓦当文様分類

三葉文 I



199801-D149



中心飾りの三葉文の横に、下向きに2本、唐草が巻く。その外側下向きの唐草の巻きは繋がっていて、上方先端は枝毛状。



200704-D215



三葉文 II



200704-D216



中心飾りの三葉文の横の下向き唐草は1本。その外側は唐草が「川」の字状に伸びる。上方先端は枝毛状。

三葉文 III



200704-D217



中心飾りの三葉文の横の下向き唐草は1本。先端まで数本の唐草で構成されている。三葉間はあまり開かない。

三葉文 IV



200704-D218



中心飾りの三葉文の間が開き、唐草は繋がっていない。全体的に簡略化される。

三葉文 V



200201-D052



中心飾りの三葉文が花卉のように幅を持ち、唐草は全て下向きに巻く。

三葉文 VI

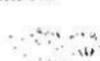


200301-D057



中心飾りの三葉文の間は開き、唐草は1本ずつ独立して、上下交互に巻いている。

三葉文 VII



200201-D053



中心飾りの三葉文は開き、横の下向き唐草は1本で巻きが浅い。その外側の唐草は、2本が交差して延び、下向きに浅く巻いている。その外側にも下向きの唐草がある。

垂下型三葉文

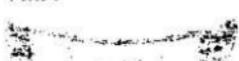


201204-T029



中心飾りの三葉文が下向き、上に小さな葉が2枚つく。第1唐草が下向きに深く巻き、途中から上向きの唐草が枝分かれしている。第2唐草も第1唐草から枝分かれして、先端は上下に分かれて巻き、間に蕾状のものがある。

半葉文



200201-D140



中心飾りは輪郭線で描かれた葉の上半分。外側に、下向きに巻く葉と上向きに巻く唐草がある。

※瓦の文様分類については、石川県民俗調査研究所 2019 年から転載した。

第 34 図 軒平・軒棧瓦 瓦当文様 1

梅鉢文 I



200703-0024



中心飾りは梅鉢文。第1唐草が第2唐草に添って上下に巻く。第2唐草は末端が上向きに巻く。

梅鉢文 II



200703-0025



中心飾りは梅鉢文。唐草は中心飾りに近い側で3本。第1唐草は上が下より開く。第2唐草は末端の巻きが大きく、下向きに巻く。

梅鉢文 III-1



200503-0011



中心飾りは梅鉢文。第1唐草の開きは上下同幅。下が上に比べ潰れている。末端の巻きは浅く、上を向く。

梅鉢文 III-2



200503-0013



中心飾りは梅鉢文。第1唐草は下が上より開き、上に比べ潰れている。末端の巻きは浅く、上を向く。

梅鉢文 IV



199801-0156



中心飾りは梅鉢文。唐草は菊文III-3と類似して、中心飾りを包むような第1唐草と屈曲の深い第2唐草からなる。

桜文



200603-0049



中心飾りは桜文。第1唐草から第2唐草へは途切れずに続いている。

九曜文



200003-0147



中心飾りは九曜文。唐草は簡略化され、第1唐草から第2唐草へは途切れずに続いている。菊文IIIが変化したものかもしれない。

星文



200003-0148



中心飾りは星文。唐草は巻きが浅く、第1唐草が下に巻き、第2唐草が上に巻いて枝分かれしていて、他の唐草文とは違っている。

※瓦の文様分類については、石川県立民俗学研究所 2019 から転載した。

第35図 軒平・軒棧瓦 瓦当文様2

玉文 I



201106-1368



中心飾りは第1唐草が玉を抱えるように配され、第2唐草は一つなぎになっている。玉の下には縦の軸が第2唐草の下まである。

玉文 II-1



199904-0056



玉は少し大きくなり、唐草も太くなるが、稜を持つため拓本では細く表現される。第2唐草が左右に独立する。玉は第1唐草の下まで続く軸を持つ。

玉文 II-2



201106-1367



玉は軸を持たず、玉・唐草ともに扁平になるため拓本では太く表現される。

玉文 II-3



199904-D030



玉は軸を持たず、第2唐草は外側に離れ、巻きが浅くなって、子葉が大きくなる。

玉文 III



201106-1089



玉が大きくなり、第1唐草は玉を抱くように上に延びる。第2唐草は下向きに深く巻き、上向きに枝分かれしている。

玉文 IV



200003-D149



中心飾りの玉は横長になり、上下に軸がある。第2唐草は上向きに渦を巻く。

玉文 V



199801-D150



中心飾りは軸を持つ玉文であるが、唐草は葉のようになっている。

五弁花文



201204-1077



中心飾りは五弁花文。輪郭線で描かれた葉状の唐草がある。

宝文



199801-D155



中心飾りは宝袋。袋の口を縛った房付きの紐が横に延びる。

※瓦の文様分類については、石川県金沢市調査研究所 2019b から転載した。

第 36 図 軒平・軒棧瓦 瓦当文様 3

菊文 I



201106-0071



中心飾りの菊は花卉 10 枚。繻は草着で、稜のはっきりしている。唐草は上向きに巻く。

菊文 II



200802-0001



中心飾りは 10 弁の菊花文。唐草は巻きが浅く、第 2 唐草は末端が下を向く。

菊文 III-1



200603-0050



中心飾りは丸味を持つ 8 弁の菊花文。唐草は幅があり、輪花状になっている。第 1 唐草は中心飾りの菊花文を包むように上に延びて、第 2 唐草は下向きに巻いて、先端で枝分かれしている。

菊文 III-2



200603-0052



中心飾りは III-1 より丸味を持つ 8 弁の菊花文。唐草は簡略化され、先端で枝分かれしなくなる。

菊文 III-3



201106-0026



中心飾りは丸味を持つ 8 弁の菊花文。唐草は簡略化されて輪花状ではなくなり、第 2 唐草の屈曲が深い。

菊文 III-4



201204-T014



中心飾りは丸味を持つ 8 弁の菊花文。第 2 唐草は第 1 唐草の途中から出て、横へ延びた後、上に延びる。

菊文 IV-1

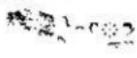


200802-0003



中心飾りは稜のはっきりした 8 弁の菊花文。第 1・第 2 唐草とも枝分かれせず、第 2 唐草は曲がりながら上へ延びる。

菊文 IV-2



200802-0005



中心飾りは丸味を持つ 8 弁の菊花文。唐草は菊文 IV-1 と同じ。

菊文 V



200802-0004



中心飾りは 8 (?) 弁の菊花文。第 1 唐草は上下に緩く巻き、第 2 唐草は、枝分かれしたものが上に強く巻いている。

菊文 VI



199904-B295



中心飾りは稜のはっきりした 8 弁の菊花文。唐草は、梅鉢文 III-1 と同じく、第 1 唐草の開きが上下同幅で、下が上に比べ潰れ、末端の巻は上を向く。

※瓦の文様分類については、石川真金民権調査研究所 2019c から転載した。

第 37 図 軒平・軒椀瓦 瓦当文様 4

燧瓦



A 1 199801-D124



B 1 200003-D105



C 1 201006-D046



A 2 200003-D100



B 2 200003-D085



C 2 200003-D130

A 1 : 硬質、緻密、断面縞状。
A 2 : 硬質、緻密、断面縞状でない。

B 1 : 軟質、空隙多、断面縞状。
B 2 : 軟質、空隙多、断面縞状でない。

C 1 : 軟質、緻密、断面縞状。
C 2 : 軟質、緻密、断面縞状でない。

釉葉瓦



1 199801-D151



2 201106-D032



3 199801-D150



4 201204-t114



5 I 199801-D133



5 II 201204-t022



6 201106-D005



7 199801-D152



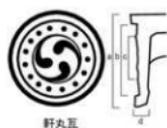
越前 200003-D138

- 1 : 橙色系で、白色粒・細砂を含み、細かい空隙が多い、軟質と硬質緻密なものがある。
 2 : 橙色系で1と似るが、砂粒の含みや空隙はやや少なく、細い白い縞が入る。
 3 : にぶい橙色系で、黒色粒が目立ち、白色粒・礫も含む。細かい空隙が多く、ザックリしている。
 4 : にぶい褐色系で、白色粒・粗砂を多く含み、硬質。器厚が厚く、断面はにぶい褐色と暗灰色のサンドイッチ状を呈する。
 5 : 橙色・灰褐色で、黒色・白色の縞が多く入る。白色粒を多く含み、黒色粒・礫・粘土塊も含む。全体が縞状を呈し比較的緻密なもの(5 I)と、大きめの空隙を含み縞状が強くないもの(5 II)がある。
 6 : 黄橙色系で、砂粒の含み少く緻密。白色または黒色の細い縞がわずかに入る。
 7 : 灰色で白色粒・細砂を含む砂っぽい胎土。光沢の無い暗灰色の釉が薄く掛かる。

越前 : 白色粒・粗砂を多く含み、硬質で、焼き締まっている。縞状が強い部分と弱い部分がある。

遺物観察表計測部位凡例

瓦計測部位



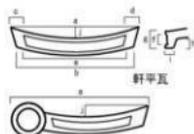
軒丸瓦

軒丸瓦（軒部） a 瓦当径 b 文様区径
c 内区径 d 瓦当厚



丸瓦

丸瓦 a 全長 b 体部幅
c 玉縁長 d 玉縁幅
e 体部高 f 体部厚
g 玉縁高



軒平瓦

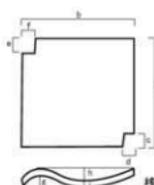
軒棧瓦

軒平瓦・軒棧瓦 a 上弧幅 b 下幅 c 右周縁
d 左周縁 e 文様区幅 f 文様区厚
g 瓦当厚 h 髷高 i 髷下部高
j 弧深



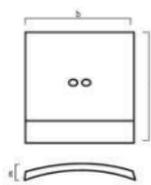
平瓦

平瓦 a 全長 b 広端幅
c 狭端幅 d 弧深
e 厚



棧瓦

棧瓦 a 全長 b 全幅
c 平部切込長 d 平部切込幅
e 棧部切込長 f 棧部切込幅
g 棧部弧深 h 平部弧深
i 厚



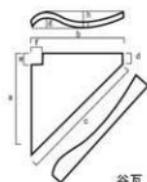
椽瓦

椽瓦 a 全長 b 全幅
c 椽部長 d 体部長
e 椽部厚 f 体部厚



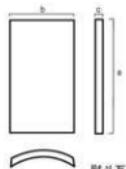
輪違い

輪違い a 全長 b 広端幅
c 狭端幅 d 厚
e 高さ f 高さ



谷瓦

谷瓦 a 全長 b 全幅
c 谷部長 d 平部長
e 椽部切込長 f 椽部切込幅
g 椽部弧深 h 平部弧深
i 厚



鬘斗瓦・腰瓦

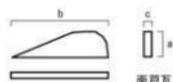
鬘斗瓦・腰瓦 a 全長 b 全幅 c 厚



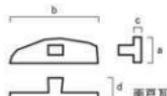
標瓦

腰瓦側辺中央凹部分類表

タイプ	平面	側辺(断面)
円形凹A		
円形凹B		
円形凹C		
方形凹		
タイプ	特徴	
円形凹A	底が平らに調整されている	
円形凹B	Aのような調整なし	
円形凹C	小型で断面は浅い重状を呈する	
方形凹	底が平らに調整されている	



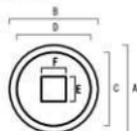
面戸瓦



面戸瓦

面戸瓦 a 全長 b 全幅
c 厚 d 高さ

銭貨計測部位

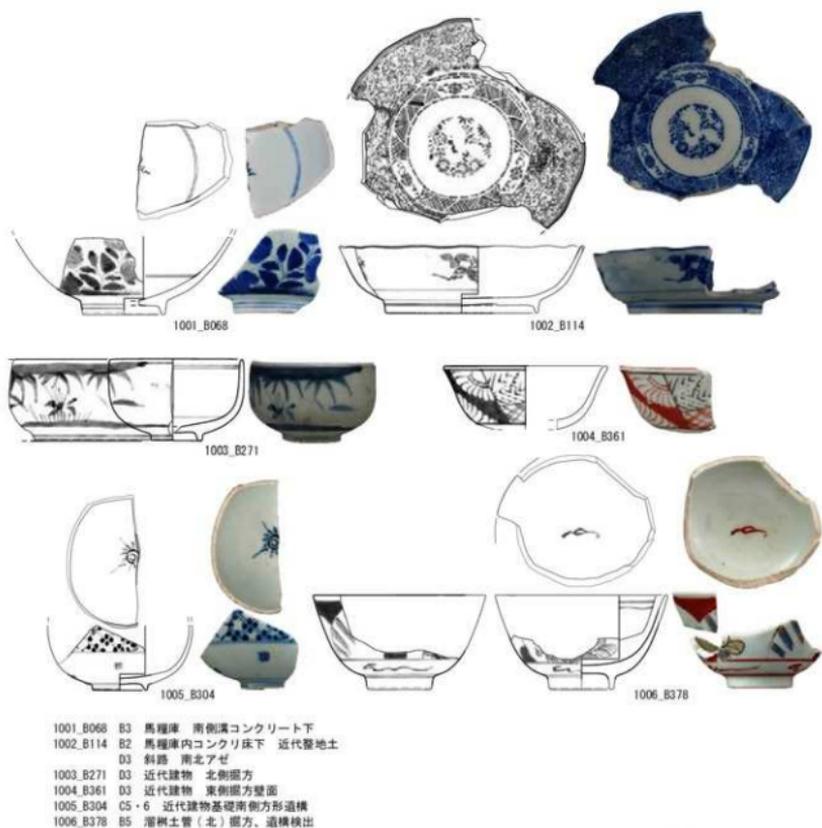


第 39 図 遺物観察表凡例

遺物実測図に付した番号は、報告番号と実測番号を表している。1000番台は陶磁器・土器、2000番台は瓦、3000番台は金属製品、4000番台は石製品、5000番台は木製品、6000番台はその他とした。報告番号は、鼠多門調査区と鼠多門橋調査区で連番となっている。実測番号についても、重複しないよう連番とした。本章中の土管・算用数字染付磁器については、鼠多門調査の報告番号に含んでいない。

遺物実測図の後に観察表を付けた。各遺物の詳細については、観察表を参照していただきたい。観察表中の「」は、復元数値を示し、()は残存数値を示す。遺存率は、12分割で示した。産地・年代等については、推定できるもののみ記入した。

軸葉瓦の軸葉のかけ方の分類など、ここで詳細を説明していないものについては、石川県金沢城調査研究所2018d『金沢城跡－玉泉院丸庭園Ⅱ－』等を参照していただきたい。



第40図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 1



- 1007_B331 B5・C5 レンガ基礎外周東側 遺物集中!
- 1008_B329 B5 レンガ基礎外周東側 遺物集中!
- 1009_B379 B5・C5 レンガ基礎外周東側 遺物集中!
- 1010_B332 B5 レンガ基礎外周東側 遺物集中!
- 1011_B330 B5・C5 レンガ基礎外周東側
- 1012_D374 B5・C5 レンガ基礎外周北側 近代埋土
- 1013_B307 C4 レンガ基礎区画2掘方、斜路 縦断アゼ北
- 1014_B413 D4 レンガ基礎 W2 掘方西壁 土層断面 18層
- 1015_B247 C4 監獄レンガ基礎
- 1016_B050 C4 馬廄レンガ基礎
- 1017_B351 D4 レンガ基礎内

第41図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器2



- 1018_B333 C4 コングリ基礎 4 掘方 斜路縦断アゼ北
 1019_B390 C4 コングリ基礎 6 掘方 コングリ基礎下砕石内
 レンガ基礎掘方 斜路縦断アゼ北
 1020_B344 C4 コングリ基礎 6 掘方 斜路縦断アゼ
 1021_B314 C4 コングリ基礎掘方 斜路縦断アゼ北
 1022_B308 C4 コングリ基礎掘方 斜路縦断アゼ北
 1023_B327 C4 コングリ基礎下砕石内 斜路縦断アゼ北
 斜路 路面直上

- 1024_B267 D2 S01 門以西溝内 石垣 10-9 下石組溝 埋土
 1025_B352 D4 斜路 側溝 S03(凝灰岩)
 C4 縦断アゼ北
 1026_B311 C4 斜路側溝内 縦断アゼ北
 1027_B354 D4 斜路南側側溝 埋土



第42図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器3



1028_B021 C2 石垣第6段 裏込め栗石
斜路 Aトレ北アゼ
C3 南北アゼ
1029_B142 D2 石垣第6段 裏込め栗石
1030_B016 C2 石垣第6段 裏込め栗石 斜路
1031_B134 D2 石垣第2段裏 斜路
1032_B109 D2 石垣第1段 裏込め
1033_B072 C2 石垣第6段 裏込め栗石 斜路
1034_B056 C2 石垣第6段 裏込め栗石 斜路

1035_B132 D2 石垣第10段前面盛土
1036_B115 D2 石垣第6段 裏込め栗石
斜路
1037_B015 C2 石垣第6段 裏込め栗石
斜路 Aトレ
C-03 斜路 南北アゼ
D2 斜路
1038_B071 C2 石垣第6段 裏込め栗石
1039_B401 側壁石垣(南)B型S113周辺裏込め

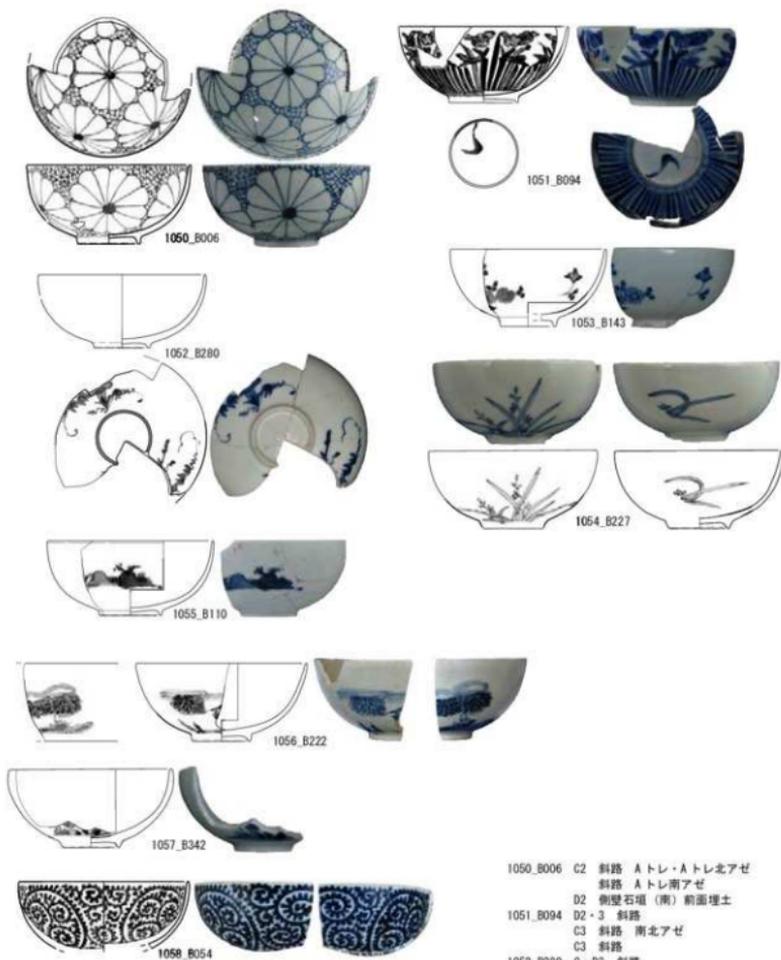
1037_B015

0 1.3 15cm

第43図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器4



第44図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器5



- 1050_B006 C2 斜路 Aトレ・Aトレ北アゼ
 斜路 Aトレ南アゼ
 D2 側壁石垣(南)前面埋土
 1051_B094 D2・3 斜路
 C3 斜路 南北アゼ
 C3 斜路
 1052_B280 C・D3 斜路
 1053_B143 D3 斜路 南北アゼ
 1054_B227 C4 斜路
 1055_B110 D2 側壁石垣(南)前面埋土
 側壁石垣前面埋土
 C2 斜路 Aトレ
 C3 斜路
 1056_B222 C3 斜路 南北アゼ
 1057_E342 C4 斜路 縦断アゼ
 1058_B054 C2 斜路

第45図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器6



第46図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器7



0 (1:3) 15cm

第47図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器8



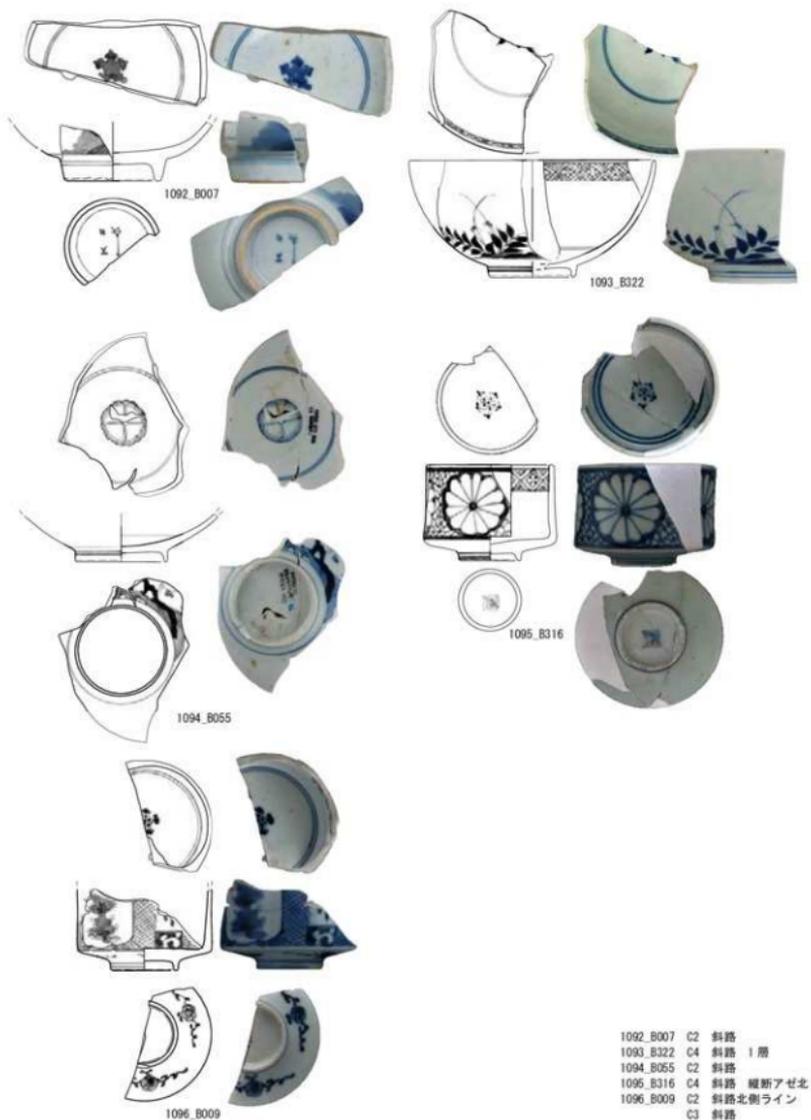
第48図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器9



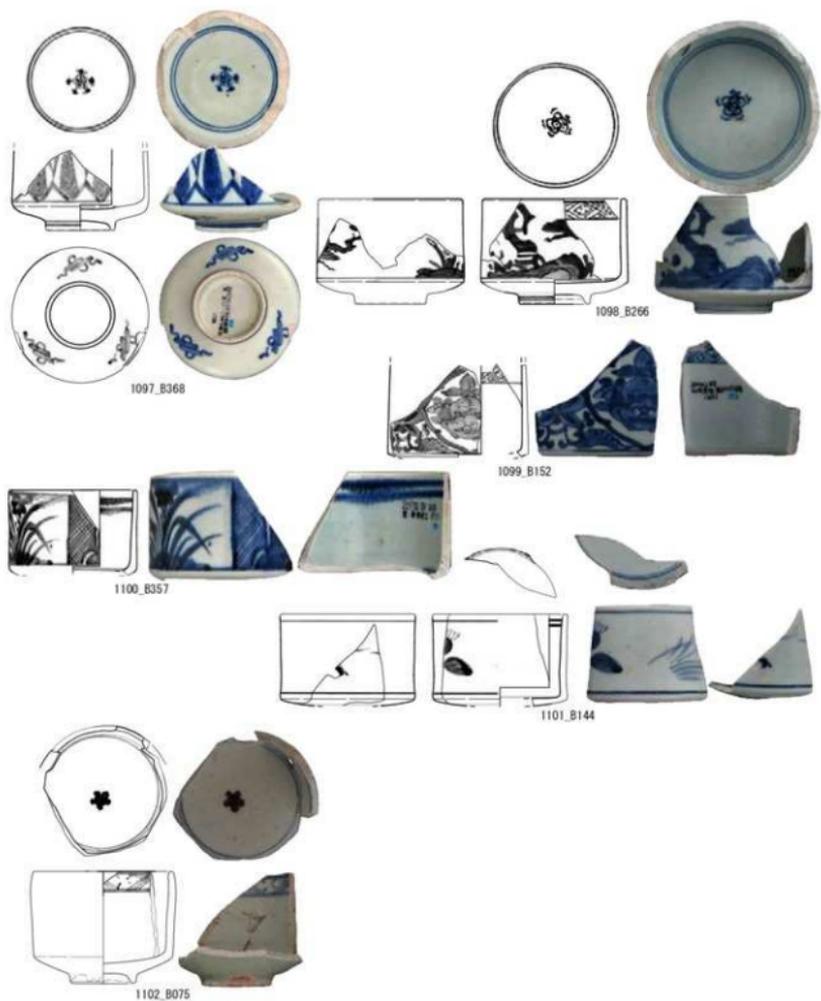
- 1086_B113 C・D3 斜路 南北アゼ
 1087_B367 C4 斜路 縦断アゼ北
 1088_B240 C4 斜路
 1089_B139 D3 斜路南法面
 1090_B148 C2 斜路 Aトレ
 1091_B359 C5 斜路 近代路面直上

0 (1:3) 15cm

第49図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 10



第50図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 11



- 1097_B368 C4 斜路 縦断アザ北
 1098_B266 C4 斜路
 1099_B152 D3 斜路
 1100_B357 D4 斜路
 1101_B144 C2 側壁石塔前面
 D3 斜路
 1102_B075 D3 斜路
 C3 斜路(南)

0 (1:3) 15cm

第51図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 12



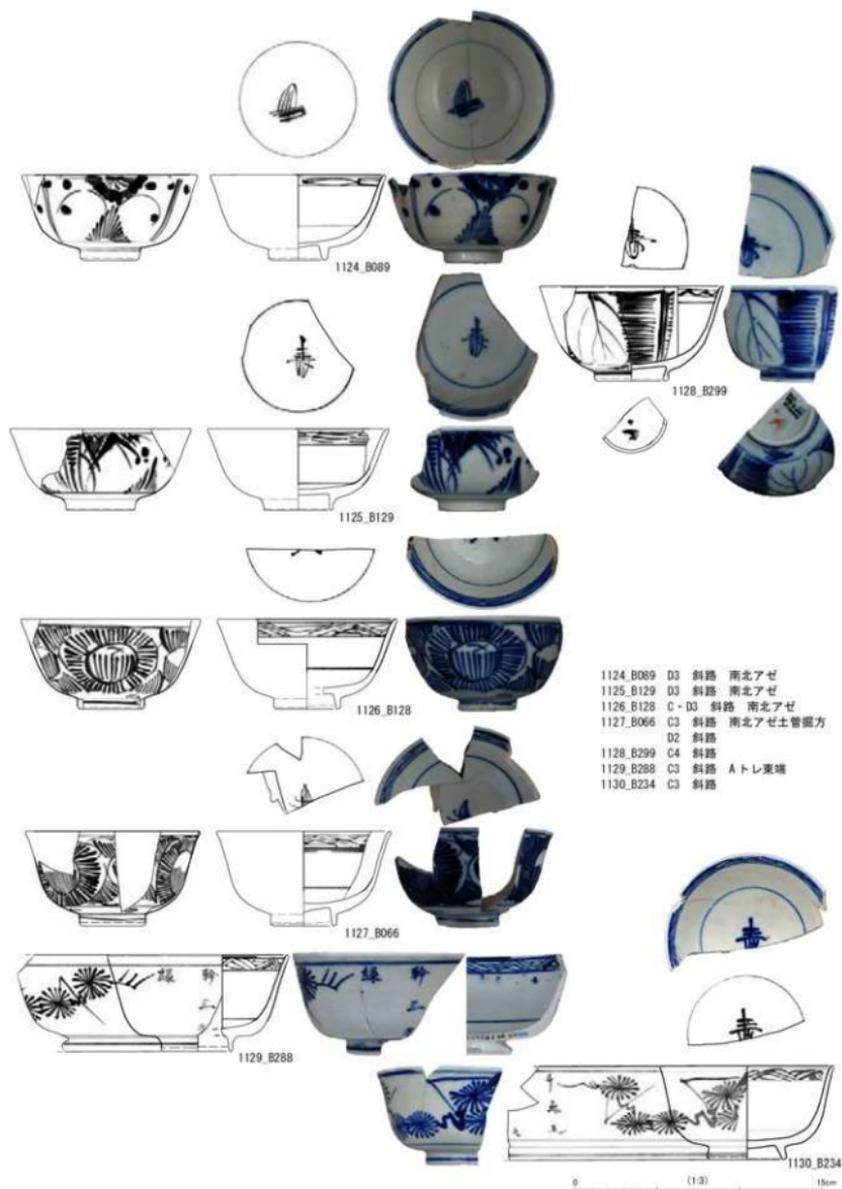
- 1103_B032 C3 斜路 セクションベルト 土管より上
 1104_B201 C3 斜路 Aトレ東端
 1105_B226 C4 斜路
 1106_B319 C4 斜路 縦断アゼ北
 1107_B019 C2 側壁石垣前面
 1108_B239 C3 斜路 Aトレ南アゼ
 C4 斜路
 1109_B384 C4 斜路 縦断アゼ北
 1110_B400 C4 斜路 縦断アゼ 1層
 斜路 縦断アゼ北
 1111_B371 C4 斜路 縦断アゼ北
 1112_B326 C4 斜路
 1113_B273 D4 斜路

第52図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 13



0 (1:3) 15cm

第53図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 14



第54図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 15



1131_B213 C3 斜路
 1132_B088 C・D3 斜路 南北アゼ
 C3 斜路
 D2 壁面清掃
 1133_B116 D3 斜路 南北アゼ
 1134_B249 C3 斜路
 1135_B117 D3 斜路 南北アゼ

1136_B268 D0 斜路
 1137_B221 C3 斜路 東西アゼ
 1138_B341 C4 斜路 縦断アゼ
 1139_B138 D2 斜路
 1140_B100 D3 斜路 南北アゼ
 1141_D067 C3 斜路 Aトレ東端

0 (1:3) 15cm

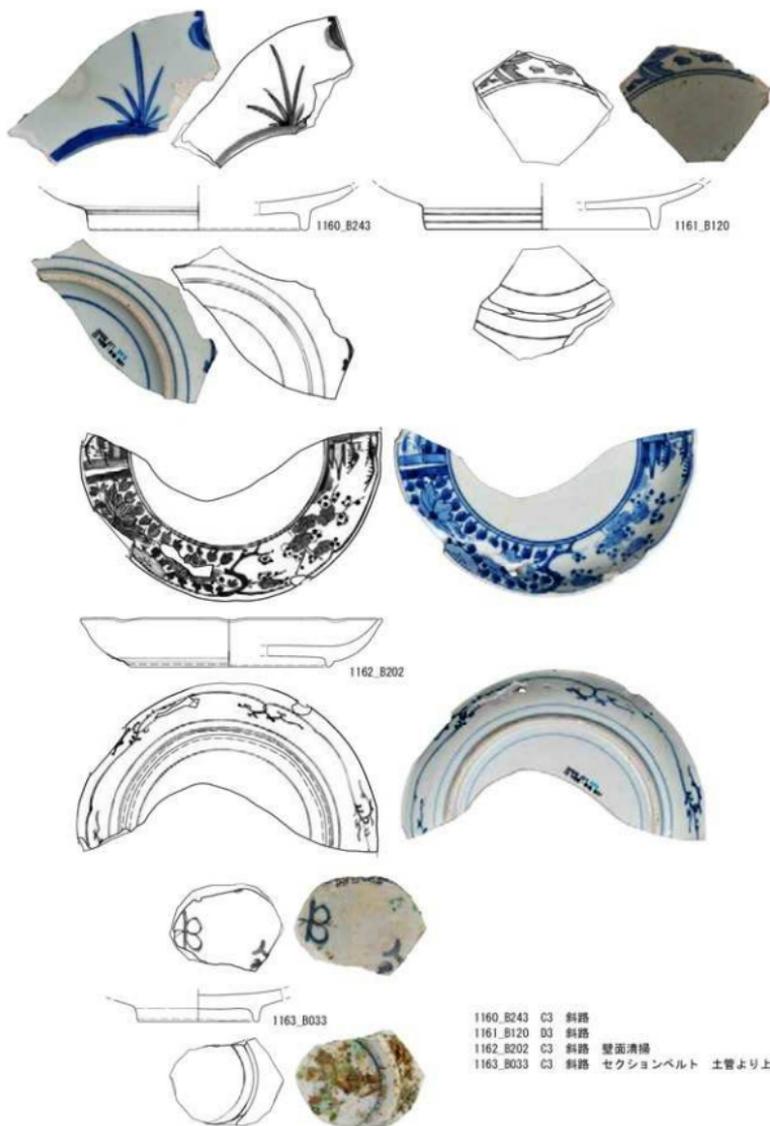
第55図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 16



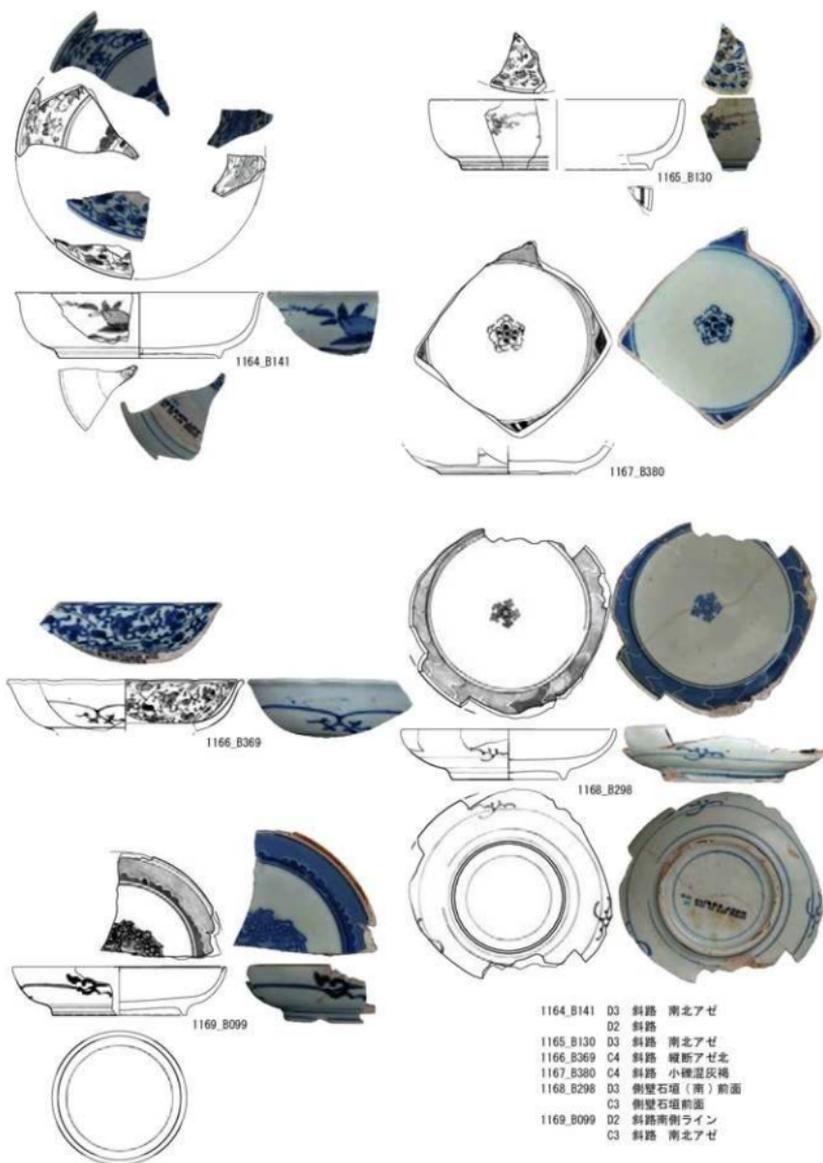
- 1155_B122 D3 側壁石楯前面
 1156_B078 D3 斜路 南北アゼ
 1157_B396 C4 斜路 縦断アゼ北
 1158_B397 C4 斜路 縦断アゼ
 1159_B394 C3・4 斜路 最下階
 D4 斜路 小石階

0 (1:3) 15cm

第57図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 18



第58図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 19



第59図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・磁器 20

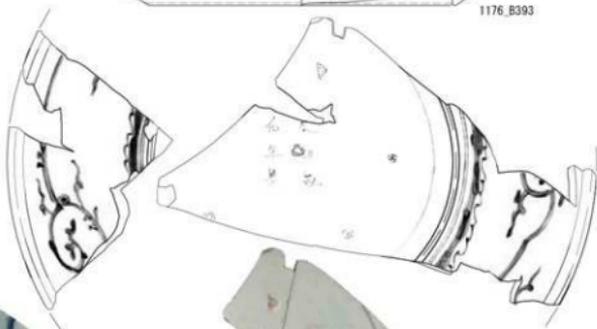


- 1170_B149 C2 A トレ南アゼ
斜路 A トレ
- 1171_B123 D3 斜路南法面
- 1172_B023 C3 斜路
- 1173_B336 C4 斜路 縦断アゼ北
- 1174_B203 C3 斜路
- 1175_B365 C4 遺構検出 斜路

第 60 図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 21



1176_B393

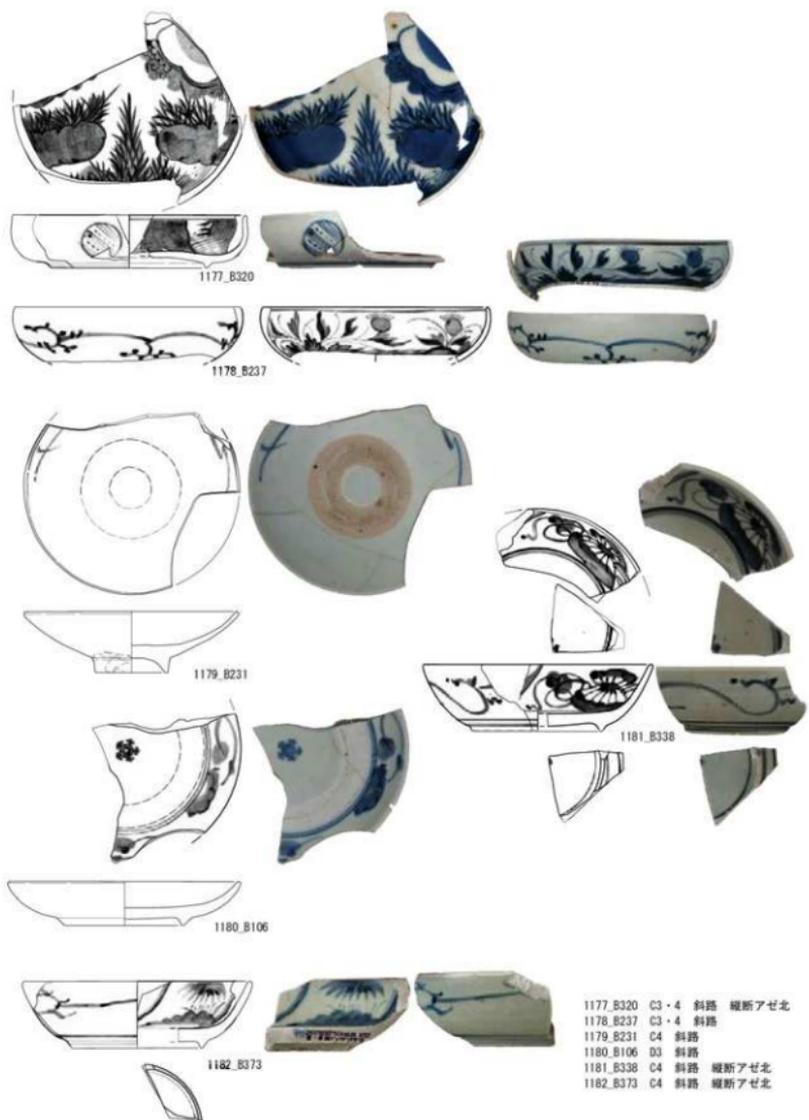


1176_B393 C5 斜路 1層
 C4 斜路 縦断アゼ北・縦断アゼ
 監獄署レンガ基礎 整地土
 B・C4 レンガ基礎内
 D4 斜路



0 (1:3) 15cm

第61図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 22



0 (1:3) 15cm

第62図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 23



- 1183_B306 C4 斜路
 C5 斜路 縦断アゼ北
 1184_B334 C4 斜路 縦断アゼ北
 1185_B077 D3 斜路 南北アゼ
 1186_B389 C4 斜路 縦断アゼ北
 1187_B136 D2 斜路
 C2 斜路 Aトレ北アゼ
 1188_B031 C3 斜路
 1189_B063 C2 斜路
 1190_B014 C2 斜路 Aトレ

第63図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 24



第64図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 25



第65図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 26



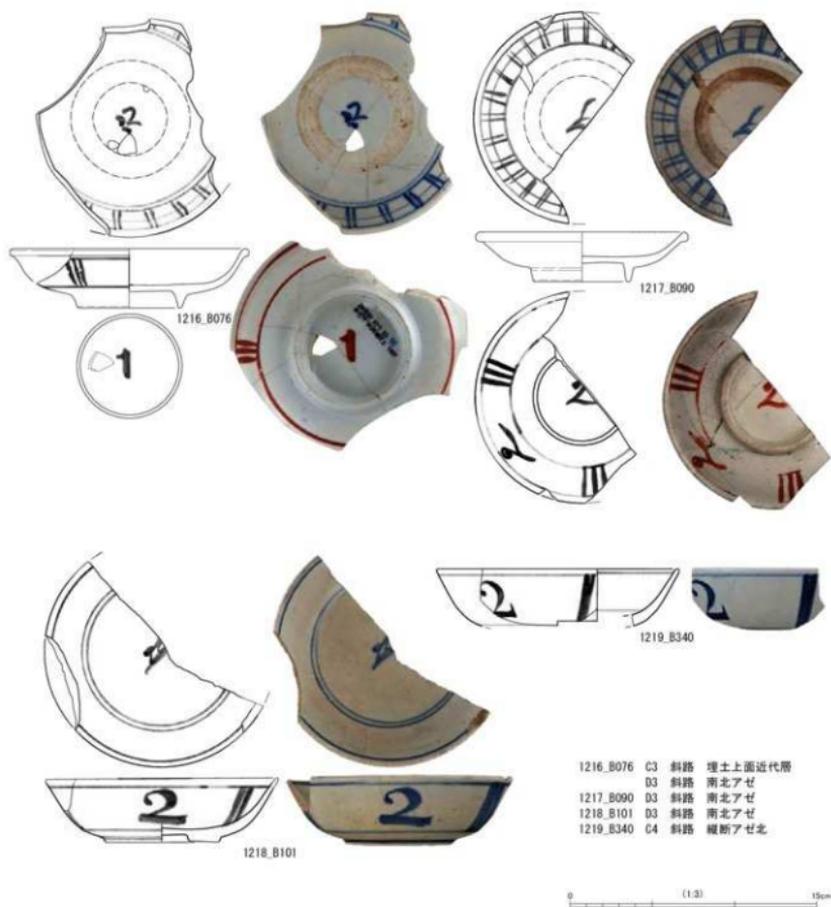
- 1204_B064 C・D3 斜路 南北アゼ
 1205_B272 D4 斜路
 1206_B269 D3 斜路南法面上方
 1207_B087 D2 近代層
 石垣際 近現代層
 斜路
 E2 礎石周辺 近現代層
 1208_B287 C4 斜路
 D4 レンガ基礎 近代整地土
 1209_B108 D2 斜路
 C・D3 斜路 南北アゼ

0 (1:3) 15cm

第66図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 27



第 67 図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 28

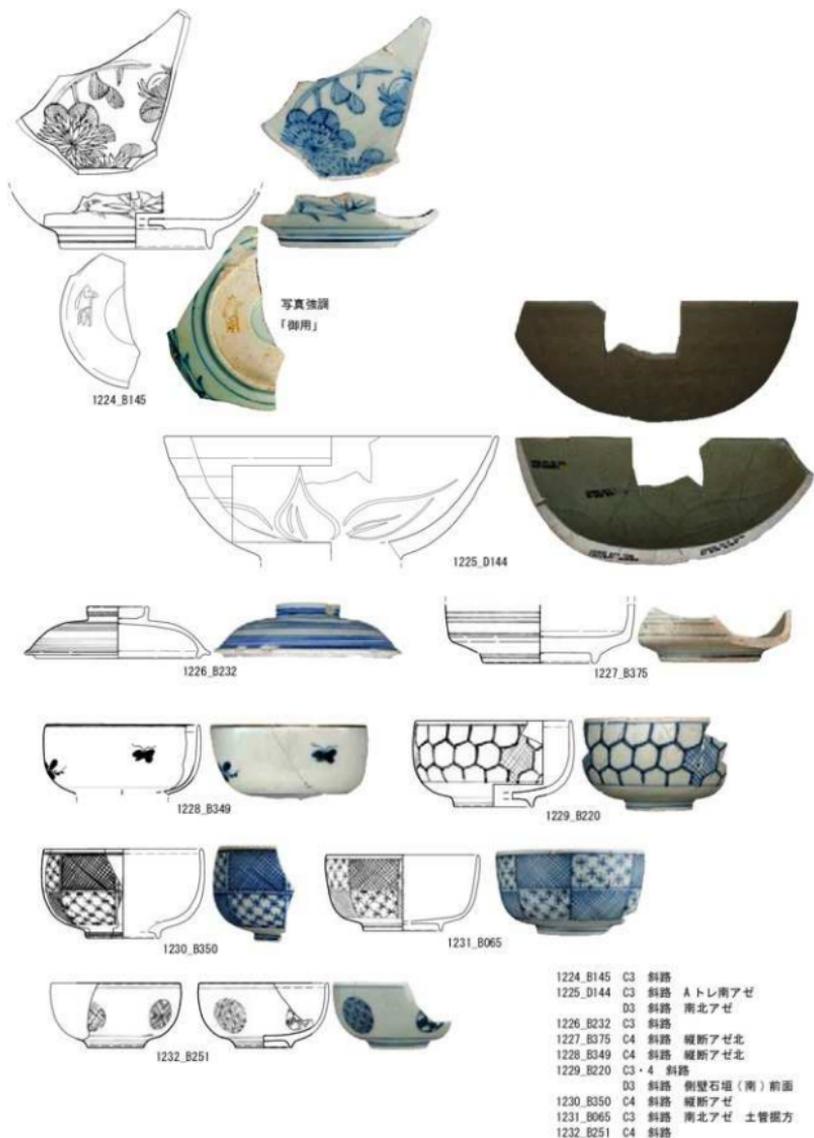


第68図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 29

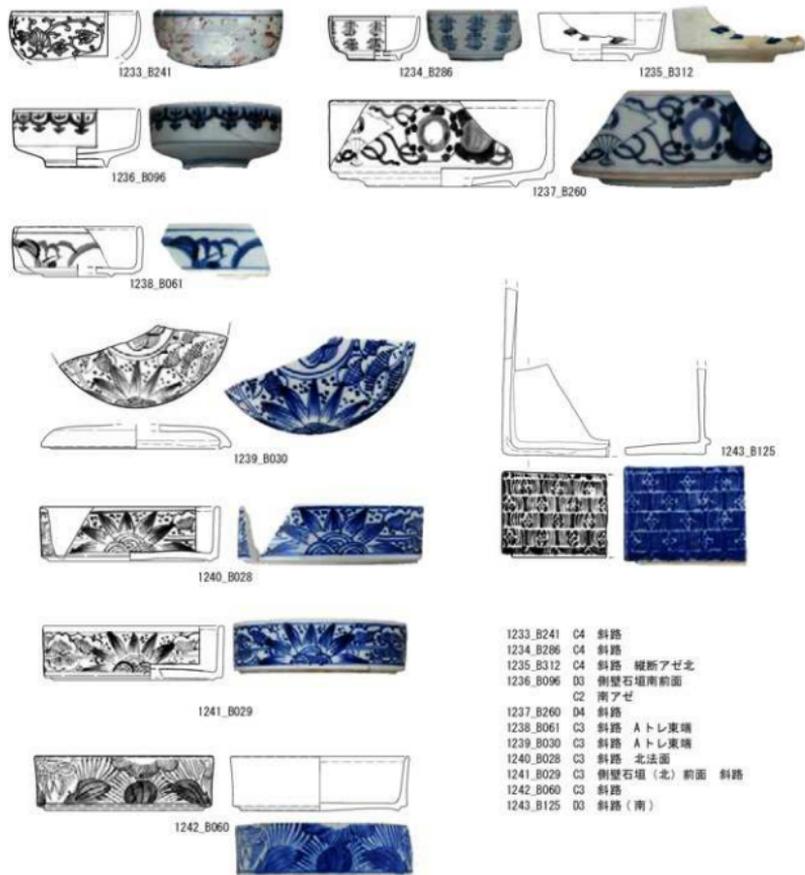


- 1220_B392 C4 斜路 縦断アゼ北
 C3 斜路 Aトレ東端
 1221_B353 D4 斜路
 1222_B053 C2 斜路北側ライン
 1223_B069 C2 斜路 Aトレ

第69図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 30

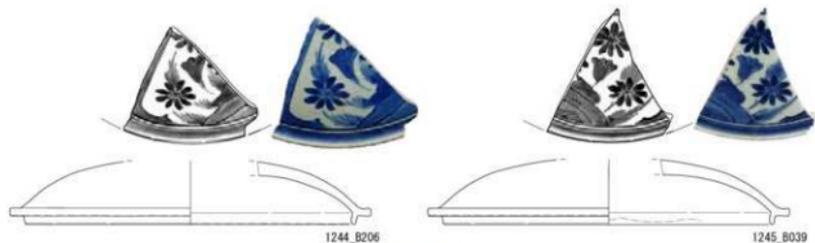


第70図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 31



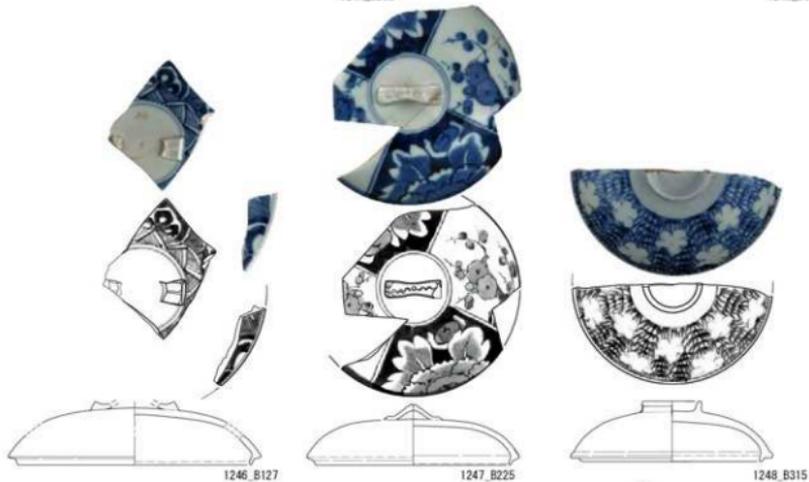
第71図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 32

0 (1:3) 15cm



1244_B206

1245_B039



1246_B127

1247_B225

1248_B315



1249_B111

1250_B047

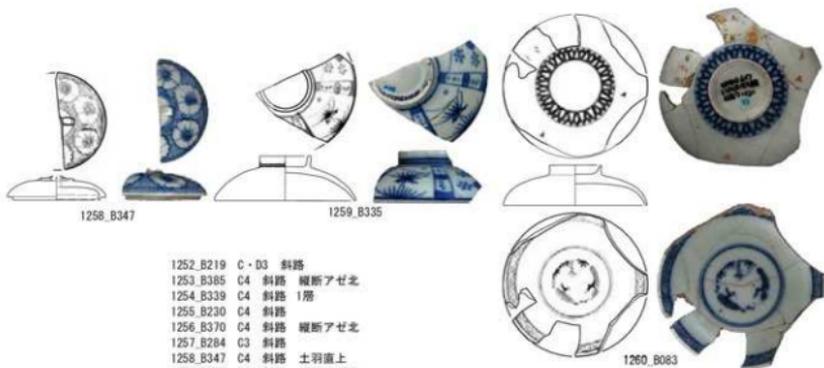
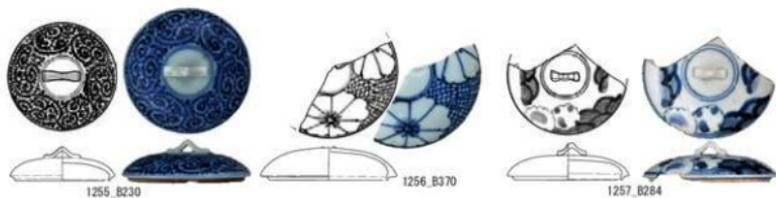
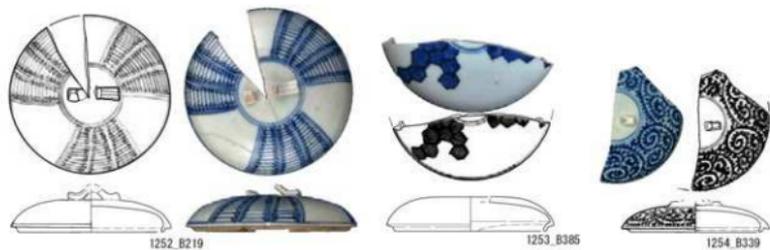
1251_B345

1244_B206 C3 斜路
 1245_B039 C3 側壁石塔(北)前面
 1246_B127 D3 斜路 南北アゼ 斜路南法面
 C2 斜路
 1247_B225 C3・4、D3 斜路

1248_B315 C4 斜路 縦断アゼ北
 1249_B111 D2 側壁石塔(南)前面埋土
 1250_B047 C3 斜路 南北アゼ
 1251_B345 C4 斜路 縦断アゼ北

0 (1:3) 15cm

第72図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 33



- 1252_B219 C-D3 斜路
 1253_B385 C4 斜路 襷断アゼ北
 1254_B339 C4 斜路 1層
 1255_B230 C4 斜路
 1256_B370 C4 斜路 襷断アゼ北
 1257_B284 C3 斜路
 1258_B347 C4 斜路 土羽直上
 1259_B335 C4 斜路 襷断アゼ北
 1260_B083 D3 斜路

0 (1:3) 15cm

第73図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 34

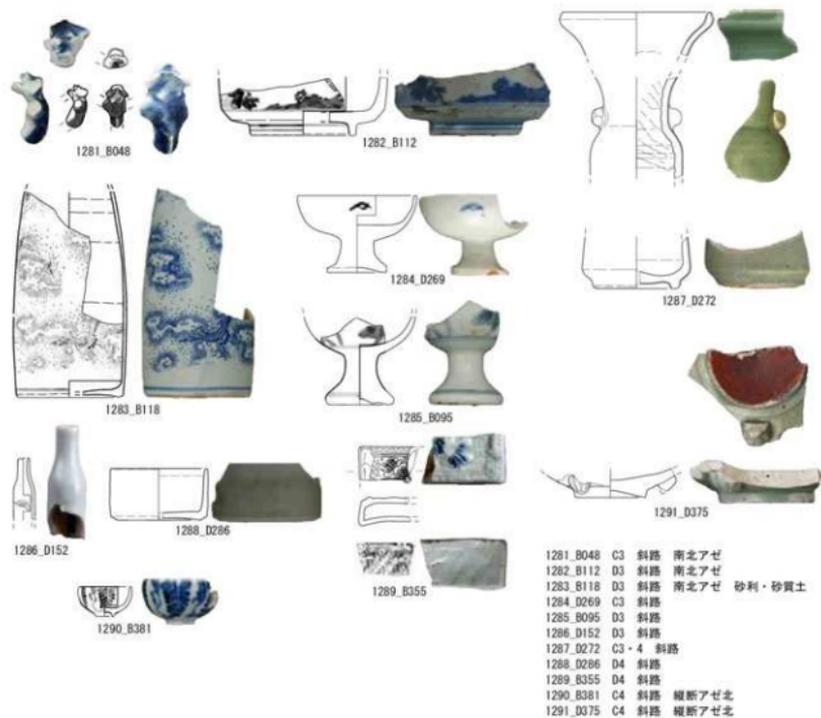


1261_D019 C2 斜路 Aトレ
 1262_B204 C3 斜路
 1263_B151 D3 斜路
 1264_B337 C4 斜路 縦断アゼ北
 1265_B003 C2 斜路
 1266_B391 C4 斜路 縦断アゼ北
 1267_B107 D3 斜路
 1268_B409 御壁石垣(北) 東側 法面高落土
 1269_B358 C4 斜路 縦断アゼ南 1層
 縦断アゼ
 D4 審所階段東コンクリ基礎根固め
 1270_D327 C4 斜路 縦断アゼ
 1271_B250 C3 斜路

1272_B398 C4 斜路 縦断アゼ北
 1273_B246 C4 斜路
 1274_B057 C3 斜路
 1275_B081 D3 斜路 南北アゼ 斜路南法面
 D3 斜路 南北アゼ
 D2 斜路
 1276_B137 D2 斜路
 1277_D276 C4 斜路
 1278_B224 C3・4 斜路
 1279_B252 C3・4 斜路
 1280_D354 C5 斜路 縦断アゼ北

0 (1:3) 15cm

第74図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 35

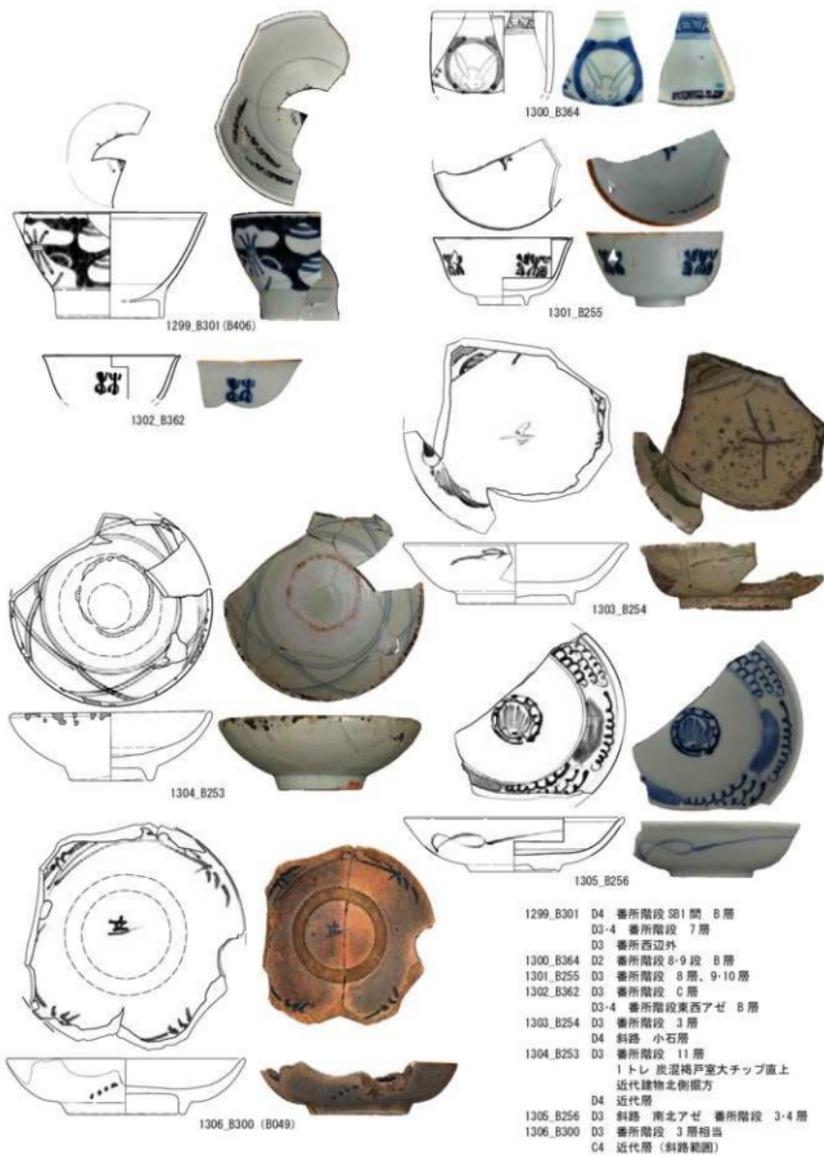


第75図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 36



0 (1:3) 15cm

第76図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 37



0 (1:3) 15cm

第 77 図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 38



- 1307_B270 D3 善所階段 6・7層、5層相当
 斜路 南側法面上方
 斜路 南北アゼ 善所階段 3・4層対応層
 D4 斜路 南北アゼ 南側法面
 斜路 小石階
- 1308_B302 D3-4 善所階段 7層
 D4 善所階段 S81間 8層
- 1309_B363 D3-4 善所階段
- 1310_B261 D3 善所階段 8層
 D4 斜路
- 1311_B411 D3 善所西辺外石敷直上
 善所北西隅 溝状落込み
 善所西落込み

第78図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 39



- 1312_B020 B2 1トレ 現代層
 1313_B051 B2 1トレ 現代層
 1314_B084 D3 近代製地土 1トレ
 1315_B258 D3 1トレ
 1316_D264 D3 1トレ 戸室大チップ直上
 1317_B074 D2 Bトレ
 1318_B105 E2 二重堀石垣直上
 1319_B360 C5 沼研遺構出土面
 1320_B085 D・E3 斜路以南 近代層

0 (1:3) 15cm

第79図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 40



- 1321_D001 B2 馬厩庫内コンクリ床下 近代整地土
 C2 斜路
 C3 斜路 Aトレ以北南北アゼ
 D2 倒壁石垣前面遺土
- 1322_D004 B3 馬厩庫内コンクリ床下 近代整地土
- 1323_D073 B4 レンガ基礎北西隅前方
- 1324_D047 B5・C5 レンガ基礎外周東側 遺物集中1
- 1325_D046 B5 レンガ基礎外周 遺物集中1
 B5・C5 レンガ基礎外周東側

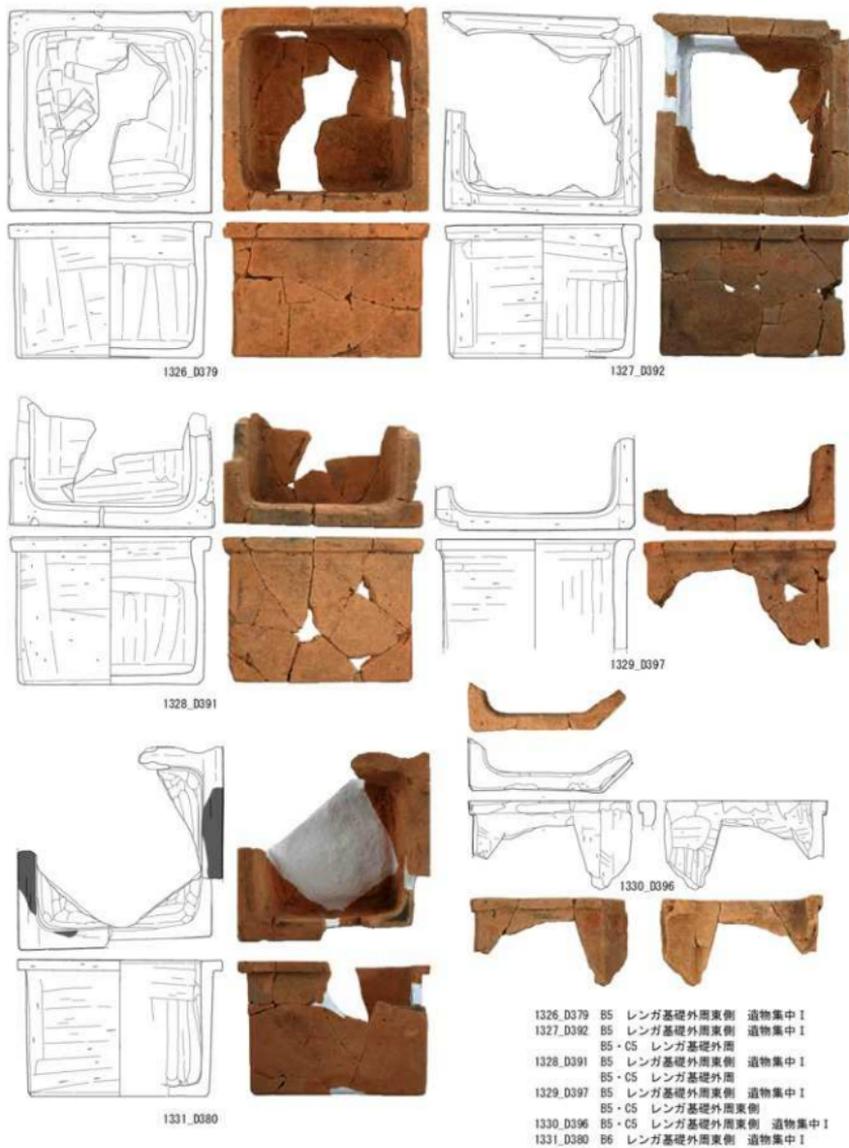
1323_D001 ~ 1325_D073 (S=1/3)

1326_D047 ~ 1327_D046 (S=1/6)

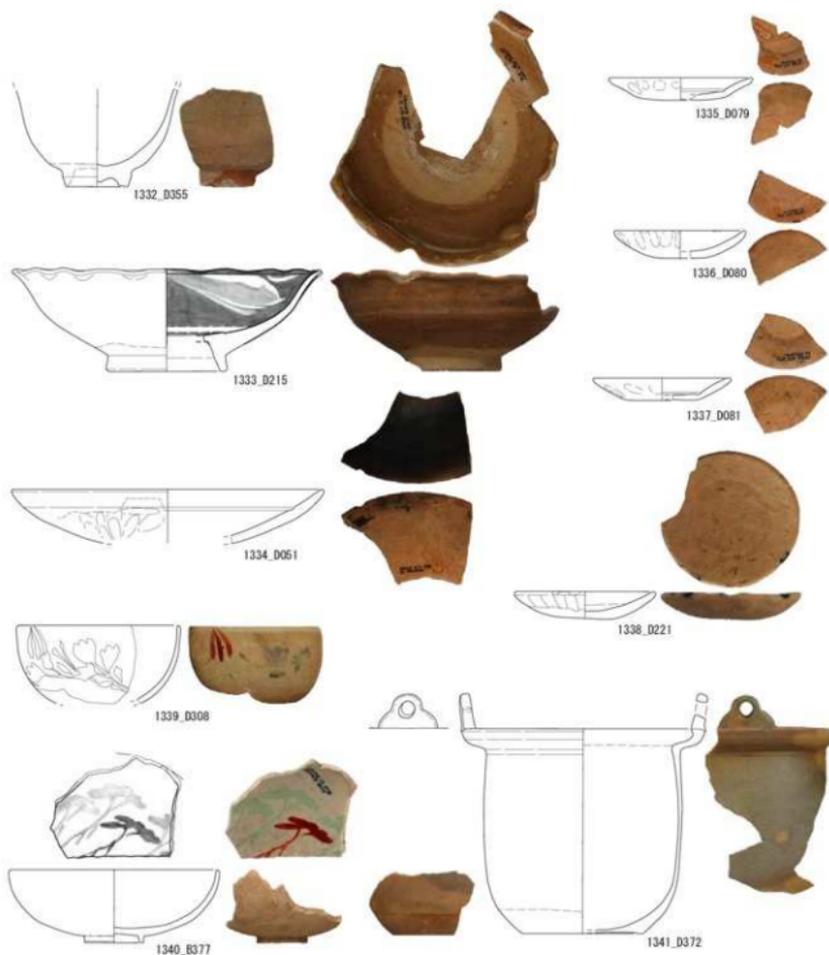
0 (1/6) 30cm

0 (1/3) 15cm

第80図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 41



第81図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 42

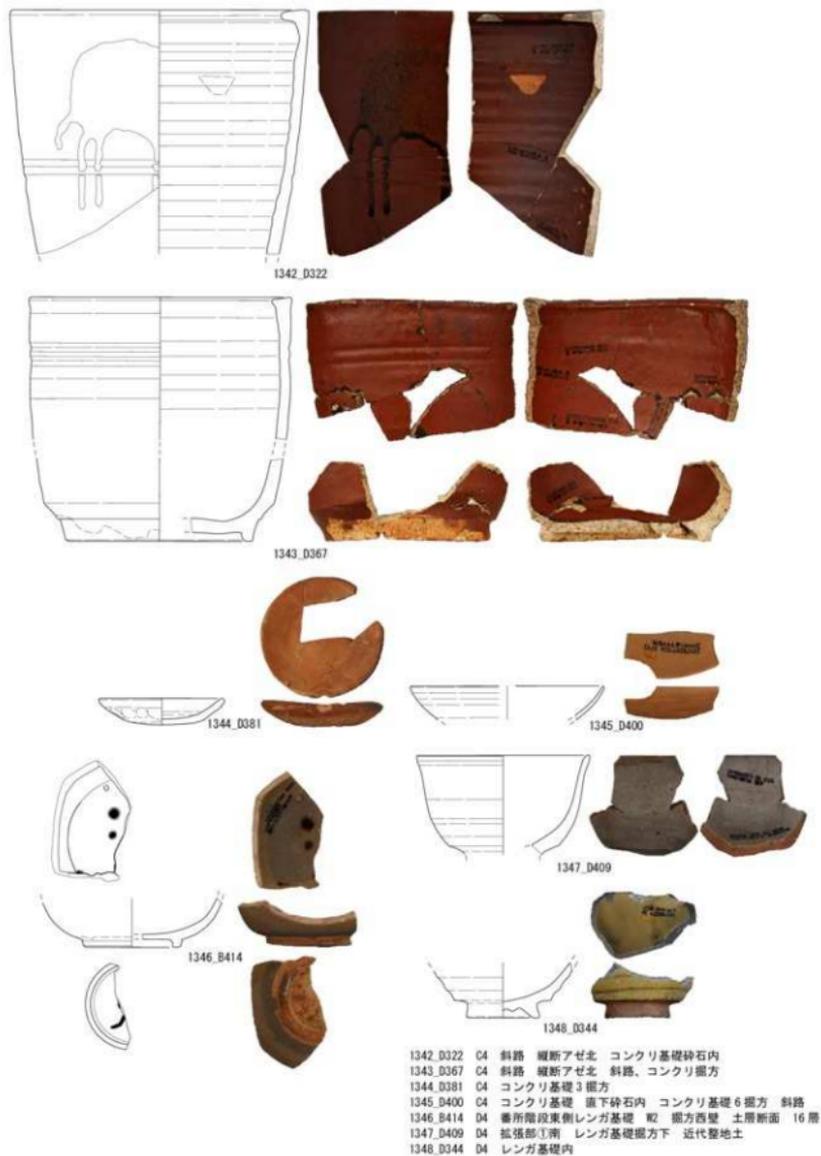


- 1332_D355 C5 レンガ基礎据方
 1333_D215 C4 斜路、レンガ基礎
 1334_D051 C4 馬籠レンガ基礎
 1335_D079 C4 馬籠レンガ基礎
 1336_D080 C4 馬籠レンガ基礎
 1337_D081 C4 馬籠レンガ基礎
 1338_D221 C4 レンガ基礎 斜路

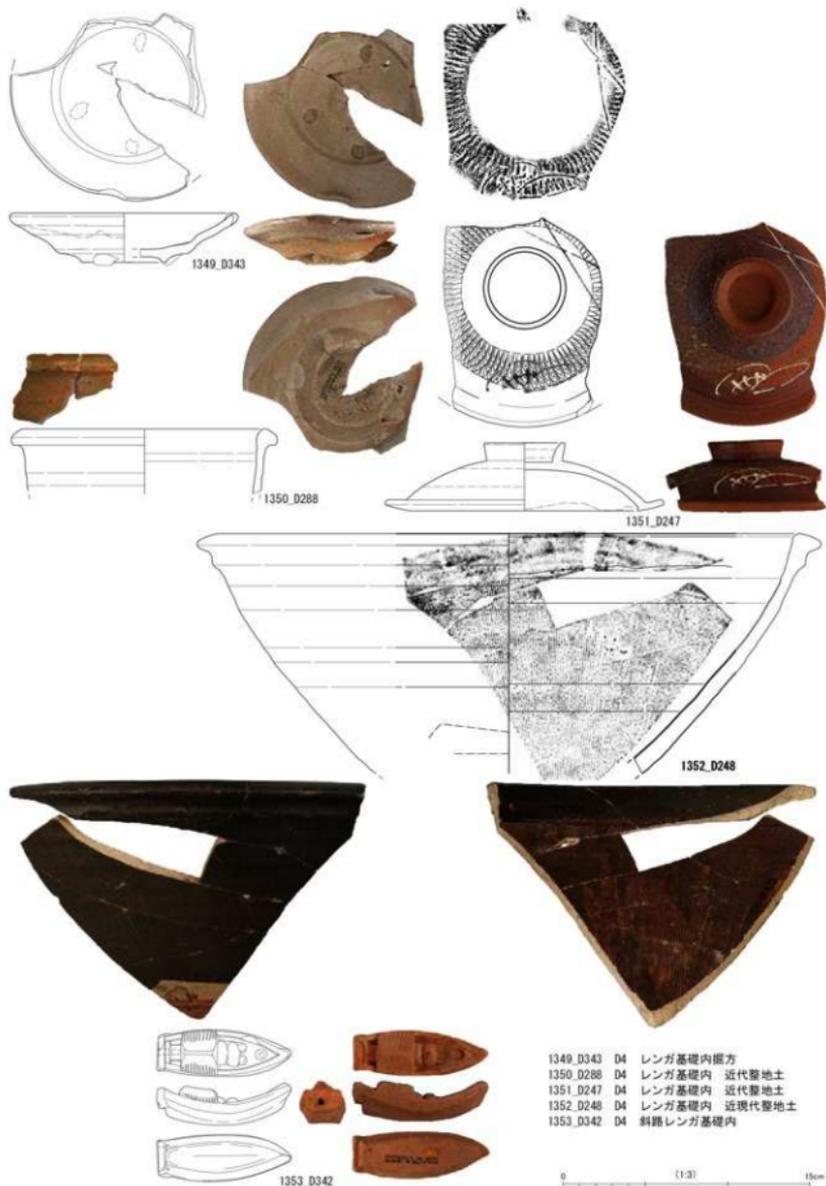
- 1339_D308 C4・5 斜路 縦断アゼ北
 C4 コンクリ基礎据方
 1340_B377 C4 斜路 縦断アゼ コンクリ基礎 5 据方
 1341_D372 C4 斜路 縦断アゼ北 コンクリ基礎下砕石内

0 (1:3) 15cm

第 82 図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 43

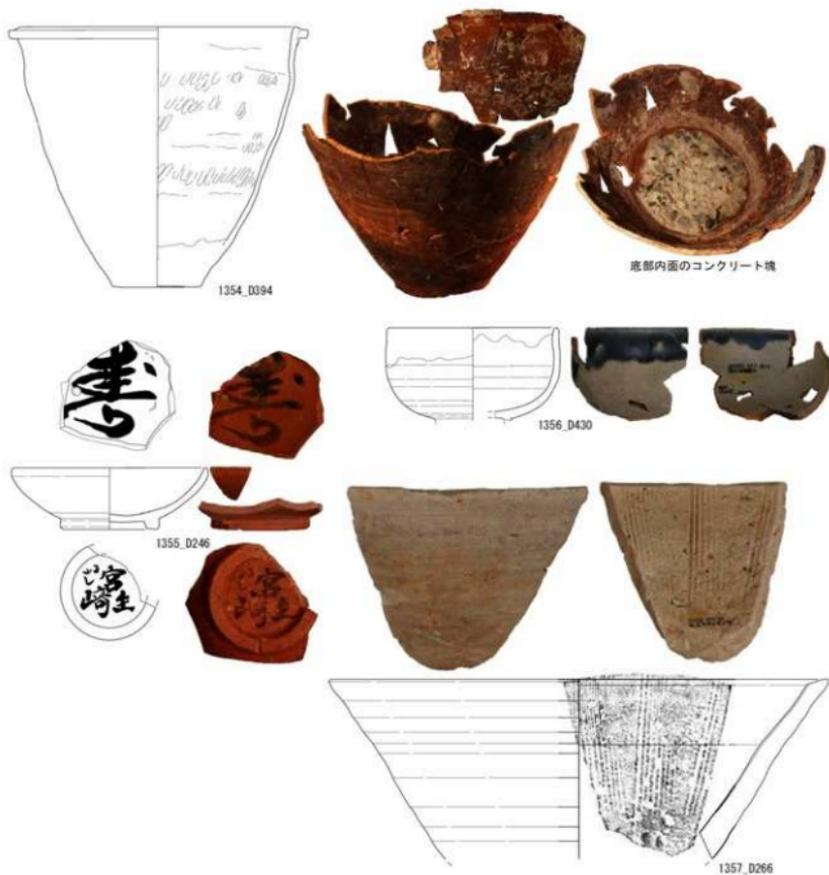


第 83 図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 44



- 1349_D343 D4 レンガ基礎内掘方
 1350_D288 D4 レンガ基礎内 近代整地土
 1351_D247 D4 レンガ基礎内 近代整地土
 1352_D248 D4 レンガ基礎内 近代整地土
 1353_D342 D4 斜路レンガ基礎内

第84図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 45



底部内面のコンクリート塊

1356_D430

1355_D246

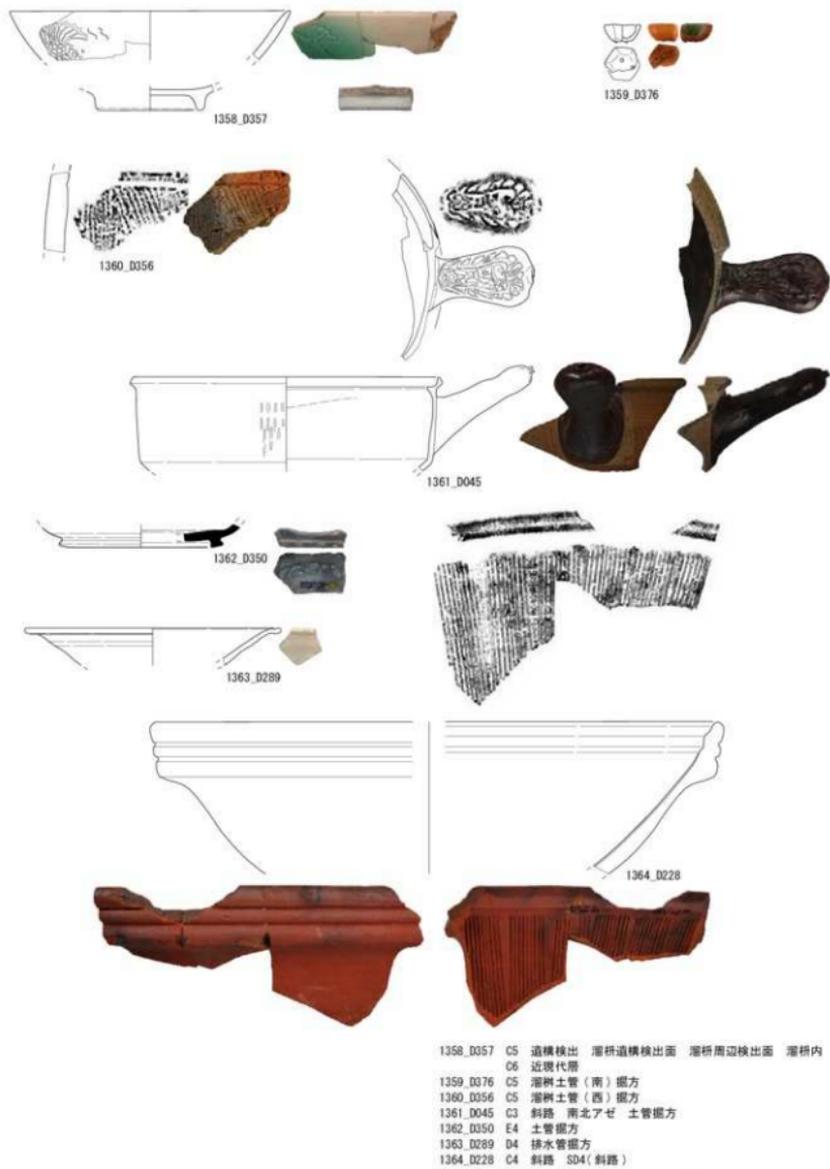
1357_D266

1354_D394 D4 レンガ基礎内
 1355_D246 D0 近代建物裏側掘方
 1356_D430 E3 S801 東側掘方、S801
 1357_D266 D4 瓦集積遺構直下

1354_D394 (S=1/6)
 1355_D246 ~ 1357_D266 (S=1/3)

0 (1/6) 20cm
 0 (1/3) 15cm

第85図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 46

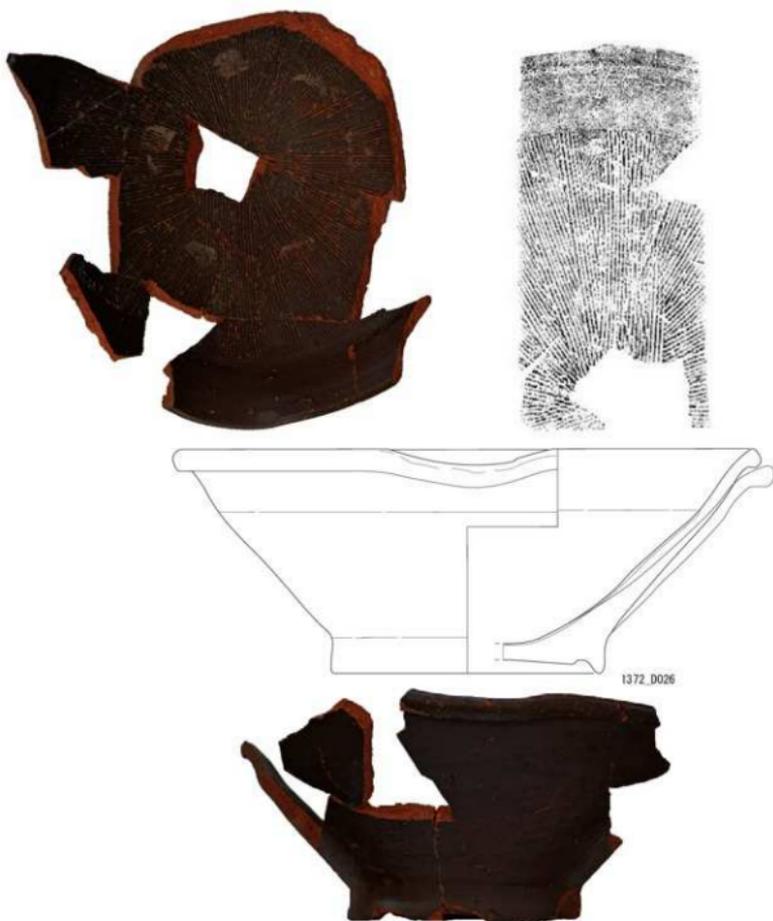


第86图 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 47



- 1365_D030 C4 S06
 1366_B022 C2 石垣第7段 石垣第5段表込め黒石 斜路
 D2 斜路
 1367_D059 C2 石垣第8段表込め 側壁石垣(北)
 1368_B052 B2 石垣第2段表込め
 1369_D083 C2 斜路 Aトレ 石垣第6段表込め 斜路
 1370_D129 C2 石垣第6段表込め黒石 側壁石垣前面
 C3 斜路 南北アゼ
 D2 斜路 側壁石垣前面 側壁石垣(南)前面
 1371_D095 C2 Aトレ 石垣第7段表込め
 C3 斜路
 D2 斜路

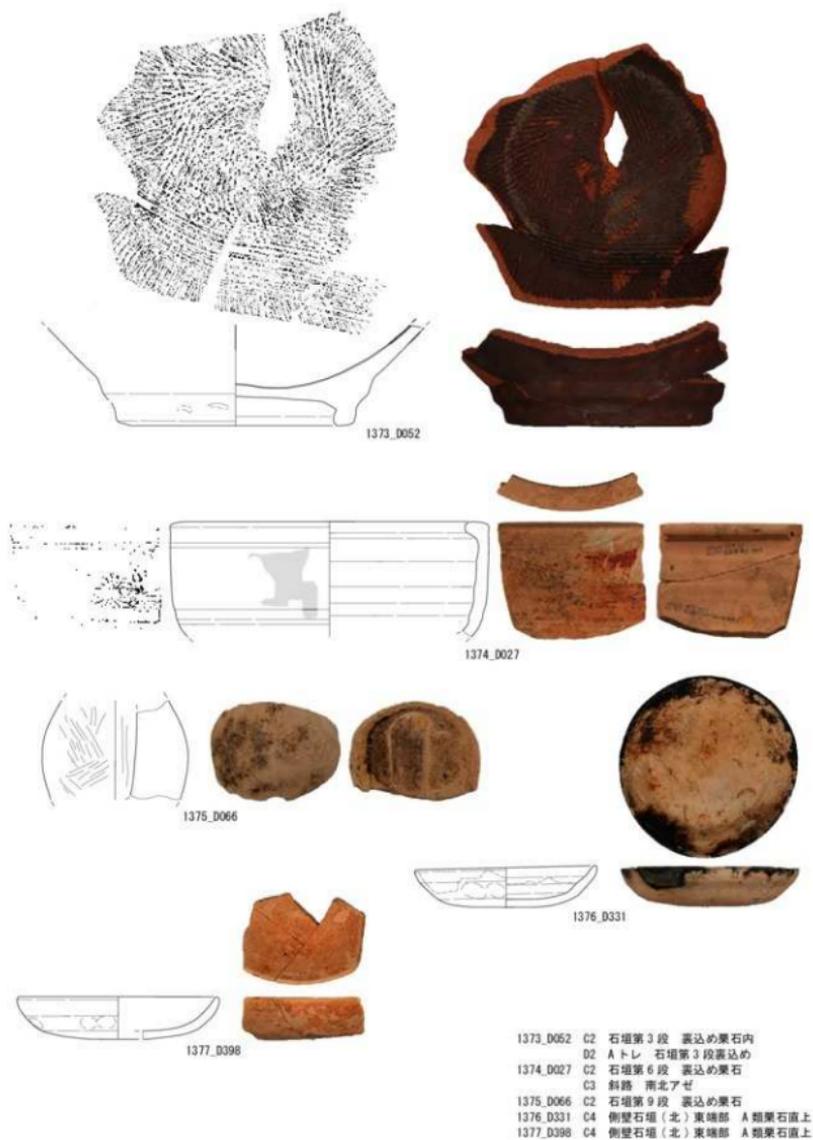
第87図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 48



1372_D026 C2 石垣第6段 裏込め栗石
 C3 斜路南北アゼ 斜路
 D3 斜路 南北アゼ南法面 斜路南法面

0 (1:3) 15cm

第88図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 49



- 1373_D052 C2 石垣第3段 蓋込め栗石内
D2 Aトレ 石垣第3段蓋込め
1374_D027 C2 石垣第6段 蓋込め栗石
C3 斜路 南北アゼ
1375_D066 C2 石垣第9段 蓋込め栗石
1376_D331 C4 側壁石垣(北)東端部 A 壘栗石直上
1377_D398 C4 側壁石垣(北)東端部 A 壘栗石直上

第89図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 50



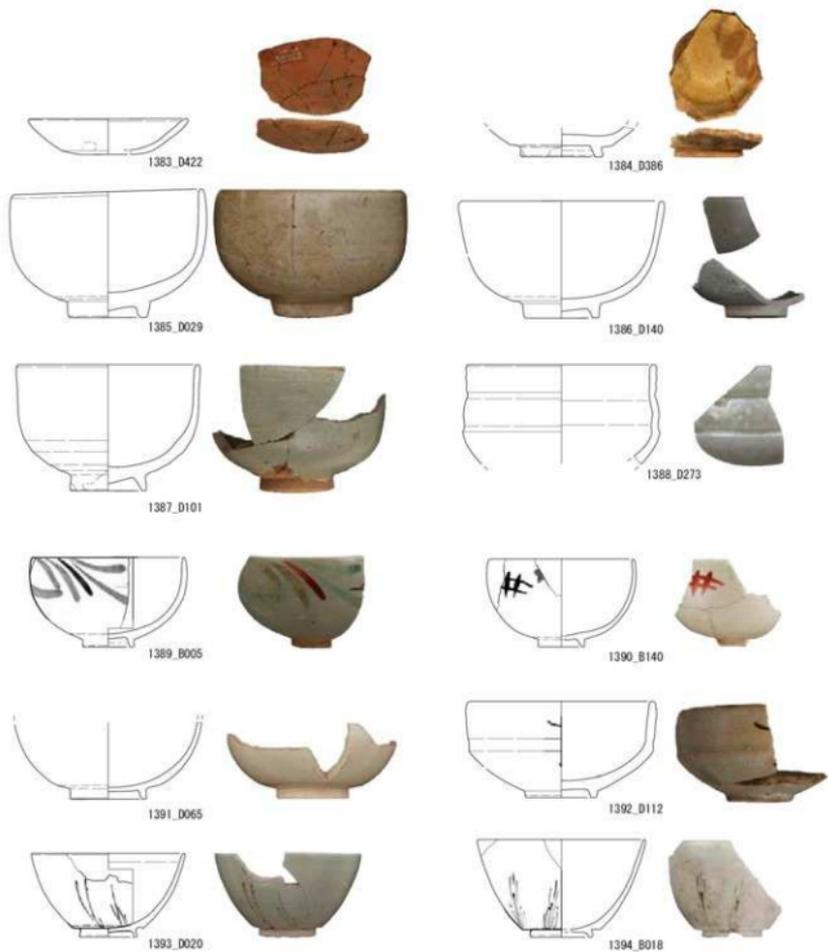
第90図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 51



- 1380_D113 D2 石塚第6段表込め栗石 石塚第4段表込め 斜路
 D3 斜路 南北アゼ 南北アゼ 斜路南法面 斜路南 斜路
 1381_D090 D2 石塚第3段表込め栗石 斜路 石塚第2段 表込め 斜路
 1382_D296 D2 石塚外側 レンガモルタル層

0 (1:3) 15cm

第91図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 52



1383_D422 C5 南土羽之断面 Pit

1384_D386 D3 門背面濠樹

1385_D029 C2 側壁石壇前面

1386_D140 D3 斜路

1387_D101 C2 斜路

D2 側壁石壇前面

D3 斜路

1388_D273 C3 斜路 南北アゼ

1389_B005 C2 斜路北側ライン 斜路 Aトレ南アゼ

C3 斜路 南北アゼ

1390_B140 D3 斜路 (南) 斜路南法面

1391_D065 C3 斜路

1392_D112 C3 斜路

D2 側壁石壇 (南) 前面

1393_D020 D3 斜路

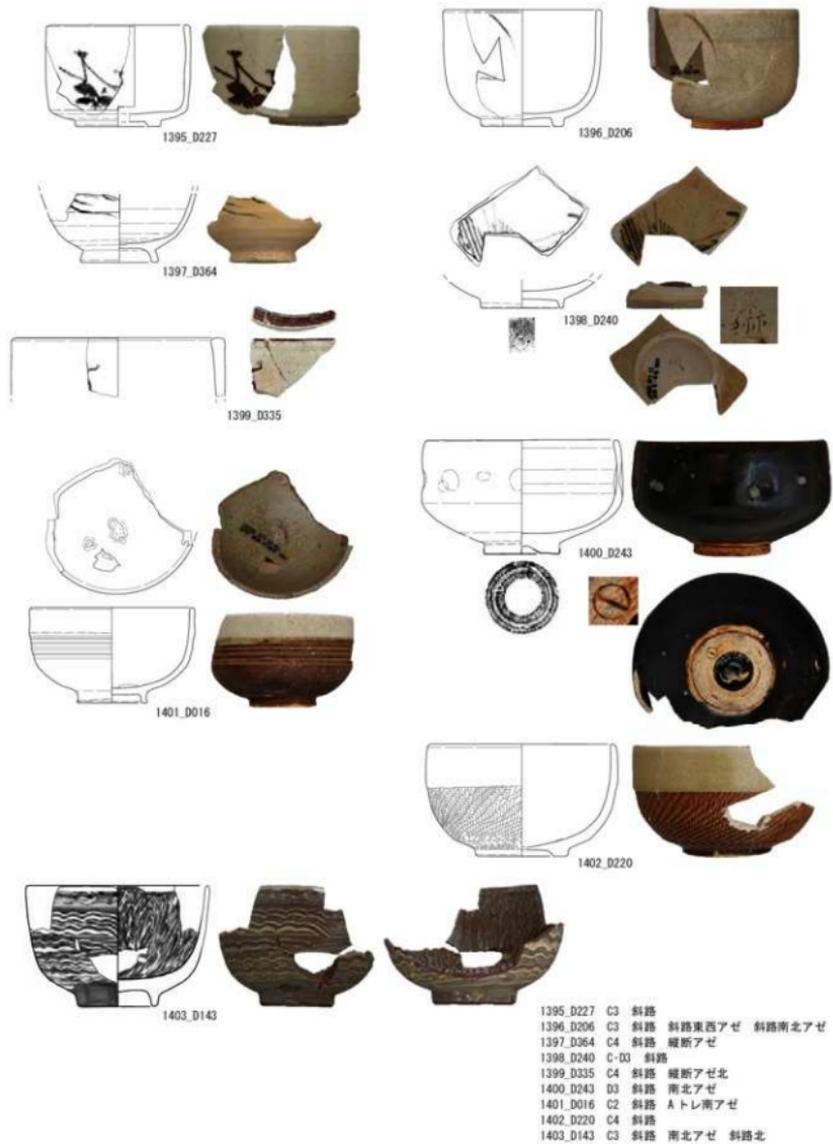
C2 斜路 Aトレ北アゼ

D2 側壁石壇 (南) 前面

1394_B018 C2 斜路 Aトレ南アゼ

0 (1:3) 15cm

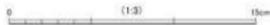
第92図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 53



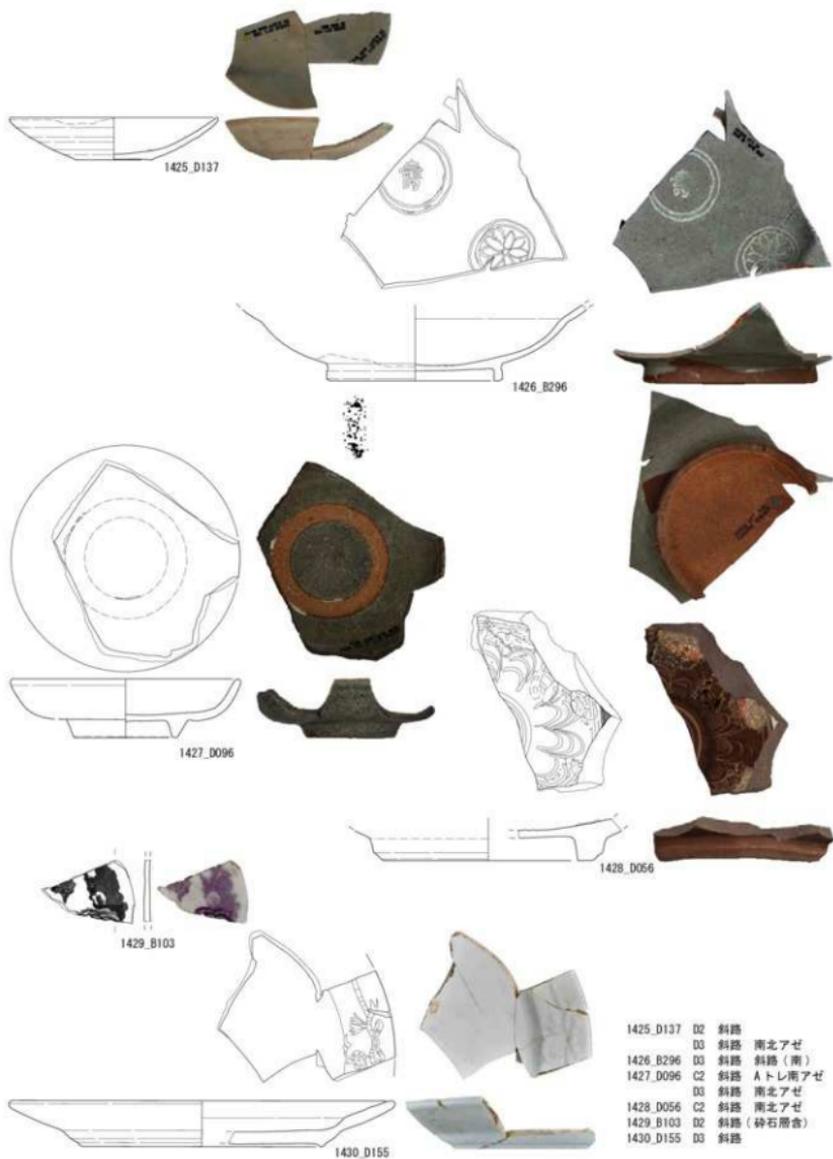
第93図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 54



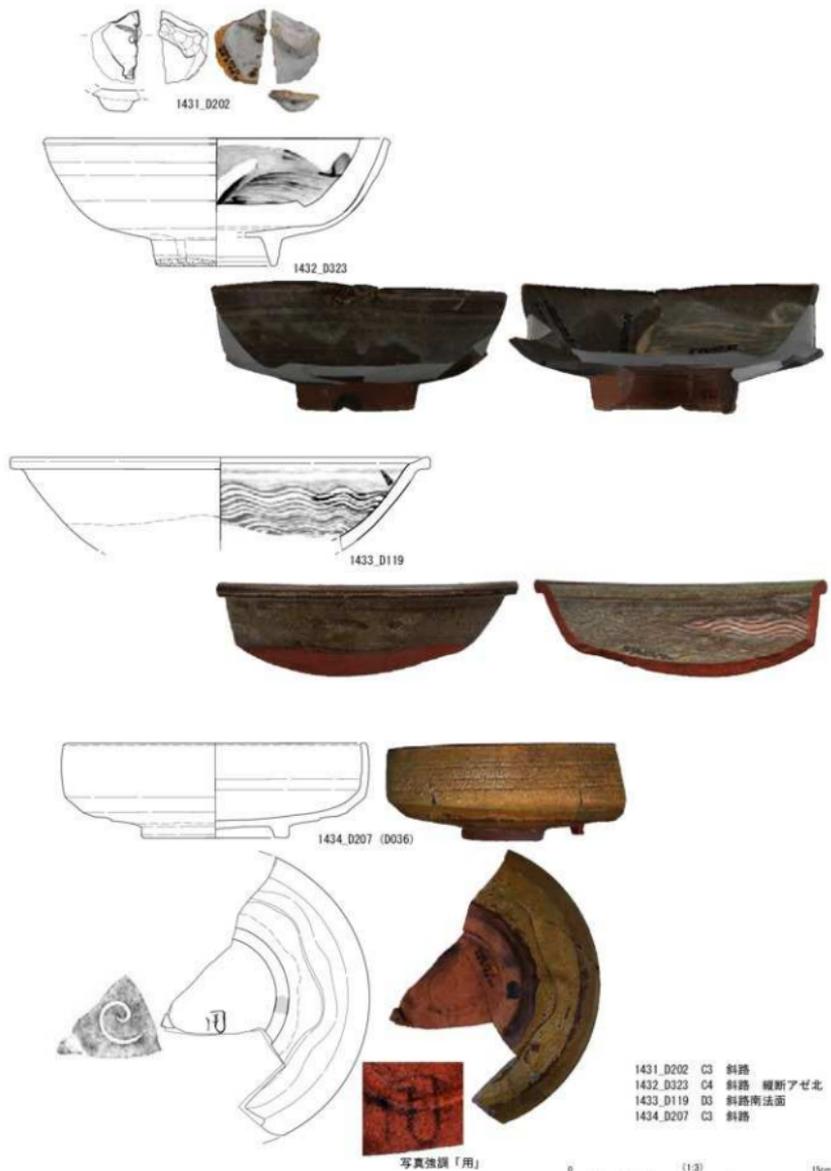
第94図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 55



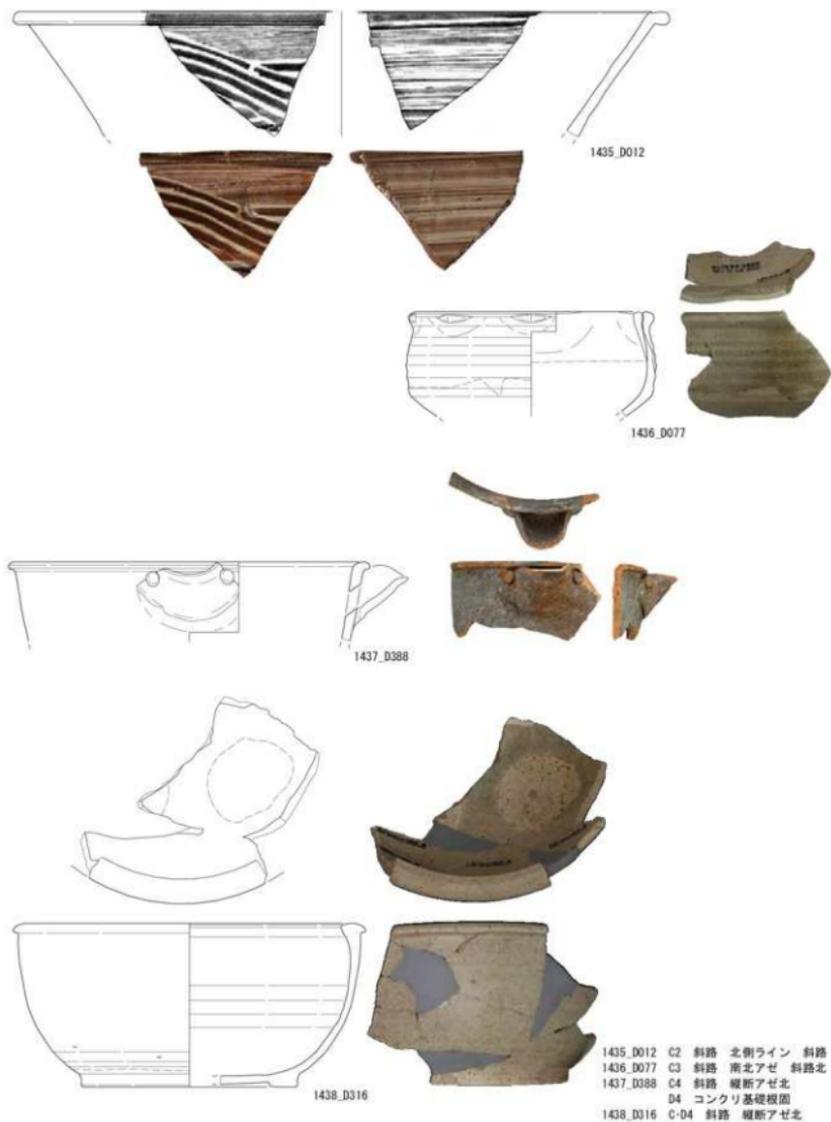
第95図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 56



第96図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 57

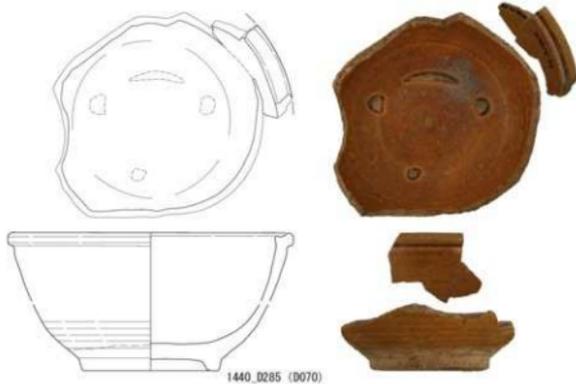
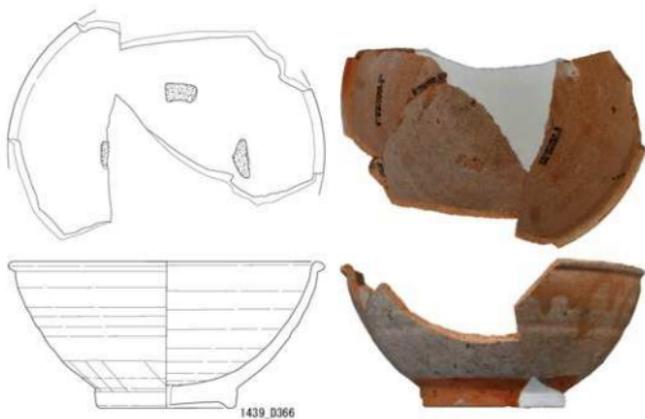


第97図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 58



第98図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 59

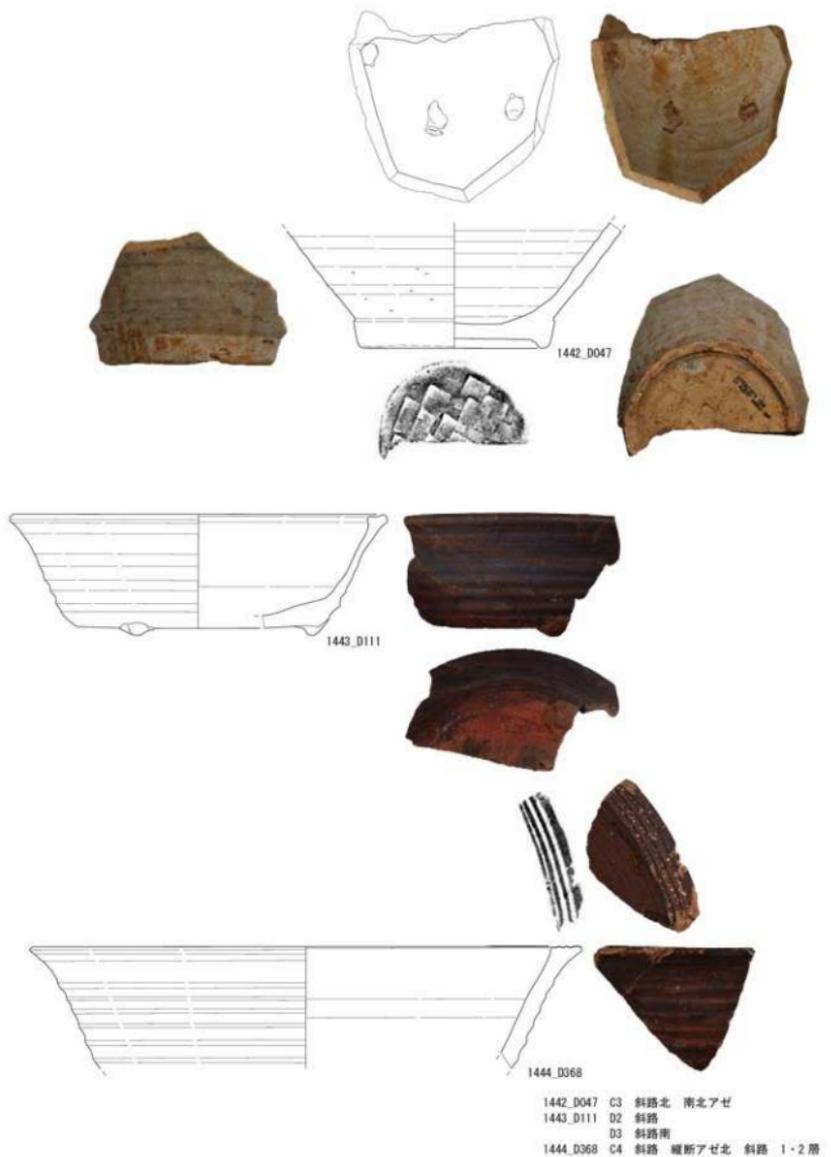
0 (1:3) 15cm



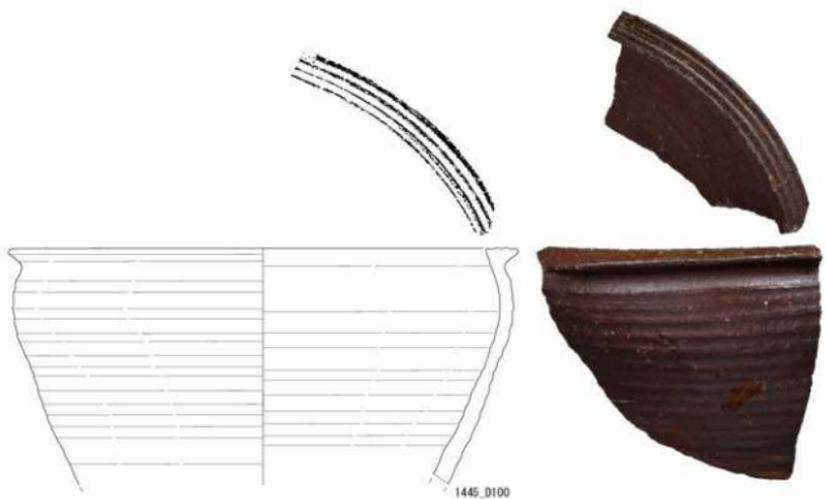
1439_D366 C4 斜路 縦断アゼ
 1440_D285 C2-4 斜路
 C3 斜路 北面法面検出
 1441_D084 C2 斜路 Aトレ

0 (1:3) 15cm

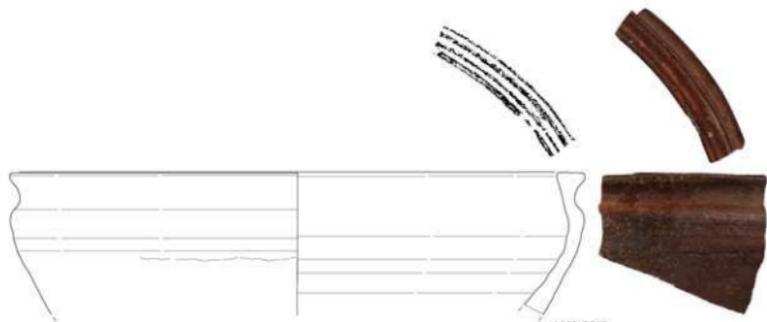
第99図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 60



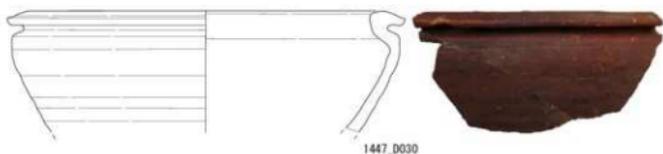
第100図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 61



1445_D100



1446_D018

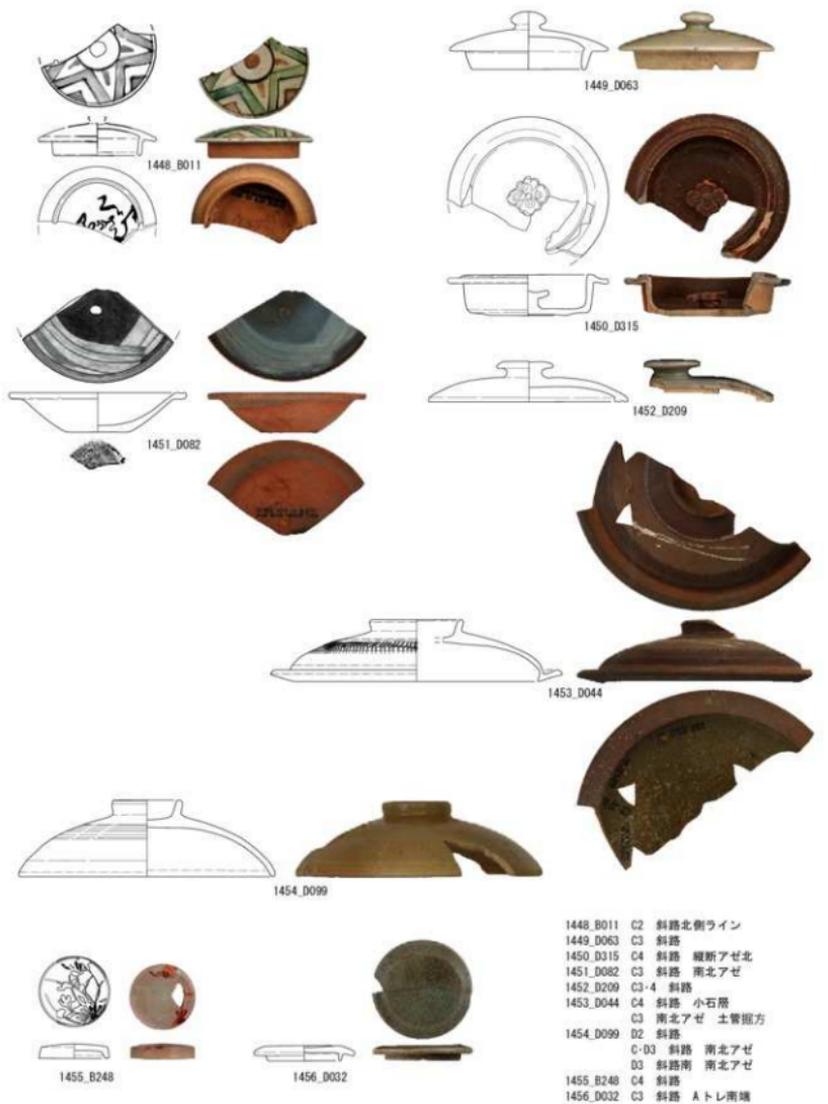


1447_D030

1445_D100 D3 斜路
 1446_D018 C2 斜路 Aトレ北アゼ
 1447_D030 C2 斜路 Aトレ 1層

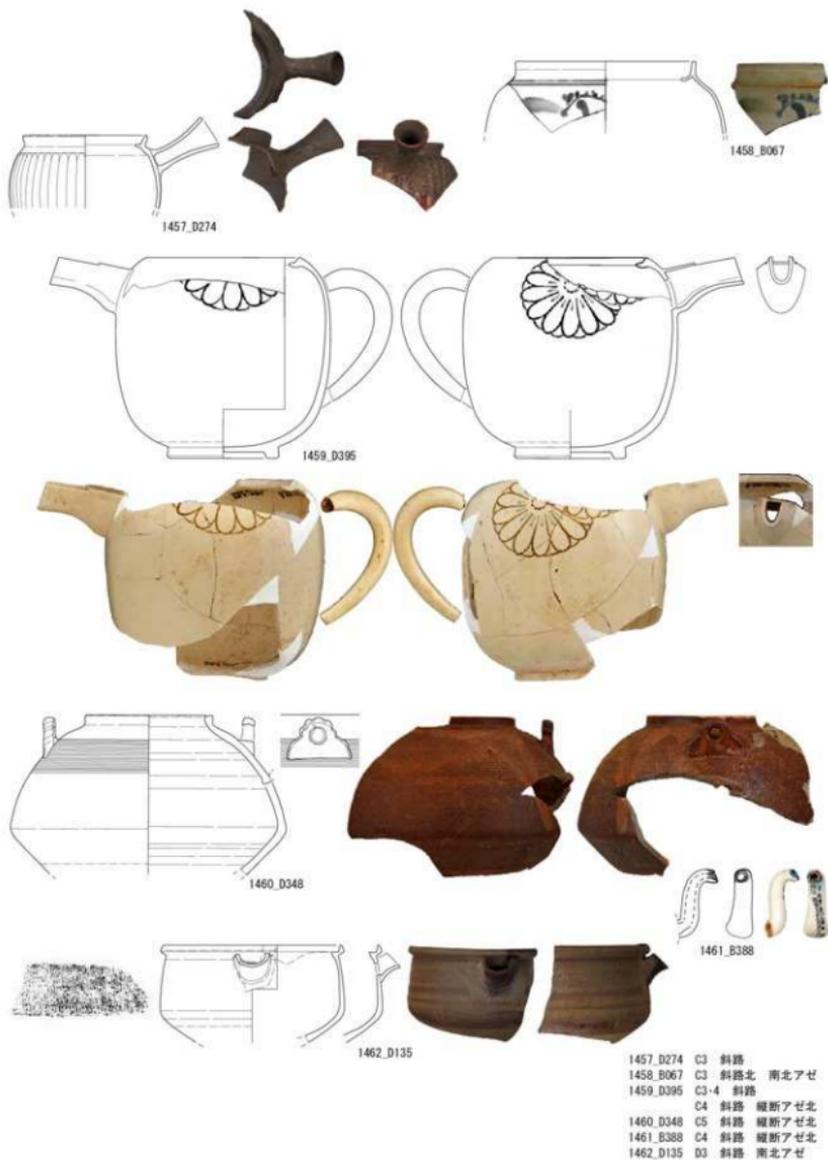
0 (1:3) 15cm

第101図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 62

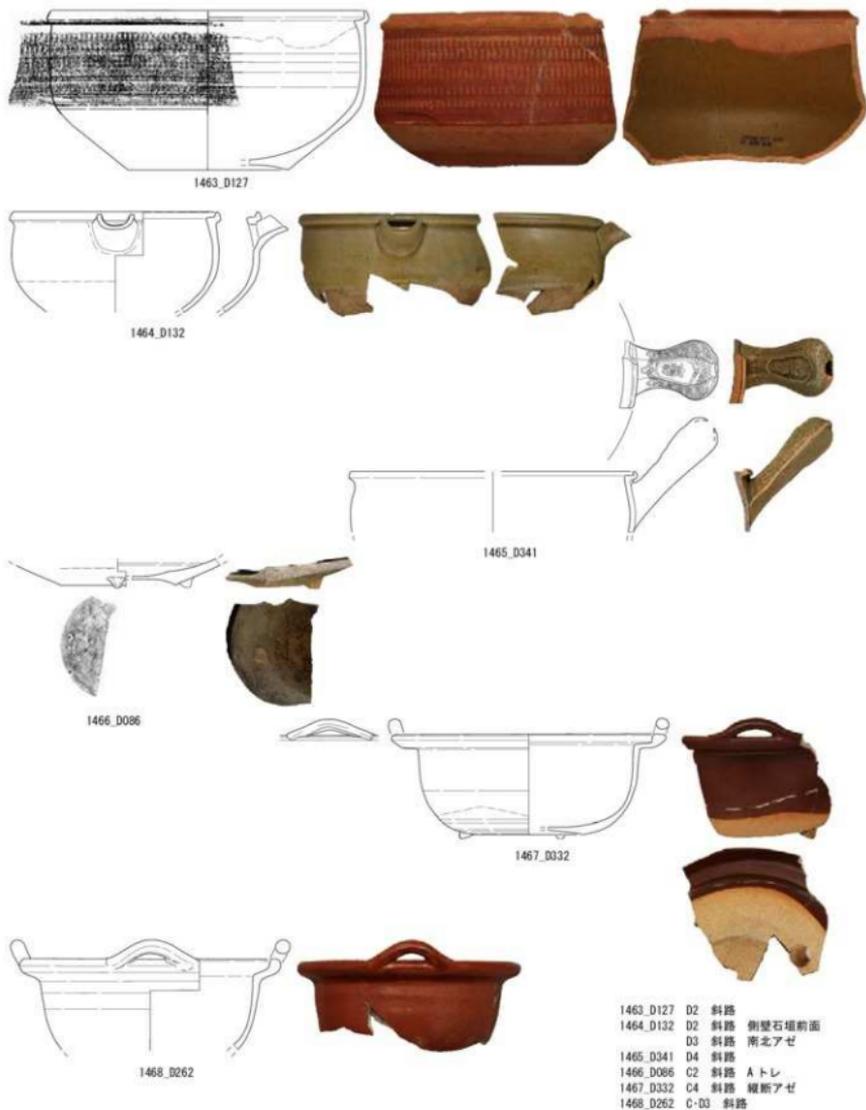


0 (1:3) 15cm

第102図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 63



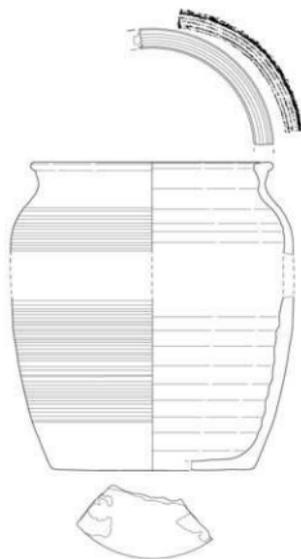
第 103 図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 64



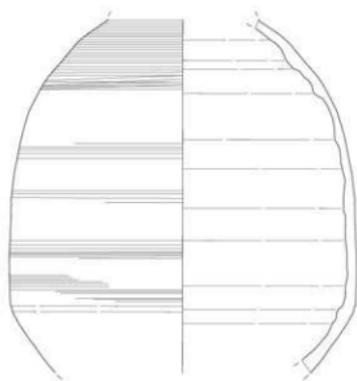
第104図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 65



第105図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 66



1480_D371



1481_D239



1480_D371 C4 斜路 縦断アゼ北
1481_D239 C3-4 斜路

0 (1:3) 15cm

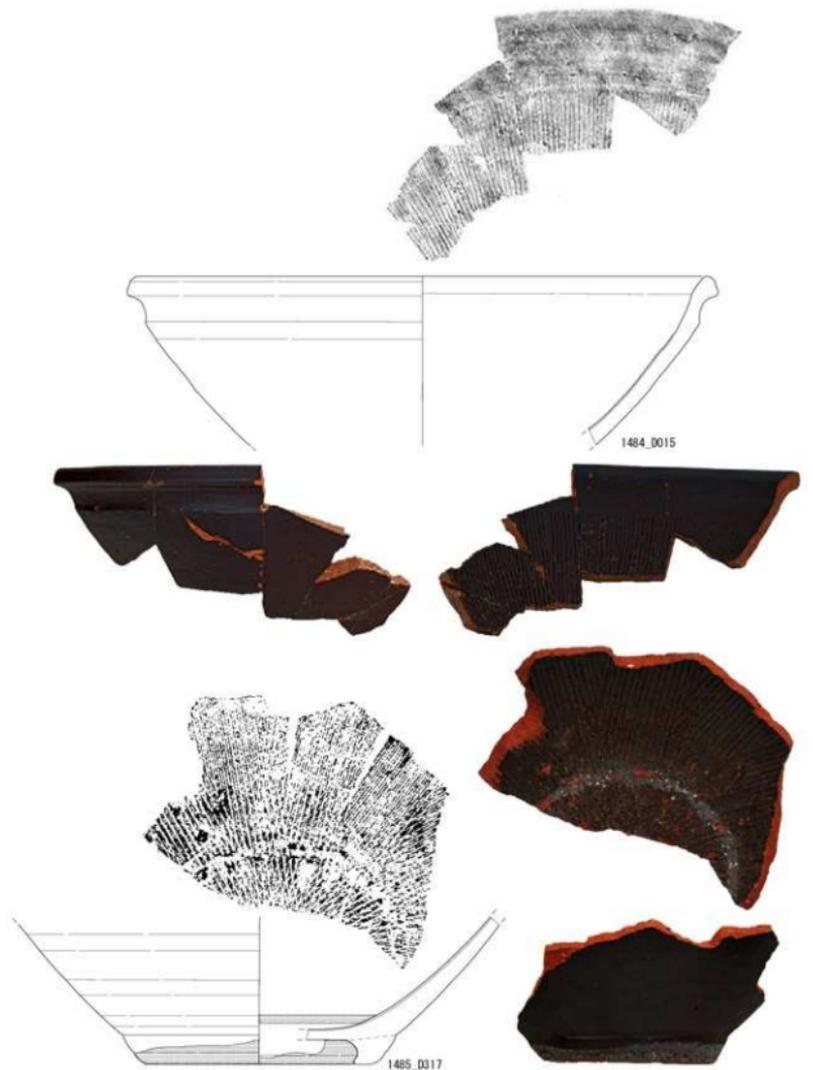
第106図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 67



1482_D017 C3 斜路
 C2 斜路 Aトシ南アゼ 斜路 Aトシ アゼ
 1483_D329 C4-5 斜路 縦断アゼ北

0 (1:3) 15cm

第107図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 68

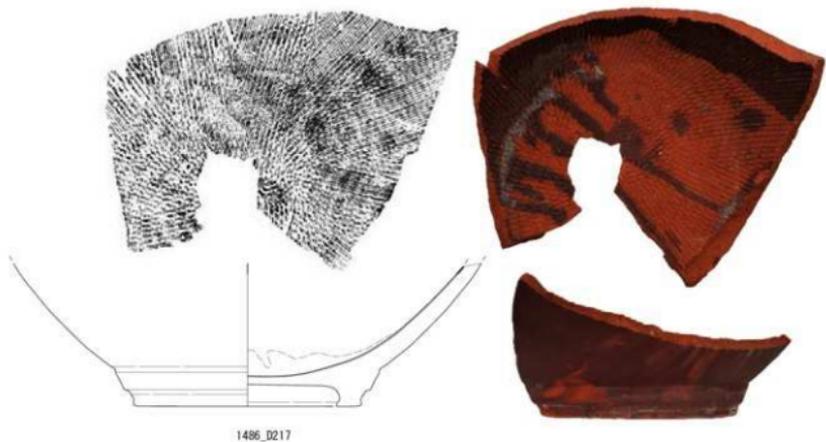


- 1484_D015 C2 斜路 北側ライン 斜路 Aトレ
 C3 斜路 南北アゼ
 D2 石垣第6段表込の黒石

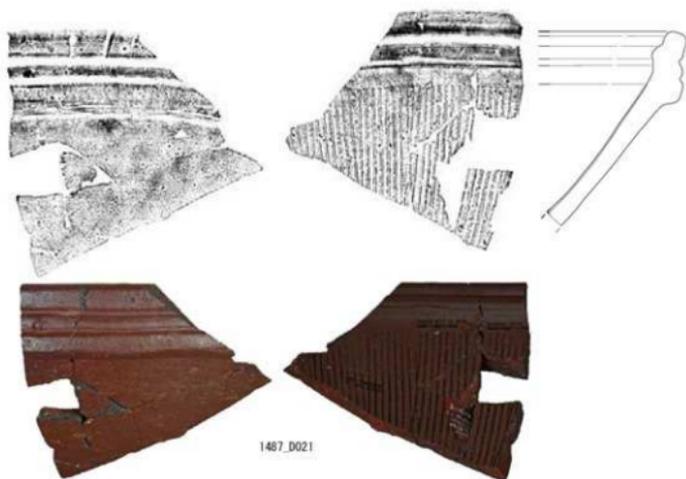
- 1485_D017 C4 斜路 縦断アゼ北

0 1.3 15cm

第108図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 69



1486_D217



1487_D021

1486_D217 C4 斜路
1487_D021 C2 斜路 北側ライン

0 (1:3) 15cm

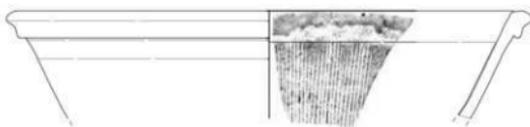
第109図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 70



1488_D011

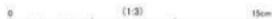


1489_D382

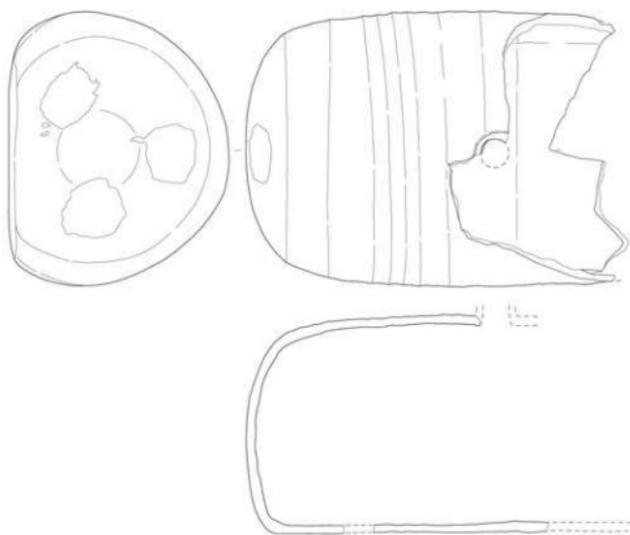


1490_D024

- 1488_D011 C2 斜路 北側ライン
 1489_D382 C4 斜路内裡乱し
 1490_D024 C3 斜路 南北アゼ

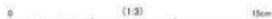


第110図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 71

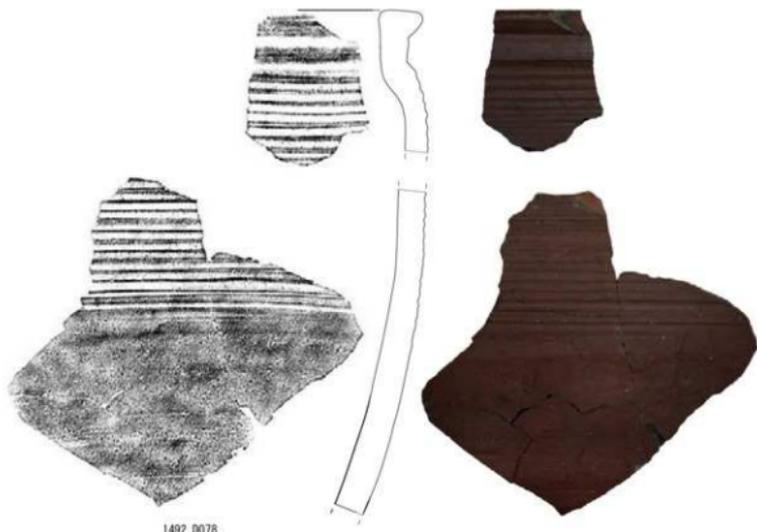


1491_D211 C3 斜路

1491_D211



第 111 图 鼠多門調查区出土遺物 陶磁器・土器 72



1492_D078



1493_D033



1494_D097

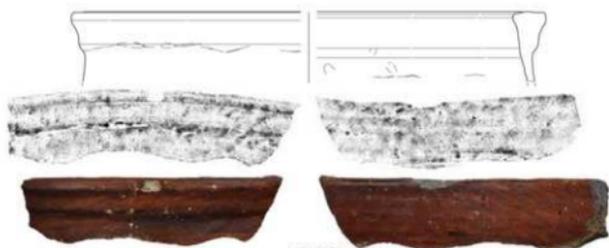
1492_D078 C3 斜路 南北アゼ 土管掘方
 C2 土管掘方
 D3 斜路 南北アゼ 南アゼ
 1493_D033 C3 斜路
 1494_D097 D3 斜路 南北アゼ

1492_D078・1493_D033 (S=1/3)
 1494_D097 (S=1/6)

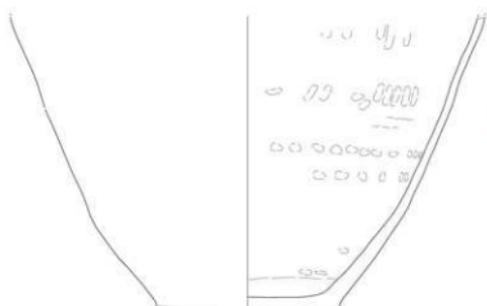
0 (1:3) 15cm

0 (1:6) 30cm

第 112 図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 73



1495_D224



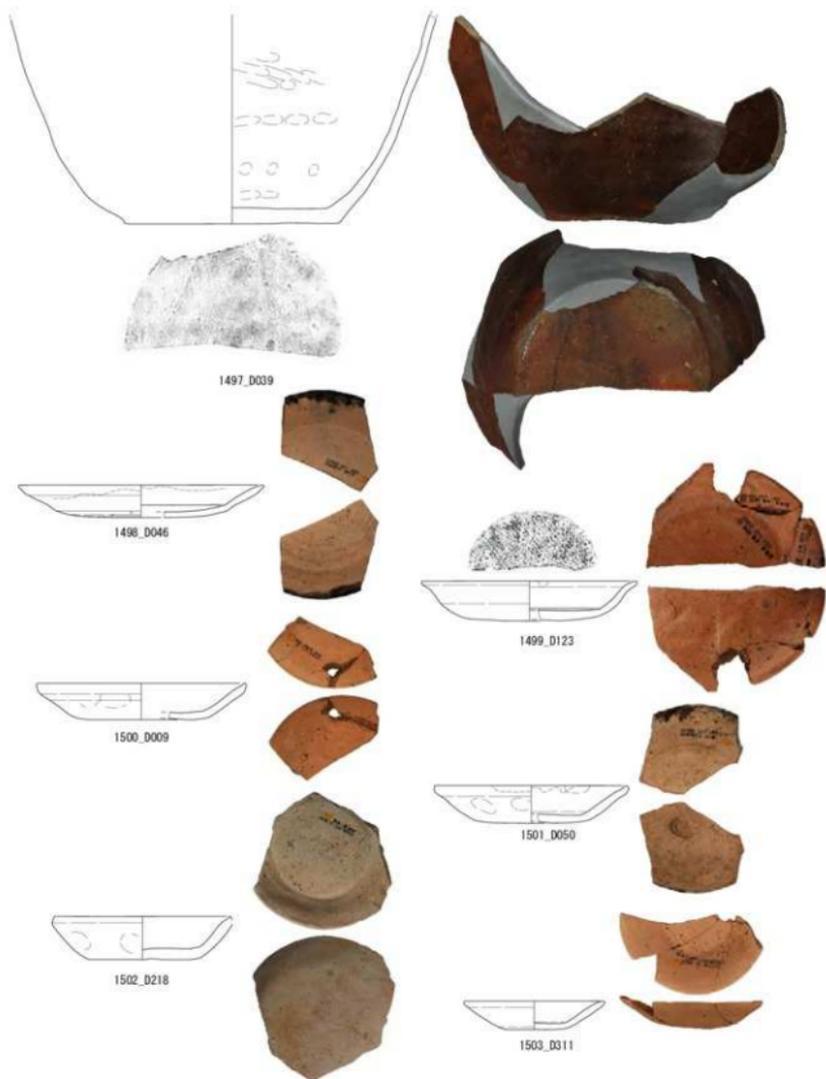
1496_D043



1495_D224 C3 斜路
 1496_D043 C3 斜路 南北アゼ 斜路
 D0 斜路 南法面 斜路

0 (1.6) 30cm

第 113 図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 74



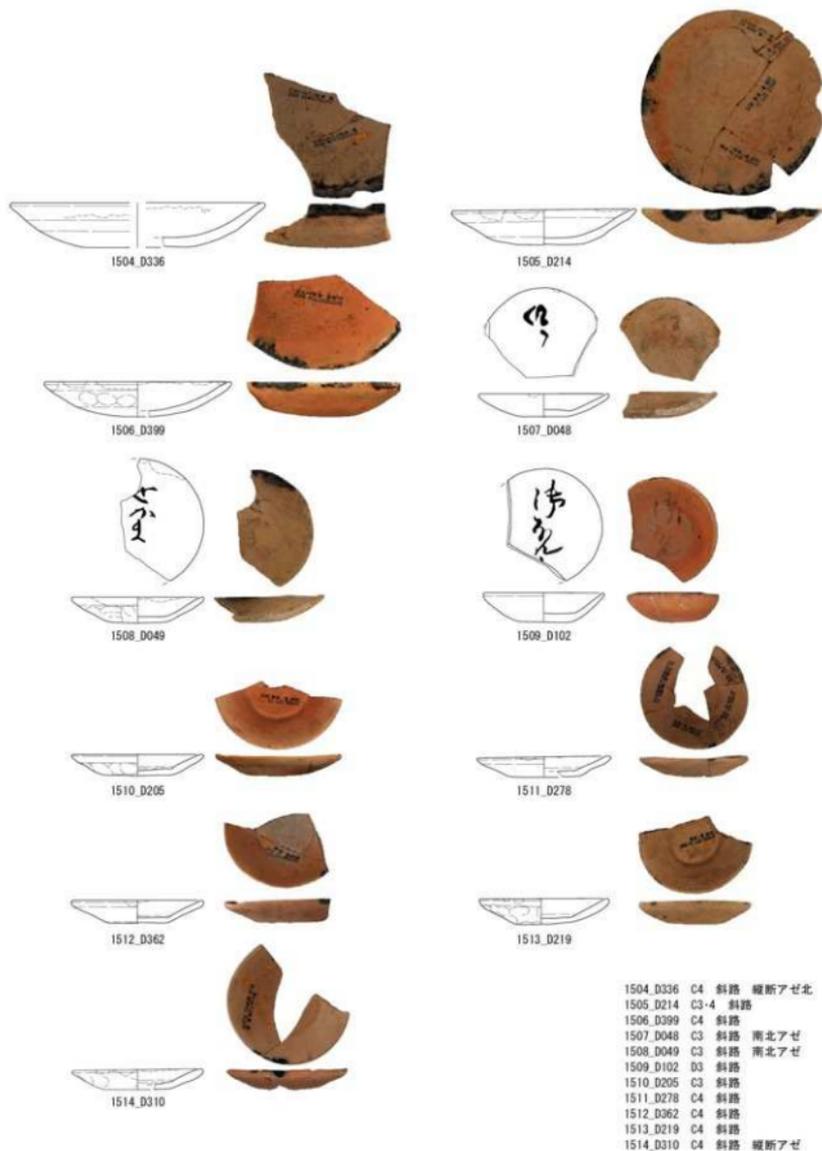
- 1497_D039 C3 斜路 Aトレ 東端
 1498_D046 C3 斜路 南北アゼ
 1499_D123 D3 斜路
 1500_D009 C2 斜路
 1501_D050 C3 斜路 南北アゼ
 1502_D218 C4 斜路
 1503_D311 C4 斜路 縦断アゼ南

1497_D009 (S=1/6)

0 (1/6) 30cm

0 (1/3) 15cm

第 114 図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 75



第 115 図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 76



- | | | | | | | |
|-----------|----|----|-----------|----|----|-------|
| 1515_D124 | D3 | 斜路 | 1521_D326 | C4 | 斜路 | 縦断アゼ |
| 1516_D142 | D3 | 斜路 | 1522_D085 | C2 | 斜路 | Aトレ |
| 1517_D150 | D3 | 斜路 | 1523_D057 | C2 | 斜路 | |
| 1518_D013 | C2 | 斜路 | 1524_D147 | D2 | 斜路 | |
| 1519_D009 | C4 | 斜路 | 1525_D092 | D2 | 斜路 | |
| 1520_D019 | C4 | 斜路 | 1526_D020 | C4 | 斜路 | 縦断アゼ北 |

0 (1:3) 15cm

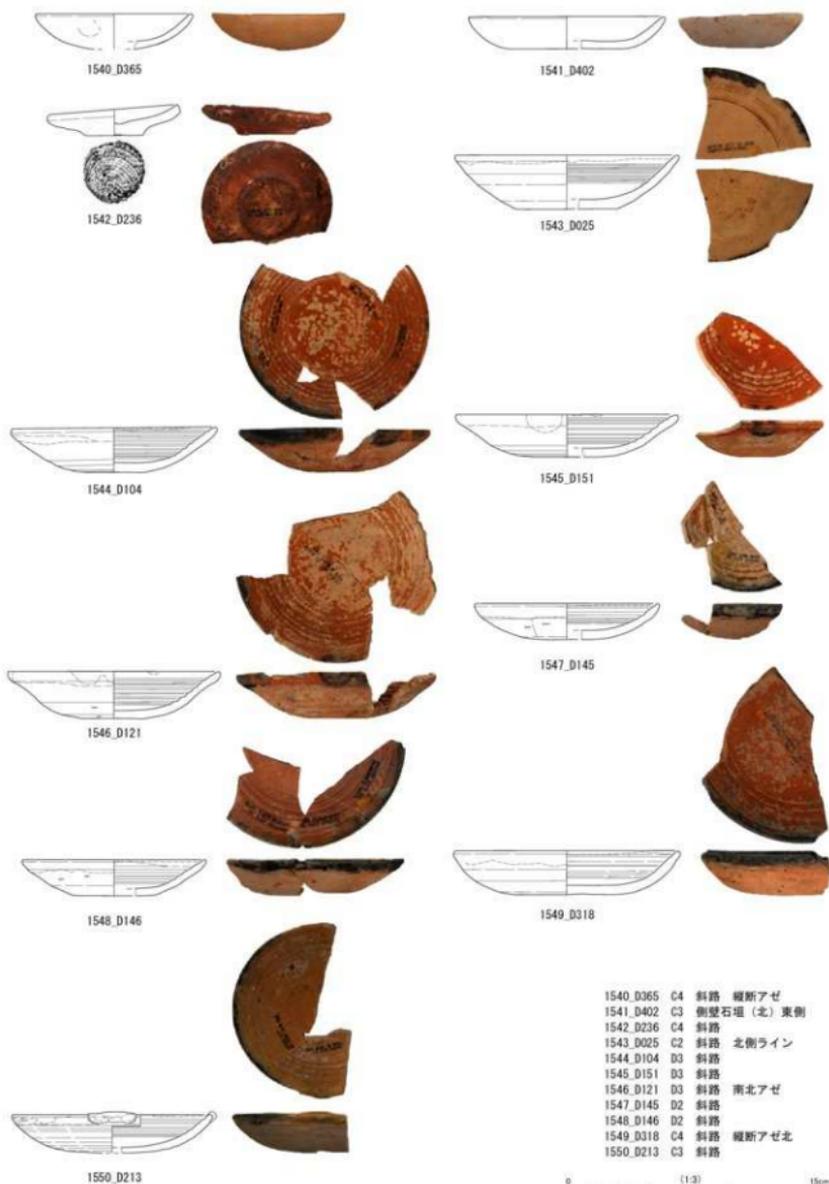
第116図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 77



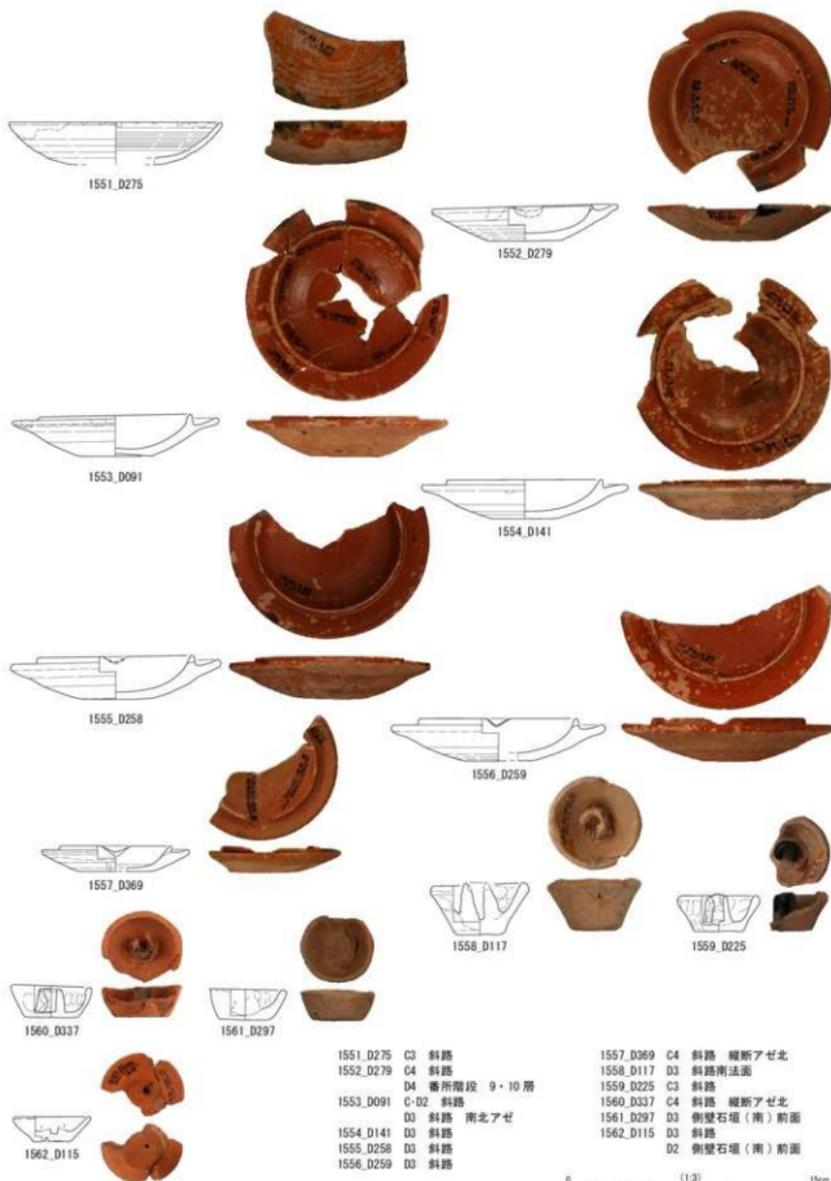
- | | | | | | |
|-----------|----|-----------|-----------|------|-----------|
| 1527_D120 | D3 | 斜路 | 1534_D014 | C2-3 | 斜路 |
| 1528_D093 | D2 | 斜路 | 1535_D349 | C5 | 斜路 縦断アゼ北 |
| 1529_D370 | C4 | 縦断アゼ北 | 1536_D040 | C3 | 斜路 Aトレ 東端 |
| 1530_D261 | D3 | 斜路 | 1537_D041 | C3 | 斜路 Aトレ 東端 |
| 1531_D363 | C4 | 縦断アゼ | 1538_D233 | C3 | 斜路 |
| 1532_D103 | D3 | 南法面 斜路 | 1539_D234 | C3 | 斜路 |
| 1533_D071 | C3 | 斜路 Aトレ 東端 | | | |

0 (1:3) 15cm

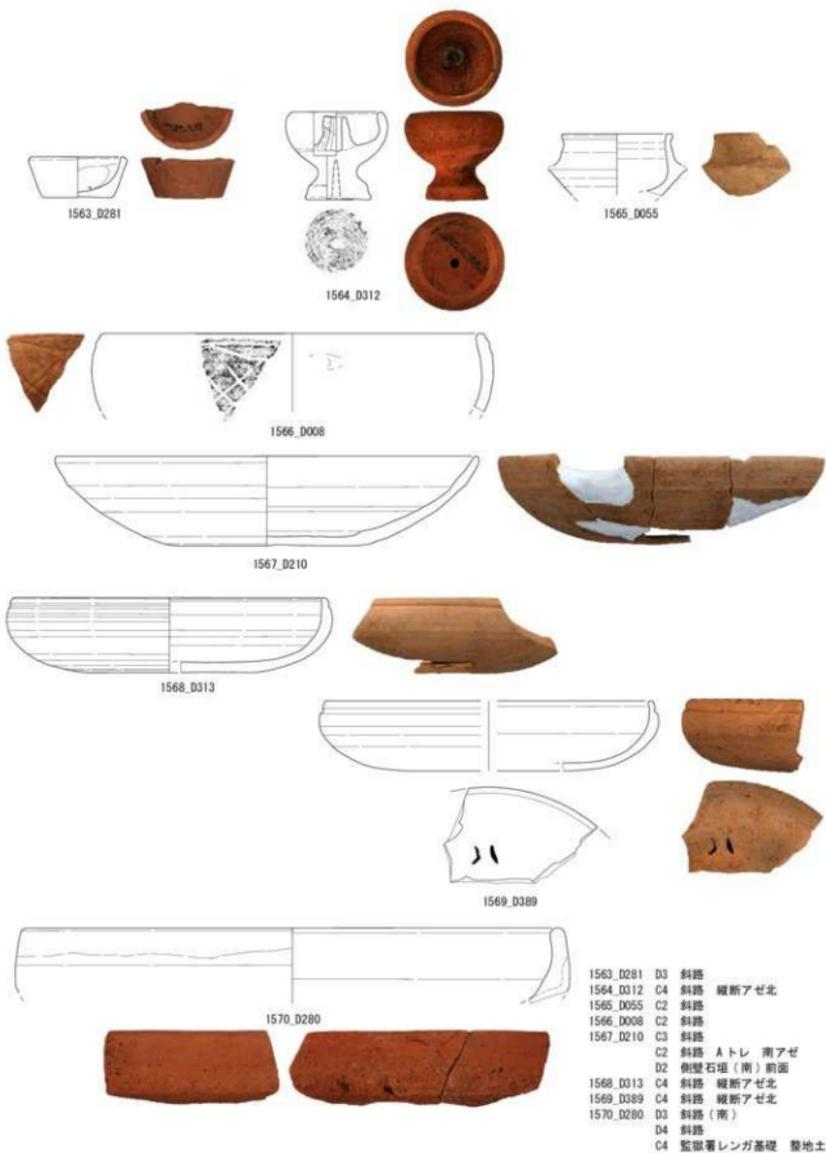
第 117 図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 78



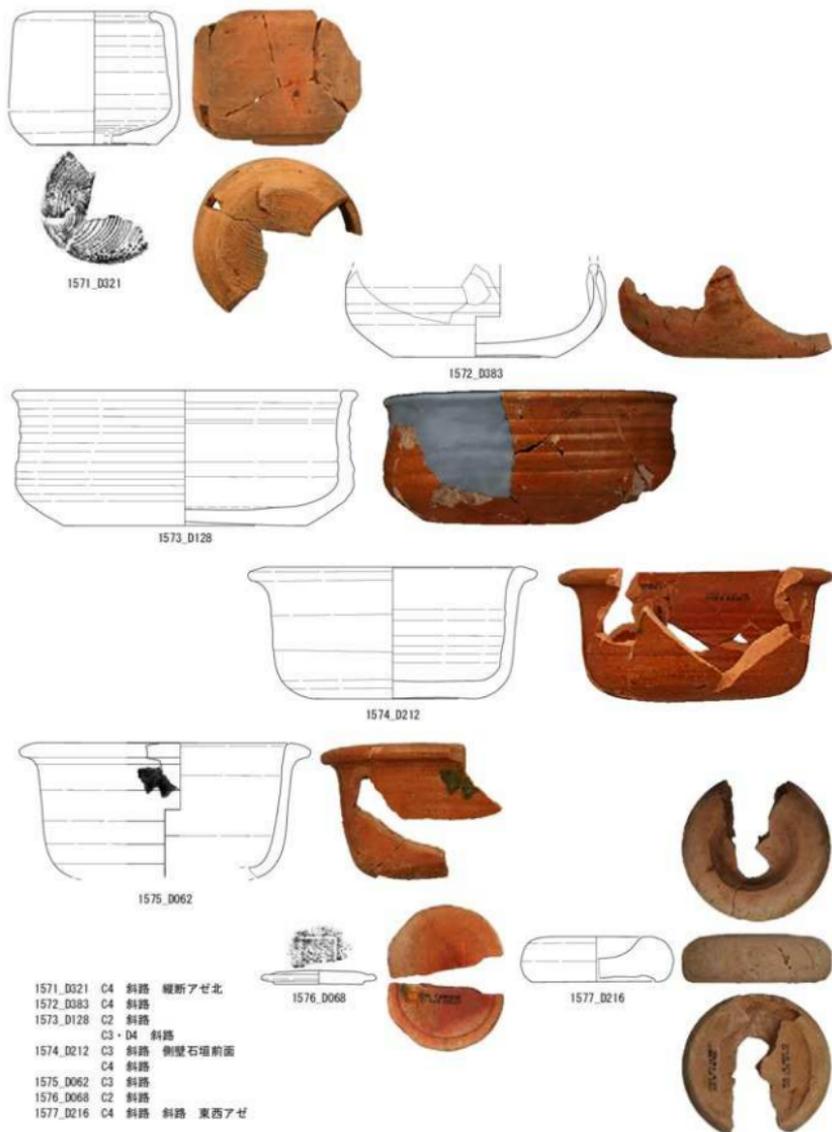
第118図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 79



第 119 図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 80

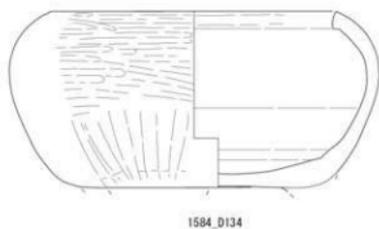
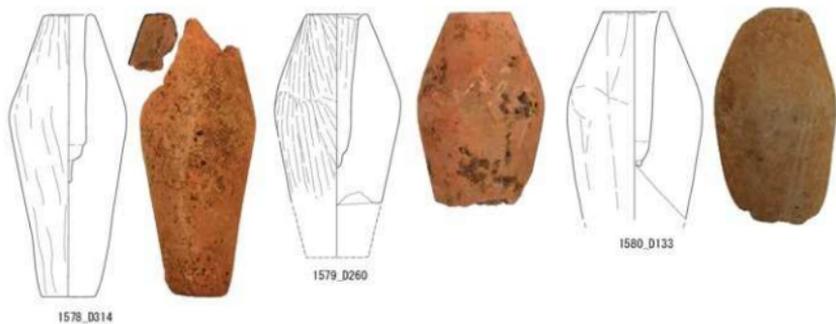


第 120 図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 81



0 (1:3) 15cm

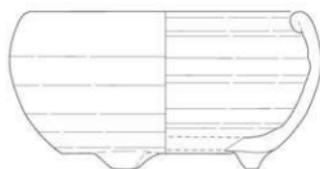
第 121 図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 82



- 1578_D0314 C4 斜路 縦断アゼ北
 1579_D260 D3 斜路
 1580_D133 D3 斜路 南北アゼ
 1581_D037 C3 斜路 北側法面横出
 1582_D107 D3 側壁石壇(南)前面
 1583_D242 C3 斜路
 1584_D134 C2 斜路
 D3 斜路 南北アゼ

0 (1:3) 15cm

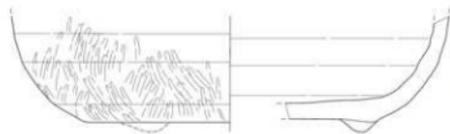
第 122 図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 83



1585_D023



1586_D118



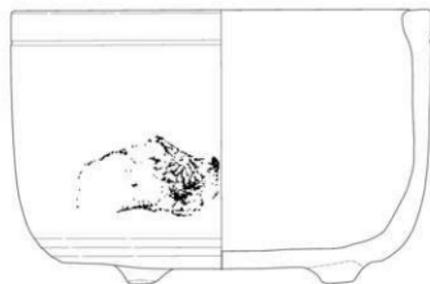
1587_D072



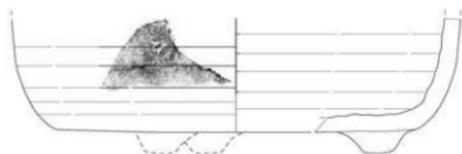
- 1585_D023 D2 斜路
 C2 斜路 Aトレ 北アゼ
 C3 斜路 南北アゼ 斜路北
 D3 側壁石壇(南)前面
 1586_D118 D2-3 斜路
 C2 斜路 Aトレ 南アゼ
 1587_D072 C3 側壁石壇(北)前面 斜路 北側法面横出

0 (1:3) 15cm

第123図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 84



1588_D223



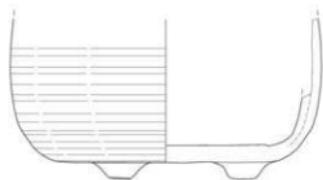
1589_D384



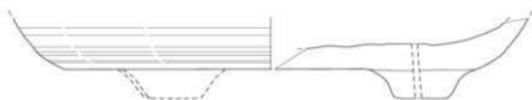
1588_D223 C3 斜路 南北了ぜ
 C4 斜路
 1589_D384 C4 斜路 縦断了ぜ

0 (1:3) 15cm

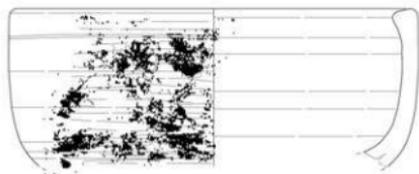
第 124 図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 85



1590_D378



1591_D385



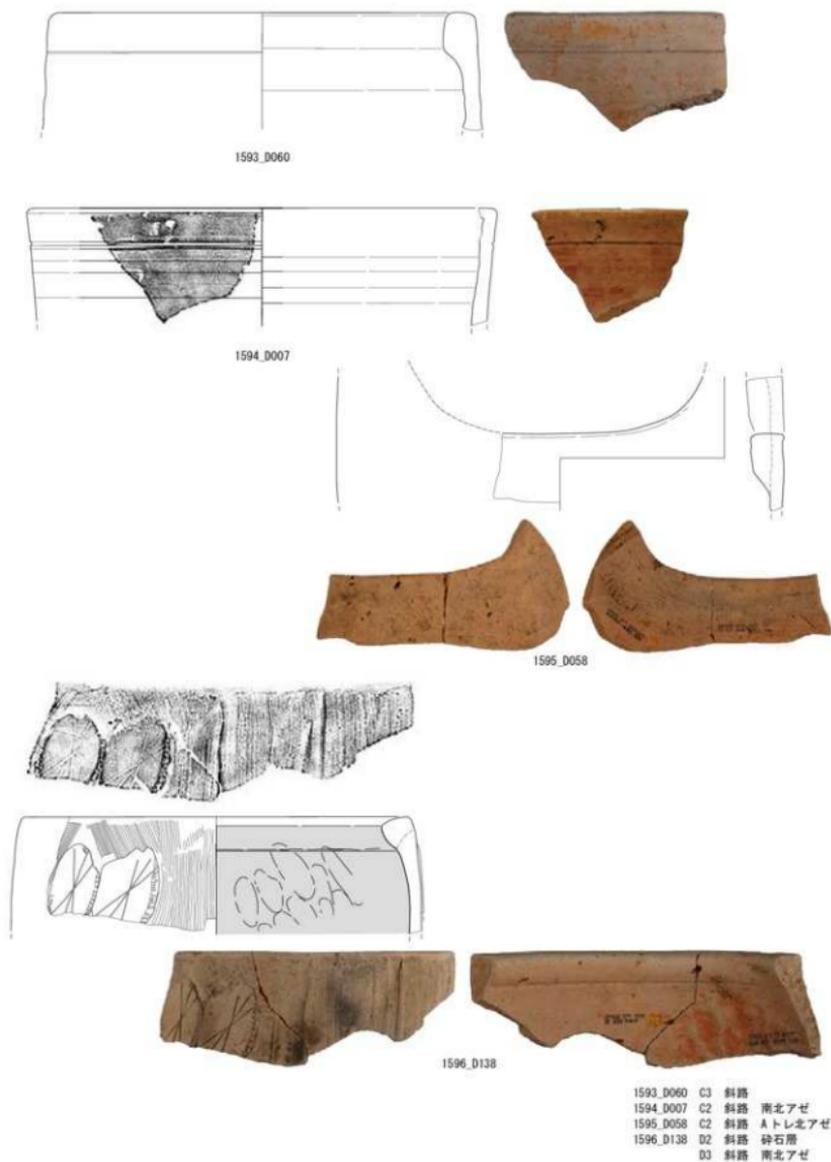
1592_D277



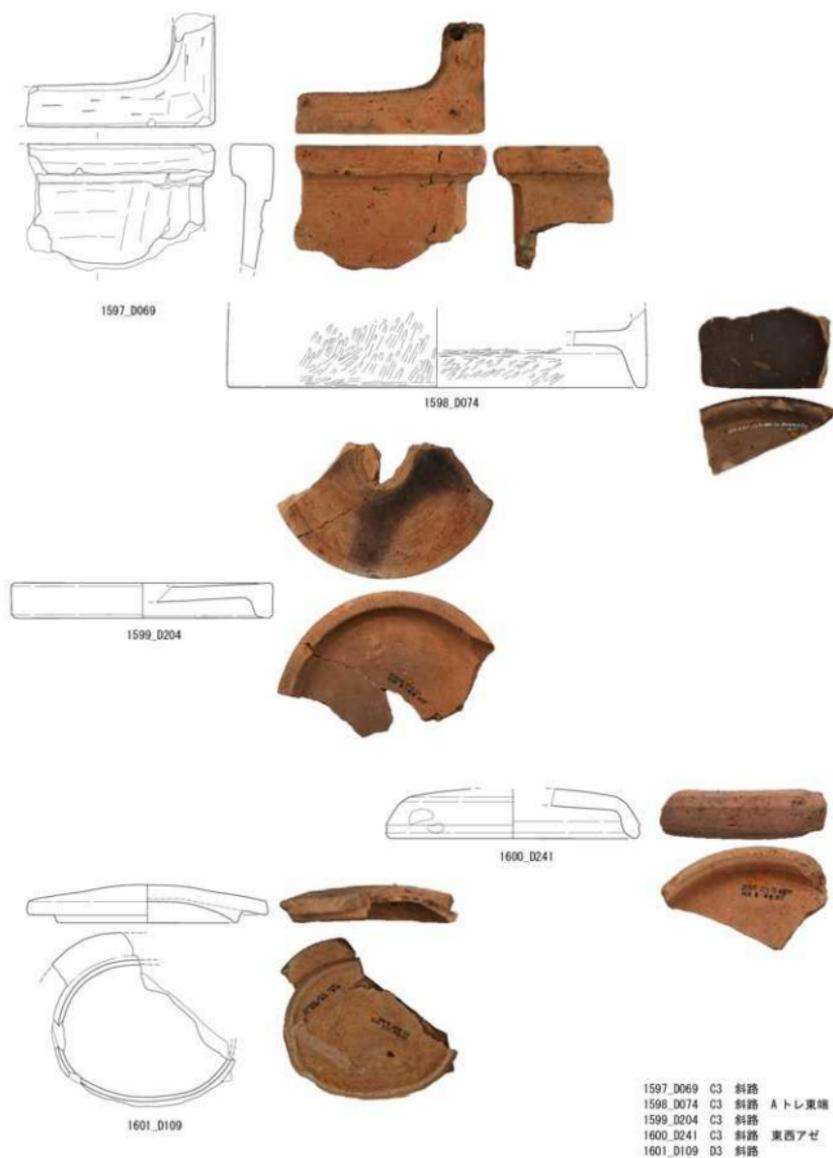
1590_D378 C4 斜踏 縦断アゼ北
 1591_D385 C4 斜踏 縦断アゼ北
 D4 斜踏 縦断アゼ
 1592_D277 C4 斜踏

0 (1:3) 15cm

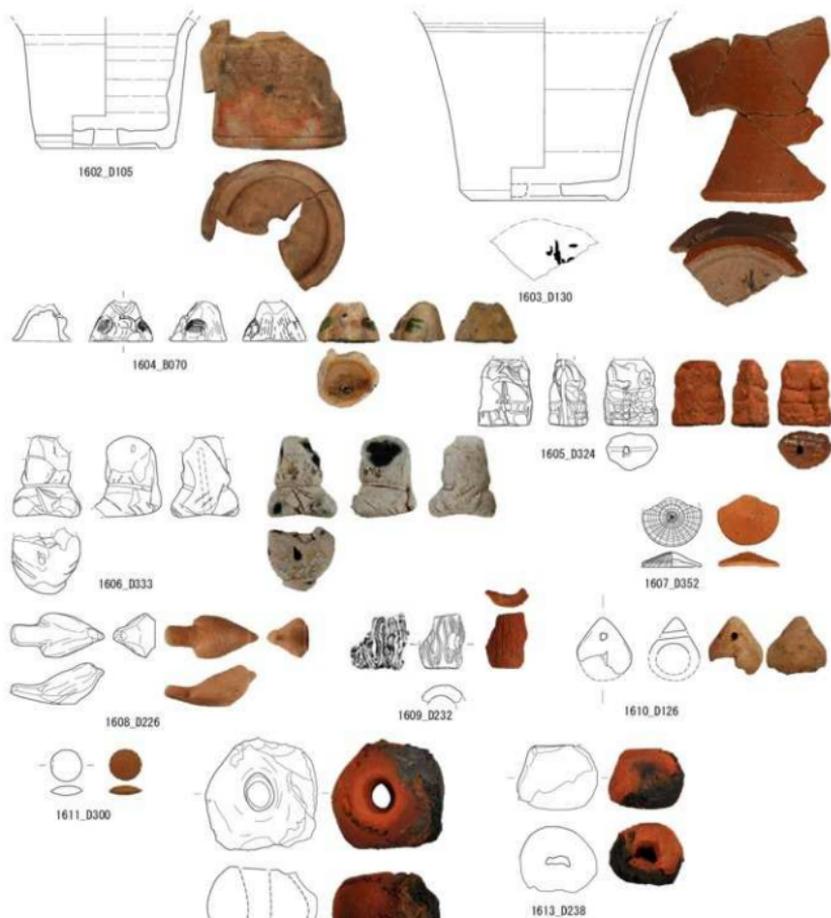
第 125 図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 86



第 126 図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 87



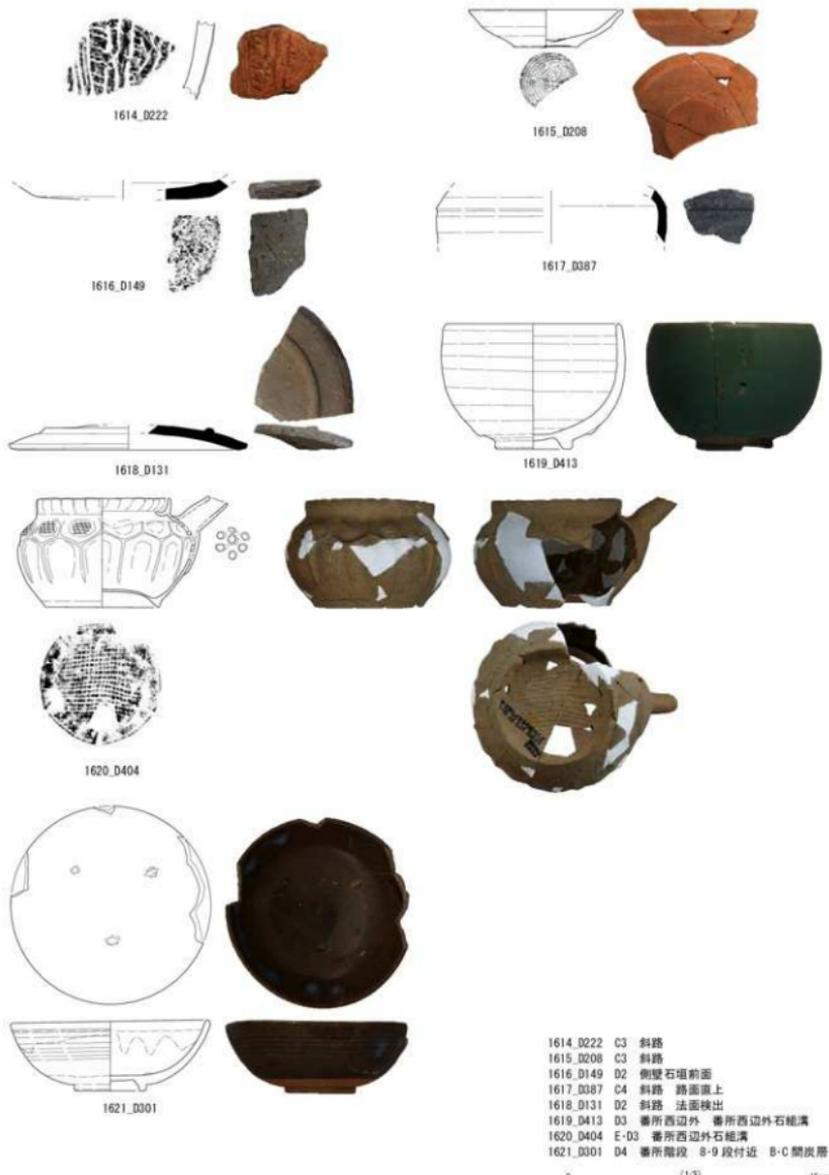
第 127 図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 88



- 1602_D105 C2 側壁石壇前面
C-D3 斜路
- 1603_D130 D2 斜路南側ライン 斜路南法面枝出
C3 斜路 Aトレ以北南北アゼ 1層
D3 斜路
- 1604_B070 C2 斜路 Aトレ
- 1605_D324 C4 斜路 縦断アゼ
- 1606_D333 C4 斜路 縦断アゼ北
- 1607_D352 C5 斜路
- 1608_D226 C3 斜路
- 1609_D232 C4 斜路 東西アゼ
- 1610_D126 D3 側壁石壇(南) 前面
- 1611_D300 C4 斜路
- 1612_D325 C4 斜路 縦断アゼ
- 1613_D238 C4 斜路

0 (1:3) 15cm

第128図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 89



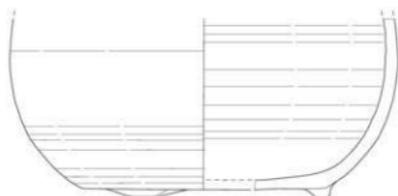
第 129 図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 90



第 130 図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 91



1629_D302 (D401)



1630_D377



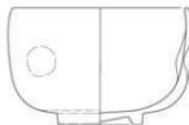
1631_D307



1632_D360



1633_D093



1634_D306



- 1629_D302 D4 香所階段 8-9段 B層-B-C間炭層 8-9段付近B層 SB1間
 ・炭層の上の層
 D3 香所西辺外 近代整地土
 E3 SB01 東側掘方東壁上面 近代整地土 香所西辺外 石組溝
 1630_D377 D4 香所階段 8-9段 B層-C層 香所階段 南北アゼ B層
 香所階段西 石敷直上層
 D3 香所階段 B層
 D3・4 香所階段

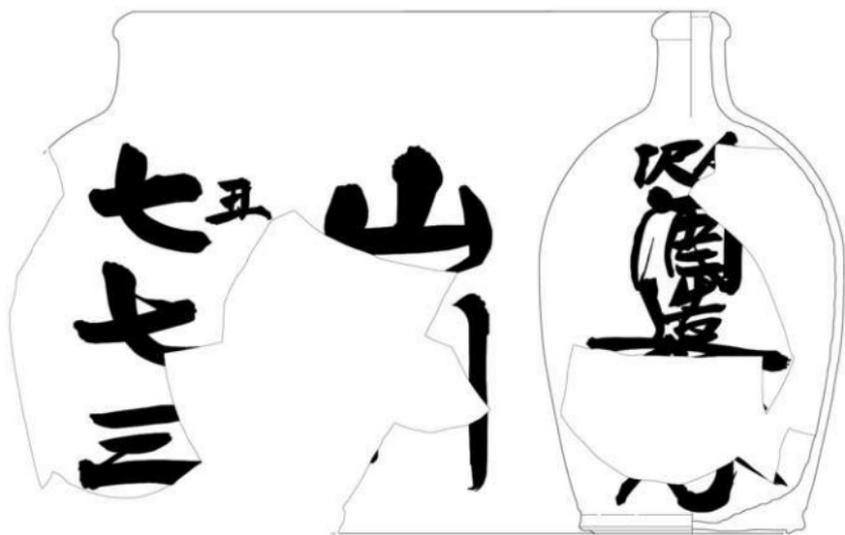
- 1631_D307 D4 香所階段 8-9段 B-C間炭層
 1632_D360 D3・4 香所階段
 1633_D093 D4 香所階段 SB1間 B層-炭層の上の層
 1634_D306 D4 香所階段 SB1間 B層-炭層の上の層
 D3 近代建物東側掘方壁面



第131図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 92



第 132 図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 93



1647_B408

1647_B408 槽台石壇上面 監獄署側内側 槽台石壇上面

0 (1:3) 15cm

第 133 図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 94



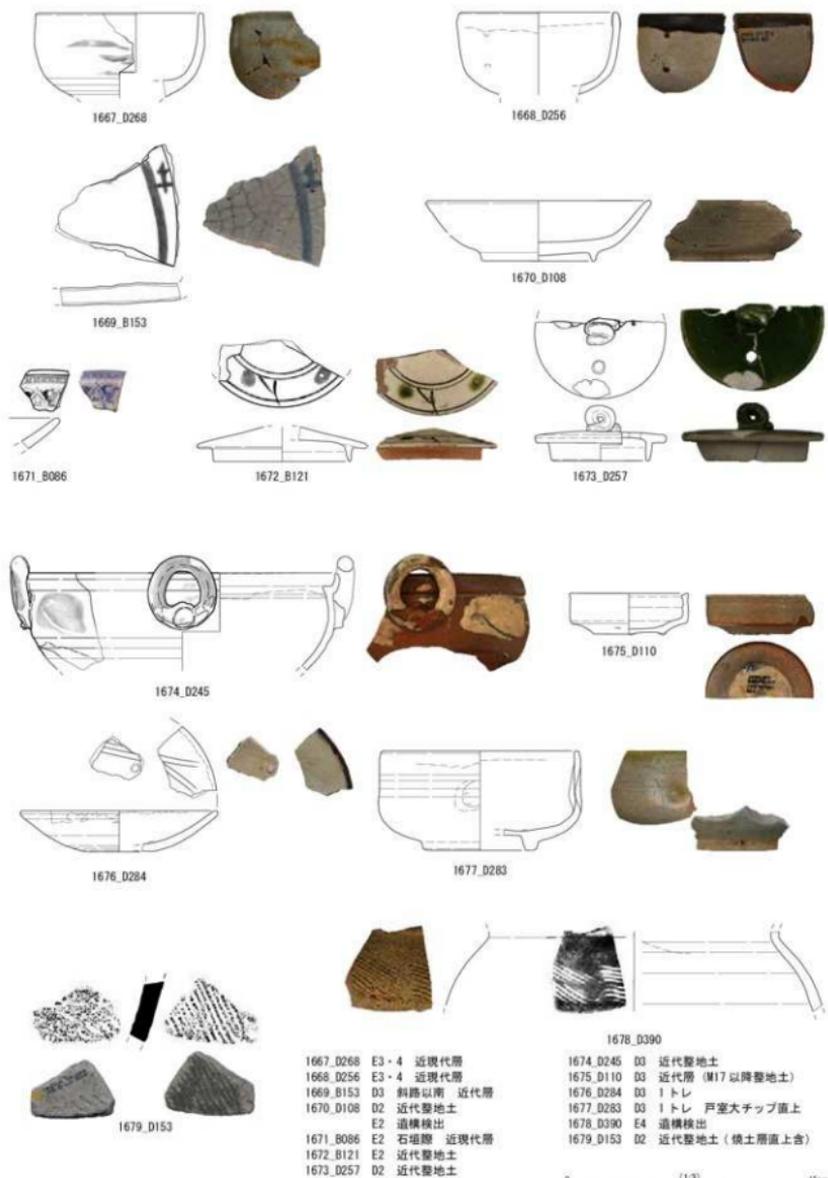
第 134 図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 95



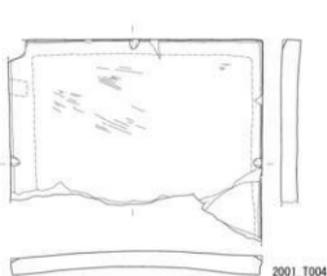
- | | | | |
|-----------|----|-------|-----|
| 1658_D053 | B2 | 1トレ | 現代層 |
| 1659_B001 | B2 | 1トレ | 現代層 |
| 1660_B002 | B2 | 1トレ | 現代層 |
| 1661_D002 | B2 | 1トレ | 現代層 |
| 1662_D006 | B3 | 現代層 | |
| 1663_D005 | B3 | 近代豊地土 | |
| 1664_D073 | B3 | 近代豊地土 | |
| 1665_D359 | C6 | 近代層 | |
| 1666_D358 | C5 | 擾乱 | |

0 (1:3) 15cm

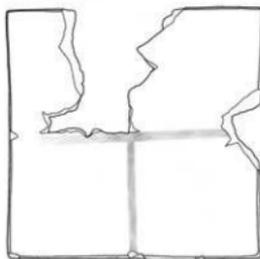
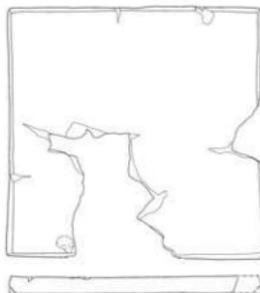
第135図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 96



第 136 図 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器 97



2001_T004



2002_T005

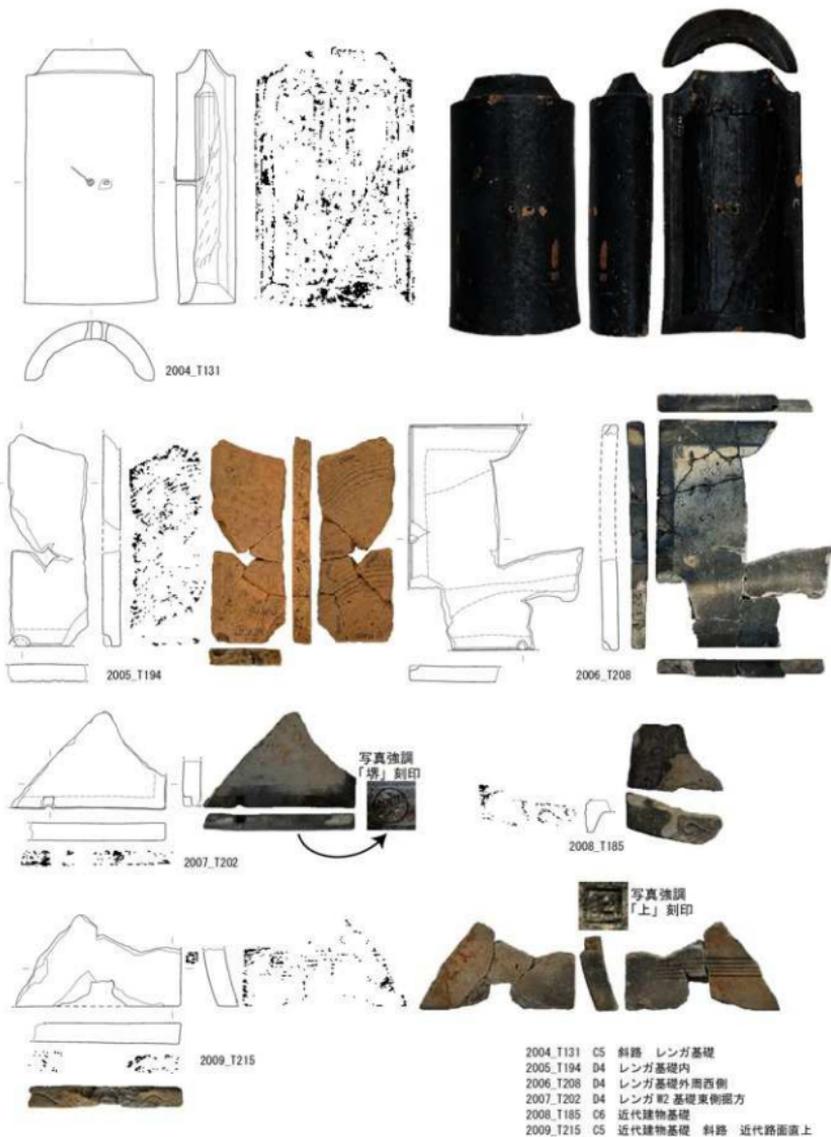


2003_T168

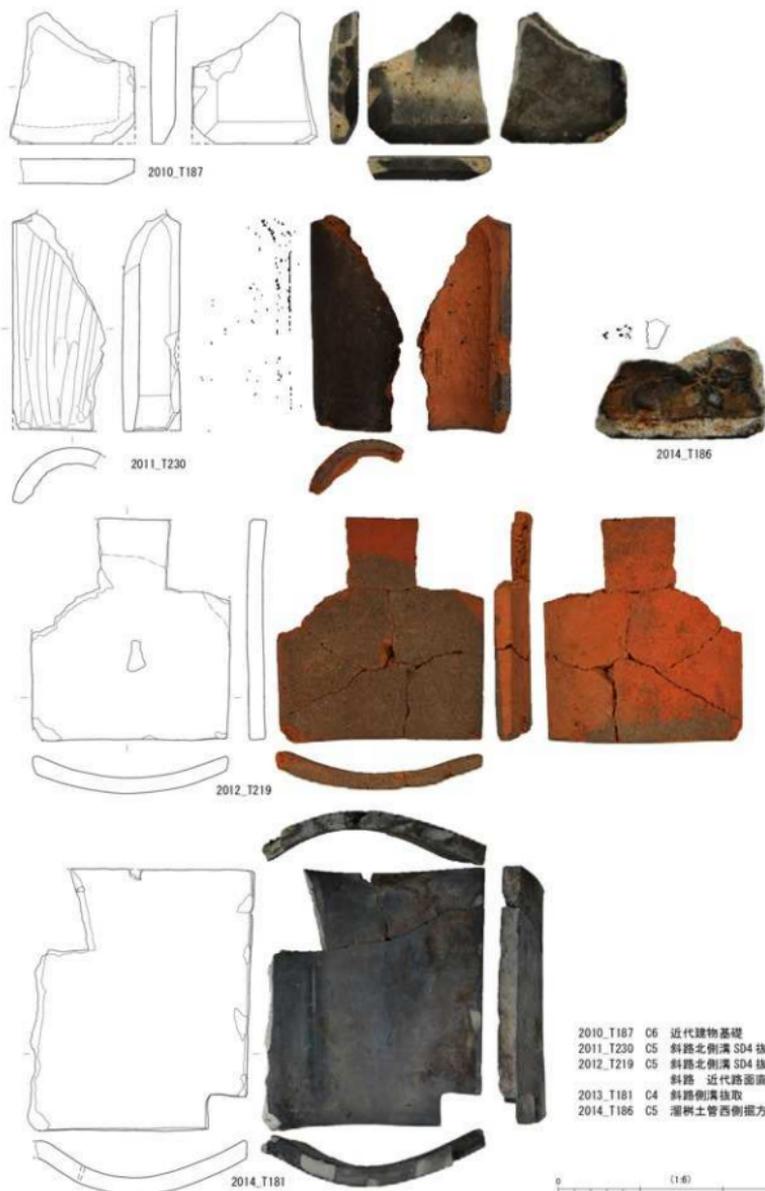
2001_T004 B2 馬糞庫内 近代整地土
 2002_T005 B2 馬糞庫内 近代整地土
 2003_T168 C4 監獄署レンガ基礎 整地土

0 (1/6) 30cm

第137図 鼠多門調査区出土遺物 瓦1

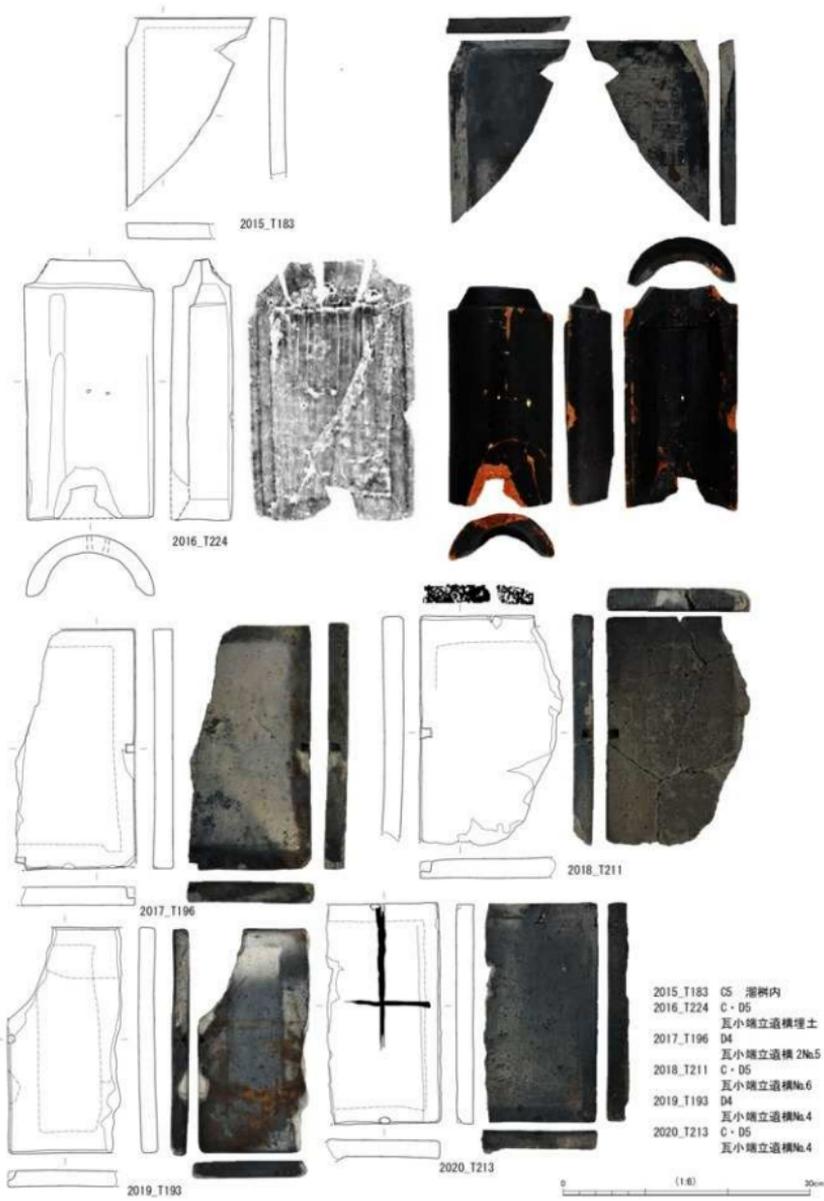


第 138 図 鼠多門調査区出土遺物 瓦 2



2010_T187 C6 近代建物基礎
 2011_T230 C5 斜路北側溝 S04 採取埋土
 2012_T219 C5 斜路北側溝 S04 採取埋土
 斜路 近代路面遺土
 2013_T181 C4 斜路側溝採取
 2014_T186 C5 瀬洲土管西側掘方

第 139 図 鼠多門調査区出土遺物 瓦 3

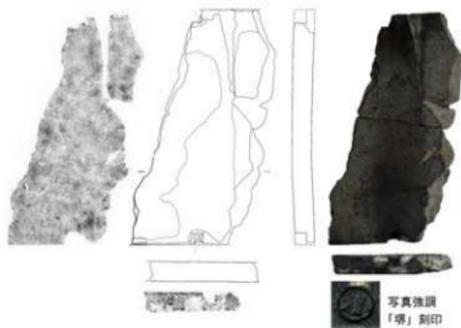


- 2015_T183 C5 屋根内
- 2016_T224 C・D5 瓦小端立遺構埋土
- 2017_T196 D4 瓦小端立遺構 2No.5
- 2018_T211 C・D5 瓦小端立遺構No.6
- 2019_T193 D4 瓦小端立遺構No.4
- 2020_T213 C・D5 瓦小端立遺構No.4

第 140 図 鼠多門調査区出土遺物 瓦 4



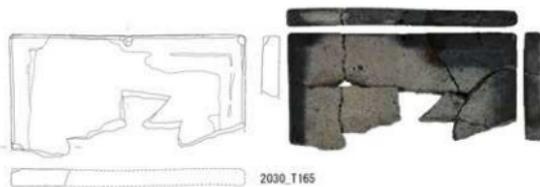
第141図 鼠多門調査区出土遺物 瓦5



2028_T119



2029_T159



2030_T165

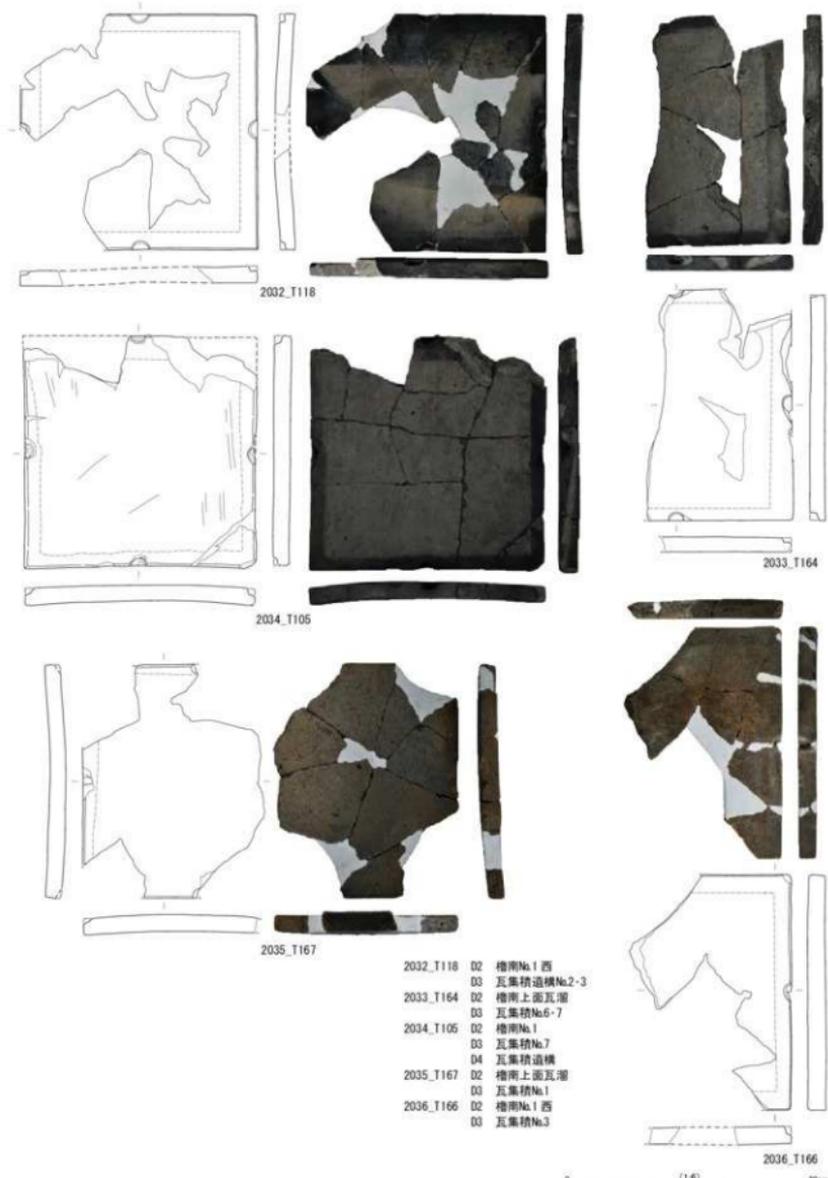


2031_T112

2028_T119 D3 瓦集積遺構No.5
 2029_T159 D3 瓦集積遺構No.2-6・7
 2030_T165 D3 瓦集積遺構No.2
 2031_T112 D2 権用No.1 ビット(東)

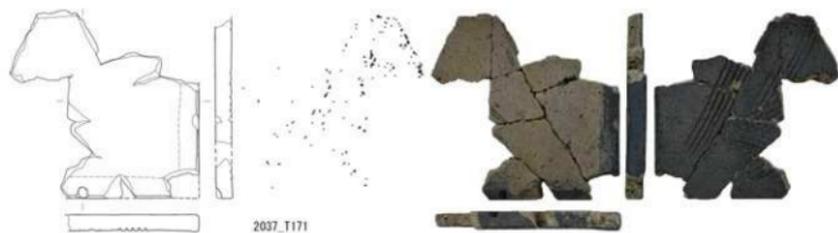
0 (1.6) 30cm

第142図 鼠多門調査区出土遺物 瓦6

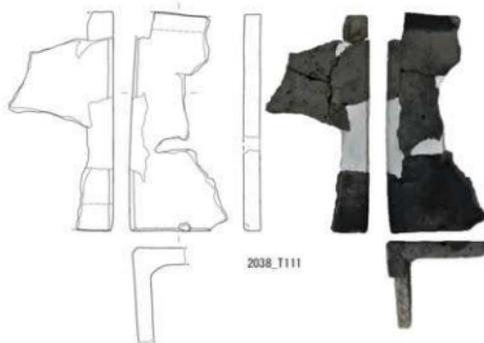


- 2032_T118 02 椽雨No.1 西
03 瓦集積遺構No.2-3
- 2033_T164 02 椽雨上面瓦溜
03 瓦集積No.6-7
- 2034_T105 02 椽雨No.1
03 瓦集積No.7
04 瓦集積遺構
- 2035_T167 02 椽雨上面瓦溜
03 瓦集積No.1
- 2036_T166 02 椽雨No.1 西
03 瓦集積No.3

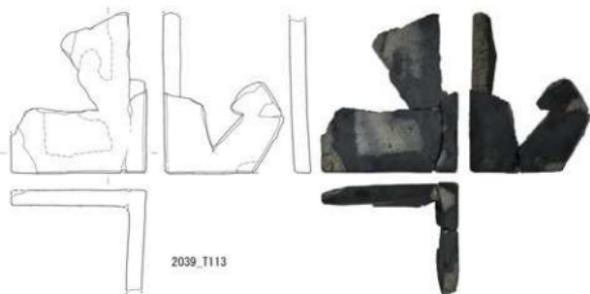
第 143 図 鼠多門調査区出土遺物 瓦 7



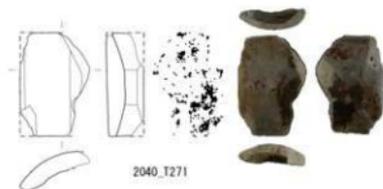
2037_T171



2038_T111



2039_T113

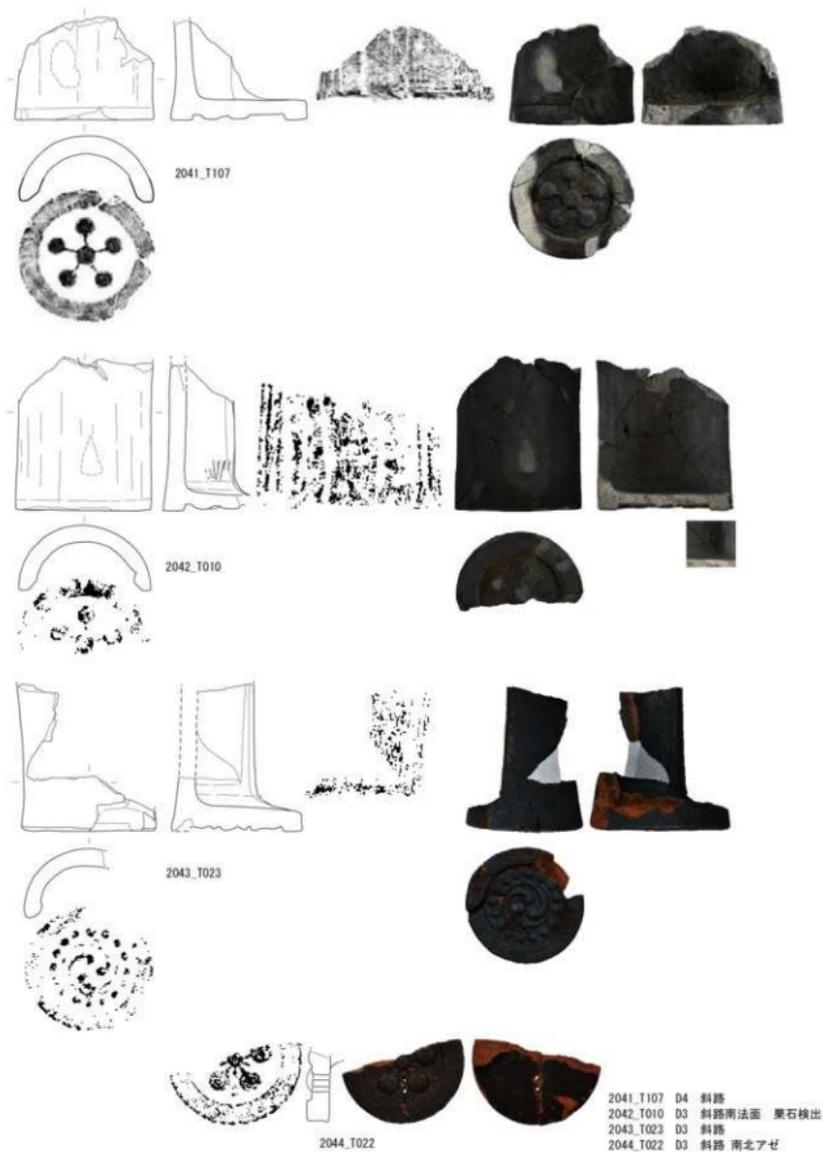


2040_T271

- 2037_T171 D3 瓦集積No.4
- D4 瓦集積遺構
- 2038_T111 D3 瓦集積No.3・6
- D2 槽南上面瓦葺
- 2039_T113 D2 槽南No.1西
- D3 瓦集積No.4
- 2040_T271 D・E2 西面石垣際近代排水溝

0 (1:6) 30cm

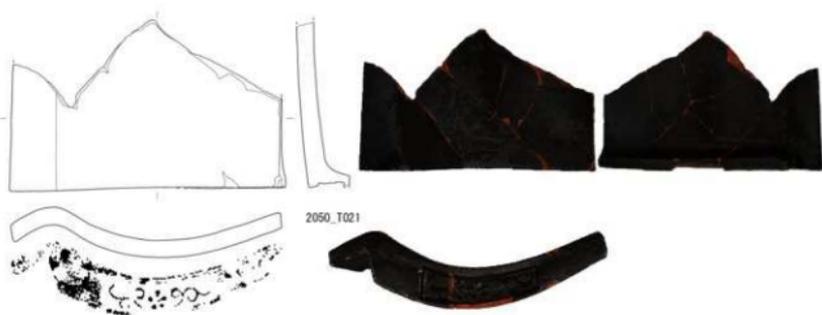
第144図 鼠多門調査区出土遺物 瓦8



第 145 図 鼠多門調査区出土遺物 瓦 9



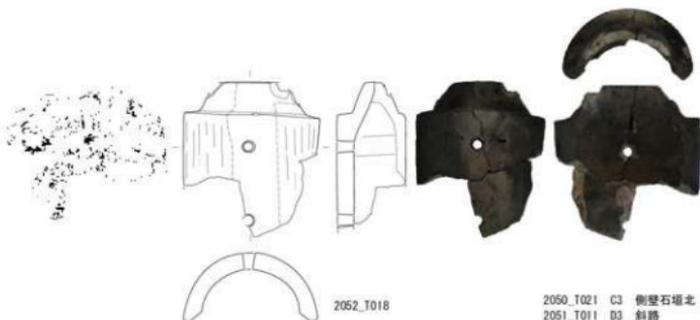
第146図 鼠多門調査区出土遺物 瓦 10



2050_T021



2051_T011



2052_T018

2050_T021 C3 側壁石垣北 前面埋土
 2051_T011 D3 斜路
 C3 斜路 南北アゼ
 2052_T018 D3 斜路

0 (1.6) 30cm

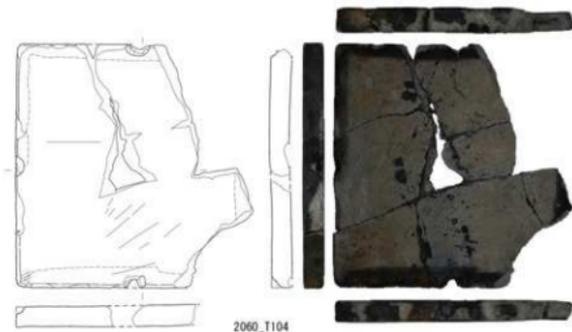
第 147 図 鼠多門調査区出土遺物 瓦 11



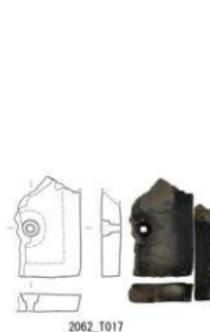
第 148 図 鼠多門調査区出土遺物 瓦 12



2059_T139



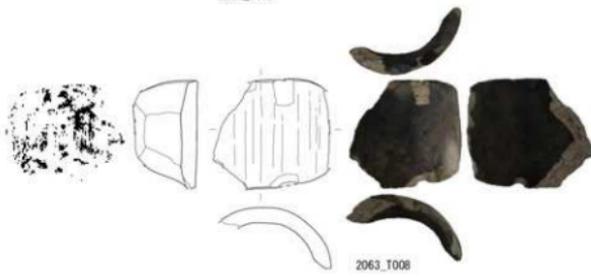
2060_T104



2062_T017



2061_T170



2063_T008

- 2059_T139 D3 斜路
- 2060_T104 D4 南側法面
- 2061_T170 C4 斜路
- 2062_T017 D2 近代層 (斜路範圍)
- 2063_T008 C3 斜路

0 (1:6) 30cm

第 149 图 鼠多門調査区出土遺物 瓦 13



2064_T266

2065_T272



2066_T273



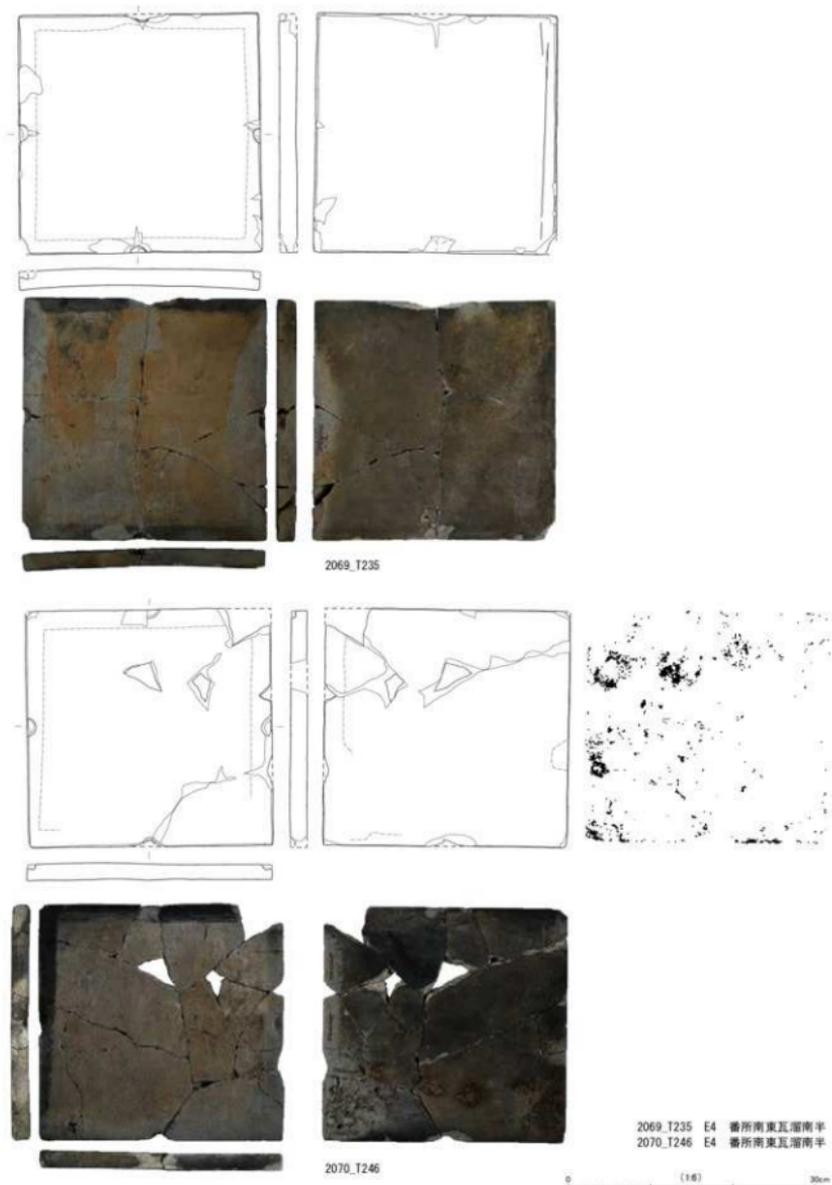
2067_T275

2068_T259

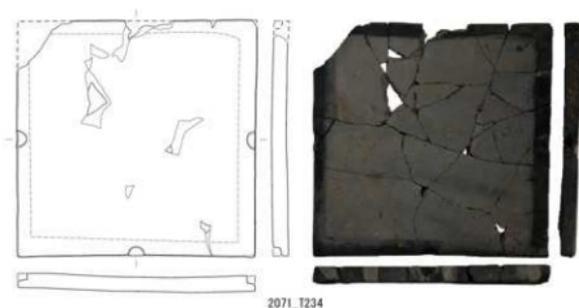
- 2064_T266 E3 SB01 東側四方東壁 上面近代墾地土
- D3 香所西辺外石組溝
- 2065_T272 E3 香所西辺外石組溝
- 2066_T273 E3 香所遺物取上 A3 香所西辺外石組溝
- 2067_T275 E4 香所南東瓦溜南半 香所南東瓦溜 SD16
- 2068_T259 E3 香所南西隅外石組溝 香所西辺外石組溝

0 (1:4) 30cm

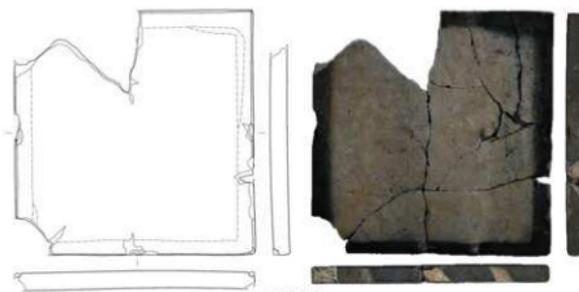
第 150 図 鼠多門調査区出土遺物 瓦 14



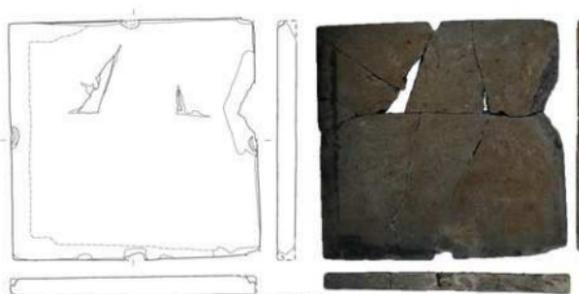
第 151 图 鼠多門調査区出土遺物 瓦 15



2071_T234



2072_T251

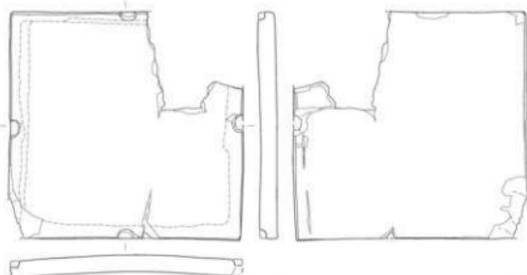


2073_T242

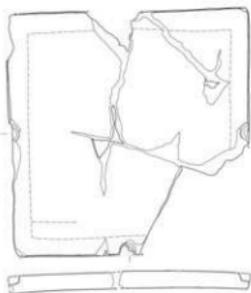
2071_T234 E4 香所南東瓦溜南半
 2072_T251 D・E4 香所南東瓦溜北半
 2073_T242 E4 香所南東瓦溜南半

0 (1.6) 30cm

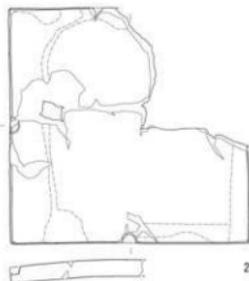
第 152 図 鼠多門調査区出土遺物 瓦 16



2074_T244



2075_T250



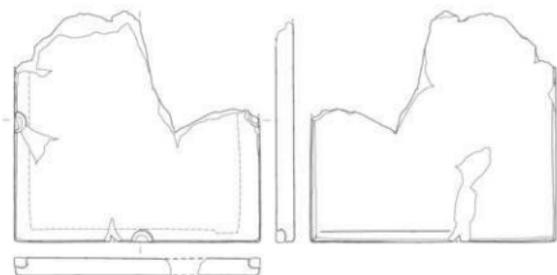
2076_T258



2074_T244 E4 香所南東瓦溜南半
 2075_T250 D・E4 香所南東瓦溜北半
 2076_T258 E4 香所南東瓦溜南半

0 (1:6) 30cm

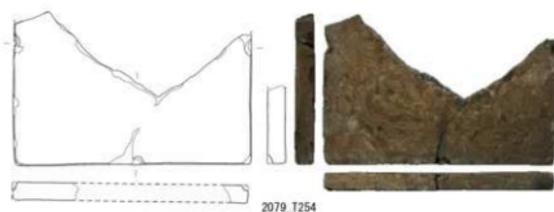
第 153 図 鼠多門調査区出土遺物 瓦 17



2077_T257



2078_T239

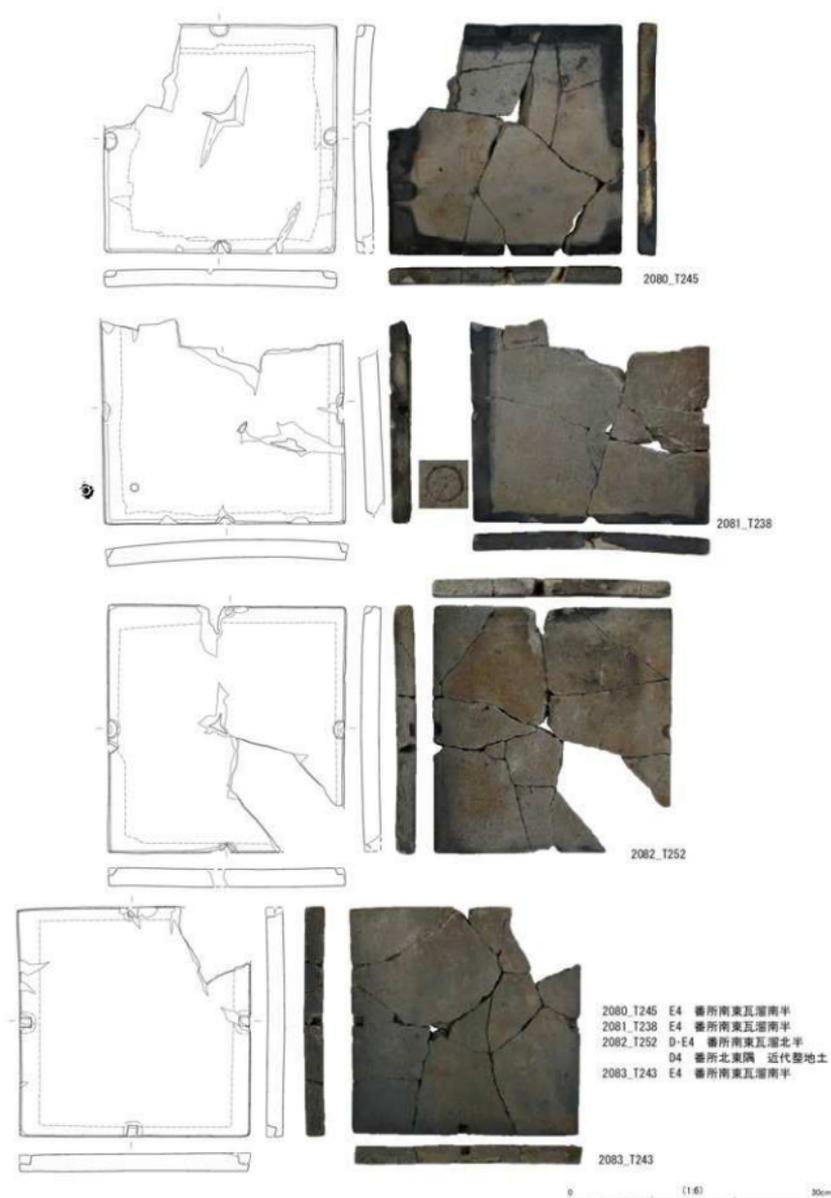


2079_T254

2077_T257 D・E4 善所南東瓦溜北半
 2078_T239 E4 善所南東瓦溜南半
 D・E4 善所南東瓦溜北半
 2079_T254 E4 善所南東瓦溜南半

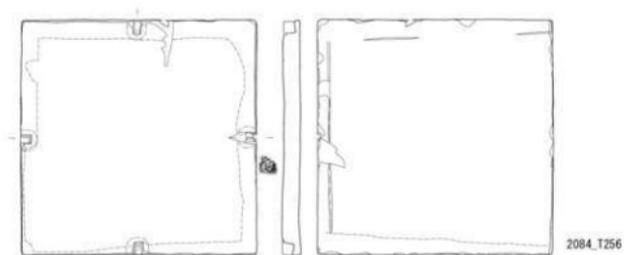
0 (1:6) 30cm

第154図 鼠多門調査区出土遺物 瓦18

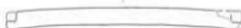


2080_T245 E4 豊洲南東瓦溜南半
 2081_T238 E4 豊洲南東瓦溜南半
 2082_T252 D-E4 豊洲南東瓦溜北半
 2083_T243 E4 豊洲南東瓦溜南半

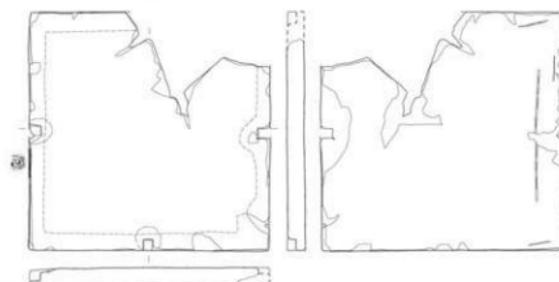
第155図 鼠多門調査区出土遺物 瓦19



2084_T256



写真物図
「塙」刻印



2085_T240



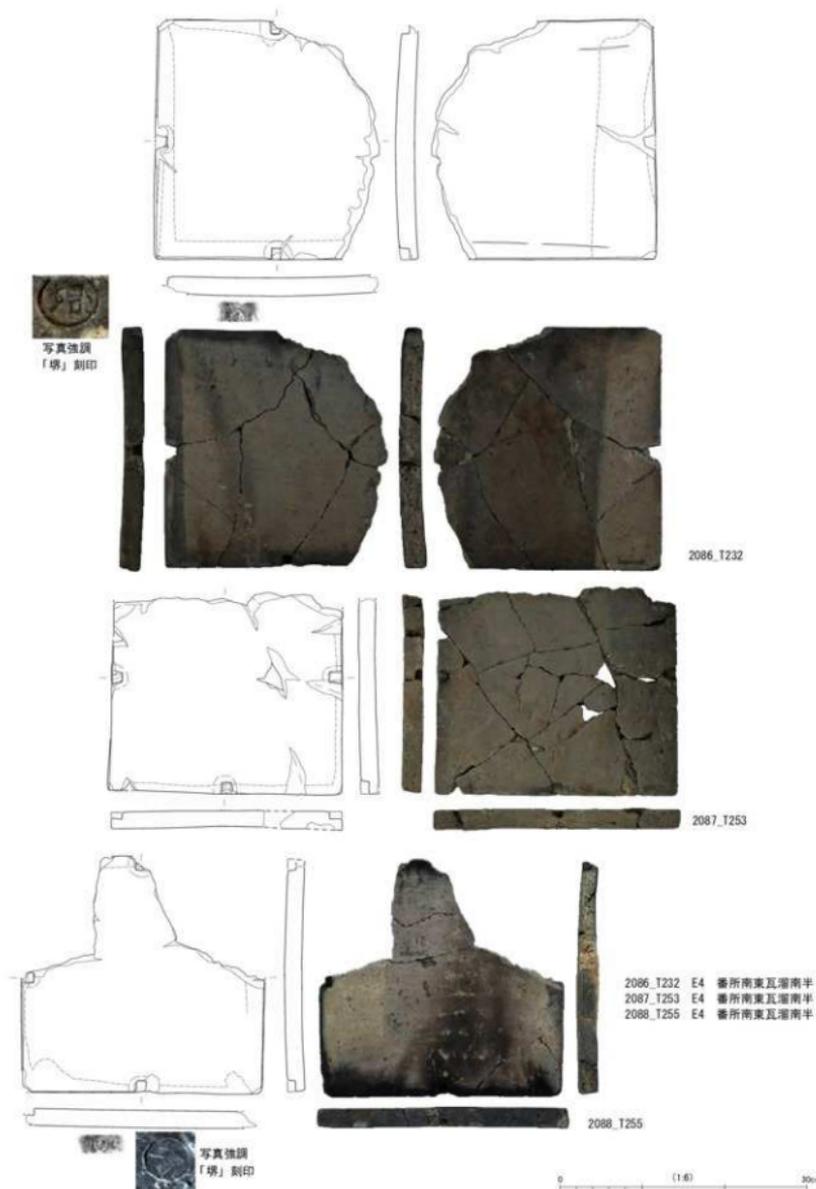
写真物図
「塙」刻印



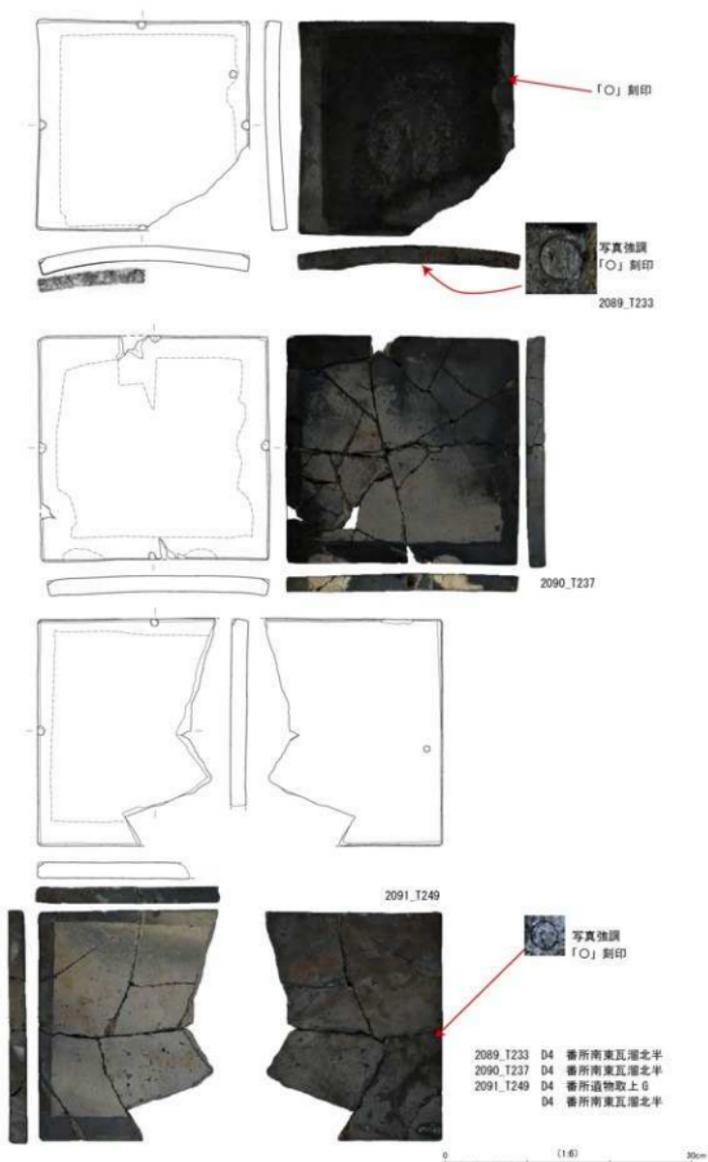
2084_T256 E4 善所南東瓦 滑南半
2085_T240 E4 善所南東瓦 滑南半

0 (1:6) 30cm

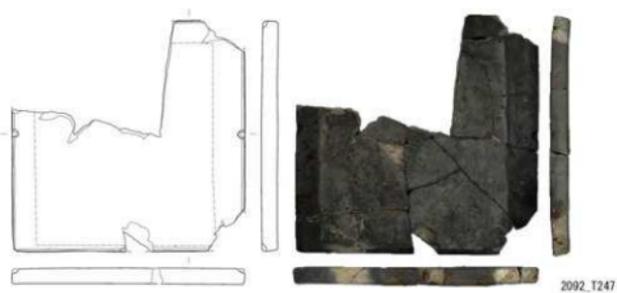
第156図 鼠多門調査区出土遺物 瓦20



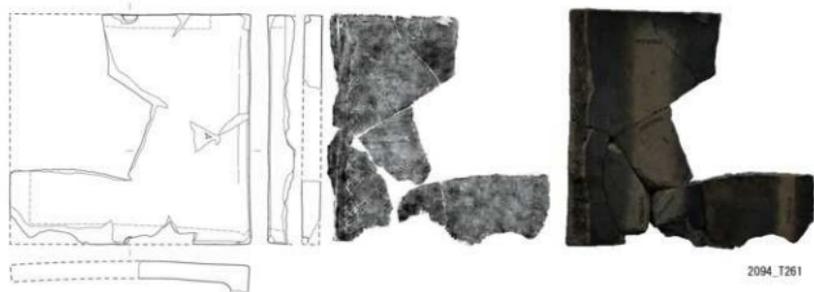
第157図 鼠多門調査区出土遺物 瓦 21



第158図 鼠多門調査区出土遺物 瓦 22



2092_T247



2094_T261

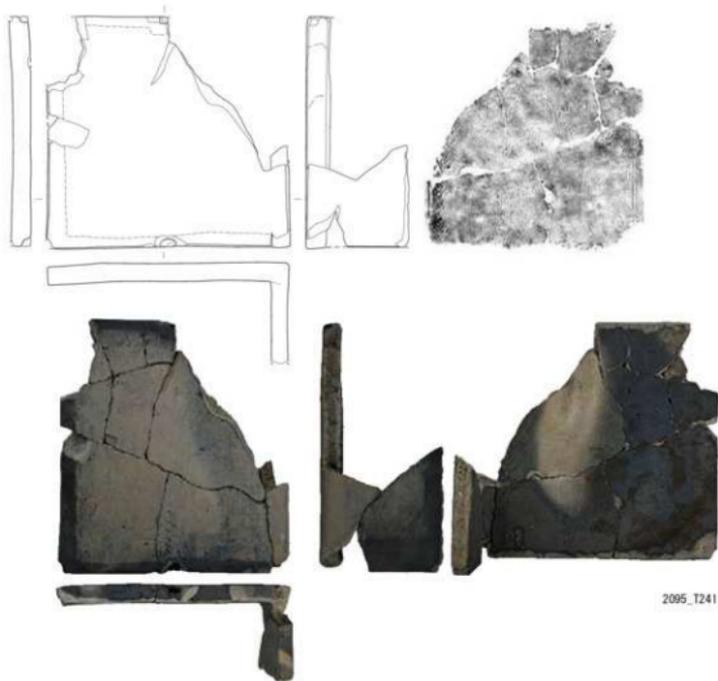


2093_T276

2092_T247 E4 壺所南東瓦溜南半
 2093_T276 D4 壺所南東瓦溜北半
 2094_T261 D4 壺所南東瓦溜北半
 E4 壺所南東瓦溜南半

0 (1:6) 30cm

第 159 図 鼠多門調査区出土遺物 瓦 23



2095_T241

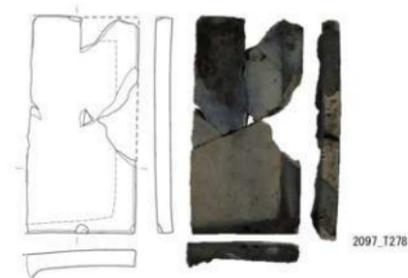


2096_T231

2095_T241 D・E4 善所南東瓦溜北半
E4 善所南東瓦溜南半
2096_T231 D・E4 善所南東瓦溜北半

0 (1.6) 30cm

第 160 図 鼠多門調査区出土遺物 瓦 24



2097_T278



2098_T280



2100_T221



2099_T225

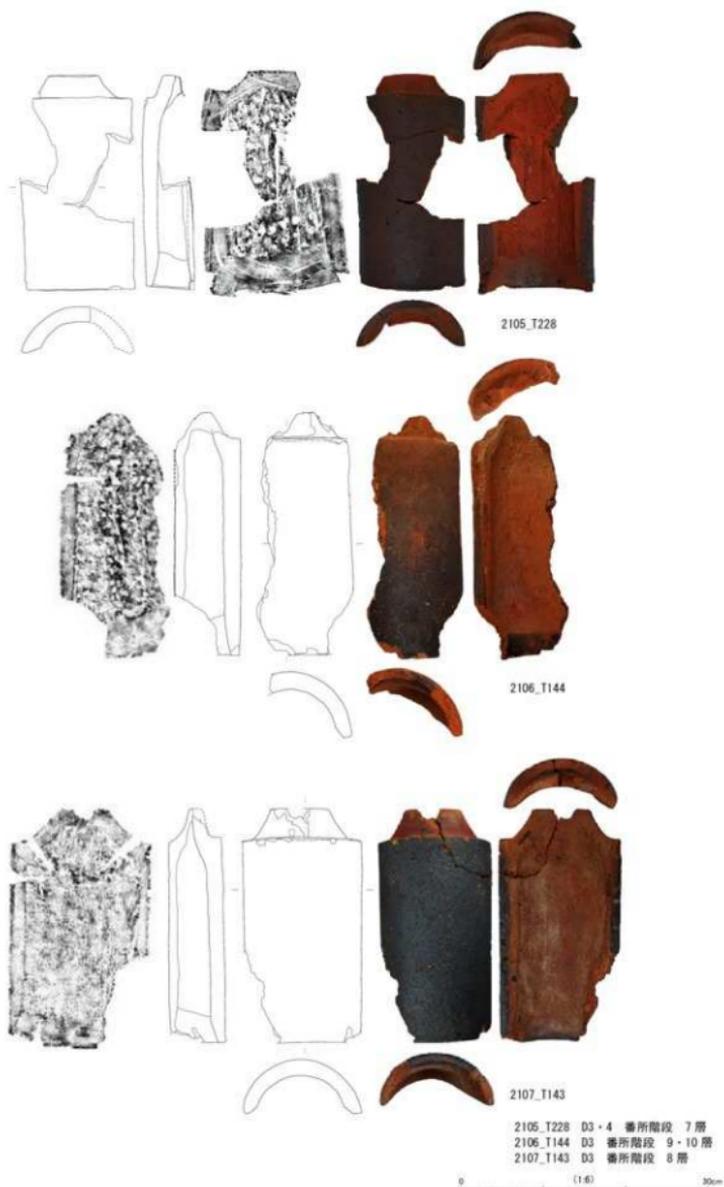
2097_T278 D-E4 善所南東瓦溜北半
 2098_T280 E4 善所南東瓦溜南半
 D-E4 善所南東瓦溜北半
 2099_T225 D4 善所階段 8-9 段付近 B 層
 2100_T221 D3・4 善所階段 A 層 7 層
 D4 善所階段 南北アゼ A 層

0 (1:6) 30cm

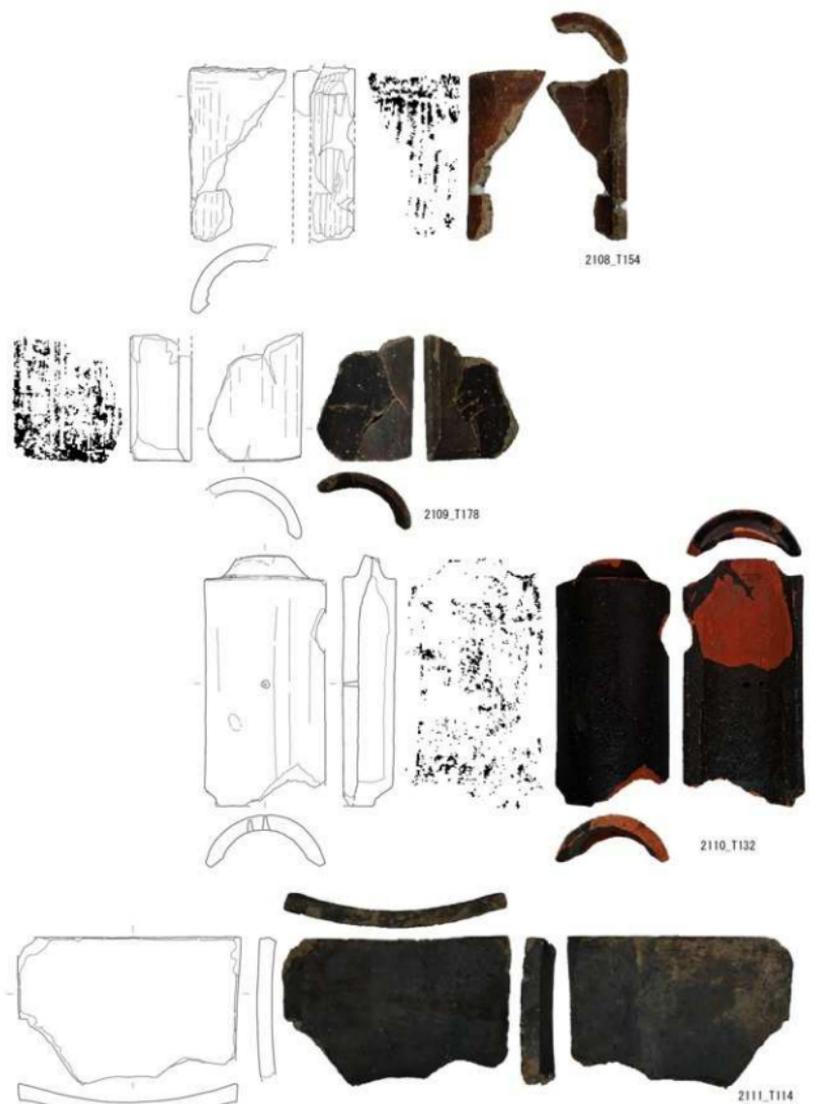
第 161 図 鼠多門調査区出土遺物 瓦 25



第 162 図 鼠多門調査区出土遺物 瓦 26



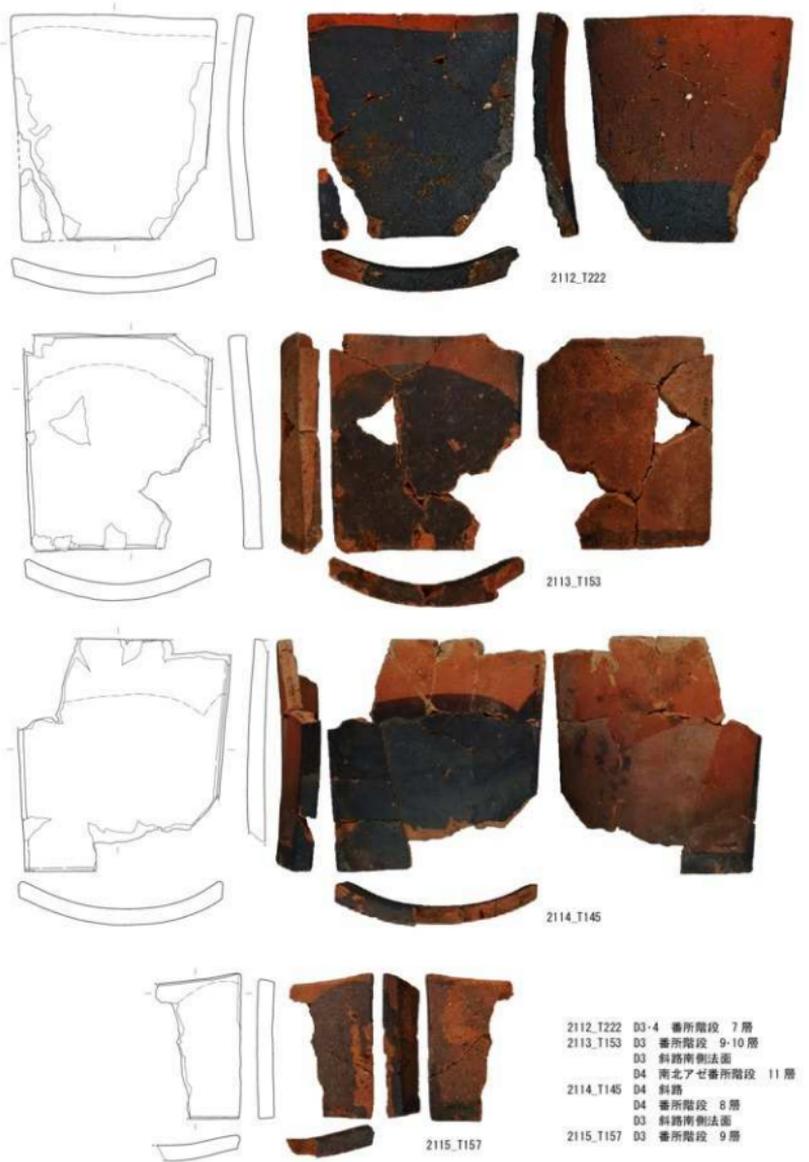
第 163 図 鼠多門調査区出土遺物 瓦 27



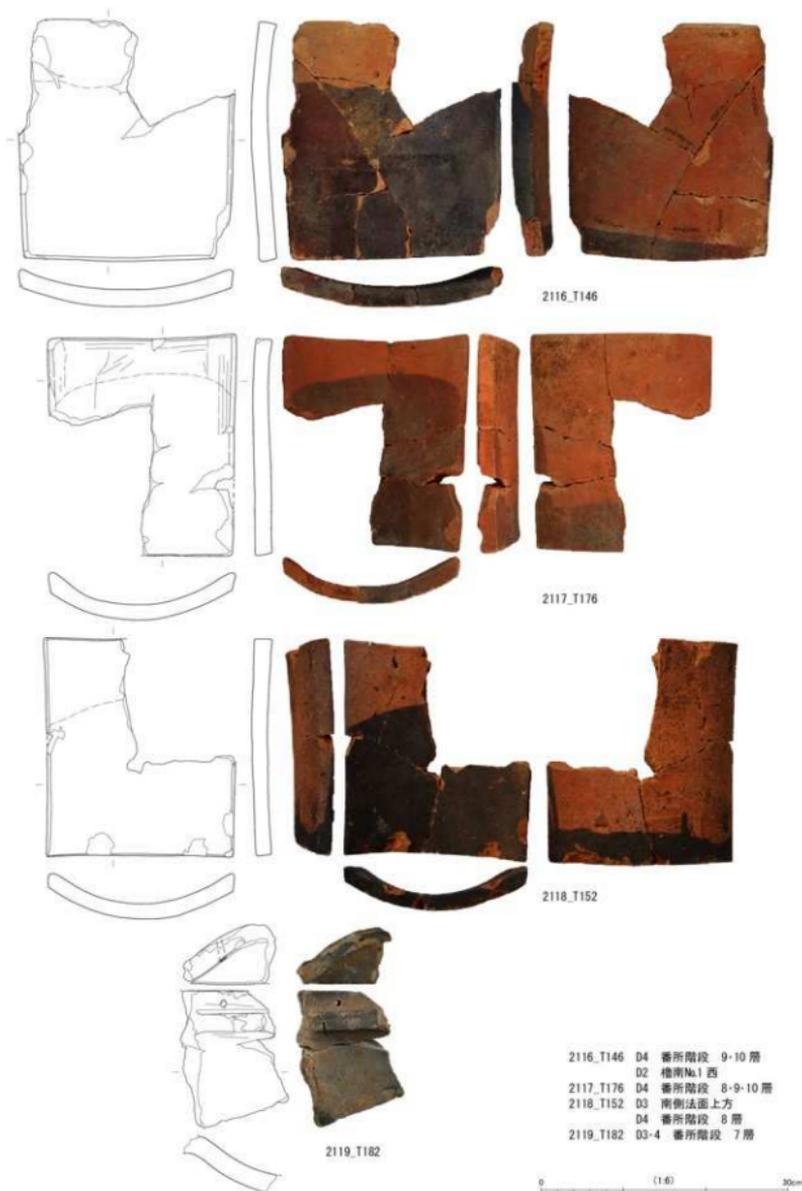
2108_T154 D4 香所階段 7-8-9-11 層
 2109_T178 D4 香所階段 9-10 層 5~10 層
 2110_T132 D4 香所階段 9 層
 2111_T114 D4 香所階段 8 層

0 (1.6) 30cm

第 164 図 鼠多門調査区出土遺物 瓦 28



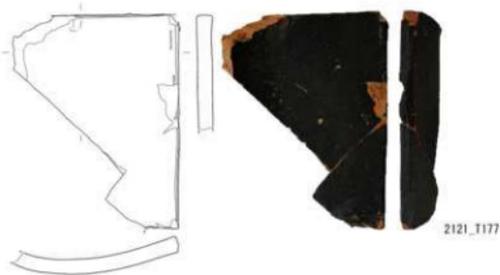
第 165 図 鼠多門調査区出土遺物 瓦 29



第 166 図 鼠多門調査区出土遺物 瓦 30



2120_T195



2121_T177



2122_T180

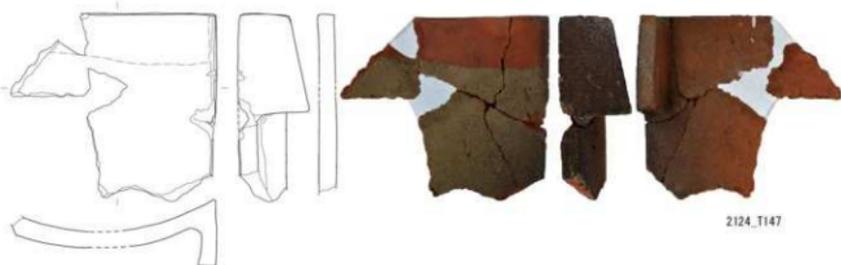
- 2120_T195 D4 番所階段 8-9段付近 B-C間炭層
SB1期 炭層の上層
- 2121_T177 D3-4 番所階段 9-10層
- 2122_T180 D3-4 番所階段 8-9・10層

0 (1.6) 30cm

第167図 鼠多門調査区出土遺物 瓦 31



2123_T229



2124_T147



2125_T220

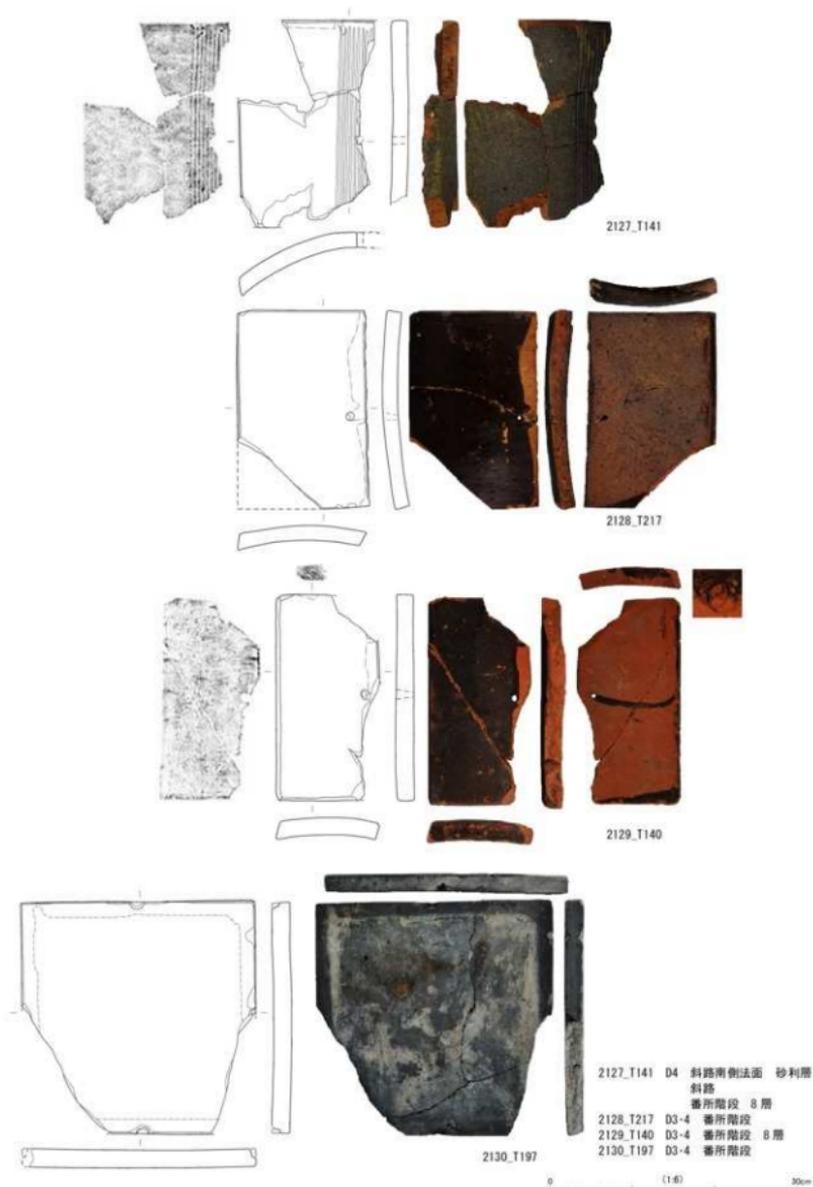


2126_T142

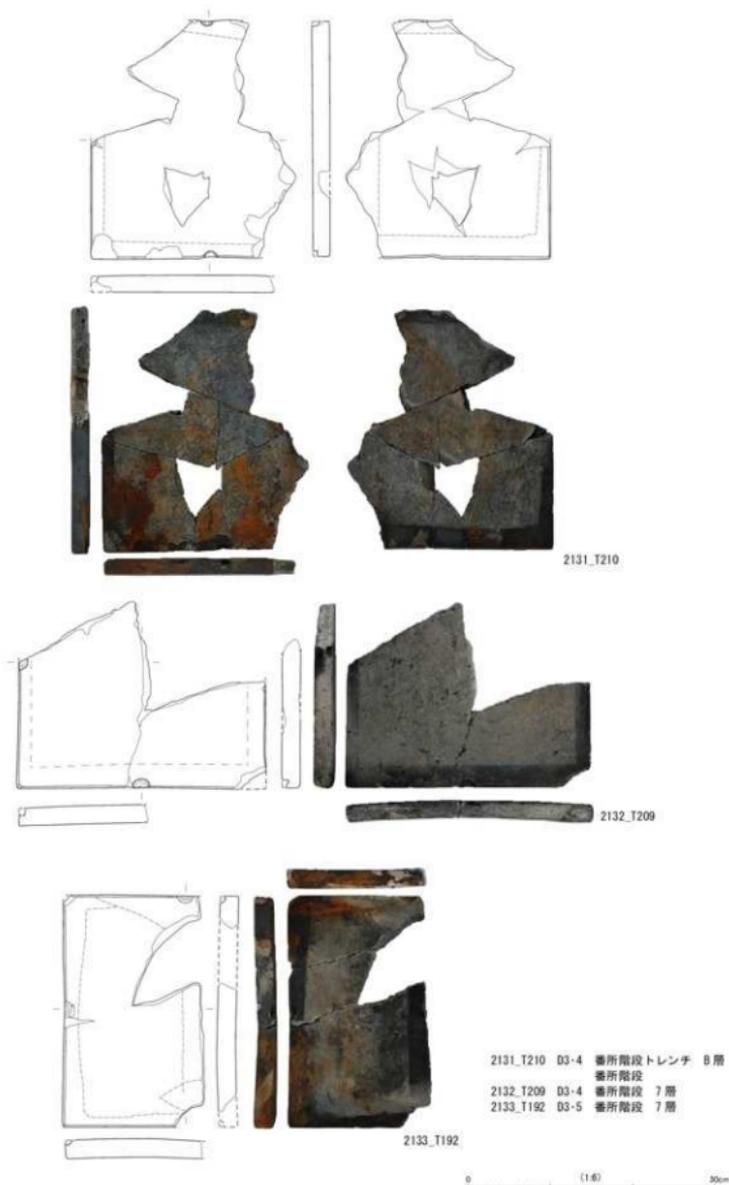
2123_T229 D3-4 番所階段 7層
 2124_T147 D4 番所階段 8~10層
 2125_T220 D3-4 番所階段 7層
 2126_T142 D4 番所階段 9-10-16-17層
 D3-4 南側法面

0 (1.6) 30cm

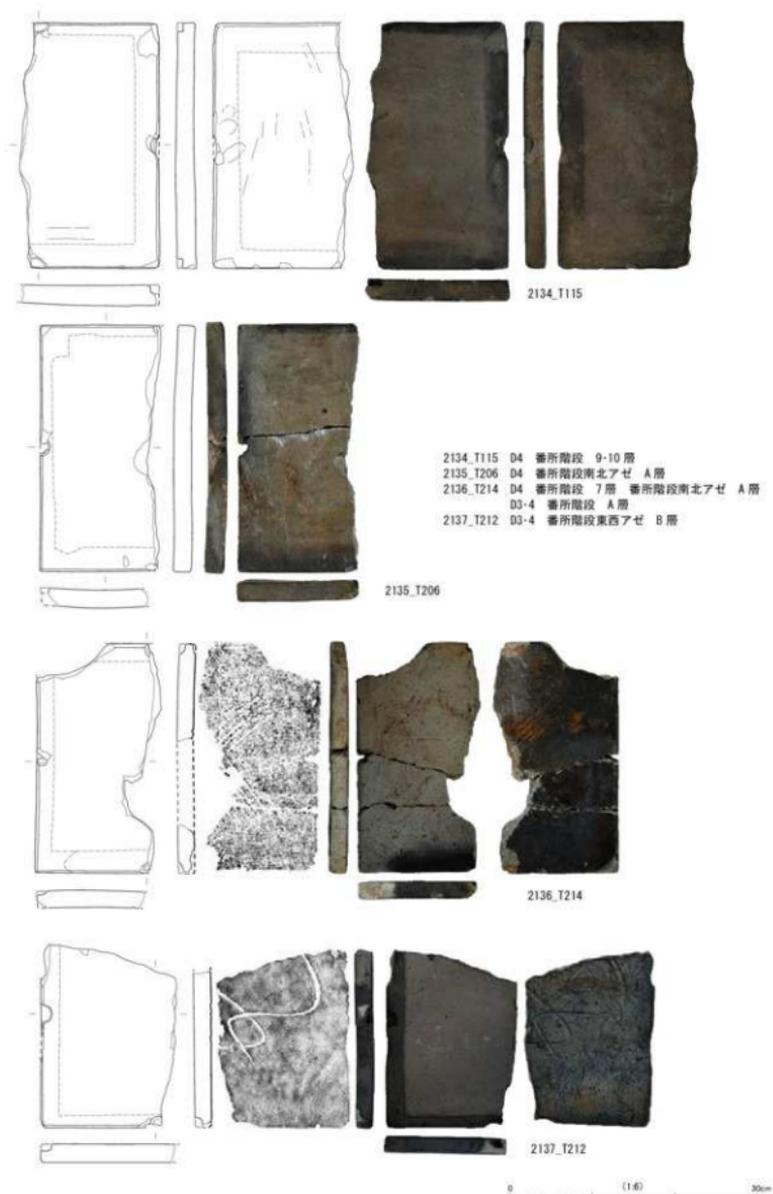
第 168 図 鼠多門調査区出土遺物 瓦 32



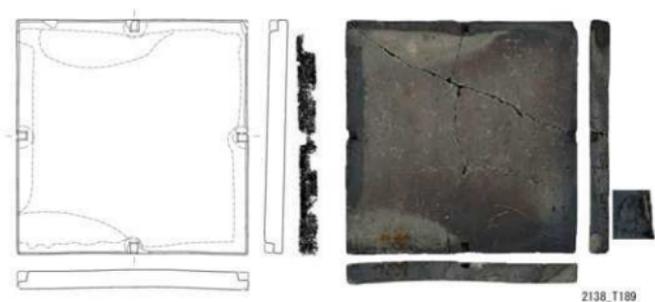
第 169 図 鼠多門調査区出土遺物 瓦 33



第170図 鼠多門調査区出土遺物 瓦 34



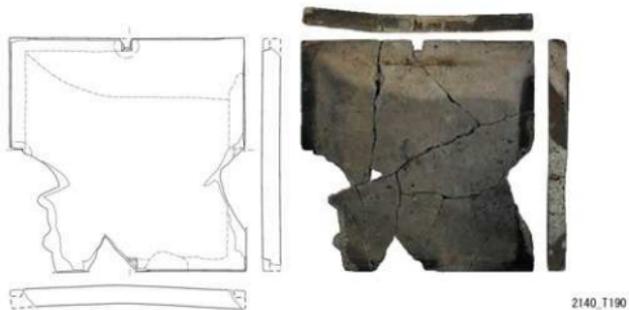
第 171 図 鼠多門調査区出土遺物 瓦 35



2138, T189



2139, T103

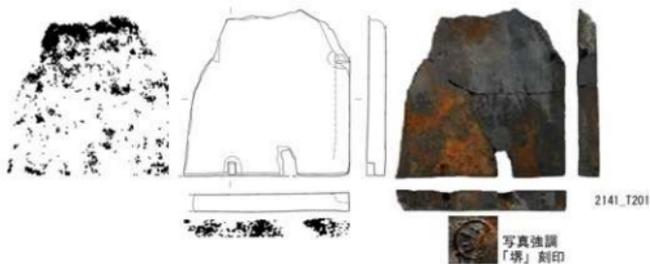


2140, T190

2138, T189 D3 番所階段
 2139, T103 D4 番所階段 6層
 2140, T190 D3-4 番所階段

0 (1.6) 30cm

第 172 図 鼠多門調査区出土遺物 瓦 36



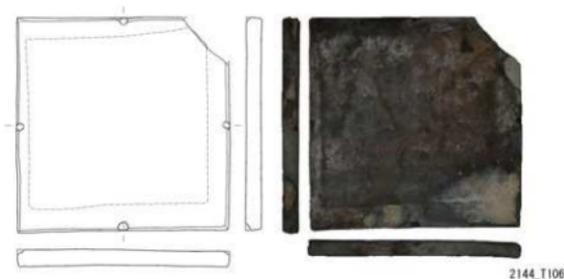
2141_T201



2142_T130



2143_T173

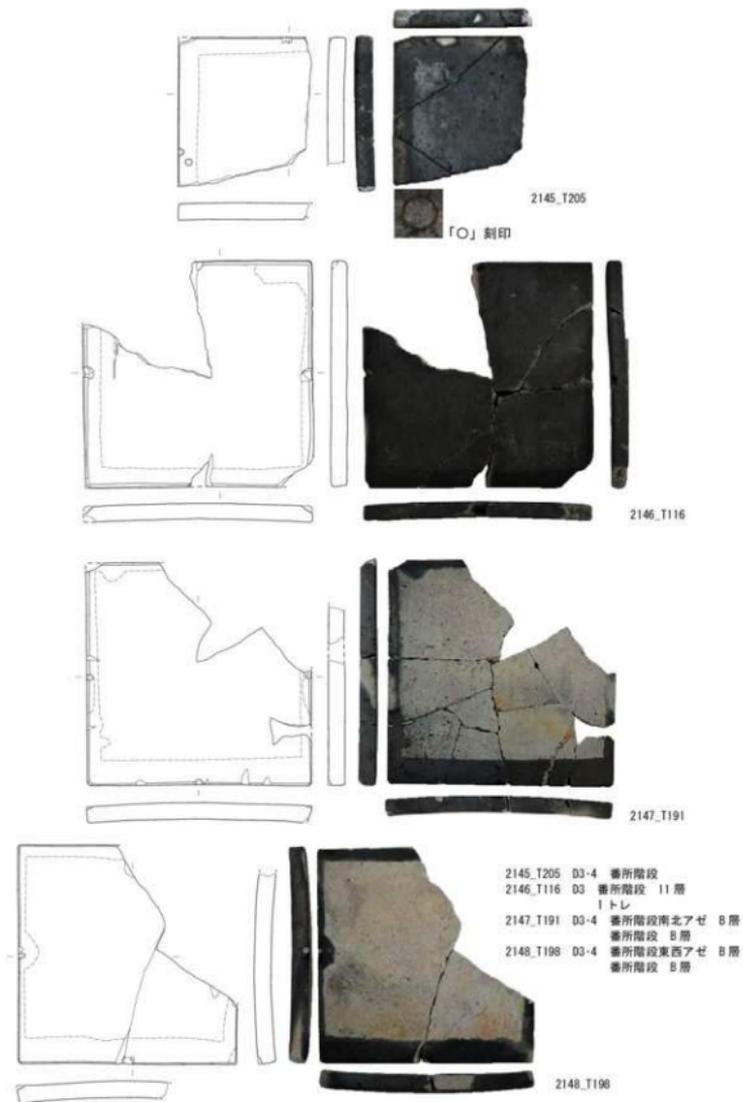


2144_T106

2141_T201 D3-4 臺所階段
 2142_T130 D3-4 臺所階段 8~10層
 2143_T173 D4 臺所階段 9-10層
 2144_T106 D3 臺所階段 8層

0 (1.6) 30cm

第 173 図 鼠多門調査区出土遺物 瓦 37

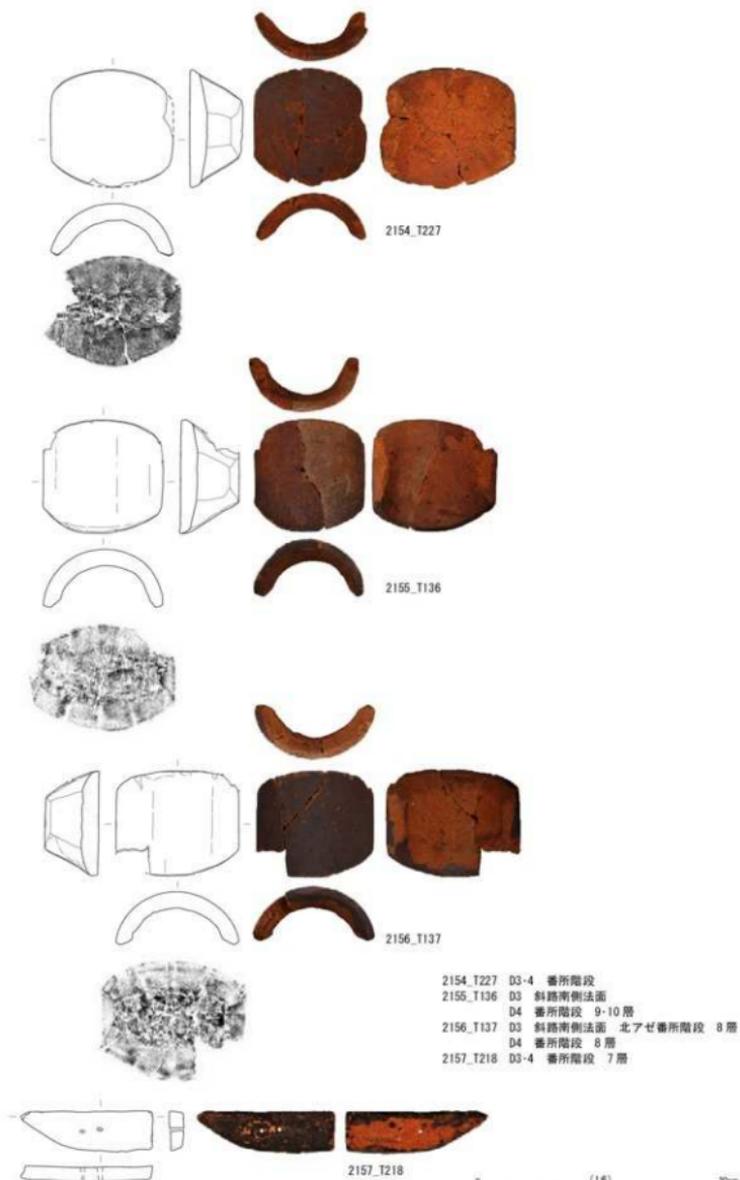


0 (1:6) 30cm

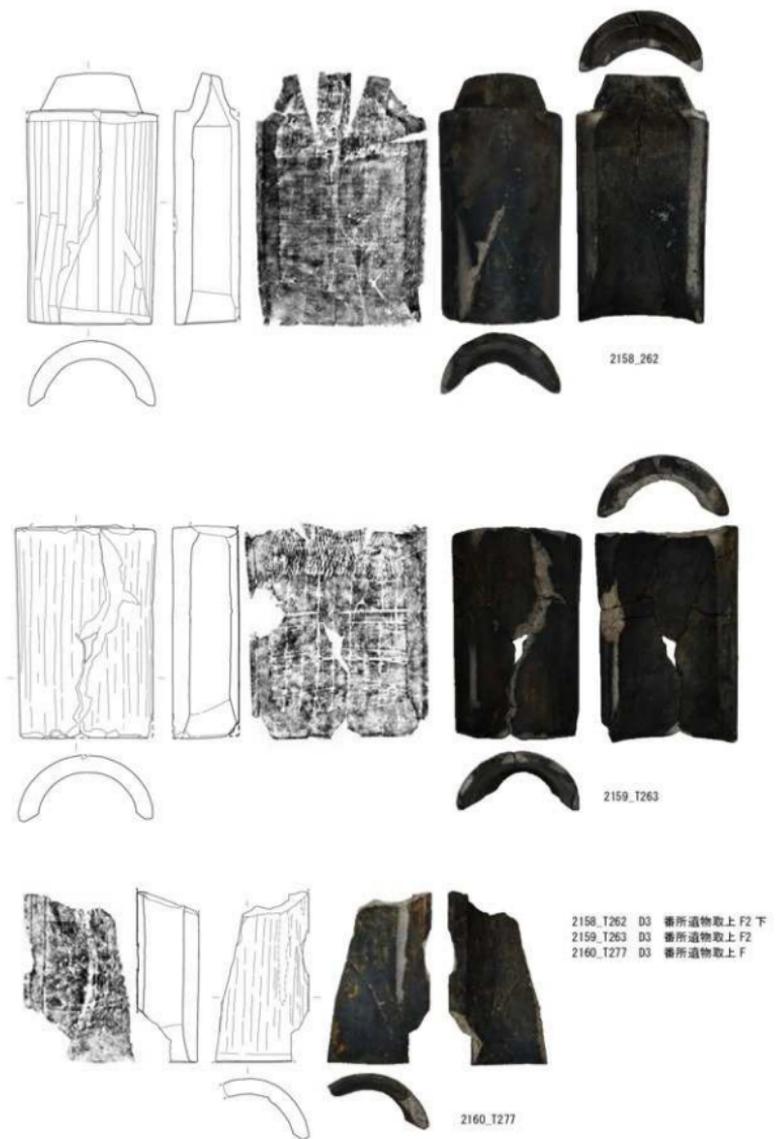
第174図 鼠多門調査区出土遺物 瓦 38



第 175 図 鼠多門調査区出土遺物 瓦 39



第 176 図 鼠多門調査区出土遺物 瓦 40



第 177 図 鼠多門調査区出土遺物 瓦 41



2161_T267



2162_T268

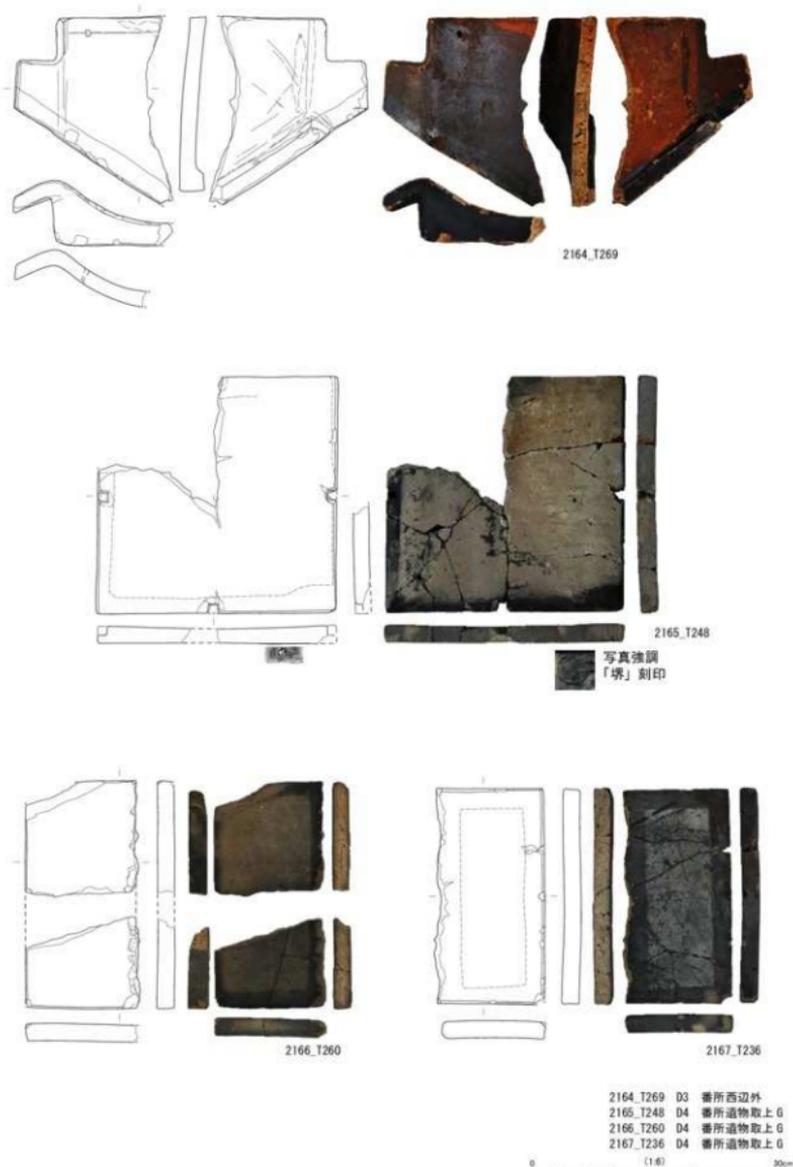


2163_T270

2161_T267 E3 番所南辺外 近代製地土
 2162_T268 E3 番所遺物取上 B3
 2163_T270 D3 番所遺物取上 C1
 番所西辺外セクション

0 (1.6) 30cm

第 178 図 鼠多門調査区出土遺物 瓦 42



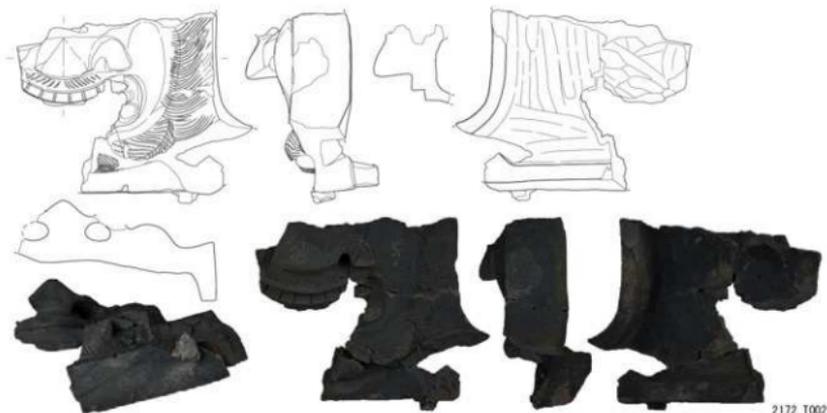
第 179 図 鼠多門調査区出土遺物 瓦 43



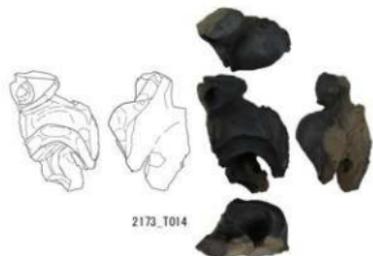
2168_T279 D3 善所西辺外
 2169_T274 D3 善所中 近代整地土
 2170_T006 E2 近代整地土
 2171_T133 不明

0 (1.6) 30cm

第180図 鼠多門調査区出土遺物 瓦44



2172_T002



2173_T014



2174_T016



2175_T003



2176_T015



2177_T161

- 2172_T002 D3 斜路 南北アゼ
- 2173_T014 D3 斜路
- 2174_T016 D3 斜路 南北アゼ 南法面
- 2175_T003 D2 斜路 南側ライン
- 2176_T015 D2 石垣第5段 裏込め栗石内
- 2177_T161 C4 斜路
- D4 コンクリ基礎根固め

0 (1:6) 30cm

第181図 鼠多門調査区出土遺物 瓦45



鬼瓦の合成復元写真 (2172 と 2174 を反転合成)
※2172 と 2174 は同一個体ではない



第 182 図 鼠多門調査区出土遺物 瓦 46



第183図 鼠多門調査区出土遺物 金属1



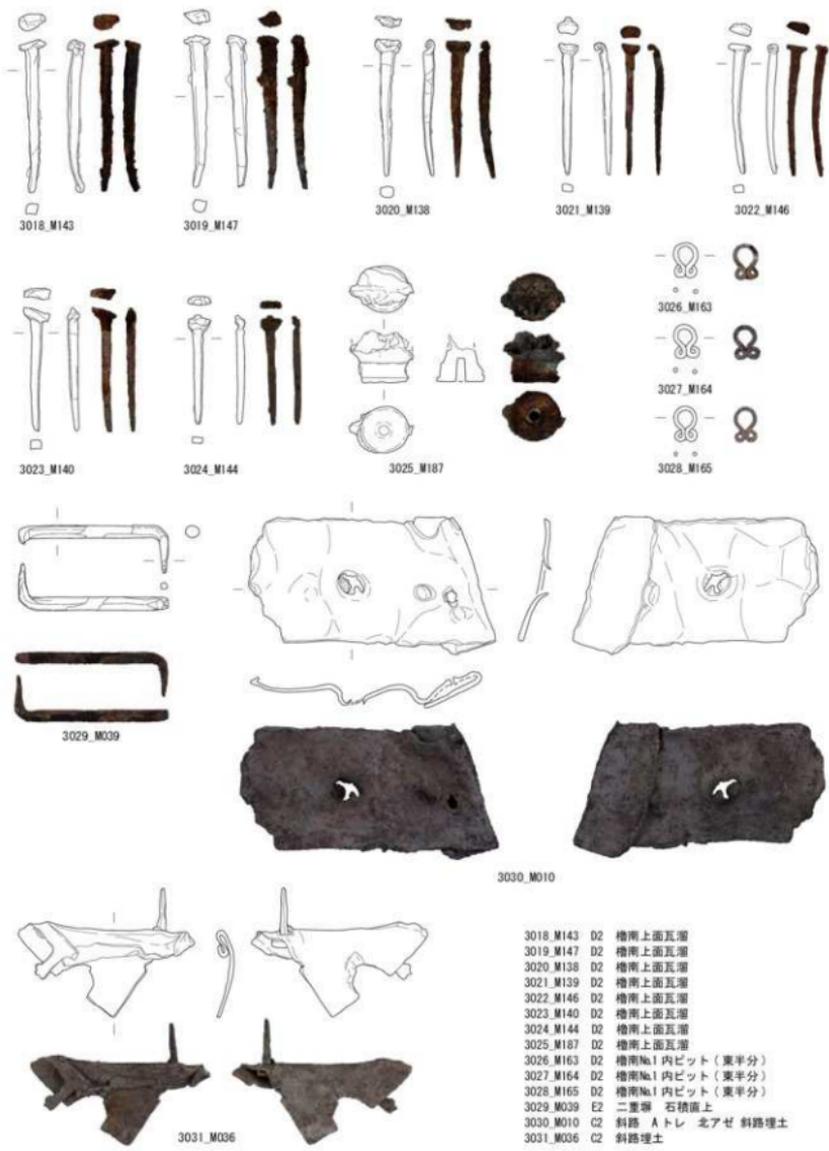
3008_M022 E3 S81 北側掘方内
 3009_M035 C4 馬屋レンガ基礎
 3010_M148 C4 監視塔レンガ基礎 整地土
 3011_M128 C4 レンガ基礎 斜路
 3012_M228 C4 レンガ基礎 近代整地土

3013_M216 D2 門部№.3
 3014_M217 D2 門部№.3
 3015_M142 D2 櫓南上面瓦渾
 3016_M145 D2 櫓南上面瓦渾
 3017_M141 D2 櫓南上面瓦渾

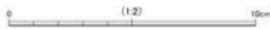
3016_M145

0 10cm 100cm

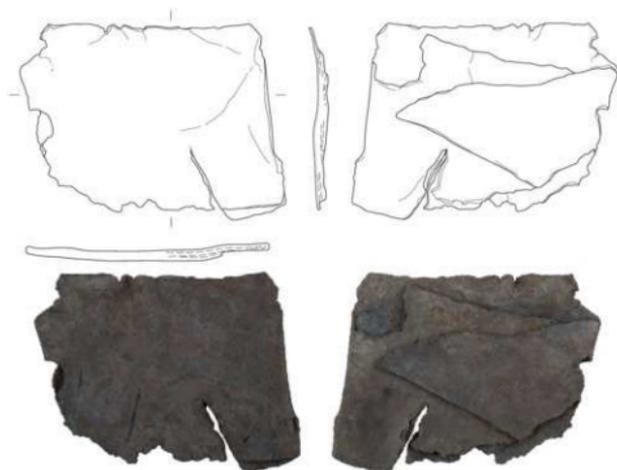
第184図 鼠多門調査区出土遺物 金属2



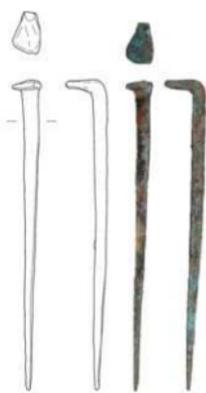
- 3018_M143 D2 樽南上面瓦溜
- 3019_M147 D2 樽南上面瓦溜
- 3020_M138 D2 樽南上面瓦溜
- 3021_M139 D2 樽南上面瓦溜
- 3022_M146 D2 樽南上面瓦溜
- 3023_M140 D2 樽南上面瓦溜
- 3024_M144 D2 樽南上面瓦溜
- 3025_M187 D2 樽南上面瓦溜
- 3026_M163 D2 樽南輪1内ビット(東半分)
- 3027_M164 D2 樽南輪1内ビット(東半分)
- 3028_M165 D2 樽南輪1内ビット(東半分)
- 3029_M039 E2 二重線 石積直上
- 3030_M010 C2 斜路 Aトレ 北アゼ 斜路埋土
- 3031_M036 C2 斜路埋土



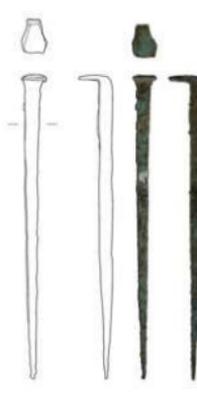
第185図 鼠多門調査区出土遺物 金属3



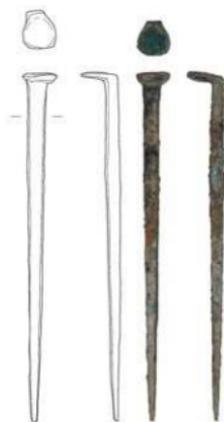
3032_M029



3033_M149



3034_M027

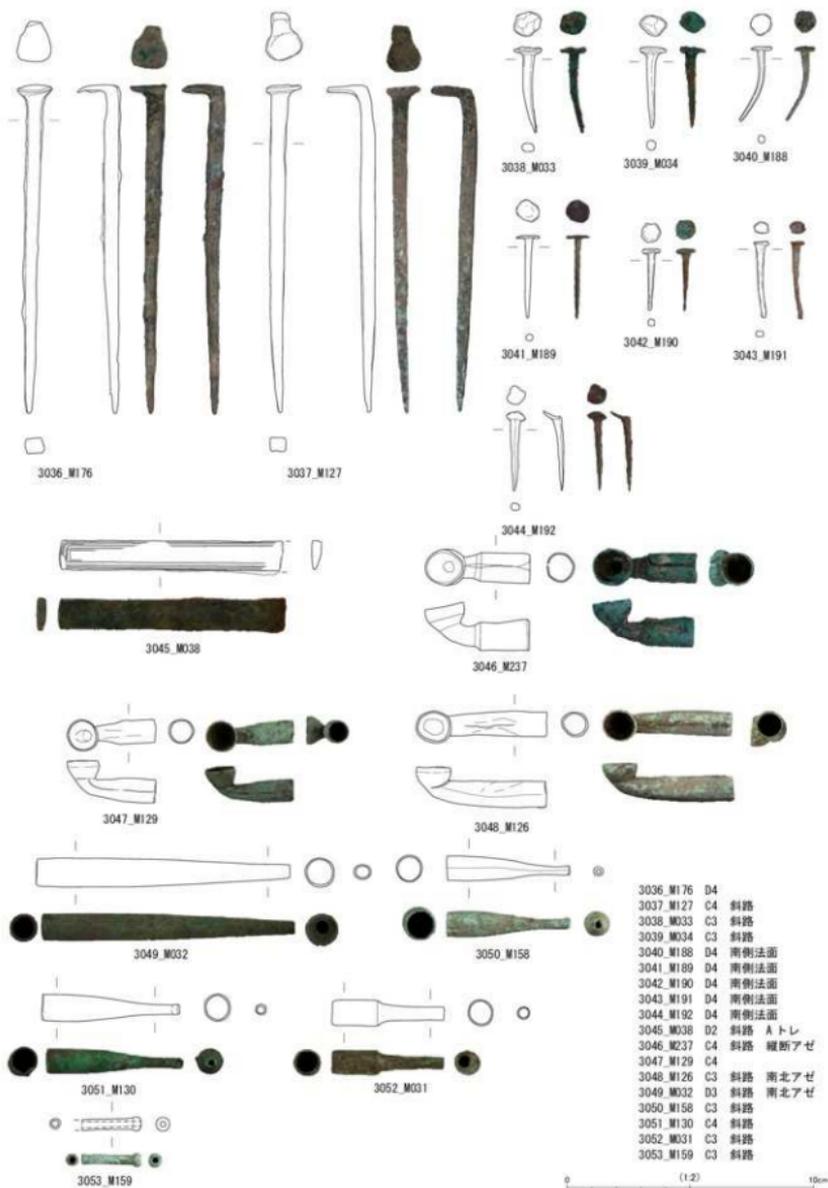


3035_M132

3032_M029 D3 斜路南側
 3033_M149 C3 斜路北側法面 栗石層
 3034_M027 C2 斜路埋土
 3035_M132 D4 南側法面

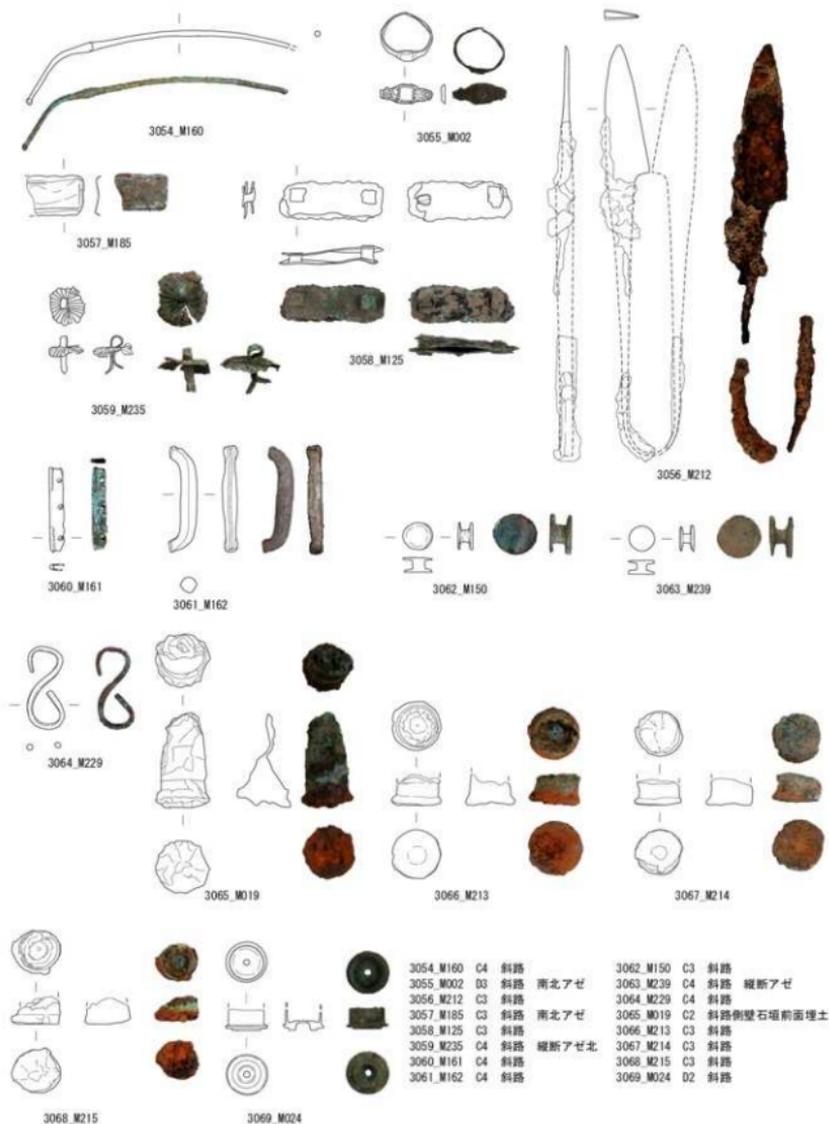
0 (1:2) 10cm

第186図 鼠多門調査区出土遺物 金属4

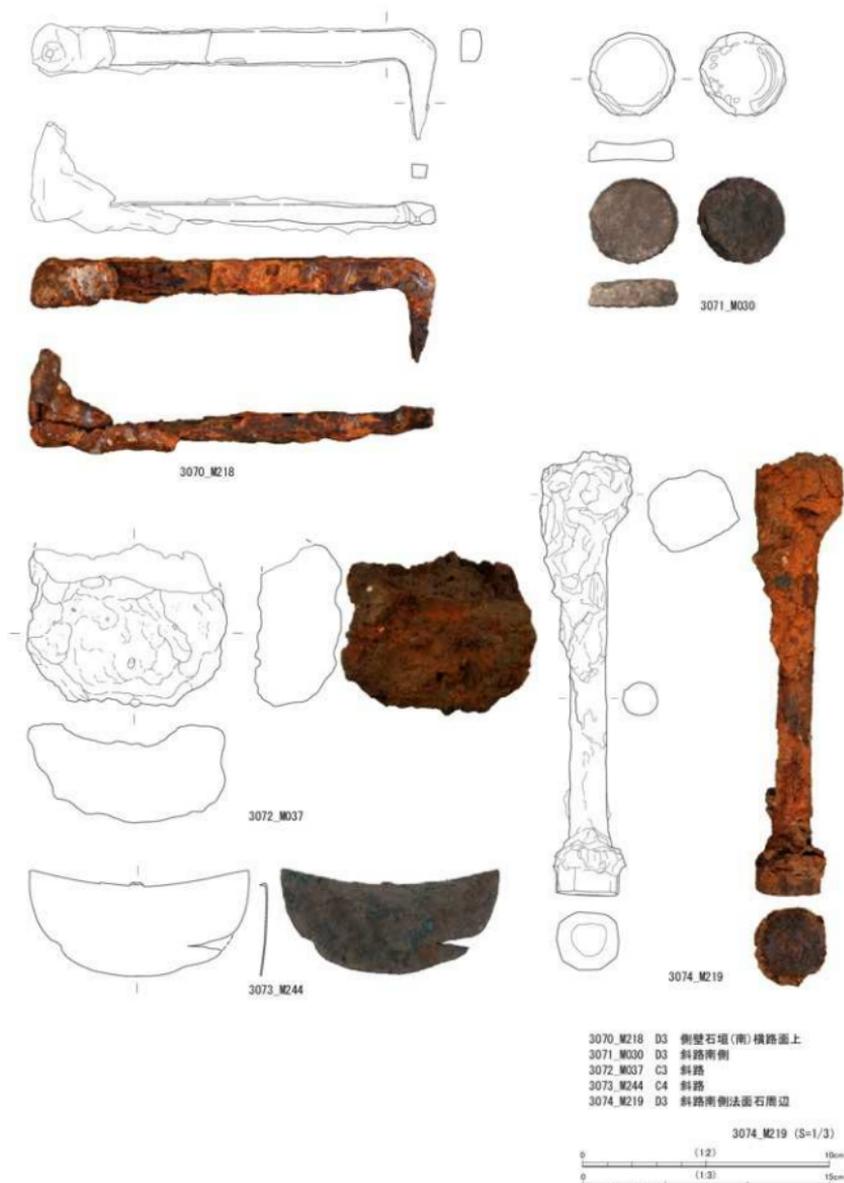


- 3036_M176 D4
- 3037_M127 C4 斜路
- 3038_M033 C3 斜路
- 3039_M034 C3 斜路
- 3040_M188 D4 南側法面
- 3041_M189 D4 南側法面
- 3042_M190 D4 南側法面
- 3043_M191 D4 南側法面
- 3044_M192 D4 南側法面
- 3045_M038 D2 斜路 Aトレ
- 3046_M237 C4 斜路 縦断アゼ
- 3047_M129 C4
- 3048_M126 C3 斜路 南北アゼ
- 3049_M032 D3 斜路 南北アゼ
- 3050_M158 C3 斜路
- 3051_M130 C4 斜路
- 3052_M031 C3 斜路
- 3053_M159 C3 斜路

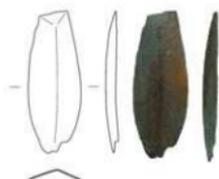
第187図 鼠多門調査区出土遺物 金属5



第188図 鼠多門調査区出土遺物 金属6



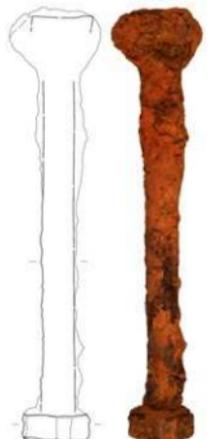
第189図 鼠多門調査区出土遺物 金属 7



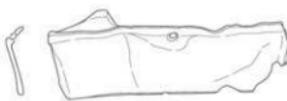
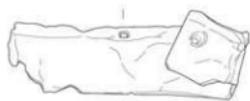
3075_M233



3077_M020



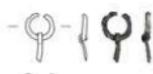
3076_M223



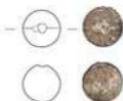
3078_M271



3079_M263



3080_M266



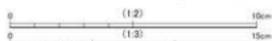
3081_M262



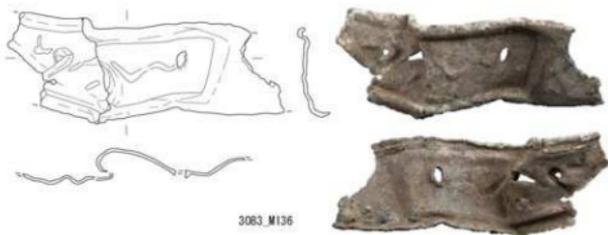
3082_M240

- 3075_M233 C4 踏面直上
 3076_M223 D4 斜踏
 3077_M020 D3 障塞部 南北了々 南側法面
 3078_M271 E3 番所西边外 石籠溝内
 3079_M263 D3 番所西边外 石籠溝内
 3080_M266 D3 番所西边外 石籠溝内
 3081_M262 D3 番所北西側落込み
 3082_M240 D3・4 番所階段

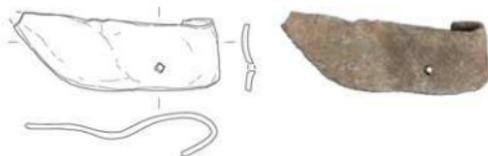
3076_M223 (S=1/3)



第190図 鼠多門調査区出土遺物 金属8



3083_M136



3084_M220



3085_M255



3086_M241

3083_M136 D4 善所階段 8層
 3084_M220 D4 善所階段 8層
 3085_M255 D4 善所階段とSB1間 8層
 3086_M241 D3・4 善所階段 7層

0 (1/2) 10cm

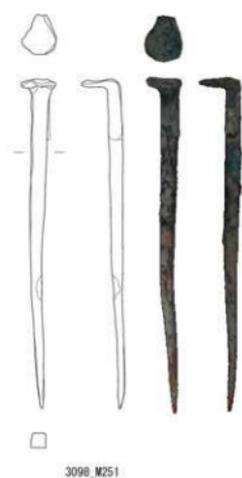
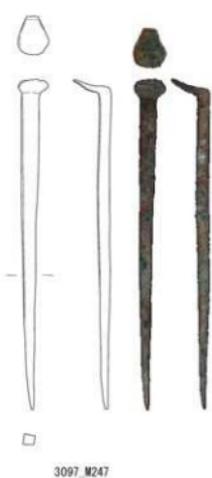
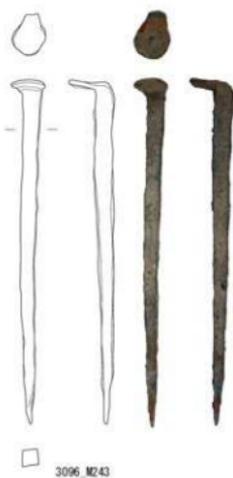
第191図 鼠多門調査区出土遺物 金属9



3087_M177 D4 香所階段 11層
 3088_M178 D4 香所階段 11層
 3089_M131 D3 香所階段 9-10層
 3090_M221 D3 香所階段 9-10層
 3091_M222 D3 香所階段 9-10層
 3092_M134 D4 南北アゼ香所階段埋土 9-10層

0 (1:2) 10cm

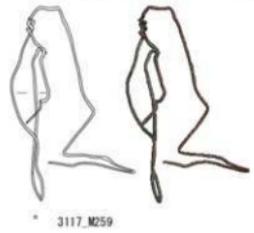
第192図 鼠多門調査区出土遺物 金属10



- 3093_M180 D4 香所階段 8層
 3094_M137 D5 香所階段 8層
 3095_M135 D5 南北アゼ香所階段埋土 7-8層
 3096_M243 D3-4 香所階段 7層
 3097_M247 D3-4 香所階段 7層
 3098_M251 D3-4 香所階段

0 (1/2) 10cm

第193図 鼠多門調査区出土遺物 金属11



- 3099_M166 D3 善所階段 8層
- 3100_M167 D3 善所階段 8層
- 3101_M168 D3 善所階段 8層
- 3102_M169 D3 善所階段 8層
- 3103_M170 D3 善所階段 8層
- 3104_M171 D3 善所階段 8層
- 3105_M172 D3 善所階段 8層
- 3106_M173 D3 善所階段 8層
- 3107_M174 D3 善所階段 8層
- 3108_M175 D3 善所階段 8層
- 3109_M248 D3-4 善所階段 7層
- 3110_M249 D3-4 善所階段 7層
- 3111_M250 D3-4 善所階段 7層

- 3112_M252 D3-4 善所階段
- 3113_M253 D3-4 善所階段
- 3114_M257 D4 善所階段西 戸室チップ石敷直上層
- 3115_M256 D4 善所階段西 戸室チップ石敷直上層
- 3116_M254 D3-4 善所階段
- 3117_M259 D3-4 善所階段
- 3118_M234 D4 善所階段 8-9段 8層
- 3119_M258 D4 善所階段 8-9段 8層
- 3120_M238 D3-4 善所階段 C層
- 3121_M260 D4 善所階段 B-C間 炭層
- 3122_M133 D4 善所階段埋土
- 3123_M179 D4 善所階段 11層
- 3124_M232 D4 善所階段 8-9段 8層



第194図 鼠多門調査区出土遺物 金属12



3125_M242



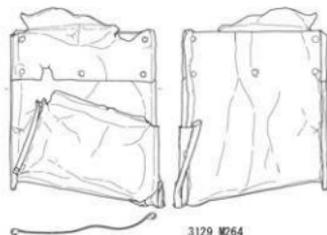
3126_M267



3127_M270



3128_M265

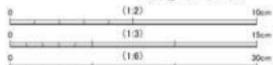


3129_M264



- 3125_M242 D4 香所階段 B-9段付近 B-C間炭層
 3126_M267 D3 香所西辺外 セクションベルト
 3127_M270 D3 香所西辺外 セクションベルト
 3128_M265 E3 香所 遺構検出 近代埋土
 3129_M264 樽台石壇上面 (監視署の基礎コン部)

- 3125_M242 (S=1/3)
 3129_M264 (S=1/6)

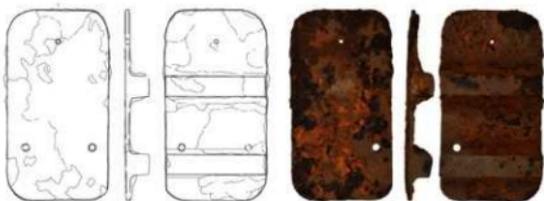


第195図 鼠多門調査区出土遺物 金属13



3130_M268

3131_M269



3132_M049



3133_M050



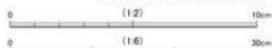
3134_M026



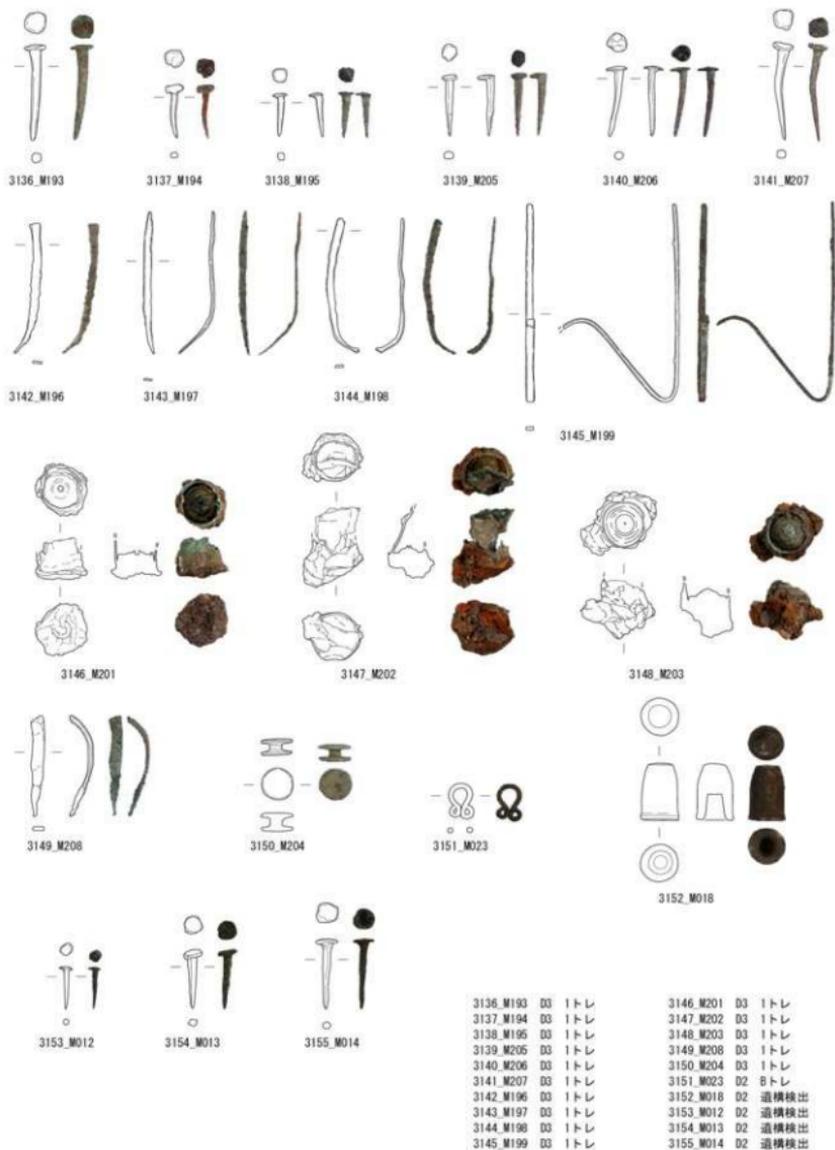
3135_M231

- 3130_M268 増台石垣上面
- 3131_M269 増台石垣上面
- 3132_M049 B2 1トレ 現代層
- 3133_M050 B2 1トレ 現代層
- 3134_M026 B3 近代整地土
- 3135_M231 C6 遺構検出

3132_M049-3133_M050 (S=1/6)



第196図 鼠多門調査区出土遺物 金属14



3136_M193	03	1トレ	3146_M201	03	1トレ
3137_M194	03	1トレ	3147_M202	03	1トレ
3138_M195	03	1トレ	3148_M203	03	1トレ
3139_M205	03	1トレ	3149_M208	03	1トレ
3140_M206	03	1トレ	3150_M204	02	1トレ
3141_M207	03	1トレ	3151_M202	02	1トレ
3142_M196	03	1トレ	3152_M018	02	遺構検出
3143_M197	03	1トレ	3153_M012	02	遺構検出
3144_M198	03	1トレ	3154_M013	02	遺構検出
3145_M199	03	1トレ	3155_M014	02	遺構検出

第197図 鼠多門調査区出土遺物 金属15



第198図 鼠多門調査区出土遺物 金属 16



- | | | | | | |
|-----------|----|------------------|-----------|----|------------|
| 3176_C002 | C2 | 石垣1-27 裏込め | 3184_C003 | C2 | 斜路 Aトレ 南アゼ |
| 3177_C125 | E4 | S016 | 3185_C004 | C3 | 斜路 |
| 3178_C001 | B3 | 馬糞庫 コンクリ床面下 | 3186_C111 | C4 | 斜路 1層 |
| 3179_C005 | C4 | 馬糞レンガ基礎 | 3187_C103 | C4 | 斜路 小石層 |
| 3180_C126 | D4 | レンガ建物基礎V 掘方下 焼土層 | 3188_C104 | C4 | 斜路 |
| 3181_C110 | D4 | レンガ基礎内 近代埋土 | 3189_C105 | C4 | 斜路 |
| 3182_C107 | D4 | レンガ基礎内 近代埋土 | 3190_C112 | C4 | 斜路 縦断アゼ北 |
| 3183_C116 | C4 | コンクリ基礎内 | 3191_C113 | C4 | 斜路 縦断アゼ北 |

0 (1:2) 10cm

第199図 鼠多門調査区出土遺物 金属17



3192_C118



3193_C120



3194_C119



3195_C115



3196_C121



3197_C124



3198_C122



3199_C123



3200_C127



3201_C114



3202_C102



3203_C117



3204_C106



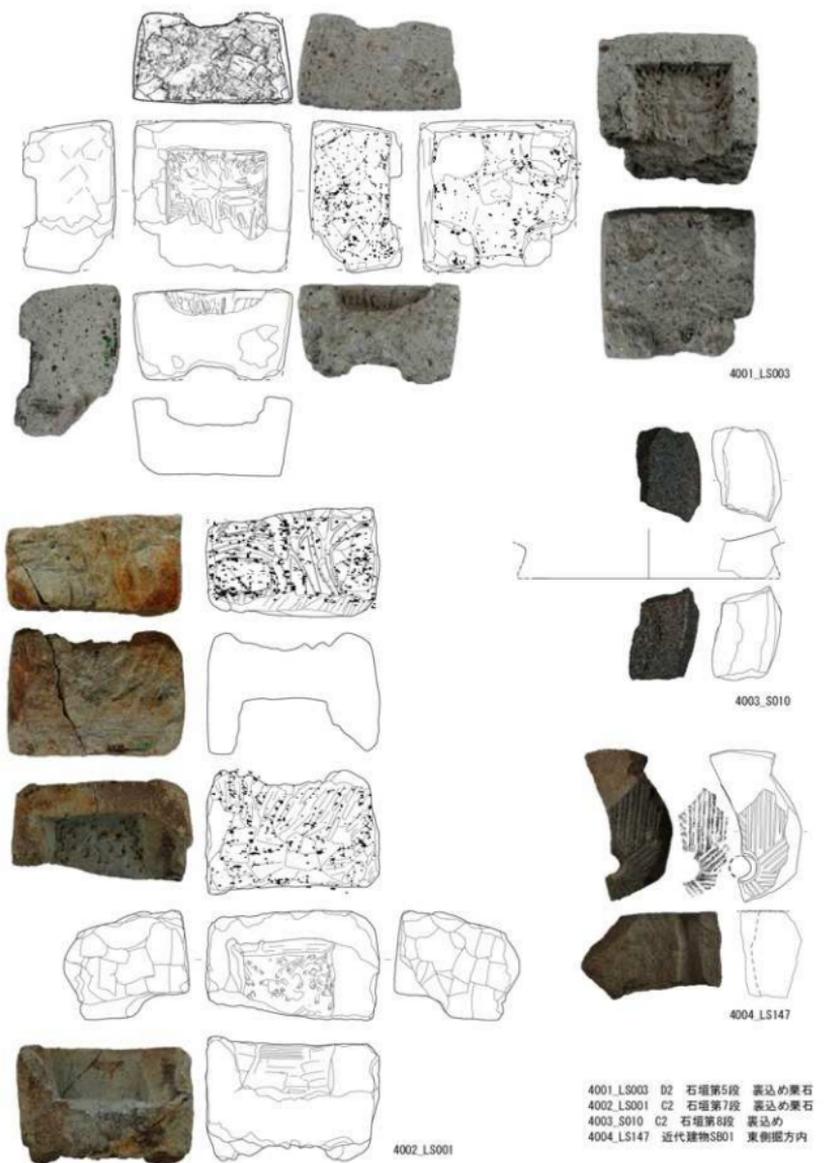
3205_C108



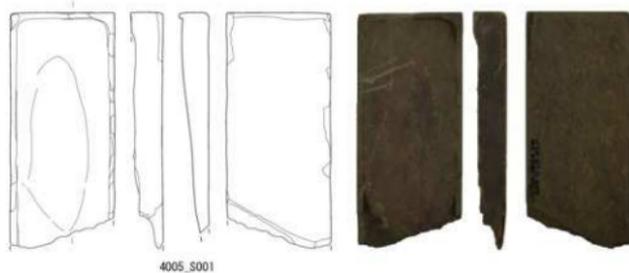
3206_C109

- 3192_C118 C4 斜路 縦断アゼ北
- 3193_C120 D4 斜路 縦断アゼ北
- 3194_C119 C4 善所階段0-9段 8階
- 3195_C115 D4 善所階段南北アゼ 8階
- 3196_C121 D3 善所中央 近代整地土
- 3197_C124 D3 善所北辺 近代整地土
- 3198_C122 D3 善所西辺外
- 3199_C123 D3 善所西辺外
- 3200_C127 D3 善所 遺構検出 近代埋土
- 3201_C114 B5 土手状遺構上面 近代埋土
- 3202_C102 D3-4 近代階
- 3203_C117 B5-6 近代遺構土
- 3204_C106 C5 溜槽南辺 検出面
- 3205_C108 C5 溜槽東側埋設場バ管据方
- 3206_C109 B5 遺構検出

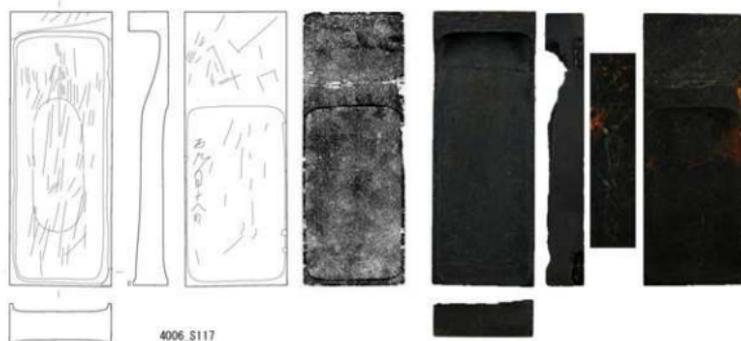
0 (1:2) 10cm



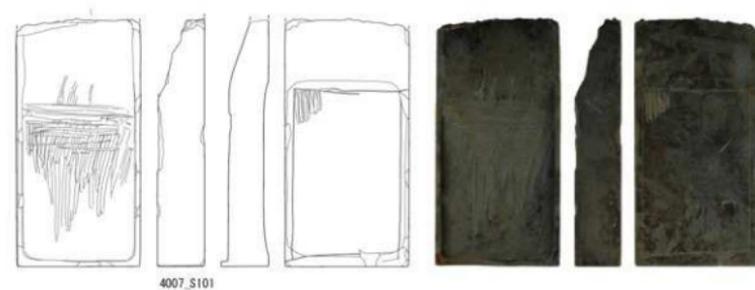
第201図 鼠多門調査区出土遺物 石1



4005_S001



4006_S117



4007_S101



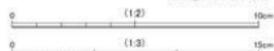
4008_S118



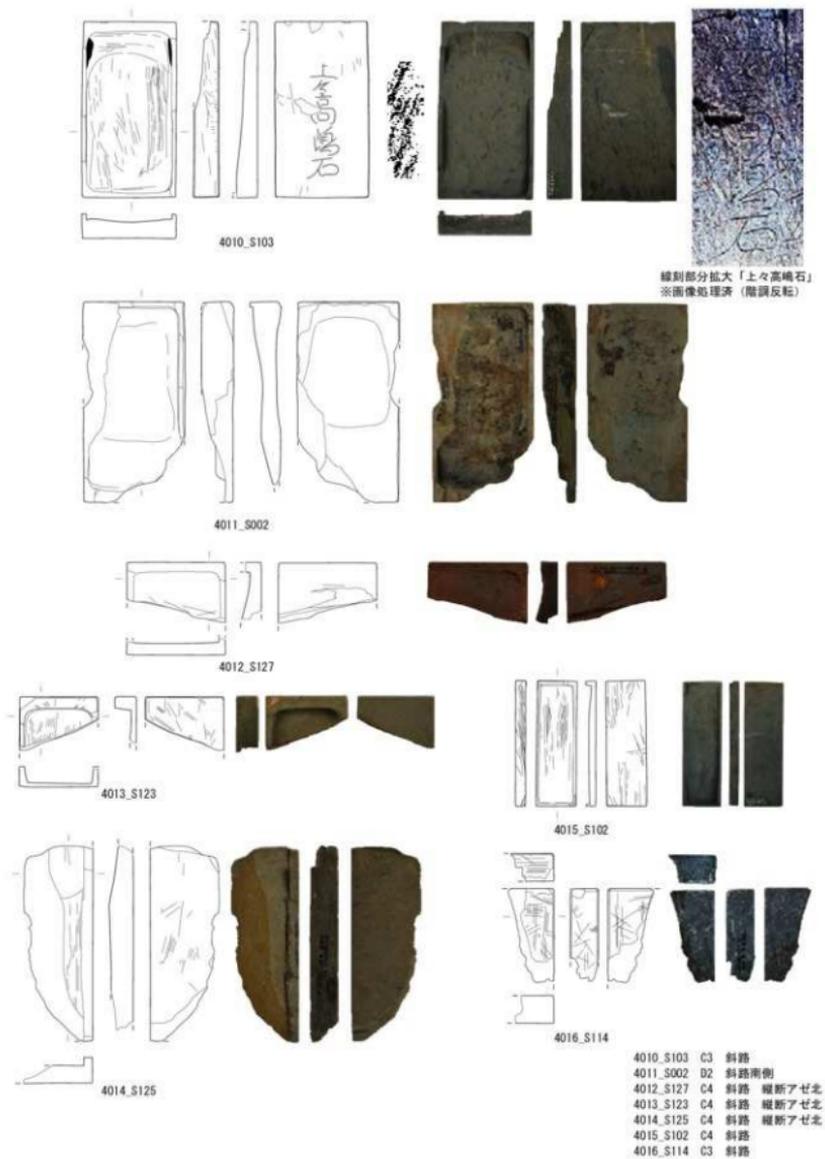
4009_S113

- 4005_S001 D3 閉塞部南北アゼ (石垣第4段裏)
 4006_S117 E4 土管掘方
 4007_S101 D3 斜路埋土
 4008_S118 CS-6 近代建物基礎南側方形遺構
 4009_S113 D4 コンクリ基礎積乱

4009_S113 (S=1/2)



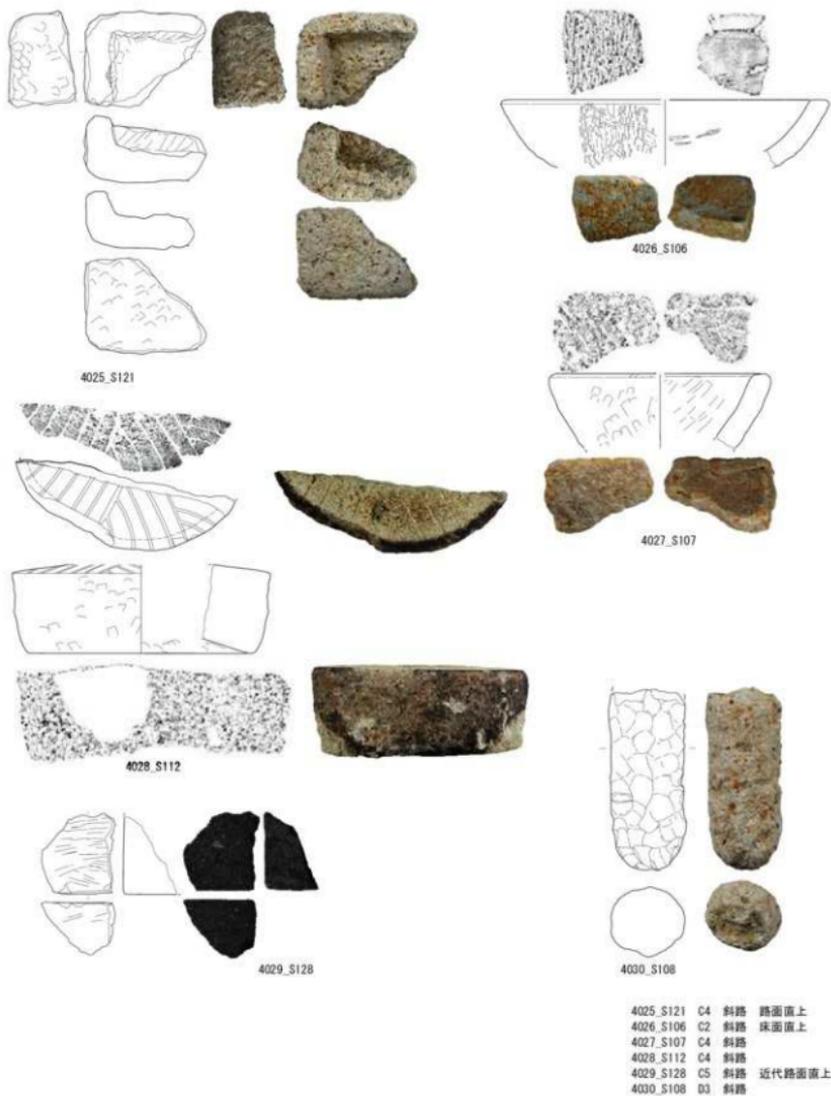
第202図 鼠多門調査区出土遺物 石2



第 203 図 鼠多門調査区出土遺物 石 3



第204図 鼠多門調査区出土遺物 石4



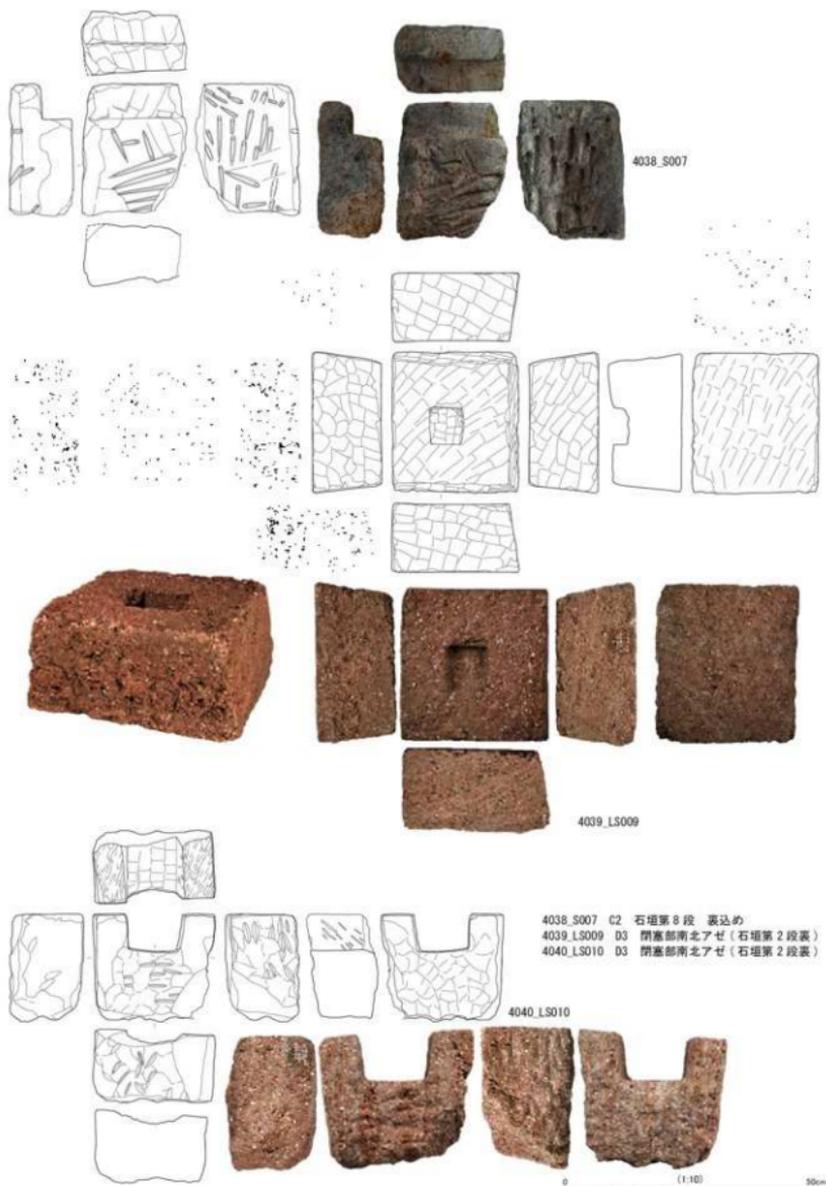
4030_S108 (S=1/3)



第 205 図 鼠多門調査区出土遺物 石 5



第206図 鼠多門調査区出土遺物 石6



4038_S007

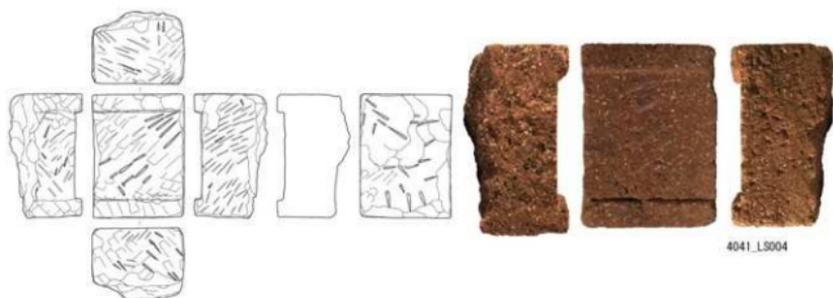
4039_LS009

4038_S007 C2 石垣第6段 裏込め
 4039_LS009 D3 階裏部南北アゼ(石垣第2段裏)
 4040_LS010 D3 階裏部南北アゼ(石垣第2段表)

4040_LS010

0 10 50mm (1:10)

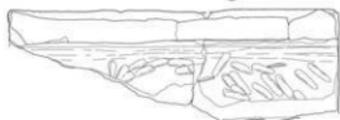
第 207 図 鼠多門調査区出土遺物 石 7



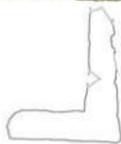
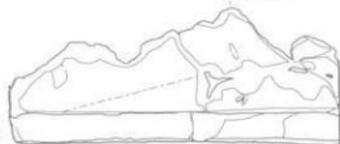
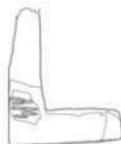
4041_LS004



外底面



内底面



4042_LS110



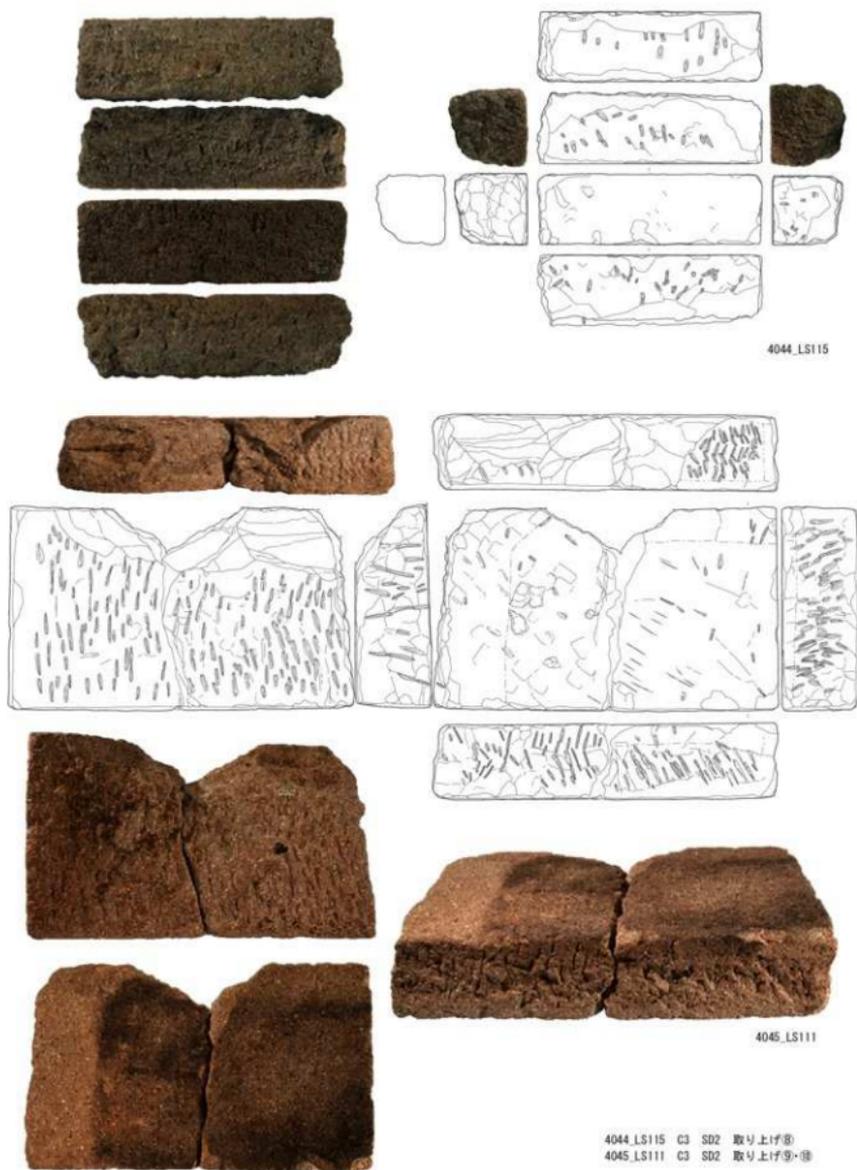
4043_LS109

4041_LS004 D2 地点不明
4042_LS110 C3 S02 取り上げ部(㊦)
4043_LS109 D3 S02 取り上げ部

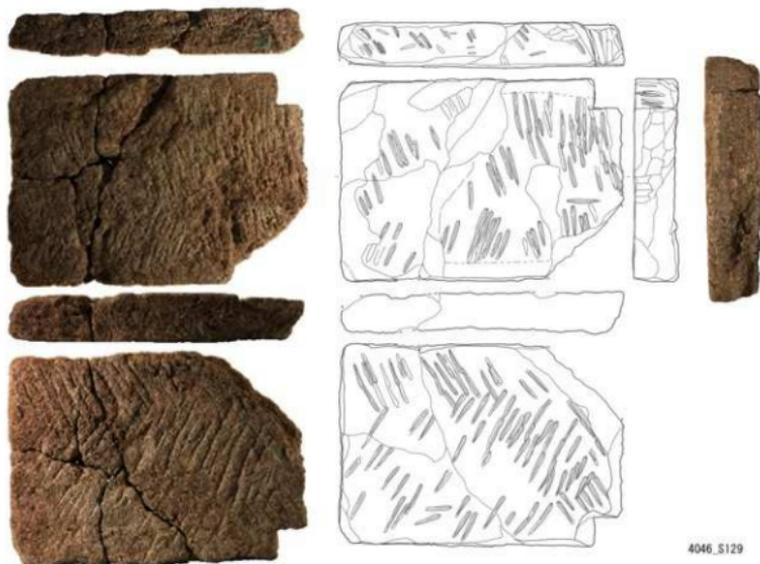


0 (1:10) 50mm

第 208 図 鼠多門調査区出土遺物 石 8



第 209 図 鼠多門調査区出土遺物 石 9



4046_S129



4047_LS121

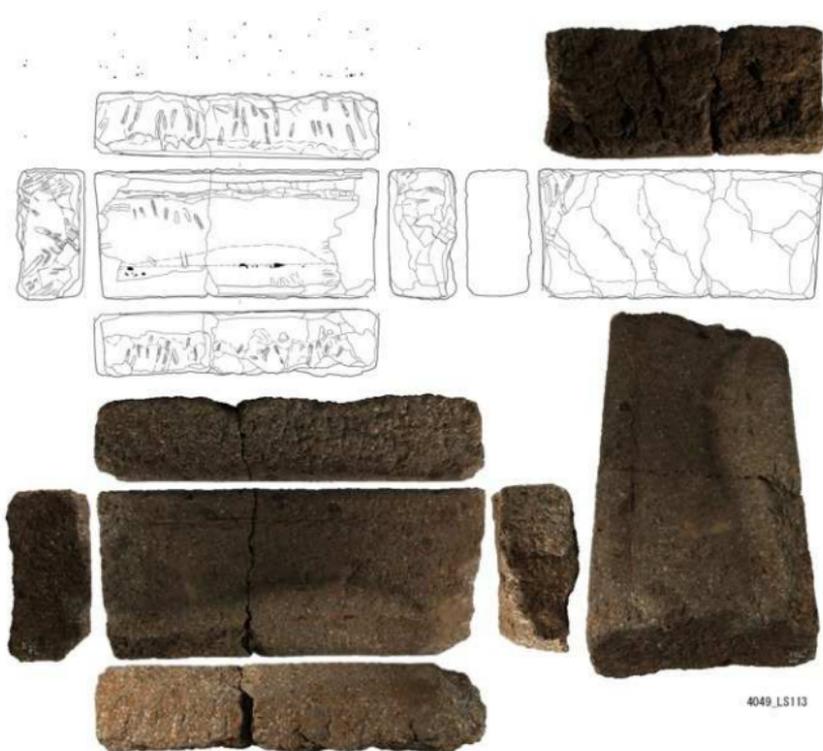
4046_S129 C5 斜路北侧溝 SD4 抜取り埋土 石 96
4047_LS121 C5 斜路 SD9

0 (1:10) 50mm

第 210 图 鼠多門調査区出土遺物 石 10



4048_LS148

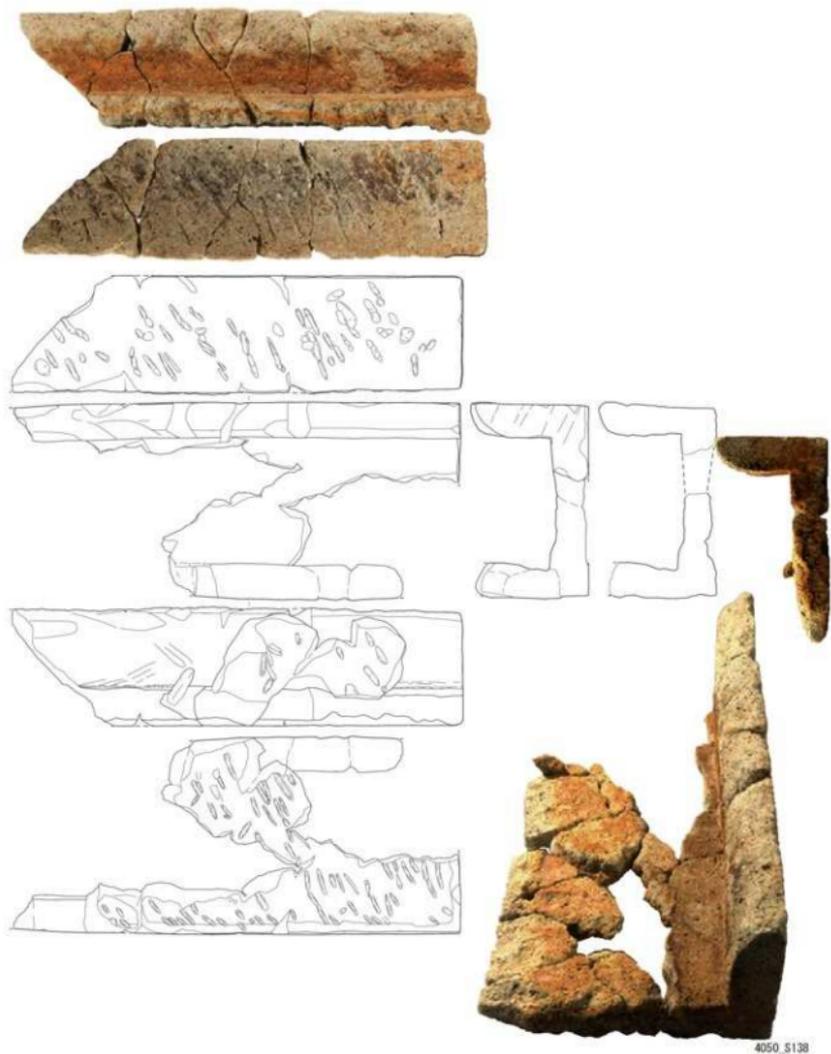


4049_LS113

4048_LS148 E4 S016 近代埋土
4049_LS113 C2 門部No.2

0 (1:10) 50mm

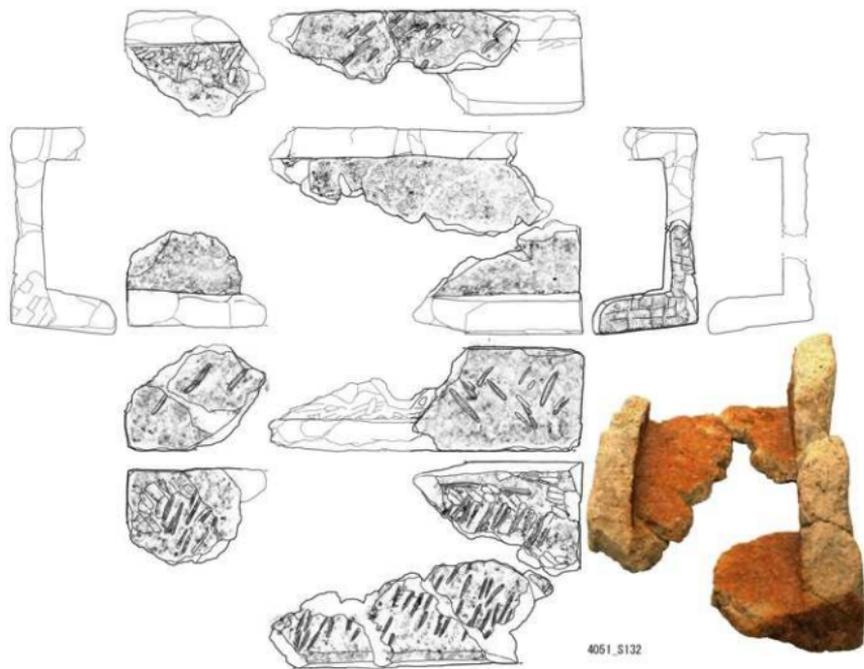
第211図 鼠多門調査区出土遺物 石11



4050_S138 D3 門背面 石材1

0 (1:10) 50mm

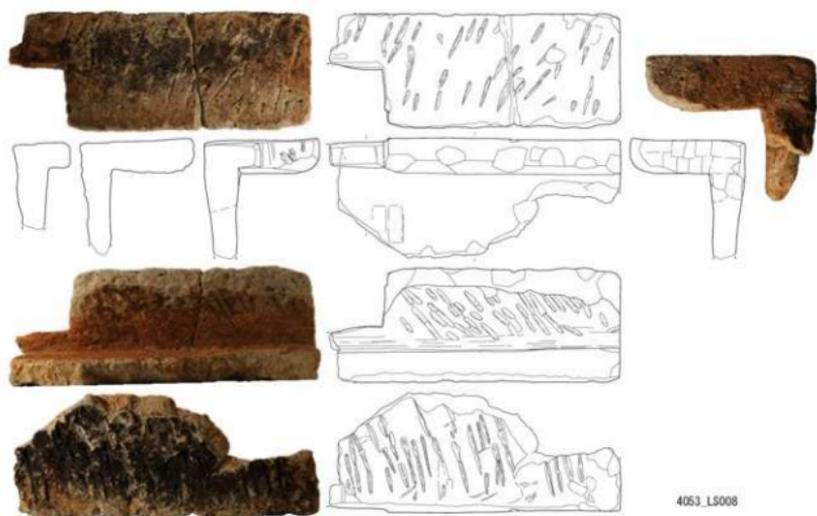
第 212 図 鼠多門調査区出土遺物 石 12



4051_S132 C3 - D4 門背面 №.14
4052_LS141 D3 門背面滑料

0 (1:10) 50mm

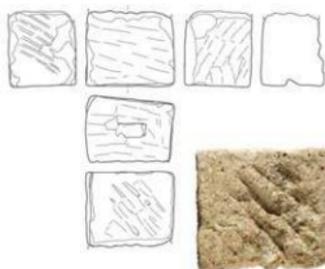
第 213 图 鼠多門調査区出土遺物 石 13



4053.LS008



4054.LS145

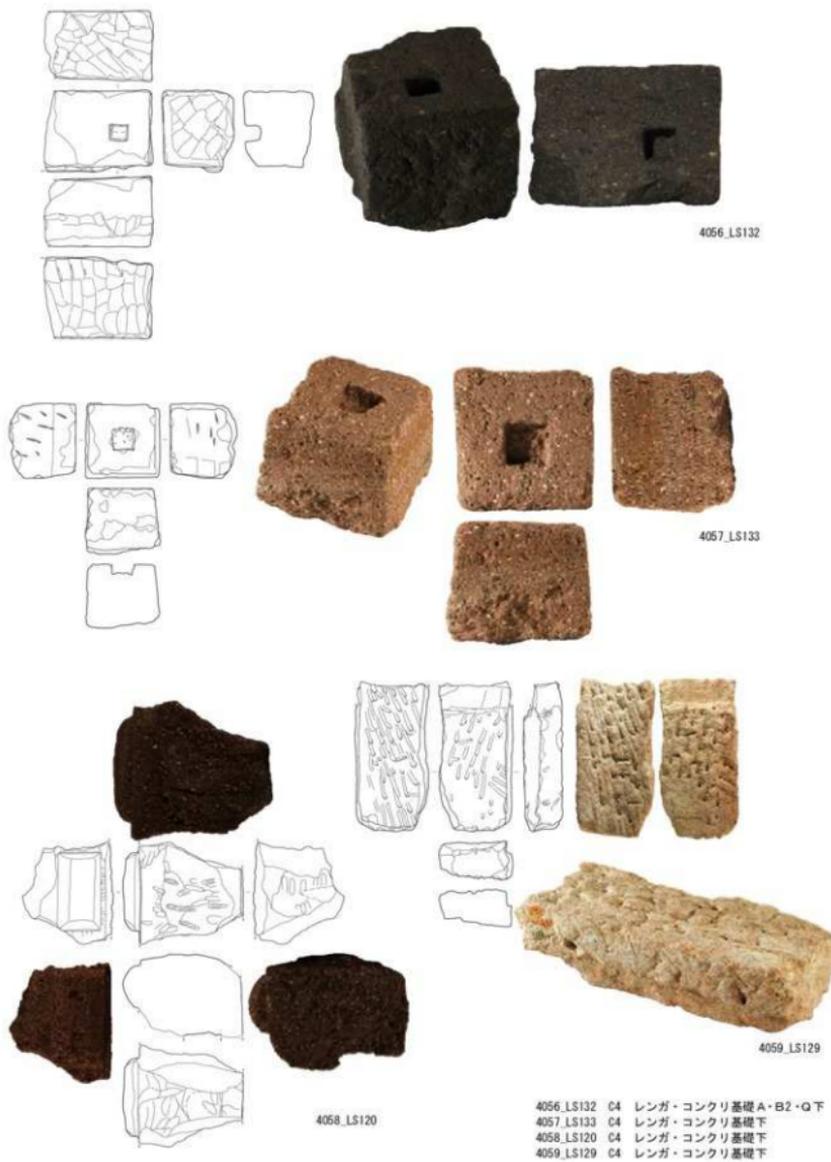


4055.LS134

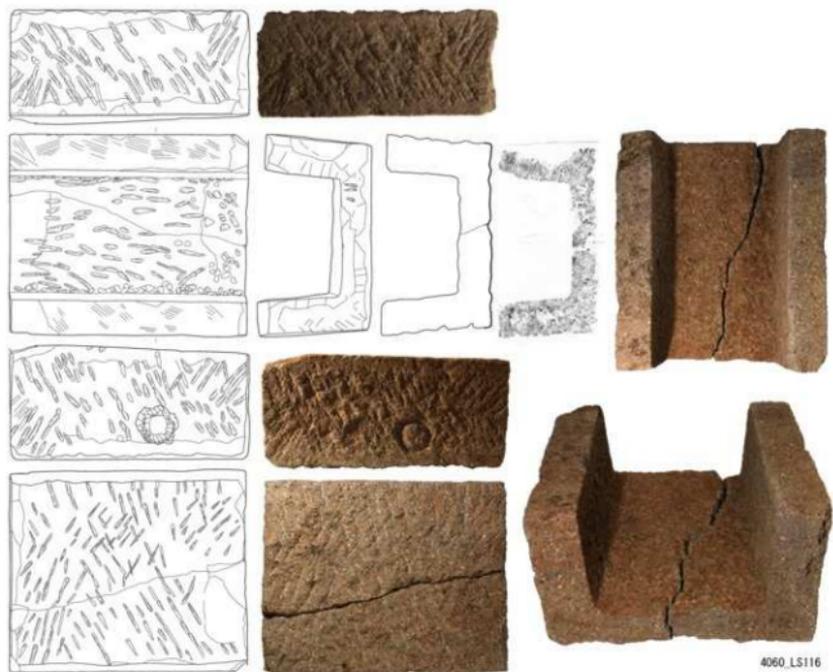
4053.LS008 C3 北側門後柱撥乱内
 4054.LS145 D4 レンガA・B2・O基礎
 4055.LS134 D4 レンガ・コンクリ基礎下

0 (1:10) 50mm

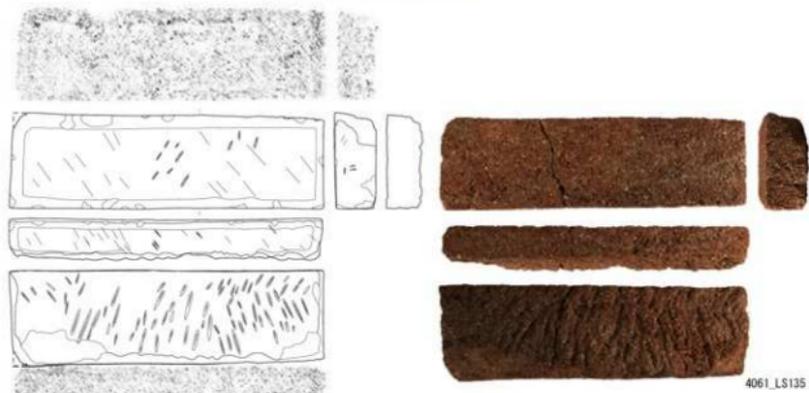
第 214 図 鼠多門調査区出土遺物 石 14



第 215 図 鼠多門調査区出土遺物 石 15



4060_LS116

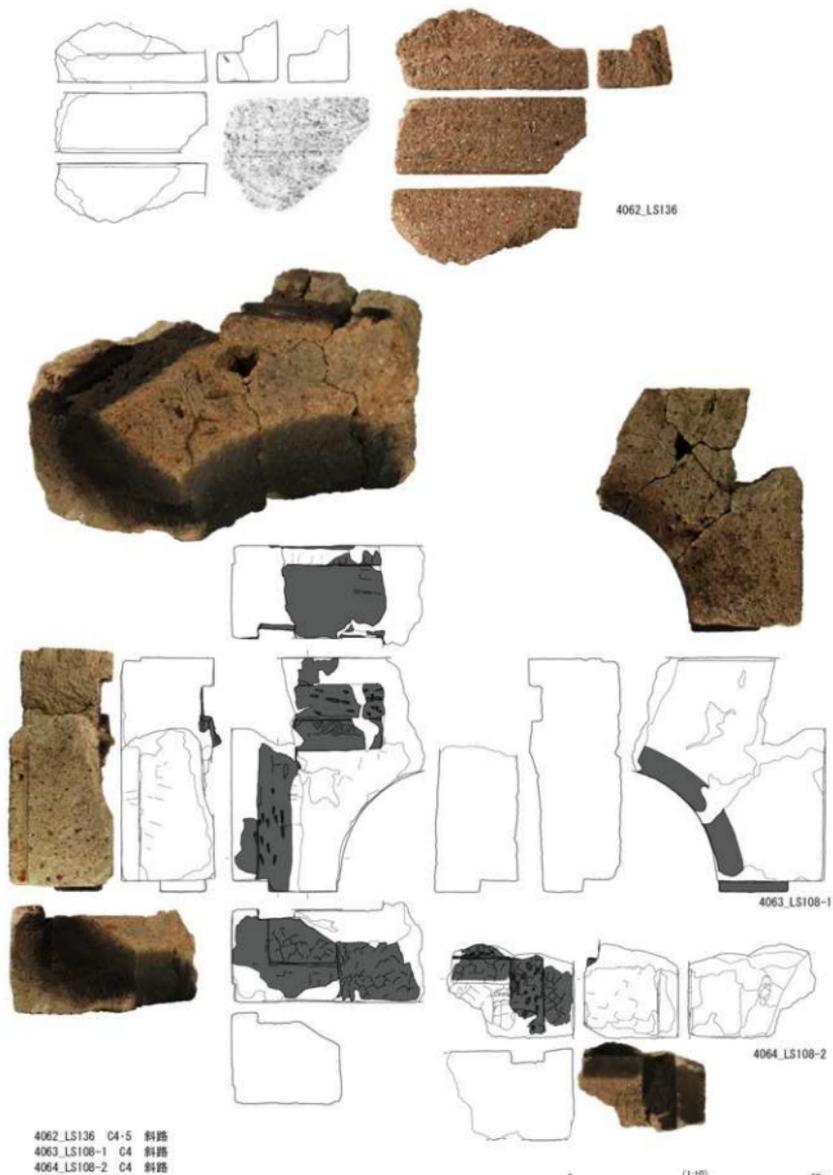


4061_LS135

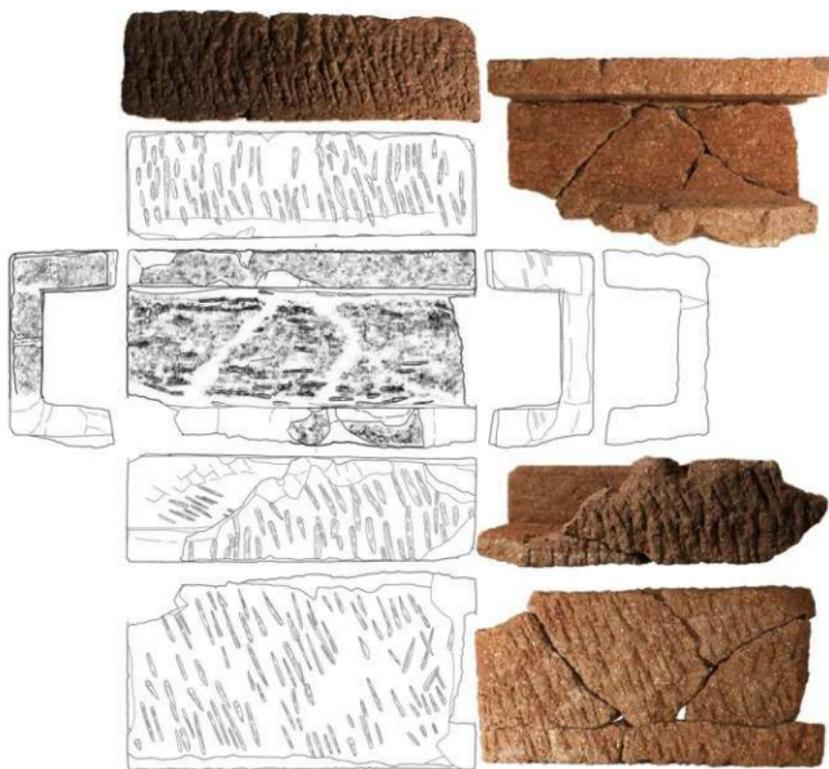
4060_LS116 C4-5 斜踏
4061_LS135 C4-5 斜踏

0 (1:10) 50mm

第 216 图 鼠多門調査区出土遺物 石 16



第 217 图 鼠多門調査区出土遺物 石 17



4065_LS130

4065_LS130 C4-5 斜路

0 (1:10) 50mm

第 218 图 鼠多門調査区出土遺物 石 18



第 219 图 鼠多門調査区出土遺物 石 19



4070_LS106



4071_LS107

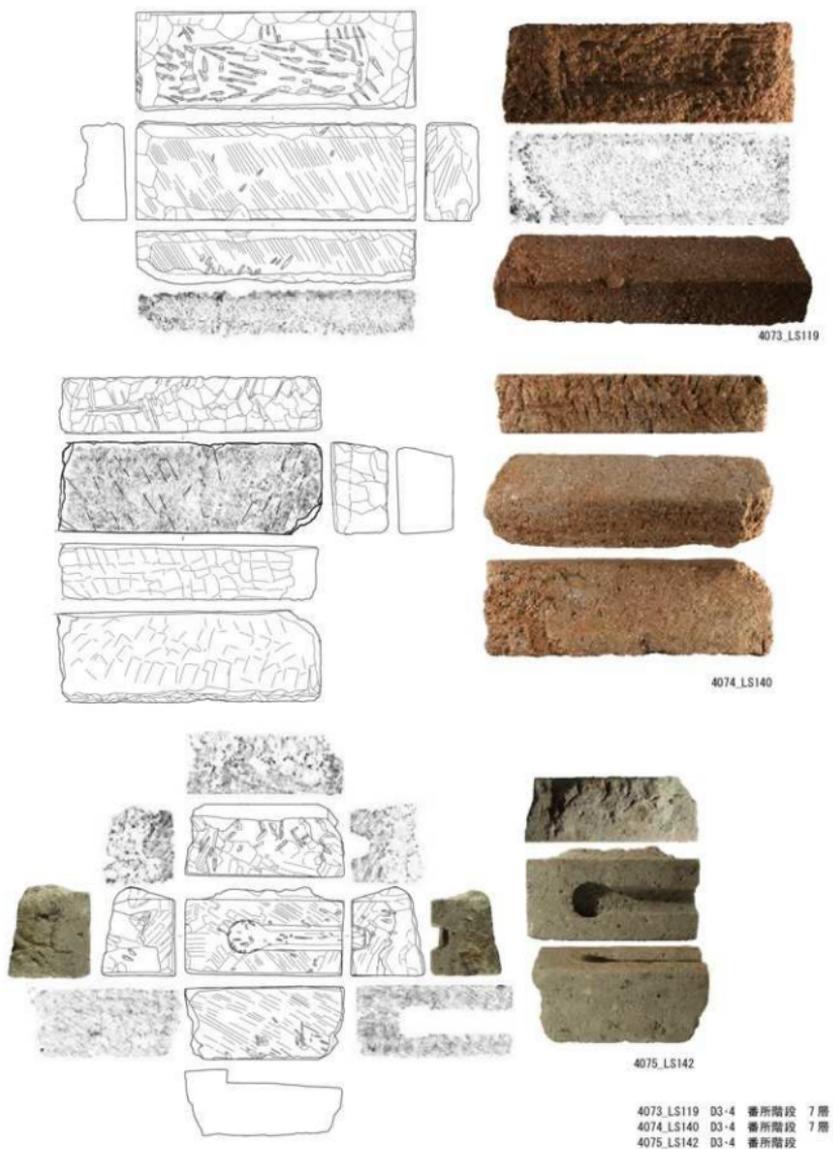


4072_LS138

4070_LS106 D3 南側法面
4071_LS107 D3 南側法面
4072_LS138 閉塞石垣の後ろ

0 (1:10) 50mm

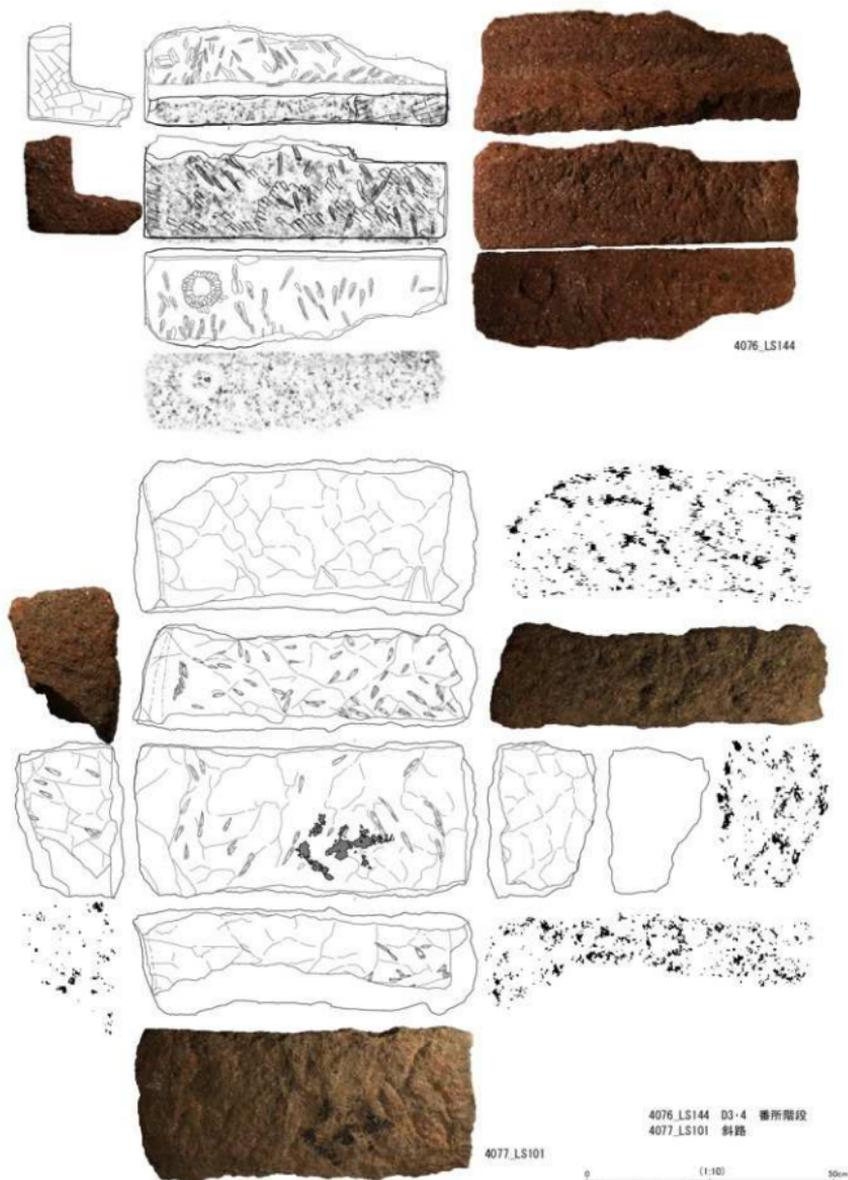
第 220 図 鼠多門調査区出土遺物 石 20



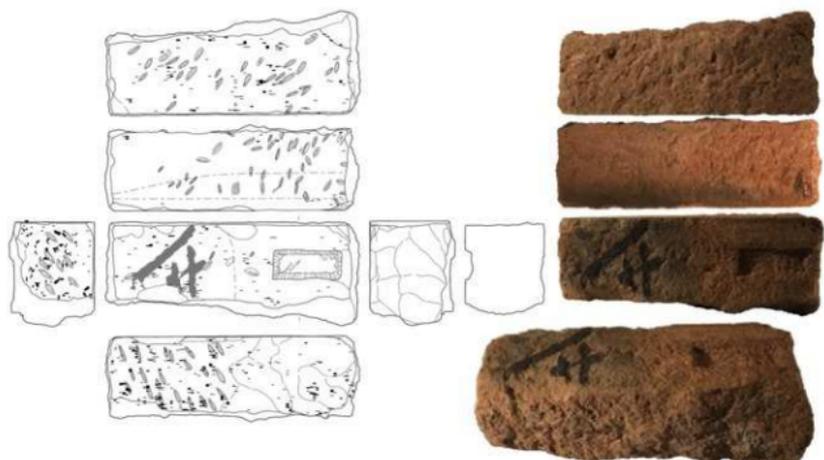
4073_LS119 D3-4 番所階段 7層
 4074_LS140 D3-4 番所階段 7層
 4075_LS142 D3-4 番所階段

0 (1:10) 50mm

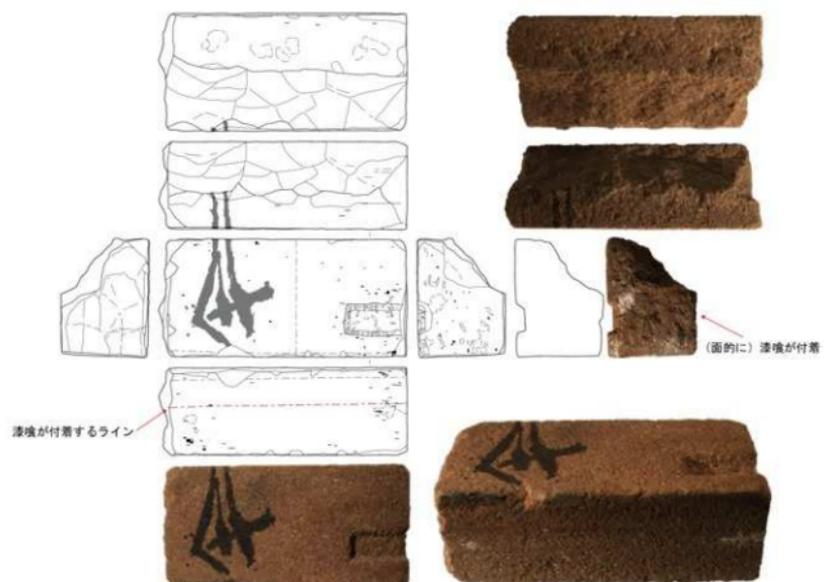
第 221 図 鼠多門調査区出土遺物 石 21



第 222 図 鼠多門調査区出土遺物 石 22



4078_LS006

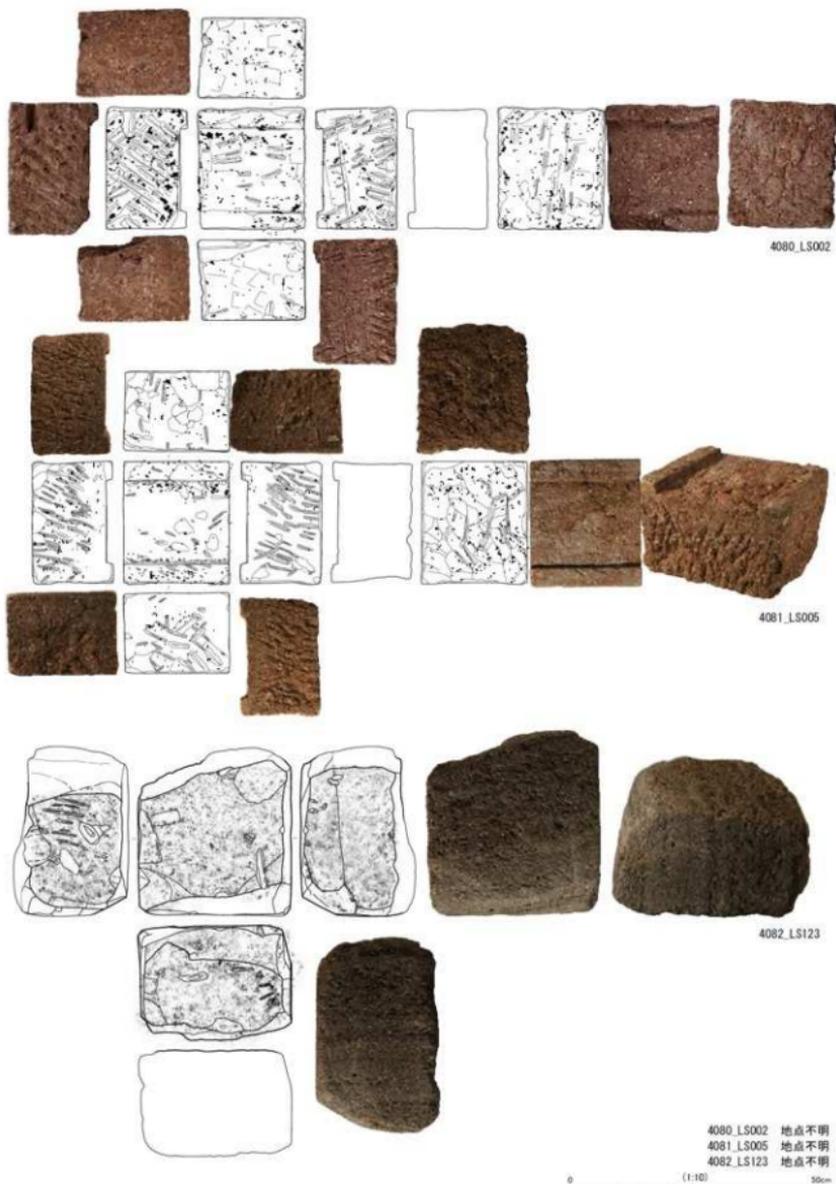


4079_LS007

4078_LS006 斜路
4079_LS007 斜路

0 (1:10) 50mm

第 223 図 鼠多門調査区出土遺物 石 23



第 224 図 鼠多門調査区出土遺物 石 24



穿孔部分拡大

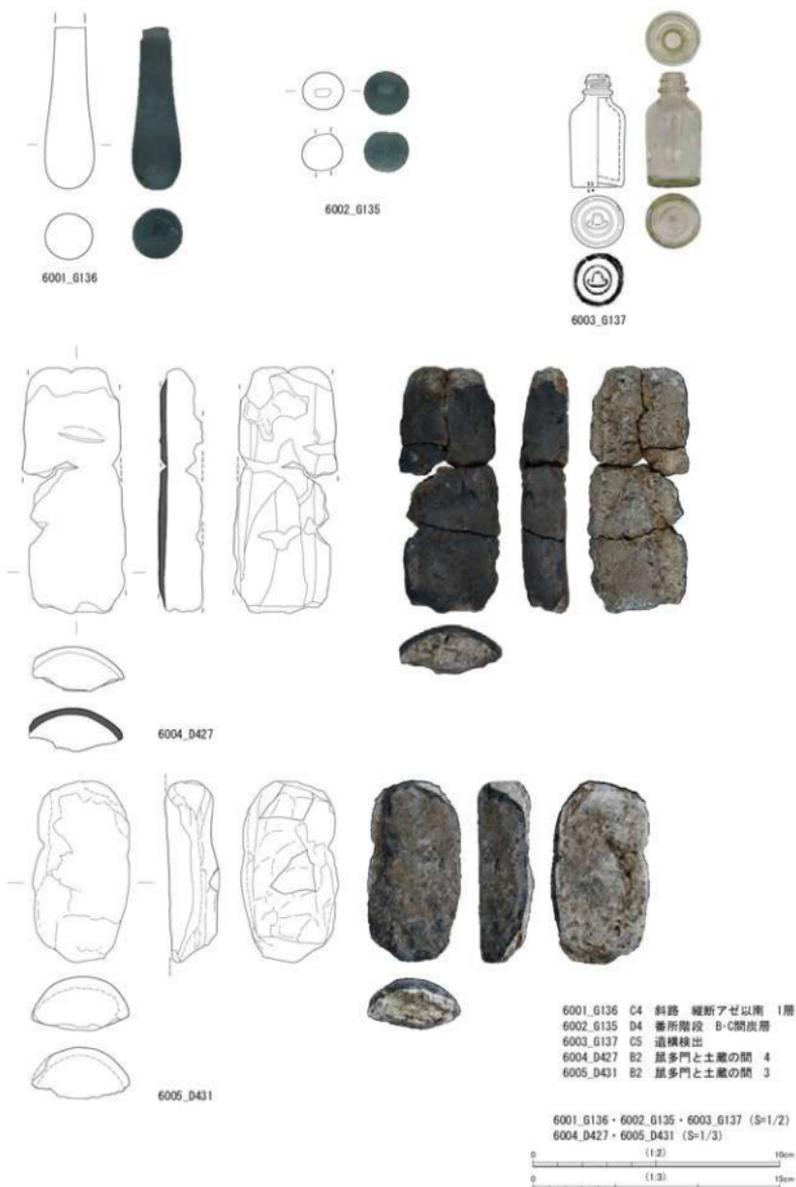


4083_LS102

4083_LS102 馬糞庵礎石

0 (1:10) 50mm

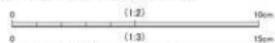
第 225 図 鼠多門調査区出土遺物 石 25



第 226 図 鼠多門調査区出土遺物 その他 1



- 6006_D432 B2 鼠多門と土蔵の間
 6007_D425 B2 馬糧庫内 近代整地土
 6008_D426 E3 近代建物S801西側掘方東壁 近代整地土
 6009_D420 側壁石垣(南) C類墓込め
 6010_D423 側壁石垣(南) C類墓込め
 6011_D424 D4 番所南東瓦溜北半
 6012_D419 側壁石垣南東隅
- 6009_D420・6010_D423・6011_D424・6012_D419 (S=1/2)
 6006_D432・6007_D425・6008_D426 (S=1/3)



第 227 図 鼠多門調査区出土遺物 その他 2

第7表 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器観察表1

図版 番号	報告 番号	実測 番号	種別	器種	グランド 出土層位・遺構等	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	口径 φ/12	口径 φ/12	成形・整形 痕跡 装飾等	胎土・色調等	形状状態	産地・年代等・備考
40	1001	B068	磁器	碗	B3 馬場南側溝 コンクリート下		4.8	(4.8)		3	ロクロ 透明、ビンホール有、 気泡有 染付、見込み文有	製成、空刷有 灰白		肥前
40	1002	B114	磁器	皿	B2 馬場内コンクリ 代整理土 B3 斜路 南芝ノモ 畑尻	14.8	9.0	4.15	4	12	ロクロ 透明、気泡少 染付(コバルト・型 染有り) 見込み文有	製成 白	輪花、都 の目印 高台	瀬戸・美濃 18C末～19C初 見込み彫刻された五弁 花
40	1003	B271	磁器	碗	B3 近代建物北側壁方	8.0	3.8	3.2	4	5	ロクロ 透明 染付	製成 灰白		肥前
40	1004	B361	磁器	碗	B5 近代建物側壁方壁面	9.8		3.9	2		ロクロ 透明 赤絵(赤・黒・不明)、 口紅	製成 白	環状形	瀬戸・美濃
40	1005	B304	磁器	碗	C5・6 近代建物基礎南側方形 遺構		3.4	(4.0)		5	ロクロ 透明 染付、見込み 文有	製成 白		肥前 18C末～19C初
40	1006	B378	磁器	碗	B5 瀬戸土管(土)壁方 遺構検出	10.4	3.8	「3.85」	1	12	ロクロ 透明、気泡有 赤絵(赤・黒・黄・部)、 見込み文有	製成 白		同上産元
41	1007	B331	磁器	碗	B5 レンガ基礎外周東 側 遺物集中1 B5-C1 レンガ基礎外 周東側	10.4	3.8	5.8	1	9	ロクロ 透明、気泡含む 見込み文有	製成 白	環状形	瀬戸・美濃
41	1008	B329	磁器	碗	B5 レンガ基礎外周東 側 遺物集中1	10.4	4.4	3.8	8	12	ロクロ 透明 染付	製成 白	環状形 輪高台	各側面アラビア数字「3」、 内縁、縁線3本1本1
41	1009	B379	磁器	皿	B5 レンガ基礎外周東 側 遺物集中1 B5-C1 レンガ基礎外 周東側	13.8	6.8	3.4	4	1	ロクロ 透明、貫入著しい 染付	製成 灰白	輪高台	アラビア数字「3」、縁線1 本、ハリ目跡1本(内縁)
41	1010	B332	磁器	皿	B5 レンガ基礎外周東 側 遺物集中1		6.0	(2.1)		12	ロクロ型押し 白磁、気泡多	製成 白	菊並、都 の目印 高台	
41	1011	B330	磁器	皿	B5・C5 レンガ基礎外周東側	13.2	5.8	3.6	6	12	ロクロ 透明、気泡含む 染付	製成 白	都の目印 環高台	瀬戸・美濃
41	1012	B374	磁器	水筒	B5・C5 レンガ基礎外周北側 近代埋土	1.2		(1.1)		12	型押し 透明	製成 白	菊花状	肥前
41	1013	B307	磁器	碗	C4 レンガ基礎区画北側 斜路 埋断アゼ北 部・黄褐色	8.7	3.7	5.8	6	4	ロクロ 透明 染付(生掛け少) 見込み文有	製成 白	標準半縁 形	肥前 18C後～19C初
41	1014	B413	磁器	碗	B4 レンガ基礎 W2 面方西 側 土層検出	10.8		(3.8)		1	ロクロ 透明 染付	製成 白		肥前
41	1015	B247	磁器	紅埴 口	C4 敷居帯レンガ基礎 敷地土	6.3		(2.45)		2	ロクロ 透明 赤絵	製成 灰白		肥前
41	1016	B059	磁器	皿	C4 馬場レンガ基礎	13.2	7.6	4.1	3	4	ロクロ 透明 染付	製成 灰白		肥前 高台部砂付着
41	1017	B351	磁器	蓋	B4 レンガ基礎内	10.6	つまみ 6.3	2.85	2	つまみ 4	ロクロ 透明、貫入有 染付、内周部内面文 様有(ササガ)	製成 白	碗蓋	肥前 18C末～19C初 内面目録有
42	1018	B333	磁器	小碗	C4 コンクリ基礎4層方 斜路 埋断アゼ北 部・黄褐色	5.9	2.1	3.5	9	9	ロクロ 透明 染付	製成 灰白		肥前
42	1019	B300	磁器	碗	C4 コンクリ基礎6層方 コンクリ基礎下時石内 レンガ基礎敷方 斜路 埋断アゼ北 部・黄褐色	8.5	3.3	3.6	3	11	ロクロ 透明 染付 見込み文有	製成 灰白	標準半縁 形	肥前 18C末～19C 見込み五弁花(手描き)
42	1020	B344	磁器	碗	C4 コンクリ基礎6層方 斜路 埋断アゼ 部・黄褐色	8.5		(3.3)		6	ロクロ 透明 染付(生掛け)	製成 白	標準半縁 形	18C後～19C
42	1021	B314	磁器	碗	C1 コンクリ基礎敷方 斜路 埋断アゼ北 部・黄褐色	8.8	3.8	5.45	5	6	ロクロ 透明 染付(黒描き) 見込み文有	製成 白	標準半縁 形	肥前 18C末～19C
42	1022	B308	磁器	碗	C4 コンクリ基礎敷方 斜路 埋断アゼ北 部・黄褐色	10.4	3.6	5.1	5	4	ロクロ 透明 染付 見込み文有	製成 白	小広葉形	肥前 18C後～19C
42	1023	B327	磁器	碗	C4 コンクリ基礎下時石内 斜路 埋断アゼ北 部・黄褐色 埋断アゼ北 部・黄褐色	8.8	3.1	5.1	5	5	ロクロ 透明 染付、見込み文有	製成 白	標準半縁 形	肥前 18C後～19C
42	1024	B267	磁器	皿	B2 門以西溝内 石目 10～9下右組溝 埋土	10.4	6.0	2.0	6	5	ロクロ 透明 染付(コバルト)	製成 白		瀬戸・美濃
42	1025	B352	磁器	鉢	B4 斜路 側溝303(埋 断アゼ) C4 斜路 埋断アゼ北 部・黄褐色	18.2		(4.1)		2	ロクロ 内・透明、気泡多 外・青磁釉 有磁染付	製成 白	輪花	肥前
42	1026	B311	磁器	碗	C4 斜路 埋断アゼ北 部・黄褐色 斜路 埋断内	8.4		(4.1)		6	ロクロ 透明、ビンホール、 貫入あり 染付(黒描き)	製成 白		肥前 18C末～19C

第8表 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器観察表2

図号	報告番号	実測番号	種別	器種	グリップ 出土層位・遺物等	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	口径 (D) φ/12	底径 (D) φ/12	成形・整形 輪削 装飾等	胎土・色調等	形状特徴	産地・年代等・備考
42	1027	R354	磁器	碗	D4 新路南側溝 埋土		3.3	(2.9)		10	ロクロ 透明 発行、裏筋、見込み 文有	製磁 白		肥前 新設「二重方形特内溝筋」、 見込み文有
43	1028	R021	磁器	碗	C2 石垣第6段 裏込 め裏石 埴焼灰 C2 新路 Aトレンチ 北アゼ 埴焼灰 C3 新路 南北アゼ 埴焼灰	9.1	3.9	4.1	4	7	ロクロ 透明、貫入有	製磁 灰白	浅平碗形	肥前 19C 前
43	1029	R142	磁器	碗	D2 石垣第6段 裏込め裏石 埴焼灰	8.6		(3.8)	1		ロクロ 透明、貫入有 発行(コンニャク印 見)	製磁 灰白		肥前 19C 前
43	1030	R016	陶器	碗	C2 新路 埴焼灰 石垣第6段 裏込め裏 石 埴焼灰	12.0	5.4	7.0	3	4	ロクロ 灰焼、貫入有 陶地発行	粗砂少 灰		
43	1031	R134	磁器	皿	D2 石垣第2段裏 新路		8.0	(2.0)		3	ロクロ 透明 発行	製磁 灰白		肥前 北海焼熟、滑着有
43	1032	R109	磁器	鉢	D2 石垣第1段 裏込め		12.4	(4.1)		2	ロクロ 透明、青磁軸 青磁発行	製磁 白		肥前 外底砂行着
43	1033	R072	磁器	皿口	C2 新路 埴焼灰 石垣第6段 裏込め裏 石	9.0	7.0	6.3	2	1	ロクロ 透明 発行	緻密 灰白	輪花	肥前 19C 末～19C
43	1034	R056	磁器	皿口	C2 新路 石垣第6段 裏込め裏石		6.2	(3.7)		5	ロクロ 透明 発行	緻密 灰白	軽の目印 痕有	肥前 18C 末～19C
43	1035	R132	磁器	蓋物	D2 石垣第10段南面盛土	6.9	3.0	3.3	2	3	ロクロ 透明 発行	製磁 灰白		肥前
43	1036	R115	磁器	蓋	D2 石垣第6段 裏込 め裏石 埴焼灰 新路 埴焼灰	9.6 かさ9 8.4		(2.4)		4	ロクロ 透明 発行	製磁 灰白		肥前
43	1037	R015	磁器	花瓶	C2 石垣第6段 裏込 め裏石 埴焼灰 C2 新路 Aトレンチ 北アゼ 埴焼灰 C2 新路 埴焼灰 D3 新路 南北アゼ 原盛焼灰	7.6	7.2	14.1	12	6	型作り 透明 発行	製磁 灰白	口縁輪付 形	肥前 肥子接合時のクシ痕有、 外底面凹痕
43	1038	R071	磁器	水筒 カマ	C2 石垣第6段 裏込め裏石					不明	形作り 透明 色絵	製磁 灰白		肥前
43	1039	R401	磁器	蓋	柳野石原(南) B類 S1-13周辺裏込め	10.0 かさ9 8.5		(1.8)		2	ロクロ 透明 発行	製磁 白		肥前
44	1040	R205	磁器	碗	C3-4 新路 黒・黄焼 C3 新路北側法面	10.6	4.6	5.6	6	9	ロクロ 透明 発行、裏筋	製磁 白	丸形	肥前 黄焼「大明年製」
44	1041	R216	磁器	碗	C3-4 新路 黒・黄焼	9.4	3.7	5.0	11	11	ロクロ 透明、貫入有 発行、見込み文有	製磁 灰白	小広底形	肥前 19C 末～19C
44	1042	R343	磁器	碗	C4 新路 網断アゼ 黒・黄焼	11.8	4.9	6.1	1	5	ロクロ 透明 発行、裏筋	製磁 白		肥前 19C 黄焼「寛政長春」
44	1043	R282	磁器	碗	C3-4 新路 黒・黄焼	9.7	3.9	5.9	4	12	ロクロ 透明、貫入有 発行、見込み文有	製磁 灰白	丸形	肥前
44	1044	R305	磁器	碗	C5 新路 黒・黄焼 遺構検出	10.0	4.1	5.4	2	12	ロクロ 透明 発行	製磁 白		肥前
44	1045	R238	磁器	碗	C3-4 新路 黒・黄焼	(9.8)	(4.4)	5.6	3	6	ロクロ 透明、貫入着しい 発行、裏筋	緻密 白	丸形	肥前 黄焼焼れた「大明年製」
44	1046	R126	磁器	碗	D3 南北アゼ 新路南 法面 埴焼灰 C2 新路 埴焼灰	10.2	5.0	5.3		11	ロクロ 透明 発行、裏筋	製磁 白	丸形	肥前 黄焼角底
44	1047	R214	磁器	碗	C3 新路 黒・黄焼	9.8	4.0	5.1	6	6	ロクロ 透明、貫入有 発行	製磁 灰白	丸形	肥前
44	1048	R323	磁器	碗	C4 新路 網断アゼ 黒・黄焼	9.9	4.1	5.6	6	12	ロクロ 透明 発行、裏筋	製磁 白	丸形	肥前 黄焼二重方形特内「溝筋」
44	1049	R309	磁器	碗	C4 新路 網断アゼ北 黒・黄焼	9.8	4.1	5.25	1	6	ロクロ 透明 発行、裏筋	製磁 白	丸形	肥前 黄焼二重方形特内「溝筋」
45	1050	R006	磁器	碗	C2 新路 埴焼灰 C2 新路 Aトレンチ 北アゼ 埴焼灰 C2 新路 Aトレンチ 南アゼ 埴焼灰 D2 柳野石原(南)南 面盛土 埴焼灰	9.8	3.9	4.9	6	11	ロクロ 透明 発行	製磁 灰白		肥前 19C 初
45	1051	R094	磁器	碗	D2 新路 埴焼灰 D3 新路 埴焼灰・黄焼 D3 新路 埴焼灰 C3 新路 南北アゼ 埴焼灰 C3 新路 黒・黄焼	10.2	4.0	4.7	6	8	ロクロ 透明 発行	製磁 白	丸形	肥前 高台内に発行
45	1052	R280	磁器	碗	D3 新路 埴焼灰 黒・黄焼	10.1	3.4	4.5	3	9	ロクロ 透明 発行	製磁 灰白	浅平碗形	肥前

第9表 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器観察表 3

図版	報告 番号	実測 番号	種別	器種	グランド 出土層位・遺構等	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	口径 φ/12	口径 φ/12	成形・整形 輪郭 裝飾等	胎土・色調等	形状特徴	産地・年代等・備考
45	1052	R143	磁器	碗	D3 斜路 南北アゼ 窪地 焼成灰 硝焼 灰	9.4	3.4	4.8	4	2	ロクロ 透明 染付	艶黒 白	肥前	
45	1054	R227	磁器	碗	C4 斜路 黒・黄焼	10.1	3.5	4.8	11	7	ロクロ 透明 染付	艶黒 灰白	浅半球碗	肥前 転写小
45	1055	R110	磁器	碗	D2 柳屋石尾(南) 前面 土 黄焼灰 D2 柳屋石尾前面埋土 層硝焼灰 C2 斜路 Aトレンチ 硝焼灰 C3 斜路 焼灰	10.0	3.7	4.6	3	5	ロクロ 透明 染付、気泡多、ピン 点有	艶黒 白	浅半球碗	肥前 18C前
45	1056	R222	磁器	碗	C3 斜路 南北アゼ、 斜路 黒・黄焼	10.3	3.4	4.8	6	6	ロクロ 透明、貫入あり、ピ ン点有	艶黒 灰白	浅半球碗	肥前 18C前
45	1057	R342	磁器	碗	C4 斜路 観断アゼ 黒・黄焼	8.8	3.5	4.8	3	7	ロクロ 透明 染付	艶黒 白	浅半球碗	肥前 18C前
45	1058	R054	磁器	碗	C2 斜路 硝焼灰	10.2		(4.1)	4		ロクロ 透明 染付	艶黒 灰白		肥前
46	1059	R159	磁器	碗	C3 斜路 南北アゼ 硝焼灰 D3 斜路 黒・黄焼	8.9	3.2	5.1	小片	1	ロクロ 透明 染付、見込み文有	艶黒 灰白	丸形	肥前 見込み文竹梅文?
46	1060	R059	磁器	碗	C3 斜路 焼灰・黄焼	8.9	4.0	4.7	6	6	ロクロ 透明 染付、黄跡	艶密 灰白		肥前
46	1061	R318	磁器	碗	C4 斜路 観断アゼ北 黒・黄焼	10.2	3.7	5.1	9	12	ロクロ 透明 染付、黄跡	艶黒 白		肥前 高台付者、黄跡二重方 形枠内(漆器)
46	1062	R091	磁器	碗	D3 斜路 焼灰・黄焼	8.8	3.6	5.5	4	12	ロクロ 透明、気泡多 黄跡	艶黒 白		肥前 黄跡内縁
46	1063	D054	磁器	碗	C2 斜路 焼灰	8.6	3.7	4.8	8	10	ロクロ 透明	艶黒 白	丸形	白磁
46	1064	R387	磁器	碗	C4 斜路 観断アゼ北 黒・黄焼	7.4		(X.9)	3		ロクロ 透明 染付、色絵(赤・金?)	艶黒 白	丸形	肥前
46	1065	R348	磁器	碗	C4 斜路 路面直上 黒・黄焼	9.7		(4.0)	1		ロクロ 透明、貫入有 染付	艶密 白	丸形	肥前
46	1066	R135	磁器	碗	D2 斜路有側ライン 焼灰	9.9		(4.3)			ロクロ 透明 染付	艶黒 灰白	丸形	肥前
46	1067	R035	磁器	碗	C3 斜路 Aトレンチ 東端 硝焼灰	9.0		(4.3)	10		ロクロ 透明 染付	艶密 灰白	丸形	肥前 18C後
46	1068	R212	磁器	碗	C3 斜路 黒・黄焼	8.0	3.1	5.4	5	12	ロクロ 透明 染付、見込み文有	艶黒 白	楕圓半球 形	肥前 18C末～19C前 見込み五弁花(手摺き)
47	1069	R006	磁器	碗	C3 柳屋石尾(北) 前面 焼灰・黄焼	8.6	3.5	5.5	4	5	ロクロ 透明 染付、見込み文有	艶密 灰白	楕圓半球 形	肥前 18C末～19C前 見込み五弁花(手摺き)
47	1070	R317	磁器	碗	C4 斜路 観断アゼ北 黒・黄焼	8.4	3.4	5.65	4	7	ロクロ 透明 染付、見込み文有	艶黒 白	楕圓半球 形	肥前 18C末～19C前 見込み五弁花(手摺き)
47	1071	R229	磁器	碗	C4 斜路 黒・黄焼	3.6	(X.4)	12			ロクロ 透明 染付、見込み文有	艶黒 灰白	楕圓半球 形	肥前 18C末～19C前 見込み五弁花(手摺き)
47	1072	R133	磁器	碗	C3 斜路 硝焼灰	3.4	(4.8)	12			ロクロ 透明 染付、見込み文有	艶黒 灰白	楕圓半球 形	肥前 18C末～19C前 見込み五弁花(手摺き)
47	1073	R324	磁器	碗	C4 斜路 観断アゼ 黒・黄焼	8.9	3.0	5.3	4	1	透明 染付	艶黒 白	楕圓半球 形	肥前 18C末～19C前
47	1074	R010	磁器	碗	C3 斜路 南北アゼ 硝焼灰 C2 斜路 北側ワイン 焼灰	9.0		(X.2)	3		ロクロ 透明 染付	艶黒 灰白	楕圓半球 形	肥前 18C末～19C前
47	1075	R253	磁器	碗	C3 斜路 黒・黄焼	8.2		(4.6)	4		ロクロ 透明 染付	艶密 灰白	楕圓半球 形	肥前 18C末～19C前
47	1076	R356	磁器	碗	D4 斜路 黒・黄焼	8.2		(4.0)	2		ロクロ 透明 染付、色絵(赤・緑・ 黒・金)	艶黒 白	楕圓半球 形	肥前 18C末～19C前
48	1077	R313	磁器	碗	C4 斜路 観断アゼ北 黒・黄焼	9.0	3.3	5.7	4	6	ロクロ 透明、貫入あり、ピ ン点有 染付、見込み文有	艶黒 白	楕圓半球 形	肥前 18C末～19C前 見込み五弁花(手摺き)
48	1078	R225	磁器	碗	C4 斜路 黒・黄焼	9.0	3.6	5.9	1	11	ロクロ 透明 染付、見込み文有	艶黒 白	楕圓半球 形	肥前 18C末～19C前 見込み五弁花(手摺き)
48	1079	R218	磁器	碗	C3-4 斜路 黒・黄焼	8.5	3.2	5.8	12	11	透明、気泡あり 染付、見込み文有	艶黒 白	楕圓半球 形	肥前 18C末～19C前 見込み五弁花(手摺き)
48	1080	R376	磁器	碗	D4 斜路 黒・黄焼 C4 斜路 観断アゼ 黒・黄焼 コンクリート基礎直上 硝焼灰	8.7	3.6	5.9	1	12	ロクロ 透明、気泡多 染付、見込み文有	艶黒 白	楕圓半球 形	肥前 18C末～19C前 見込み五弁花(手摺き)
48	1081	R298	磁器	碗	C3 斜路 黒・黄焼	8.6	3.4	6.0	7	5	ロクロ 透明 染付、見込み文有	艶黒 灰白	楕圓半球 形	肥前 18C末～19C前 見込み五弁花(手摺き)

第10表 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器観察表4

図版	報告番号	発掘番号	種別	器種	グリップ 出土層位・遺構等	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	口径 φ/12	底径 φ/12	成形・修整 細部 装飾等	胎土・色調等	形状特徴	産地・年代等・備考
48	1082	R244	磁器	碗	C4 鉢路 黒・黄褐色	8.9	3.3	5.35	3	2	ロタロ 透明、細い・気泡、 ピンホール有 染付、見込み文有	艶黒 灰白	標準半球 形	肥前 18C末～19C 前 見込み五弁花(手描き)
48	1083	R321	磁器	碗	C4 鉢路 黒線アゼ北 黒・黄褐色	8.0		(5.0)	5		ロタロ 透明、ピンホール有	艶黒 灰白	標準半球 形	肥前 18C末～19C 前
48	1084	R147	磁器	碗	C4 鉢路 南北アゼ 黒 C3 鉢路 Aトレンテ 以北南北アゼ1層 C2 鉢路 褐色	8.2	3.4	5.7	2	5	ロタロ 透明 染付、見込み文有	艶黒 灰白	標準半球 形	肥前 18C末～19C 前 見込み五弁花(手描き)
48	1085	R098	磁器	碗	D3 銅鑿石相(南) 黒 黒灰・黄褐色 D2 鉢路 褐色	8.6	3.6	5.4	3	11	ロタロ 透明 染付、見込み文有	艶黒 灰白	標準半球 形	肥前? 18C末～19C 前 染付の色黒く濃い、見 込み文刻れた五弁花(手 描き)
49	1086	R113	磁器	碗	C4 鉢路 南北アゼ 黒 C3 鉢路 南北アゼ 褐色	8.4	3.3	5.0	2	12	ロタロ 透明、ピンホール有 貴人有 染付、見込み文有	艶黒やや多 彩い 灰白	標準半球 形	肥前 18C末～19C 前 見込み文刻れた五弁花(手 描き)、底部に砂付文
49	1087	R367	磁器	碗	C4 鉢路 黒線アゼ北 黒・黄褐色		3.3	(4.75)		12	ロタロ 透明 染付、見込み文有	艶黒 灰白	標準半球 形	肥前 18C末～19C 前 見込み文有(今迄)
49	1088	R240	磁器	碗	C4 鉢路 黒・黄褐色	8.6	3.0	5.5	2	6	ロタロ 透明、細い・気泡多 染付(黒描き)	艶黒 灰白	標準半球 形	肥前 18C末～19C 前 同上復元
49	1089	R130	磁器	碗	D3 鉢路南法面 灰黒褐色		2.8	(3.8)		12	ロタロ 透明 染付(黒描き)、見 込み文有	艶黒 灰白	標準半球 形	肥前 18C末～19C 前 見込み松竹梅文
49	1090	R148	磁器	碗	C2 鉢路 Aトレンテ 褐色	8.4	3.8	5.7	1	12	ロタロ 透明 染付、見込み文有	艶黒 灰白	標準半球 形	肥前 18C末～19C 前 見込み五弁花(コンキヤ ク印判)
49	1091	R339	磁器	碗	C5 鉢路 古代路直道上	8.8	3.0	4.6	2	4	ロタロ 透明 染付、見込み文有	艶黒 灰白	標準半球 形	肥前 18C末～19C 前
50	1092	R007	磁器	碗	C2 鉢路 褐色		5.9	(3.6)		4	ロタロ 透明 染付、見込み文有、 善部	艶黒 灰白		肥前 見込み五弁花(コンキヤ ク印判)、黄線刻れた「人 明年製」
50	1093	R322	磁器	碗	C4 鉢路 1層	14.8	5.3	7.2	1	4	ロタロ 透明 染付、見込み文有	艶黒 灰白		肥前 18C 後
50	1094	R035	磁器	碗	C2 鉢路 褐色		5.6	(2.9)		10	ロタロ 透明 染付、見込み文有	艶黒 灰白		肥前 18C 後
50	1095	R316	磁器	碗	C4 鉢路 黒線アゼ北 黒・黄褐色	7.5	3.8	5.9	6	12	ロタロ 透明 染付、見込み文有、 善部	艶黒 灰白	筒形	肥前 18C 後～19C 初 見込み五弁花(手描き)、 黄線一重方帯内(黒描)
50	1096	R009	磁器	碗	C2 鉢路北側ライン 褐色 C3 鉢路 黒灰・黄褐色、褐色		4.1	(5.0)		6	ロタロ 透明 染付、見込み文有	艶黒 灰白	筒形	肥前 18C 後～19C 初 見込み五弁花(手描き)
51	1097	R368	磁器	碗	C4 鉢路 黒線アゼ北 黒・黄褐色		3.9	(4.9)		11	ロタロ 透明 染付、見込み文有	艶黒 灰白	筒形	肥前 18C 後～19C 初 見込み五弁花(手描き)
51	1098	R266	磁器	碗	C4 鉢路 黒・黄褐色	8.4	4.4	6.4	1	12	ロタロ 透明 染付、見込み文有	艶黒 灰白	筒形	肥前 18C 後～19C 初 見込み五弁花(手描き)
51	1099	R152	磁器	碗	D3 鉢路 黒灰・黄褐色			(5.6)			ロタロ 透明 染付	艶黒 灰白		肥前 18C 後～19C 初
51	1100	R357	磁器	碗	D4 鉢路 黒・黄褐色	7.5		(5.2)	3		ロタロ 透明 染付(生継ぎ)	艶黒 灰白	筒形	肥前 18C 後～19C 初
51	1101	R144	磁器	碗	C2 銅鑿石相南面 褐色 D3 鉢路 黒灰・黄褐色	8.0		(5.7)	3		ロタロ 透明 染付	艶黒 灰白	筒形	肥前 18C 後～19C 初
51	1102	R075	磁器	碗	D3 鉢路 褐色 C4 鉢路 (南) 灰黒褐色	8.4	4.0	6.9	1	12	ロタロ 外・青緑結 内・透明 有染付、見込み文 有	艶黒 灰白	筒形	肥前 18C 後 見込み五弁花(コンキヤ ク印判)
52	1103	R032	磁器	碗	C3 鉢路 セクション ベルト 土管より上	11.4	4.5	6.3	4	7	ロタロ 透明 染付、見込み文有	艶黒 灰白		肥前 見込み五弁花(コンキヤ ク印判)、黄線の縁色濃い
52	1104	R201	磁器	碗	C4 鉢路 黒・黄褐色 黒灰・黄褐色	10.0	4.0	5.4	11	5	ロタロ 透明、ピンホール有 貴人有 染付、見込み文有	艶黒 灰白	小広東形	肥前 18C 後 見込み五弁花(手描き)
52	1105	R226	磁器	碗	C4 鉢路 黒・黄褐色	9.5	3.5	5.3	8	11	ロタロ 透明、気泡有 染付、見込み文有	艶黒 灰白	小広東形	肥前 18C 後～19C 初 見込み文「寿」
52	1106	R319	磁器	碗	C4 鉢路 黒線アゼ北 黒・黄褐色	8.9	3.6	5.25	3	7	ロタロ 透明、貴人有 染付、見込み文有	艶黒 灰白	小広東形	肥前 18C 後 上端面取り
52	1107	R019	磁器	碗	C2 銅鑿石相南面 褐色 C4 鉢路 Aトレンテ 南アゼ 黒灰・黄褐色	10.6	4.0	5.1	1	12	ロタロ 透明 染付(黒描き)	艶黒 灰白	小広東 形、輪文	肥前
52	1108	R239	磁器	碗	C3 鉢路 東西アゼ 黒・黄褐色 C4 鉢路 黒灰・黄褐色 斜め地帯層 C4 鉢路 黒・黄褐色	10.2		(3.7)	6		ロタロ 透明 染付	艶黒 灰白	小広東形	肥前 18C 後～19C 初

第11表 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器観察表5

図版	報告 番号	実測 番号	種別	器種	グリッド 出土層位・遺構等	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	口径 φ/12	底径 (cm)	口径 φ/12	成形・整形 特徴等	胎土・色調等	形状特徴	産地・年代等・備考
52	1109	B384	磁器	碗	C4 斜路 縦断アゼ北 黒・黄褐色	10.2		(4.1)	4	ロクロ 透明 発行	透明、貫入有	艶黒 白	小広底形		
52	1110	B400	磁器	碗	C4 斜路 縦断アゼ北 黒・黄褐色 斜路 縦断アゼ、斜路 1層	9.9		(3.8)	2	ロクロ 透明 発行	透明	艶黒 白	小広底形	肥前 19C 後～19C 初	
52	1111	B371	磁器	碗	C4 斜路 縦断アゼ北 黒・黄褐色	3.4		(2.4)		ロクロ 透明、貫入有 発行、黄緑	透明、貫入有	艶黒 白		肥前	
52	1112	B326	磁器	碗	C4 斜路 縦断アゼ北 黒・黄褐色 最下層、黒・ 黄褐色	8.2	3.7	6.5	3	8	ロクロ 透明 発行 (コンニャク状)	艶黒 灰、にぶい焼	筒丸形	肥前 19C 前半 見込み目録、高台砂 付着	
52	1113	B273	磁器	碗	B4 斜路 黒・黄褐色	7.2	3.6	6.3	2	5	ロクロ 透明 発行	艶黒 白	筒丸形	肥前 19C 前半	
53	1114	B228	磁器	碗	C4 斜路 黒・黄褐色	8.4		(4.3)	5	ロクロ 透明、貫入有 発行	透明、貫入有	艶黒 白		肥前	
53	1115	B046	磁器	碗	C4 斜路 南北アゼ 土層上部	4.8		(3.15)	4	ロクロ 透明 発行	透明	艶黒 白		肥前 19C 後半 内外面胎着	
53	1116	B386	磁器	碗	C4 斜路 縦断アゼ北 黒・黄褐色	4.3		(4.0)	5	ロクロ 透明 発行	透明 発行、見込み文有	艶黒 白	高台内筒	肥前	
53	1117	B297	磁器	碗	B3 斜路 黒・黄褐色 C 横壁石版(北) 南 黒・黄褐色 C 斜路 横穴	9.0	3.8	4.9	6	12	ロクロ 透明、ビンホール有 発行、見込み目録	艶黒 白	罐反形	見込み目録「成化年製」	
53	1118	B245	磁器	碗	C4 斜路 黒・黄褐色	8.6	3.7	4.7	5	ロクロ 透明 発行	透明 発行、見込み文有	艶黒 白	罐反形	瀬戸・美濃	
53	1119	B038	磁器	碗	C 横壁石版(北) 南 黒・黄褐色	9.0	3.9	4.8	2	6	ロクロ 透明 発行、見込み文有	艶黒 白	罐反形	瀬戸・美濃 焼磁器(赤土胎マーク有)	
53	1120	B131	磁器	碗	B3 斜路 南北アゼ 横穴、黒 C 斜路 横穴、黒 黒・黄褐色	9.5	3.6	4.8	11	11	ロクロ 透明、気泡多、ビン ホール有 発行(線刻・ダミ)、 口縁、見込み文有(線 刻・ダミ)	艶黒 白	罐反形	瀬戸・美濃	
53	1121	B217	磁器	小碗	C4 斜路 黒・黄褐色 横壁石版(北) 南 黒・黄褐色	8.3	2.3	4.0	11	12	ロクロ 透明 発行、口縁、見込み 文有	艶黒 白	罐反形	瀬戸・美濃 19C 後半 煤付着	
53	1122	B223	磁器	小碗	C4 斜路 22層	8.7	2.9	4.4	9	12	ロクロ 透明、貫入有 発行、口縁	艶黒 白	罐反形	瀬戸・美濃 19C 後半 高台に胎着物あり	
53	1123	B037	磁器	小碗	C 横壁石版(北) 南 黒・黄褐色	8.2	2.8	3.9	4	2	ロクロ 透明 発行、口縁	艶黒 白	罐反形	瀬戸・美濃 19C 後半	
54	1124	B089	磁器	碗	B3 斜路 南北アゼ 砂質土	10.5	3.2	5.25	9	11	ロクロ 透明 発行 (コバルト)、見 込み文有	艶黒 白	罐反形	見込み文「寿」	
54	1125	B129	磁器	碗	B3 斜路 南北アゼ 黒褐色	10.9	4.0	5.0	1	9	ロクロ 透明 発行 (コバルト)、見 込み文有	艶黒 白	罐反形	瀬戸・美濃 見込み文「寿」	
54	1126	B128	磁器	碗	B3 斜路 南北アゼ 砂質土 C 斜路 南北アゼ 黒褐色	10.8	4.0	5.5	4	4	ロクロ 透明 発行 (コバルト)	艶黒 白	罐反形	瀬戸・美濃	
54	1127	B066	磁器	碗	B3 斜路 黒・黄褐色 C 斜路 南北アゼ 土層上部	10.5	4.0	5.8	2	5	ロクロ 透明 発行 (コバルト)、見 込み文有	艶黒 白	罐反形		
54	1128	B299	磁器	碗	C4 斜路 黒・黄褐色	11.0	4.3	5.9	2	5	ロクロ 透明 発行 (コバルト)、見 込み文有	艶黒 白	罐反形	瀬戸・美濃 見込み文「寿」、焼磁器(赤 土胎マーク有)	
54	1129	B288	磁器	碗	C4 斜路 黒・黄褐色 C 斜路 Aトレンチ 東端 黒・黄褐色	10.8	4.2	5.9	5	3	ロクロ 透明 発行 (コバルト)	艶黒 灰白	罐反形	瀬戸・美濃	
54	1130	B234	磁器	碗	C4 斜路 黒・黄褐色	10.4	4.7	5.8	5	6	ロクロ 透明、細かい気泡、 ビンホール有 発行 (コバルト)、見 込み文有	艶黒 白	罐反形	瀬戸・美濃 見込み文「寿」か	
55	1131	B213	磁器	碗	C4 斜路 黒・黄褐色	10.8	4.3	5.5	4	4	ロクロ 透明 発行	艶黒 灰白	罐反形	瀬戸・美濃	
55	1132	B088	磁器	碗	C4 斜路 南北アゼ 砂質土、黒褐色 C 斜路 横穴～黒 B3 斜路 南北アゼ 黒褐色 B2 横面清漆	11.0	4.2	5.2	3	12	ロクロ 透明 発行 (コバルト)、見 込み文有	艶黒 白	罐反形	見込み文「寿」か、見込 み目録5カ所有	
55	1133	B146	磁器	碗	B3 斜路 南北アゼ 黒褐色	11.8	3.9	4.7	4	12	ロクロ 透明 発行 (コバルト)、型 面胎着	艶黒 白	罐反形	瀬戸・美濃 19C 後半	
55	1134	B249	磁器	碗	C4 斜路 黒・黄褐色	11.4		(4.2)	2	ロクロ 透明 色絵 (赤・青・灰)	透明 色絵	艶黒 白		20C	

第12表 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器観察表6

図版	報告番号	実測番号	種別	器種	グリップ 出土部位・遺物等	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	底存 (口) φ/12	底存 (底) φ/12	成形・整形 特徴 装飾等	胎土・色調等	形状特徴	産地・年代等・備考
55	1335	R17	磁器	碗	D3 新路 南北アゼ 黒灰	11.7	4.1	4.55	6	5	ロクロ 透明、タコム青磁? 白灰、緑釉(帯緑黄 り)	製緑 白		
55	1336	R268	磁器	碗	D3 新路 黒・黄焼	4.0	(5.1)			12	ロクロ 透明 足付(コバルト)、見 込み文有、赤釉	製緑 灰白		
55	1337	R221	磁器	碗	C3 新路 東西アゼ 黒・黄焼	10.7	4.2	6.0	5	12	ロクロ 透明、貫入有、ピン ホール有、有 青上絵付、見込み文 有	製緑 灰白	環反形、 輪高台	内裏九谷? 19C末～20C初 外面：細線3条、細線2 本1組、アラビア数字「1」、? 見込み文「寿」
55	1338	R341	磁器	碗	C4 新路 観断アゼ 黒・黄焼	10.8		(4.8)	2		ロクロ 透明 足付	製緑 灰白	環反形	内裏九谷? 19C末～20C初 外面：細線3条、細線2 本1組、アラビア数字「2」 7画；細線3本
55	1339	R138	磁器	碗	D2 新路	12.6	5.8	6.4	2	10	ロクロ 透明 足付	製緑 白		19C末～20C初 底面アラビア数字「2」、 全面黒釉(口首部のみ緑 釉)
55	1340	R100	磁器	碗	D3 新路 南北アゼ 黒灰	12.8	5.4	6.3	6	7	ロクロ 透明 赤釉	製緑、空洞若 手有 白		19C末～20C初 底面アラビア数字「2」、 見込降成か
55	1341	D67	磁器	碗	C3 新路 Aトレンチ東端 新路 黒灰・黄焼	9.4	3.0	4.8	10	8	ロクロ 透明 足付、口縁	製緑 白		20C
56	1342	B08	陶器	碗	C2 新路 焼灰	11.2	5.2	7.8	5	6	ロクロ 灰釉、貫入有 陶粒足付	製砂赤 灰白		肥前
56	1343	B013	陶器	碗	C2 新路 Aトレンチ 北アゼ1層 黒灰 新路 焼灰	10.8		(7.1)	1		ロクロ 灰釉、貫入有 陶粒足付	製緑 灰		
56	1344	B092	陶器	碗	D3 新路 黒灰・黄焼	10.9	4.4	7.25	3	6	ロクロ 灰釉、貫入多、貫入 多、 陶粒足付	製砂赤 灰		肥前
56	1345	R399	陶器	碗	C5 新路 観断アゼ北 黒・黄焼	10.6	4.6	6.7	1	3	ロクロ 灰釉、貫入有 陶粒足付	製緑 灰		肥前
56	1346	R382	陶器	碗	C4 新路 観断アゼ北 黒・黄焼	10.0		(6.6)	2		ロクロ 灰釉、貫入有 陶粒足付	製緑 黄灰		肥前
56	1347	B041	陶器	碗	C3 新路 北(北)南面 焼灰 新路 北側法面焼出 焼灰	10.6	4.8	7.3	2	5	ロクロ 灰釉、貫入有 陶粒足付	製緑 焼灰		肥前
56	1348	R383	陶器	碗	C4 新路 観断アゼ北 黒・黄焼		5.0	(6.2)	5		ロクロ 灰釉、貫入有 陶粒足付	製緑 黄灰		肥前 貫付き離れ砂付着
56	1349	R124	陶器	碗	B0 新路、新路(南)焼灰 新路 南北アゼ 黒灰	11.2	4.8	6.9	2	2	ロクロ 灰釉 陶粒足付	製緑 灰白		
56	1350	R374	陶器	碗	C4 新路 観断アゼ北 黒・黄焼	10.9	4.8	7.35	2	12	ロクロ 灰釉、貫入有、ピン ホール有 陶粒足付	製緑 灰		肥前
56	1351	R281	陶器	碗	C3 新路 焼灰・黄焼 C4 新路 黒・黄焼	(10.0)	2.5	6.8	5	11	ロクロ 灰釉、貫入多、気泡 多、 陶粒足付	製砂赤 灰		貫付き全面に砂付着
56	1352	R207	陶器	碗	C3 新路 黒・黄焼	10.15	4.7	6.75	4	10	ロクロ 灰釉、細かい気泡、 ピンホール、貫入有 陶粒足付	製砂、製砂 灰		肥前、 19C末～19C初
56	1353	B012	陶器	碗	C2 新路 Aトレンチ 焼灰	10.0	4.3	6.8	2	12	ロクロ 灰釉、貫入有 陶粒足付(緑釉)	製砂赤 灰		肥前 19C末～19C初
56	1354	B097	陶器	碗	B2 新路 焼灰 C2 新路北側ライン C2 新路 Aトレンチ 焼灰 D3 新路 焼灰・黄焼 D3 新路 南北アゼ 新路南法面 灰泥焼灰	10.0		(6.6)	4		ロクロ 透明 陶粒足付	製砂赤 灰白		瀬戸 19C
57	1355	R122	磁器	皿	D3 御幸石垣南面 黒灰・黄焼	8.0	(2.5)		3		ロクロ 透明、気泡少 足付	製緑 白		中国(景徳鎮)
57	1356	B078	磁器	中皿	D3 新路 南北アゼ 灰泥焼灰	13.6	0.6		2		ロクロ 透明、気泡、ピンホ ール有 足付	製緑 白		中国(景徳鎮) 19C 高台に砂赤敷付着
57	1357	R396	磁器	皿	C4 新路 観断アゼ北 黒・黄焼			(1.7)		小片	ロクロ 透明 足付	製緑 白		中国(景徳鎮) 焼成、深緑釉付着
57	1358	R397	磁器	皿	C4 新路 観断アゼ 黒・黄焼	22.3		(2.0)		小片	ロクロ 透明 足付	製緑 白		中国 焼成
57	1359	R394	磁器	皿	C4 新路 黒・黄焼 黒下層、黒・黄焼 C3 新路 黒・黄焼 D4 新路 小石皿	19.0	13.0	2.8	3	4	ロクロ 透明、気泡有 足付、黄泥「金」	製緑 灰白		肥前 19C 焼 ハコ目跡有 図上復元
58	1360	R243	磁器	皿	C3 新路 黒・黄焼	13.4	(1.8)		3		ロクロ 透明、細かい気泡有 足付	製緑 白		肥前

第13表 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器観察表7

図版	報告 番号	実測 番号	種別	器種	グランド 出土層位・遺構等	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	口径 φ/12	口径 φ/12	成形・整形 特徴 装飾等	胎土・色調等	形状特徴	産地・年代等・備考
58	1163	B120	磁器	皿	B3 斜路 埴埴灰		14.0	(2.8)		2	ロクロ 透明、貫入多 発行	やや堅硬 灰白	大皿	肥前
58	1162	B202	磁器	皿	B3 斜路 黒・黄褐色 硬面青緑	18.3	12.1	3.9	6	6	ロクロ 透明、ピンホール僅 く有 発行	軟質 灰白	輪花	肥前
58	1163	B033	磁器	皿	B3 斜路 セクション ベルト 土管より上		7.3	(2.0)		2	ロクロ 透明 発行	軟質 灰白		中国 土質焼成 (南口含む)、 高台物多
59	1164	B141	磁器	皿	B3 斜路 南定アゼ 灰埴埴灰、埴埴 灰 B2 斜路 埴埴灰	15.0	9.6	4.1	2	1	ロクロ 透明、一巡貫入有 発行、裏高	空胴多 灰白	髷の目取 型高台	肥前 18C 後 新島角皿
59	1165	B130	磁器	皿	B3 斜路 南定アゼ 黒灰	(15.3)	(11.4)	3.8	1		透明 発行	軟質 灰白		肥前 軟熟、滑着物有
59	1166	B369	磁器	皿	C4 斜路 縦断アゼ北 黒・黄褐色	14.2		(3.2)	3		ロクロ 透明 発行	軟質 灰白	輪花	肥前 18C
59	1167	B380	磁器	皿	C4 斜路 小磯炭灰焼	8.2	(1.8)			12	ロクロ 透明 発行、見込み文有	軟質 灰白	髷の目取 型高台	肥前 18C 後 見込み五弁花(手掻き)
59	1168	B298	磁器	皿	B3 御堂石紀(南) 南 黒・黄褐色 C3 御堂石紀曲面 黒・黄褐色	13.0	6.9	3.1	1	9	ロクロ 透明 発行、見込み文有、 彫琢多	軟質 灰白		肥前 18C 見込み五弁花(コンキヤ ク母型)
59	1169	B099	磁器	皿	B2 斜路 南側ライン C3 斜路 南定アゼ 黒灰	12.9	8.2	3.1	2	3	ロクロ 透明 発行、型残有り、墨 口跡	軟質 灰白		肥前 18C
60	1170	B149	磁器	皿	C2 斜路 Aトレンテ 南アゼ 斜路 Aトレン テ 黒灰・黄褐色	8.2	(1.4)		4		ロクロ 透明 発行	軟質 灰白		肥前 軟熟、内面陶質著しい
60	1171	B123	磁器	皿	B3 斜路南法面 埴埴灰	21.2		(4.3)	小片		ロクロ 透明 発行	軟質 灰白		肥前
60	1172	B023	磁器	皿	C3 斜路 埴埴灰	16.9	6.2	2.9		12	ロクロ、型押し 透明 発行、口跡、裏高有	硬密 白	輪花	肥前 軟熟
60	1173	B336	磁器	皿	C4 斜路 縦断アゼ北 黒・黄褐色	12.3	7.1	2.15	4	2	ロクロ 透明 発行	軟質 灰白	輪花	肥前
60	1174	B203	磁器	皿	C3 斜路 黒・黄褐色	17.9		(2.0)			ロクロ 透明 発行	軟質 灰白		肥前
60	1175	B365	磁器	皿	C4 遺構検出 斜路			(3.7)	小片		ロクロ 透明 発行、色絵(緑・黄・ 黒・赤?)	軟質 灰白		肥前
61	1176	B303	磁器	皿	C5 斜路 1層 C4 斜路 縦断アゼ 縦断アゼ北 黒・黄褐色 B・C1 レンガ基礎内 C 軟質赤レンガ基礎 敷土 B4 斜路 黒・黄褐色	37.2	18.6	6.0	2	2	ロクロ 透明 発行、彫琢、見込み 文有	軟質 灰白	大皿	肥前 見込み竹梅文、裏高「太 明成化年製」、ヘリ目録有、 地上復元
62	1177	B320	磁器	皿	C3・C4 斜路 縦断アゼ北 黒・黄褐色	14.1	9.5	3.5	2	8	ロクロ 透明 発行	硬密 白	髷の目取 型高台、 口跡内湾	肥前
62	1178	B237	磁器	皿	C3・C4 斜路 黒・黄褐色	13.6		(3.4)	5		ロクロ 透明、気泡多 発行(生肌付)	軟質 灰白	口跡内湾	肥前 口跡ゆがみ
62	1179	B231	磁器	皿	C4 斜路 黒・黄褐色	12.8	4.4	3.75	6	11	ロクロ 透明 発行	軟質 灰白	見込み髷 の目録多	肥前 17C 後～18C 前
62	1180	B106	磁器	皿	B3 斜路 埴埴灰、黒灰・黄褐色	14.0	7.0	2.8	2	4	ロクロ 透明、気泡多 発行、見込み文有	軟質 灰白	見込み髷 の目録多	肥前 12C 末～18C 初高台五弁花(コンキヤ ク母型)
62	1181	B338	磁器	皿	C4 斜路 縦断アゼ北 2層、黒・黄褐色	13.7	8.0	(4.2)	2	3	ロクロ 透明 発行	軟質 灰白		肥前 18C 後～19C 初 高台砂付着、地上復元
62	1182	B373	磁器	皿	C4 斜路 縦断アゼ北 黒・黄褐色	13.7	8.0	4.1	2	2	ロクロ 透明 発行	軟質 灰白		肥前 18C 後～19C 初 高台内側砂付着
63	1183	B306	磁器	皿	C4 斜路 縦断アゼ北 黒・黄褐色	14.0	8.2	4.3	4	6	ロクロ 透明、気泡多 発行、裏高	軟質 灰白	輪花、髷 の目録多 高台	肥前 外底に輪吹の砂付着
63	1184	B334	磁器	皿	C4 斜路 縦断アゼ北 黒・黄褐色	13.9	9.6	3.6	2	2	ロクロ 透明、気泡多 発行	軟質 灰白	輪花、髷 の目録多 高台	肥前 19C 高台砂付着
63	1185	B077	磁器	皿	B3 斜路 南定アゼ 灰埴埴灰 斜路 黒灰・黄褐色	13.8	8.6	4.4	2	6	ロクロ 透明 発行	軟質 灰白	髷の目取 型高台	肥前 18C 後～19C 初 高台
63	1186	B369	磁器	皿	C4 斜路 縦断アゼ北 黒・黄褐色			3.8			透明 発行	軟質 灰白	角皿	肥前 軟熟、滑着物付着・滑着 有
63	1187	B136	磁器	皿	C2 斜路 Aトレンテ 南アゼ 埴埴灰	13.2	8.5	3.1	3	4	ロクロ 透明 発行、彫琢多	軟質 灰白	輪花、髷 の目録多 高台	肥前 18C 後
63	1188	B031	磁器	皿	C3 斜路	14.0	5.2	3.5	4	12	ロクロ 透明 発行、細網後ダテ、 口跡	硬密 白	髷の目取 型高台	瀬戸・美濃 19C 後

第14表 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器観察表8

図版	報告番号	発掘番号	種別	器種	グリッド 出土部位・遺構等	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	遺存 (口) φ/12	遺存 (底) φ/12	成形・修整 輪削 装飾等	胎土・色調等	形状特徴	産地・年代等・備考
63	1189	R063	磁器	皿	C2 斜路		5.4	(1.8)		6	ロクロ 透明 内面塗付、縁割後ダ シ、外面半結	靑緑 白	椀の目田 型高台	瀬戸・美濃 瀬戸(1号) 外周(脚線1条無、縦線、 アラビア数字「2」か)
63	1190	R014	磁器	皿	C2 斜路 Aトレンチ 基灰					小片	ロクロ 透明	靑緑 白		焼熟、裏面「大口化粧□」
64	1191	R064	磁器	皿	C2 斜路		12.0	(2.3)		2	透明 塗付、擦磨き	靑緑 白	角皿	肥前 19C末-19C中 焼熟、胎面着
64	1192	R146	磁器	皿	C3 斜路 セクション ペルト 土管より上		8.8	(1.8)		3	ロクロ 透明 塗付	靑緑 白	掬押し	肥前 焼熟、全体に胎面着
64	1193	R310	磁器	皿	C4 斜路 縦断アゼ北 黒・黄焼	10.4	6.7	2.4	4	12	ロクロ 透明 塗付、裏筋	靑緑 白	輪花 小皿	肥前 焼熟「成化年製」
64	1194	R366	磁器	皿	C4 斜路 縦断アゼ北 黒・黄焼	10.0	5.7	2.9	1	6	ロクロ 透明 塗付、裏筋	靑緑 白	小皿	肥前 19C末 裏筋「裏書□□」
64	1195	R372	磁器	皿	C4 斜路 縦断アゼ北 黒・黄焼	9.3	5.1	1.95	4	5	ロクロ 透明 塗付、見込み文有	靑緑 白	小皿	肥前
64	1196	R017	磁器	皿	C2 斜路 横灰	6.3	4.2	1.4	3	3	透明 塗付	靑緑 白	小皿	肥前
64	1197	R236	磁器	皿	C3 斜路 黒・黄焼	8.7	5.0	1.9	5	12	掬押し 透明 塗付(コンニャク印 付)、口縁	靑緑 白	角皿	肥前 19C末 焼熟
64	1198	R361	磁器	皿	C4 斜路 縦断アゼ北 黒・黄焼	器高 9.0 各 側9.4		(1.7)		3	ロクロ 青磁釉	靑緑 白	小皿	肥前
64	1199	R353	磁器	皿	C5 斜路 近代曲面上		5.1	(1.3)		2	ロクロ 透明、貫入有	靑密 白		肥前 底面に墨書
65	1200	R079	磁器	皿	D3 斜路 南北アゼ 砂利・砂質土 D2 斜路 黒灰・黒焼	13.8	6.2	3.15	8	12	ロクロ 透明、ピンホール有 塗付(コバルトウ)	靑密 白	椀の目田 型高台	瀬戸・美濃
65	1201	R025	磁器	皿	C3 斜路 Aトレンチ 東端 黒灰・黄焼	14.1	6.2	2.6	7	12	ロクロ 透明 塗付(コバルトウ)	靑密 白	椀の目田 型高台	瀬戸・美濃
65	1202	R102	磁器	皿	D2 斜路 黒灰 C3 土管直方 D3 斜路 南北アゼ 砂利・砂	13.3	6.6	2.4	9	7	ロクロ 透明 塗付(コバルトウ)	靑密 浅黄焼		瀬戸・美濃
65	1203	R026	磁器	皿	C3 斜路 黒灰・黄焼	14.8	6.1	3.7	7	6	ロクロ 透明 塗付(コバルトウ)	靑密 白	椀の目田 型高台	瀬戸・美濃
66	1204	R064	磁器	皿	C3 斜路 南北アゼ 砂利・砂 D3 斜路 南北アゼ 砂	13.3	6	3.05	1割	12	ロクロ 透明 塗付(コバルトウ)	靑密 白	椀の目田 型高台	瀬戸・美濃
66	1205	R272	磁器	皿	D4 斜路 黒・黄焼	14.9	5.9	3.5	1	12	ロクロ 透明、気泡多 塗付(コバルトウ)	靑密 白	椀の目田 型高台	瀬戸・美濃
66	1206	R269	磁器	皿	D3 斜路 南側法面上方 焼灰	14.0	6.4	3.4	5	9	ロクロ 透明、貫入有 塗付、見込み文有	靑密 灰白	玉縁、見 込み文「寿」、輪割ぎ に胎面着か	
66	1207	R087	磁器	皿	D2 近代層 石垣跡 近代代燻 斜路 黒灰 D3 埋石周辺 近代代燻	13.1	5.8	(3.6)	3	6	ロクロ 透明、貫入有 塗付、見込み文有	緑っぽい空調や や多少 灰白	玉縁、見 込み文の 目線跡有	
66	1208	R287	磁器	皿	C4 斜路 黒・黄焼(土 管直方含む) D4 トレンチ基礎 近代 整地土	13.2	6.7	2.4	1	7	ロクロ 透明 塗付(コバルトウ)	靑密 白	椀の目田 型高台	瀬戸・美濃 焼熟
66	1209	R108	磁器	皿	D2 斜路 埋燻成 C3 斜路 南北アゼ 焼灰 D3 斜路 南北アゼ 埋燻成	9.9	5.5	2.8	3	5	ロクロ、掬押し 透明 塗付	靑密 白	輪花	瀬戸・美濃
67	1210	R080	磁器	皿	C2 斜路 Aトレンチ 南アゼ 母焼灰 D2 斜路 母焼灰 D3 斜路 南アゼ 南からの埋土	10.0	5.1	2.6	3	6	ロクロ、掬押し 透明 塗付	靑密 白	菊皿	瀬戸か
67	1211	R205	磁器	皿	C4 斜路 黒・黄焼	9.8	5.8	2.25	2	3	ロクロ 透明、気泡多 裏面有	靑密 白	輪花	肥前 19C後
67	1212	R210	磁器	皿	C3+D4 斜路 黒・黄焼	10.4	6.8	2.4	9	11	ロクロ 透明、白濁 塗付(コバルトウ)、裏 筋	靑密 白		瀬戸・美濃 20C
67	1213	R209	磁器	皿	C3 斜路 黒・黄焼	10.4	6.4	2.4	8	12	ロクロ 透明、白濁 塗付(コバルトウ)、裏 筋	靑密 白		瀬戸・美濃 20C
67	1214	R027	磁器	皿	C3 斜路 黒灰・黄焼	10.3	6.2	2.0	3	4	ロクロ 透明 塗付(コバルトウ)、裏 筋	靑密 白		瀬戸・美濃 20C

第15表 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器観察表9

図版 番号	調査 番号	種別	器種	グリッド 出土部位・遺構等	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	口径 φ/12	底径 (φ/12)	成形・整形 輪郭 裝飾 胎地等	胎土・色調等	形状特徴	産地・年代等・備考
67	1215	R211	磁器	Ⅲ C1 斜路 黒・黄褐色	10.7	6.0	2.3	8	12	ロクロ 透明 染付 (コバルト)・黄 褐色	縹白	縹戸・美濃 2BC 裏面肉紅	
68	1216	R076	磁器	Ⅲ C1 斜路 南定アゼ Ⅲ C2 斜路 Aトレンチ Ⅲ C3 斜路 南定アゼ Ⅲ C4 斜路 黒・黄褐色	14.2	6.3	3.6	2	12	ロクロ 透明、貫入有、ビン ホール有 染付・赤絵、見込み 文有	縹密 白	玉縁、見 込杯の肉 紅ハキ	糸紡外証アラビア数字 [1]、外側面縁線2条・縦 線3本1組
68	1217	R090	磁器	Ⅲ C1 斜路 南定アゼ Ⅲ C2 斜路 Aトレンチ Ⅲ C3 斜路 黒・黄褐色	12.4	5.8	3.05	5	6	ロクロ 透明、貫入有、ビン ホール有、赤絵、見込み 文有	縹密 灰白	玉縁、見 込杯の肉 紅ハキ	外証と外側面赤絵、アラ ビア数字 [2]、外側面 縁線2条、縦線3本1組、 白縁部に赤付有。
68	1218	R101	磁器	Ⅲ C1 斜路 南定アゼ Ⅲ C2 斜路 黒・黄褐色	14.0	6.8	(3.95)	5	6	ロクロ 透明、貫入有	空閑少 灰白	幅広輪高 台	外面：縁線4条、縦線2 本1組、アラビア数字 [2] 内面：縁線3条、見込み 文
68	1219	R340	磁器	Ⅲ C1 斜路 縦断アゼ北 Ⅲ C2 斜路 黒・黄褐色	14.6		(3.5)	2		ロクロ 透明、貫入有	縹密 白		外側面：縁線2条、縦 線1本1組、アラビア数字 内側面：縁線3条
69	1220	R382	磁器	Ⅲ C1 斜路 縦断アゼ北 Ⅲ C2 斜路 Aトレンチ Ⅲ C3 斜路 黒・黄褐色 Ⅲ C4 斜路 黒・黄褐色	21.4	13.2	8.7	7	6	ロクロ 透明 染付、見込み方形の 赤絵	縹密 白	杯の目田 型高台	肥前 18C 同上復元
69	1221	R353	磁器	Ⅲ C1 斜路 黒・黄褐色	21.4		(6.4)	2		ロクロ 内・外赤絵、外・透明、 気泡多 青磁染付	縹密 白	輪花、新 緑	肥前 内側面ケズリ直有
69	1222	R053	磁器	Ⅲ C1 斜路北側ライン Ⅲ C2 斜路 黒・黄褐色	[30.0]		(5.3)	1		ロクロ 透明 染付	縹密 白	輪花	肥前
69	1223	R069	磁器	Ⅲ C1 斜路 Aトレンチ Ⅲ C2 斜路 黒・黄褐色	20.8		(4.6)	2		ロクロ 透明 染付	縹密 白		肥前
70	1224	R145	磁器	Ⅲ C1 斜路 黒・黄褐色	8.4		3.2	4	4	ロクロ 透明 染付 (黒縁き)	縹密 白	杯の目田 型高台	肥前 18C末～19C 内底未施き「継用」
70	1225	R144	磁器	Ⅲ C1 斜路 Aトレンチ Ⅲ C2 斜路 南定アゼ Ⅲ C3 斜路 南定アゼ Ⅲ C4 斜路 黒・黄褐色	20.2		(7.6)	3		ロクロ 青磁、貫入多 内面鉄屑片切跡	縹密 灰白		肥前
70	1226	R232	磁器	Ⅲ C1 斜路 黒・黄褐色	11.3 小径り 10		3.25	6		ロクロ 透明、細かい気泡含 む、貫入有	縹密 白	蓋物蓋	肥前 18C
70	1227	R375	磁器	Ⅲ C1 斜路 縦断アゼ北 Ⅲ C2 斜路 黒・黄褐色	6.7		(3.6)	10	10	ロクロ 透明 染付	縹密 灰白		肥前 18C 被熱、軸かららぎ状
70	1228	R349	磁器	Ⅲ C1 斜路 縦断アゼ北 Ⅲ C2 斜路 黒・黄褐色	8.3		(4.3)	4	4	ロクロ 透明 染付	縹密 白		肥前
70	1229	R220	磁器	Ⅲ C1 斜路 Ⅲ C2 斜路 黒・黄褐色 Ⅲ C3 斜路 黒・黄褐色 Ⅲ C4 斜路 南定アゼ Ⅲ C5 斜路 南定アゼ	9.4	4.7	5.3	3	3	ロクロ 透明、貫入有、ビン ホール有 染付	砂粒少、空閑 少 灰白		肥前
70	1230	R350	磁器	Ⅲ C1 斜路 縦断アゼ Ⅲ C2 斜路 黒・黄褐色	9.5	4.5	5.5	2	1	ロクロ 透明 染付	縹密 白		肥前
70	1231	R065	磁器	Ⅲ C1 斜路 南定アゼ Ⅲ C2 斜路 土器製方	9.2	4.8	4.7	4	4	ロクロ 透明 染付	縹密 白		肥前
70	1232	R251	磁器	Ⅲ C1 斜路 黒・黄褐色	7.7	3.3	3.95	6	12	ロクロ 透明、 気泡含む 染付	縹密 白		肥前
71	1233	R241	磁器	Ⅲ C1 斜路 黒・黄褐色	7.6		(3.0)	4	4	ロクロ 透明 染付、色絵 (赤・金、 他)	縹密 白		肥前
71	1234	R296	磁器	Ⅲ C1 斜路 黒・黄褐色	(5.4)	(3.0)	2.7	3	3	ロクロ 透明、 気泡多 染付	縹密 白		肥前
71	1235	R312	磁器	Ⅲ C1 斜路 縦断アゼ北 Ⅲ C2 斜路 黒・黄褐色	7.6	3.5	2.4	3	12	ロクロ 透明、貫入有	縹密 白		肥前
71	1236	R096	磁器	Ⅲ C1 斜路 南定アゼ Ⅲ C2 斜路 南定アゼ Ⅲ C3 斜路 黒・黄褐色	7.6	3.6	3.6	9	6	ロクロ 透明、 気泡多 染付 (生染付)	縹密 白		肥前
71	1237	R260	磁器	Ⅲ C1 斜路 黒・黄褐色	13.6	9.0	5.3	2	4	ロクロ 透明、 気泡多、ビン ホール有 染付	縹密、空閑有		肥前 18C末～19C
71	1238	R061	磁器	Ⅲ C1 斜路 Aトレンチ Ⅲ C2 斜路 黒・黄褐色	7.6	4.2	3.1	2	3	ロクロ 透明 染付	縹密 白		肥前 18C末～19C
71	1239	R030	磁器	Ⅲ C1 斜路 Aトレンチ Ⅲ C2 斜路 黒・黄褐色	10.2		(1.5)	4		ロクロ 透明 染付	縹密 白	段重産	肥前
71	1240	R028	磁器	Ⅲ C1 斜路 黒・黄褐色 Ⅲ C2 斜路 黒・黄褐色	10.9	9.9	3.4	3	7	ロクロ 透明 染付	縹密 白		肥前
71	1241	R029	磁器	Ⅲ C1 斜路 縦断アゼ北 Ⅲ C2 斜路 黒・黄褐色	10.9	9.9	3.3	6	6	ロクロ 透明 染付	縹密 白		肥前

第16表 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器観察表 10

図版	報告番号	発掘番号	種別	器種	グリップ 出土部位・遺物等	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	口径 (口) φ/12	口径 (口) φ/12	成形・整形 細部 装飾等	胎土・色調等	形状特徴	産地・年代等・備考
71	1242	B060	磁器	段重	C3 斜路 黒灰・黄焼	10.7	9.7	3.42	5	7	ロクロ 透明 染付 (コバルト)	肌白	白	19C末
71	1243	B125	磁器	段重	B3 斜路 (南) 段重焼灰 2016 斜路 黒・黄焼				不明	不明	透明 染付 (コバルト・型 取盛り)	肌白	白	方形 瀬戸・美濃
72	1244	B296	磁器	蓋	C3 斜路 黒・黄焼	22.0 かえり 20.0		13.90	小片		ロクロ 透明、貫入有	肌白	白	肥前
72	1245	B039	磁器	蓋	C3 網壁石(北) 南面 黒灰・黄焼	22.0 かえり 20.0		(4.0)	1		ロクロ 透明、貫入有	肌白	白	肥前
72	1246	B127	磁器	蓋	B3 斜路 南北アゼ 斜路南正面 段重焼灰 C2 斜路 焼灰	12.4 かえり 14.1		3.9	1.5		ロクロ 透明 染付	肌白	白	肥前 図上復元
72	1247	B225	磁器	蓋	C3-4 斜路 黒・黄焼 B3 斜路 黒灰・黄焼	13.0 かえり 11.8		3.7	5		ロクロ 透明、気泡多 染付	肌白	白	肥前 つまみ上面陰刻
72	1248	B315	磁器	蓋	C4 斜路 網断アゼ北 黒・黄焼	12.3 かえり 10.8		3.7	6	つまみ 3.6	ロクロ 透明 染付	肌白	白	肥前
72	1249	B111	磁器	蓋	B2 網壁石(南) 南面埋土 陶焼焼灰	11.0 かえり 9.1		(2.2)	4		ロクロ 透明、気泡有、ピン ホール有	肌白、若干空 洞有	白	肥前 ねむら焼成痕有
72	1250	B047	磁器	蓋	C3 斜路 南北アゼ 焼灰	12.4 かえり 11.5		(3.1)	2		ロクロ 透明 染付	肌白	白	肥前
72	1251	B345	磁器	蓋	C4 斜路 黒・黄焼及下層 斜路 網断アゼ北 黒・黄焼	10.0 かえり 8.8		3.0	4		ロクロ 透明 染付	肌白	白	肥前
73	1252	B219	磁器	蓋	C3-B3 斜路 C3 斜路 黒灰・黄焼	9.7 かえり 8.7		(3.7)	11		ロクロ 透明、ピンホール僅 か 染付	肌白	灰白	肥前
73	1253	B385	磁器	蓋	C4 斜路 網断アゼ北 黒・黄焼	10.2 かえり 9.3		(2.1)	4		ロクロ 透明 染付	肌白	白	肥前 かえりに砂付着
73	1254	B330	磁器	蓋	C4 斜路 1層		8.0	(1.9)	3		ロクロ 透明 染付	肌白	白	肥前 19C
73	1255	B230	磁器	蓋	C4 斜路 黒・黄焼	6.4 かえり 5.8		2.1	12		ロクロ 透明、気泡多 染付	肌白	白	肥前
73	1256	B370	磁器	蓋	C4 斜路 網断アゼ北 黒・黄焼	8.3 かえり 7.1		(2.0)	5		ロクロ 透明 染付	肌白	白	肥前
73	1257	B284	磁器	蓋	C3 斜路 黒・黄焼	7.4 かえり 6.5		2.3	6		ロクロ 透明、ピンホール有 染付	肌白	白	肥前
73	1258	B347	磁器	蓋	C4 斜路 黒・黄土割直上	6.0 かえり 5.2		(1.4)	6		ロクロ 透明 染付	肌白	白	肥前
73	1259	B335	磁器	蓋	C4 斜路 網断アゼ北 黒・黄焼	8.5	つまみ 3.1	2.75	2	つまみ 6	ロクロ 透明 染付	肌白	白	陶葺 肥前
73	1260	B083	磁器	蓋	B3 斜路 黒灰・黄焼	8.8	つまみ 3.1	2.5	3	つまみ 12	ロクロ 透明、貫入多、気泡 多 染付、色絵(赤・黄 ・金)、大井田内面陰 竹梅文	肌白	白	陶葺 肥前
74	1261	B019	磁器	瓶口	C2 斜路 Aトレンテ 黒灰	7.2		(4.1)	1		ロクロ 透明 白磁か	肌白	白	環状形 肥前 焼痕、外面降灰
74	1262	B294	磁器	瓶口	C3 斜路 黒・黄焼	8.0	5.0	6.2	5	3	ロクロ 透明、気泡多 染付	肌白	白	肥前
74	1263	B151	磁器	瓶口	B3 斜路 黒灰・黄焼	5.8	4.2	5.2	6	2	ロクロ 透明、気泡多 染付、色絵(赤・金)	肌白	白	肥前
74	1264	B337	磁器	瓶口	C4 斜路 網断アゼ北 黒・黄焼	7.4	4.4	(4.2)	6		ロクロ 透明 染付、色絵(赤・金)	肌白	白	肥前
74	1265	B093	磁器	小杯	C2 斜路		3.7	(1.9)	12		ロクロ 透明 染付、黄緑	肌白	灰白	肥前 唐縁(寛治年製)、被焼、 胎面着
74	1266	B391	磁器	小杯	C4 斜路 網断アゼ北 黒・黄焼		2.7	(1.3)	11		ロクロ 透明、気泡多 染付、黄緑	肌白	白	中国 唐縁(瓶)
74	1267	B107	磁器	小杯	B3 斜路 黒灰・黄焼	5.2	2.2	4.15	1	12	ロクロ 透明、気泡多 染付	肌白	白	肥前
74	1268	B409	磁器	小杯	網壁石(北) 東側 法面埋土		3.1	(1.8)	7		ロクロ 透明 染付	肌白	灰白	肥前 見込み付着物有
74	1269	B358	磁器	小杯	C4 斜路 網断アゼ南 1層 C4 斜路 網断アゼ B4 垂当筒改良コシク 系埋土面	7.4		(3.8)	4		ロクロ 透明 染付 (網取転写)	肌白	白	環状形 瀬戸・美濃 19C末～20C初
74	1270	B327	磁器	瓶口	C4 斜路 網断アゼ 黒・黄焼、小磯流焼灰	4.4	2.4	2.5	4	11	ロクロ 白磁	肌白	灰白	肥前 19C 高台着有

第17表 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器観察表11

図版	報告番号	実測番号	種別	器種	グランド 出土層位・遺構等	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	口径 (口) φ/12	口径 (底) φ/12	成形・整形 輪郭 裝飾等	胎土・色調等	形状特徴	産地・年代等・備考
74	1271	B259	磁器	小瓶	C4 斜路 黒・黄焼	7.4	2.8	3.2	1	11	ロクロ 透明 足付、色絵(赤・黄・黒)	緻密 白	肥前	
74	1272	B388	磁器	小瓶	C4 斜路 黒断アゼ北 黒・黄焼	7.7	2.6	3.7	2	5	ロクロ 透明 足付	緻密 白	肥前	
74	1273	B246	磁器	小瓶	C4 斜路 黒・黄焼 (7.8)			(3.3)	3		ロクロ 透明 足付、赤上絵	緻密 白	肥前 赤上絵付「□」に□	
74	1274	B057	磁器	小瓶	C4 斜路 黒灰・黄焼	5.7	2.1	3.05	1	12	ロクロ 透明 足付	緻密 白	肥前	
74	1275	B081	磁器	小瓶	B0 斜路 南定アゼ 斜路南正山 焼灰 B2 斜路 南定アゼ 南正山 焼灰	5.6	1.8	2.95	7	7	ロクロ 透明 足付	緻密 白	肥前	
74	1276	B137	磁器	小瓶	B2 斜路 焼灰	5.8	2.3	3.4	6	7	ロクロ 透明 足付	緻密 白	肥前	
74	1277	B276	磁器	小瓶	C4 斜路 黒・黄焼	6.9	2.8	3.0	7	9	白磁	緻密 白	墨付き砂一層付着	
74	1278	B224	磁器	紅 口	C3-4 斜路 黒・黄焼	(5.4)	(1.6)	2.3	1	11	ロクロ 透明 赤絵	緻密 白	肥前	
74	1279	B252	磁器	紅 口	C3-4 斜路 黒・黄焼	6.1	1.9	2.15	3	12	ロクロ 透明 足付(コンニャク印 付)	緻密 白	肥前	
74	1280	B354	磁器	紅 口	C5 斜路 黒断アゼ北 黒・黄焼	4.3	1.4	1.7	5	12	整形し 透明(緑色を帯びる)	緻密 白	菊花	肥前 19C 前 外面無絵
75	1281	B048	磁器	蓋の 把ネ コウ	C4 斜路 南定アゼ 焼灰	最大長 (1.65)	最大幅 (1.55)	最大厚 (1.3)			手づくね 透明 足付	緻密 白	横巻	
75	1282	B112	磁器	蓋物 (赤)	B2 斜路 南定アゼ 焼灰	6.2	(3.6)		5		ロクロ 透明、気泡有	緻密 灰白	肥前 18C 以降 横巻により前面着	
75	1283	B118	磁器	蓋 器口	B2 斜路 南定アゼ 焼灰・砂質土、黒灰	6.2	(12.6)		8		ロクロ 透明 足付(型組有り)	緻密 灰白	肥前	
75	1284	B089	磁器	仏 瓶	C4 斜路 黒・黄焼	7.0	3.5	4.7	5	12	ロクロ 透明、気泡多 足付	緻密 白	肥前 17C 末～18C	
75	1285	B095	磁器	仏 瓶	B2 斜路 埴焼灰	3.8	(5.4)		11		ロクロ 透明、気泡多 足付	緻密 白	肥前 土加無絵、墨付き輪刺ぎ、 底着有	
75	1286	B152	磁器	把ネ (急須 コウ)	B2 斜路 埴焼灰		(3.8)				白磁 印印有	緻密 白		
75	1287	B272	磁器	仏 花瓶	C3-4 斜路 黒・黄焼	8.9	5.2	口(12.7) 体(16.2) 底(3.2)	2	6	ロクロ 青磁輪 足付	緻密 灰白	丸蓋(横 1脚) 固定2脚	肥前 同上復元
75	1288	B286	磁器	合子	B4 斜路 灰青焼灰	5.6	5.0	3.1	2	7	ロクロ 青磁輪?、貫入有	緻密 灰白		外面面砂盛付に付着
75	1289	B355	磁器	水筒	B4 斜路 黒・黄焼	最大長 (2.65)	最大幅 (3.4)	最大厚 (1.8)			整形し 透明、気泡含む 足付	緻密 白	方形	肥前 漆着有、底面有圧痕
75	1290	B381	磁器	ミニ チュ ア瓶	C4 斜路 黒断アゼ北 黒・黄焼	3.1	1.1	1.85	4	12	透明 足付	緻密 白	肥前	
75	1291	B075	磁器	香炉	C4 斜路 黒断アゼ北 黒・黄焼		4.2	(1.75)	5		ロクロ 青磁輪 外面酸化粧	細砂盛付・白	肥前 3足か 内底墨付着、転用か	
76	1292	B410	磁器	瓶	E3 豊前西辺外石組 土	11.0		(3.8)	3		ロクロ 透明 足付	緻密 白	小広東形 18C 後 横巻	
76	1293	B415	磁器	瓶	E3 豊前西辺外石組 土内 灰青焼灰		3.2	(2.2)	12		ロクロ 透明、貫入有 足付、横刺、見込み 文	緻密 灰白	輪高台	再彫丸容(哲村) 19C 前 横刺?若(田字)」、見込 み花文
76	1294	B402	磁器	瓶	E3 豊前西辺外石組 土	8.5	3.2	3.9	5	2	ロクロ 透明 足付、地物・ゴミ、 見込み文	緻密 白	横反形、 底の目高 有	肥前 見込み「寿」字文
76	1295	B404	磁器	瓶	E3 豊前西辺東高セク ション北高 10層 E3 豊前西辺外石組 土	8.8	3.9	4.75	5	6	ロクロ 透明 足付、見込み文	緻密 白	横反形	横戸・美濃 19C 前 横刺ぎ(外底に朱書き有)
76	1296	B405	磁器	瓶	E3 豊前北西側外溝状 溝込み E3 豊前西辺外石組 土	7.6	3.8	6.7	3	9	ロクロ 透明 足付	緻密 白	筒丸形	肥前 19C 前 横刺ぎ(外底に朱書き有)、 見込みに横刺
76	1297	B403	磁器	蓋	E3 豊前西辺外石組 土	8.5	つまみ 3.55	2.3	6	つまみ 6	ロクロ 透明 足付、つまみ内・天 井底内面磨有	緻密 白	横蓋	肥前 天井底内面「□」年製
76	1298	B407	磁器	蓋物	B 豊前西辺外石組 土 焼灰・灰青焼灰	9.4		(6.1)	4		ロクロ 透明 足付(生漆けか)	緻密 灰白		気味の紫色悪い
77	1299	B301	磁器	瓶	B4 豊前階段 5段 間 B 瓶 B3-1 豊前階段 に付いた黄焼土、H28の 7層 E3 豊前西辺外 灰焼	11.6	6.6	6.5	2	5	ロクロ 透明 足付、見込み文	緻密 白	広東形	肥前 18C 末～19C 前

第18表 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器観察表 12

図版	報告番号	発掘番号	種別	器種	グリッド 出土層位・遺構等	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	口径 (口) φ/12	口径 (底) φ/12	成形・整形 輪削 装飾等	胎土・色調等	形状特徴	産地・年代等・備考
77	1300	R364	磁器	碗	D2 東西階段 8・9段 8層	7.0		(5.0)	1	以下	ロクロ 透明 発行	紫黒 灰白	皿丸形	肥後 19C
77	1301	R255	磁器	小碗	D3 東西階段 8層 9・10層	8.4	2.9	4.2	4	6	ロクロ 透明、気泡有 発行、口縁	紫黒 白	楕円形	瀬戸・美濃
77	1302	R362	磁器	小碗	D3 東西階段 C層 D3-4 東西階段東西ア ゼ 8層	8.4		(2.8)	3		ロクロ 透明 発行、口縁	紫黒 白	楕円形	瀬戸・美濃
77	1303	R254	磁器	皿	D3 東西階段 3層 D4 斜路 小石層	13.4	6.8	3.8	2	12	ロクロ 透明、ピンホール有 発行	無砂・空閑有 灰白		焼熟、僅行着
77	1304	R253	磁器	皿	D3 東西階段 11層 D3 1トレンチ 黄緑 粘シルト粘面 D3 1トレンチ 粘 D3 1トレンチ 黒緑 黄緑シルトプロック並 D3 1トレンチ 灰面 瀬戸並大ツップ並上 D3 古代建物北側掘方 D4 古代層	11.4	4.8	4.0	7	12	ロクロ 透明 発行	紫黒 灰白	見込み粒 の目輪跡 あり	遠見 19C 末～19C 前 意丹焼赤褐、黄付き砂行 着。口縁全周部僅行着、 打明肌として使用
77	1305	R256	磁器	皿	D3 南アゼ 東西階 段 3・4層	13.2	5.3	3.4	3	8	ロクロ 透明、気泡有 発行	紫黒、空閑や 多い、白	粒の目回 型高台	瀬戸・美濃
77	1306	R300	磁器	皿	D3 東西階段 3層相 互 D4 古代層 (斜路掘削)	13.8	6.8	3.5	2	11	ロクロ 透明、質人細かく有 発行、見込み文有	細砂少 に多い黄緑	見込み粒 の目輪跡 あり	焼熟
78	1307	R270	磁器	皿	D3 東西階段5層相 互 D3 東西階段6～7層 D3 斜路 南側法面上 方 焼灰 D4 斜路 南アゼ D4 南側法面 明黄焼 D4 斜路 南アゼ 灰黄焼灰 D4 斜路 小石層	13.6	6.4	3.6	4		ロクロ 透明、質人多 発行、見込み文有	紫黒 灰黄	玉粒、見 込み粒の 目輪跡 あり	焼熟、見込み文「寿」
78	1308	R302	磁器	盃	D3-4 東西階段 にご い黄焼粘、D2の5段 D4 東西階段5段 間 8層	9.0	つまみ 3.8	2.8	4	つま み10	ロクロ 透明 発行(黄焼き)、つ まみ内蓋有、天井部 内蓋文様有	紫黒 白	細蓋	肥後 19C 前
78	1309	R363	磁器	段重	D3-4 東西階段 灰黄緑粘	9.2	8.2	3.6	4	4	ロクロ 透明 発行	紫黒 白		肥後
78	1310	R261	磁器	燗酒 利	D3 東西階段 8層 D4 斜路 黒・黄物	3.4		(6.4)	11		ロクロ 透明、気泡多 発行(生掛けか)	紫黒 白	歯口型	
78	1311	R411	磁器	碗	D3 東西階段外石敷道上 部南北西側黄緑粘込み 東西西邊込み	8.4	3.2	5.8	2	4	ロクロ 透明、気泡多、ピン ホール有 発行、見込み文有	紫黒 白		肥後
79	1312	R020	磁器	皿	D2 1トレンチ 現代層	7.5	3.3	2.4	12	12	ロクロ 型押し 透明、鉄線 鉄線、色絵	紫黒 白	口縁10 角	20C 口縁と外面一部にも鉄線
79	1313	R051	磁器	盃	D2 1トレンチ 現代層	13.2	つまみ 5.3	4.6	6	つま み6	ロクロ 透明 発行、つまみ内蓋有	紫黒 白	并蓋	20C
79	1314	R084	磁器	皿	D3 古代建物土 2016 1トレンチ 黄緑粘シルト粘土層	11.2	6.4	6.3	5	10	ロクロ 透明、気泡多 発行、見込み文有	紫黒 白	広東煎	肥後 19C 末～19C 前 性瀬戸(未擦き有)
79	1315	R258	磁器	蓋物	D3 1トレンチ 焼(灰蓋)	6.2	3.4	3.3	4	4	ロクロ 透明 発行	紫黒 白		肥後
79	1316	R094	磁器	紅瓦	D3 1トレンチ 褐色土(民間)戸並大 字高土 黒灰・黄緑シルト小 プロック並	4.6	2.3	1.6	6	1	型押し 白黒	紫黒 灰白		肥後 19C～19C 初 内面と外面の一部施 釉
79	1317	R074	磁器	碗	D2 Bトレンチ	8.5	3.1	4.3	5	8	ロクロ 透明、気泡有 発行、口縁	紫黒 白	楕円形	瀬戸・美濃
79	1318	R105	磁器	皿	F2 二重明石相席上	13.6	6.8	3.3	1	3	ロクロ 透明 発行	紫黒 白	見込み粒 の目輪跡 あり 口縁 指輪跡 あり	
79	1319	R360	磁器	小杯	C5 瀧道儀検出面	7.2		(3.8)	3		ロクロ 透明 発行(黄緑転写)	紫黒 白	楕円形	瀬戸・美濃 19C 末～20C 初
79	1320	R085	磁器	蓋物	D-03 斜路以南 古代層 黄物	9.0	5.0	6.5	3	2	ロクロ 透明、気泡多 発行	紫黒 白	輪高台	肥後 19C

第19表 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器観察表 13

図版	報告番号	実測番号	種別	器種	アクリル 土器目録・遺構等	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	遺存 (口) * / 12	遺存 (底) * / 12	成形・彫刻 施文 装飾等	胎土・色調	調整 (内)	調整 (外)	形状・位置	産地・年代等 備考	
80	1321	1001	陶器	碗	B2 馬場内コンクリート リボ下 近代製粘土 C2 斜路 埋戻し C3 斜路 Aトレン チ 南北アゼ 溝区 B2 御幸石垣南面盛土 埋戻し	11.6	3.4	3.9	5	10	ロクロ 灰釉、貫入有、ビ ンホール有	磁砂多、空洞や 少、灰白			平皿	地面 外底面着色	
80	1322	004	陶器	鉢	B1 馬場内コンクリート 下 近代製粘土	25.4		(15.8)	2		鉄釉、磁砂	磁砂多、空洞や 少、灰白	ココ ナデ	ココ ナデ		越前	
80	1323	0373	陶器	皿	B4 レンガ基礎 北西隅部	12.4	5.4	4.5	1	1	ロクロ 灰釉	磁砂 灰				見込み・覆付きに砂 目録有	
80	1324	0347	土器	六鉢	B5 レンガ基礎外周 東側 遺物集中1 B-C5 レンガ基礎外 周東側	22.0	17.6	18.7	1	5	輪削み・回転台 外面着色	磁砂、磁砂 少、灰白	ココ ナデ		円柱状 器(口 足あり)	在地 内面着色	
80	1325	0346	土器	六鉢	B5 レンガ基礎外周 東側 遺物集中1 B-C5 レンガ基礎外 周東側	22.4	17.2	18.2	4	1	輪削み・回転台 外面着色	磁砂少 灰黄緑	ココ ナデ		ココナ デ後、 ケミ キカ	在地 内面わずかに着色	
81	1326	0379	土器	六鉢	B5 レンガ基礎外周 東側 遺物集中1 B-C5 レンガ基礎外 周東側	最大長 24.9	最大幅 24.9	16.7	12	9	タタラ作り	磁砂多、非 色粘土 にふい黄緑	ココ ナデ		ヘラケ ズリ ナデ、 表面未 調整	方形	在地 内面着色
81	1327	0392	土器	六鉢	B5 レンガ基礎外周 東側 遺物集中1 B-C5 レンガ基礎外 周東側	最大長 25.2	最大幅 24.3	16.5	10	8	タタラ作り	磁砂、磁砂 灰、にふい黄緑、 灰黄緑	ヘラケ ズリ ナデ、 表面未 調整		ヘラケ ズリ ナデ、 表面未 調整	方形	在地
81	1328	0391	土器	六鉢	B5 レンガ基礎外周 東側 遺物集中1 B-C5 レンガ基礎外 周東側	最大長 (18.15)	最大幅 25.0	18.25	5	6	タタラ作り	磁砂多、非 色粘土 にふい黄緑	ヘラケ ズリ ナデ、 表面未 調整		ヘラケ ズリ ナデ、 表面未 調整	方形	在地 内面着色
81	1329	0397	土器	六鉢	B5 レンガ基礎外周 東側 遺物集中1 B-C5 レンガ基礎外 周東側	最大長 (10.4)	最大幅 24.5	(13.5)	4	1	タタラ作り	磁砂、磁砂 灰、赤色粘 土黄緑	ヘラケ ズリ ナデ、 表面未 調整		ヘラケ ズリ ナデ、 表面未 調整	方形	在地
81	1330	0396	土器	六鉢	B5 レンガ基礎外周 東側 遺物集中1 B-C5 レンガ基礎外 周東側	最大長 (8.65)	最大幅 (20.0)	(10.9)			タタラ作り	磁砂多、非 色粘土 灰黄緑、灰 白	ヘラケ ズリ ナデ、 表面未 調整		ヘラケ ズリ ナデ、 表面未 調整	五角形 器	在地
81	1331	0380	土器	六鉢	B6 レンガ基礎外周東 側遺物集中1	最大長 25.1	最大幅 25.1	16.9	6	7	タタラ作り	磁砂、磁砂 灰、にふい黄緑	ヘラケ ズリ ナデ、 表面未 調整		ヘラケ ズリ ナデ、 表面未 調整	方形	在地
82	1332	0355	陶器	碗	C5 レンガ基礎部		4.0	(6.0)		7	ロクロ 灰釉、貫入有	磁砂多、にふい黄 緑			下平口 ナデ、 ケズリ	見込み 器、赤 山有	被熱
82	1333	0215	陶器	鉢	C4 斜路 黒・黄緑 B-C5 近代製粘土	(18.6)	(7.0)	6.3			ロクロ 灰釉、貫入有 白泥刷毛有	磁砂 灰			下平口 ナデ、 ケズリ	波状口 縁、見 込み器 の目録 割差	
82	1334	0051	土器	土師器 皿	C4 馬場レンガ基礎	18.9		(3.3)	2			磁砂少 にふい黄緑	ココ ナデ	ココナ デ、指 環区		圈縁	在地 内面黒色、拍撃痕有
82	1335	0079	土器	土師器 皿	C4 馬場レンガ基礎	8.6		1.4	1			磁砂少、非 色粘土 にふい黄緑	ココ ナデ	ココナ デ、指 環区		見込み 区	在地 18C
82	1336	0080	土器	土師器 皿	C4 馬場レンガ基礎	7.8		1.7	3			磁砂少、非 色粘土 にふい黄緑	ココ ナデ	ココナ デ、指 環区		見込み 器(口 縁が口 縁部に 取7る)	在地 拍撃痕有
82	1337	0081	土器	土師器 皿	C4 馬場レンガ基礎	8.3		1.4	3			磁砂少、非 色粘土 にふい黄緑	ココ ナデ	ココナ デ、指 環区		見込み 器、ナ 指環区	在地 18C
82	1338	0221	土器	土師器 皿	C4 レンガ基礎 斜路 黒・黄緑	8.35	3.2	1.7	9	12		磁砂、磁砂 灰、赤色粘 土あり にふい黄緑	ココ ナデ	ココナ デ、指 環区		ココナ デ、指 環区	在地 18C 拍撃痕有
82	1339	0088	陶器	碗	C4-5 斜路 埋戻し アゼ北 黒・黄緑 C4 コンクリート埋 戻し	9.8		(4.8)	4		ロクロ 灰釉、貫入有 赤緑(赤・緑)	磁砂 灰			ロクロ ナデ、 ケズリ	京・辰楽 18C 被熱	
82	1340	0377	陶器	碗	C4 斜路 埋戻し アゼ北 黒・黄緑 コンクリート埋戻し	12.5	3.6	4.5	小片	6	ロクロ 灰釉、貫入有 赤緑(赤・緑)	磁砂 灰			ロクロ ナデ	地面 18C 被熱	
82	1341	0372	陶器	碗	C4 斜路 埋戻し アゼ北 黒・黄緑 コンクリート埋戻し	14.6	7.3	14.75	2	3	ロクロ 灰釉、貫入有、ビ ンホール有	磁砂 灰、黄緑	ココ ナデ		ココナ デ、 ケズリ	横行き、面上覆元	
83	1342	0322	陶器	中甕	C4 斜路 埋戻し アゼ北 黒・黄緑 コンクリート埋戻し	17.5		(15.0)			ロクロ 鉄釉	磁砂少、磁 砂灰	ココ ナデ	ココナ デ、 ケズリ		古外 鉄釉道い跡付	
83	1343	0267	陶器	中甕	C4 斜路 埋戻し アゼ北 黒・黄緑 コンクリート埋戻し	15.7	11.4	(15.9)	4	6	ロクロ 鉄釉	磁砂多、赤色粘 土にふい黄緑	ココ ナデ	ココナ デ		甕戸・美濃 赤土 洗練2条、土質上	

第20表 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器観察表 14

図録番号	発掘番号	実測番号	種別	器種	ドリアン出土部位・遺構等	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	底径 (口) #/12	底径 (底) #/12	成形・整形 輪郭 筋部等	胎土・色調 等	調整 (内)	調整 (外)	形状特徴	産地・年代等 備考
83	1344	E381	土器	土師器 皿	C4 コンクリ基礎3段方	7.45		1.6	11	8		細砂少、赤色に濃い黄緑	ココロナデ	ココロナデ、家圧痕		在産 18C末～19C 内外地
83	1345	B400	土器	土師器 皿	C4 コンクリ基礎 風下砂石内 コンクリ基礎6段方 筋部 黒・黄緑	11.7		(2.05)	3	3	ロクロ	細砂少、緑色に濃い黄緑	ロクロナデ	ロクロナデ、筋部へラミガキ		在産 古土 土製カワラケ
83	1346	B414	陶器	碗	D4 遺構1段東側レンガ基礎 2段方西側 土器筋内 16層		7.6	(3.0)		5	ロクロ 灰釉、貫入有	緑色 浅黄緑		下半ロクロズリ		見込あり目録、外底面黄緑
83	1347	B409	陶器	碗	D4 控室即1階内 筋部 レンガ基礎下方 近代製地土	10.3		(6.1)	1	1	ロクロ 灰釉	細砂少、緑色に濃い黄緑		下半ロクロズリ	曜反照	肥前 17C 前
83	1348	E344	陶器	碗	D4 レンガ基礎内		4.4	(3.4)		4	ロクロ 黄緑色釉	厚緑 灰		ロクロズリ	高台内面黄緑の強いケズリ	益谷 骨付きに添着有
84	1349	E343	陶器	皿	D4 レンガ基礎内面方	13.4	5.2	3.0	4	2	ロクロ 灰釉	細砂少に濃い黄				肥前 18C末～17C初 内面に粘土目録3か所 北方向に粘土目録の跡。2ヵ所付着。全体に赤み
84	1350	E088	雑貨 土器	鉢	D4 レンガ基礎 近代製地土	14.4 最大径 (16.2)		(4.0)	3	3	ロクロ 陶質、筋部ムラあり	細砂多、赤色灰白、明濁ナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		
84	1351	E047	陶器	盥	D4 レンガ基礎 近代製地土	横径 13.8 最大径 17.8	つまみ 4.9	4.2	2	12	ロクロ 陶質 白灰染め、強び	細砂多、赤色、空多、やや不揃い、明濁	ロクロナデ	ロクロナデ		行幸古土 調査
84	1352	E048	陶器	鉢鉢	D4 レンガ基礎 近代製地土	35.5 最大径 28.0		(14.9)	2	2	ロクロ 陶質	細砂並、緑色 浅黄緑		ロクロナデ、ロクロケズリ		九谷 18C 卸し目 14 条
84	1353	E042	土製品 土人形	土人形	D4 筋部レンガ基礎内 黒・黄緑	最大長 2.85	最大幅 8.2	最大厚 2.6			中実型合わせ	細砂少 微			舟形	表面に黄緑色
85	1354	E094	陶器	壺	D4 レンガ基礎内	横径 66.9 最大径 73.9	21.5	64.9	9	12	鉄製	灰釉並 浅黄緑	ロクロナデ	ロクロナデ		筋部 外面に接合時の「へら」痕跡等。内面全体に付着有。内底面には磁器片がコンクリート付着。底面に墨書。図上黄緑
85	1355	E046	陶器	皿	B3 近代建物東側面方	11.6	5.7	3.8	7	7	ロクロ 陶質 見込み筋部「寿」	細砂多に濃い黄		下半ロクロズリ		19C 以降 高台内面墨書「主8 宮崎 子〇しき」、目録3か所
85	1356	D430	陶器	碗	E3 S01 東側面方	10.2		(3.7)	3	3	ロクロ 灰釉、貫入有 口縁部黄緑色成し	細砂並、緑色 暗黄		下半ロクロズリ		九谷 19C
85	1357	E056	陶器	鉢鉢	D4 瓦集積遺構下側	32.0		(11.1)	1	1		細砂並、緑色 赤色、灰白	ロクロナデ、卸し目	ロクロナデ		越前 卸し目 9 条
86	1358	E057	雑貨 陶器	碗	C5 遺構検出 遺構遺構検出面 遺構筋部検出面 遺構内 C6 近代製地	17.0	6.6	(6.1)	4	3	透明、緑釉 筋部(魚リ)	緑色				20C 以降の一部分のみ緑色 口縁部と底面は緑色しない。図上黄緑
86	1359	E376	雑貨 土器	ミユチコ小鉢	C5 遺構土管(南)筋方	2.2	1.2	1.1	4	型押し 筋部	細砂僅か				六角 足 3	内面白黄緑色成し
86	1360	E356	陶器 土器	深鉢	C5 遺構土管(西)筋方			(3.0)	体部 小片	平截竹管文、網文	細砂・緑多、赤色、灰白	ナデ				在産 縄文中期
86	1361	E045	陶器	行平	C3 筋部 南北アゼ土管筋方	18.6		(6.5)	把手 瓦形	把手中空型合わせ筋部 筋部 筋部飛び筋、把手筋部「寿」	緑黄 灰白	ロクロナデ	ロクロナデ			
86	1362	E050	瓦器 器	右台杯	E4 土管筋方	10.0	(1.4)		1	1	細砂・緑多、赤・白色灰含む 灰白	ココロナデ	ココロナデ	貼付け 高台	図録 既用	
86	1363	E289	陶器	皿	D4 排水管筋方 地土	15.5		(2.3)	1	1	ロクロ 陶質、ビンノル有	細砂あり、濃い黄				康縁皿
86	1364	E228	陶器	鉢鉢	C4 筋部 黒・黄緑 S04(筋部)	(33.2)		(9.4)	2	2	ロクロ	細砂、細砂成	ロクロナデ、卸し目	ロクロナデ		湯谷 世 卸し目 9 条
87	1365	E030	土製品 土人形	土人形	C4 筋部 S06	最大長 (5.9)	最大幅 (4.3)	最大厚 (3.8)			手づくね	細砂並、石家瓦付 に濃い黄				底のたけ下 部分に穿孔
87	1366	B022	陶器	碗	C2 石垣第7段・第5段 裏込め栗石 C2・C2 筋部 筋部	10.4	3.8	5.4	2	1	ロクロ 灰釉、貫入有 筋部・白	緑色 灰白		下半ロクロズリ		康縁皿 見込目録有
87	1367	B059	陶器	碗	C2 石垣第8段 裏込め 駒形石班(北) 埋瓦成	9.2	3.8	6.2	2	6	ロクロ 陶質	細砂並、緑色 灰白		下半ロクロズリ		型押し 輪軸有
87	1368	B052	雑貨 陶器	皿	B2 石垣第2段 裏込め			(8.9)	不明		ロクロ 透明、細い貫入有	緑色 灰白				イギリスカ ムーラーロゾ有、刻印有

第21表 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器観察表 15

図版番号	報告番号	実測番号	種別	器種	グラフィック 出土位置・遺構等	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	底存 (口) * /12	底存 (底) * /12	成形・彫刻 施部等	胎土・色調 等	調整 (内)	調整 (外)	形状・装 飾	産地・年代等 備考
87	1369	D083	陶器	鉢	C2 石組第6段 裏込め C1 割路 埴輪区	20.6	9.9	(11.0)	2	2	ロクロ 鉄輪・ 穴摩	胎砂少、空 腔不全多 褐色灰	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ		信楽 戻上復元
87	1370	D129	陶器	土鍋	C2 石組第6段 裏込め C1 割路 埴輪区 C2 割路 埴輪区 C2 割路 埴輪区 C2 割路 埴輪区 C2 割路 埴輪区 C2 割路 埴輪区 C2 割路 埴輪区	21.3	9.6	9.7	2	4	ロクロ 鉄輪	胎砂少、整 褐色 灰白		下半ロ クロク ズリ	口縁 のみ、 凹状不 明	信楽 戻上復元
87	1371	D095	陶器	仏花煎	C2 Aトレンチ 石 組第7段 裏込め C3 割路 埴輪区 C2 割路 埴輪区 C2 割路 埴輪区	7.1		(10.7)	9		ロクロ 鉄輪	胎砂少 灰黄	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	凹形肥 字どか 所	
88	1372	D026	陶器	片口 鉢	C2 石組第6段 裏込め C1 割路 埴輪区 C2 割路 埴輪区 C2 割路 埴輪区 C2 割路 埴輪区 C2 割路 埴輪区 C2 割路 埴輪区	34.8	16.7	13.8	3	9	粘土練き上げ、 凹、 鉄輪	産少、胎砂・ 胎砂見、マ ーブ状 産	ロクロ ナデ、 加し具	ロクロ ナデ、 叩き		肥前 18C 産～19C 頃 割し目 13条、並込 み輪状(右台内)に割 6か所
89	1373	D032	陶器	鉢	C2 石組第3段 裏込め C1 トレンチ 裏込め C1 石組第3段 裏込め			(6.2)	12		ロクロ 鉄輪	産少、胎砂	ロクロ ナデ、 加し具	ロクロ ナデ		肥前 18C 産～19C 頃 割し目 13条、並込 み輪状(右台内)に割 6か所
89	1374	D027	土器	火鉢	C2 石組第6段 裏込め C1 割路 埴輪区 C1 割路 埴輪区 C1 割路 埴輪区	最大 19.3		(7.1)	1		輪轆み・回転 式、 泥、 拍花文(南 西)、 舟山形産	胎砂多 にぶい産	ロクロ ナデ	ハラミ ガキ、 ロクロ ナデ		在場
89	1375	D066	土器	焼煮釜	C2 石組第9段 裏込め C1 割路 埴輪区			(6.1)	小片		手づくね	胎砂少、胎 砂多 浅黄褐色	ナデ	ミガキ	帆形	在場
89	1376	D031	土器	土師器 甕	C4 割路 石組(北)東端 A 割路 石組上	10.9	8.5	2.4	12		手づくね	胎砂多、非 色配 にぶい黄褐色	ロクロ ナデ、 加 おさえ	ロクロ ナデ、 加 おさえ	C1 1 18条 底板目 状産	在場 17C 頃 口縁全周内外滑漣痕
89	1377	D098	土器	土師器 甕	C4 割路 石組(北)東端 A 割路 石組上	12.0	9.25	2.6	3	3	手づくね	胎砂少、非 色配 にぶい黄褐色	ロクロ ナデ、 加 おさえ	ロクロ ナデ		在場
90	1378	D114	陶器	鉢	B2 石組第7段 裏込め B1 割路 埴輪区	35.2		(13.2)	3		ロクロ 鉄輪、 鉄轆	胎砂多、胎 砂多、 産少	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	口唇部 凹線4 本	越前 口唇部陥凹
90	1379	D148	陶器	鉢	B2 割路 石組2段 B2 割路 石組2段			(4.5)	小片		ロクロ 鉄輪	産多、胎砂 多 にぶい赤褐色	ロクロ ナデ、 加し具	ロクロ ナデ		割し目 11条か
91	1380	H113	陶器	甕	B2 石組第6段 裏込め B1 割路 埴輪区 B2 石組第4段 裏込め B1 割路 埴輪区 B1 割路 埴輪区 B1 割路 埴輪区 B1 割路 埴輪区 B1 割路 埴輪区 B1 割路 埴輪区	34	14.0	30.7	3	3	ロクロ 鉄輪、 泥轆 印線2本、3個の 円形淨文1か所	胎砂多、産 多 にぶい産	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ、 ハラミ ガキ、 表面 黄褐色		肥前 産地に板目状の庄 輪、 戻上復元
91	1381	D090	陶器	灯明 受皿	B2 石組第3段 裏込め B1 割路 埴輪区 B2 石組第2段 裏込め B1 割路 埴輪区	12.6 外径 9.4	5.8	2.0	5	6	ロクロ 鉄輪	胎砂少 浅黄褐色	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ、 ロクロ ケズリ		在場 内外面滑漣痕有
91	1382	D296	陶器	土瓶	B2 石組外側 レンガモデル産			(5.2)			緑釉 白泥陶器	形、 浅黄	ロクロ ナデ	注口部 分		
92	1383	D422	土器	土師器 甕	C5 南土利定断面P1r	9.5	5.5	2.2	3	3	手づくね	胎砂少、非 色配 産	ロクロ ナデ、 加 おさえ	ロクロ ナデ、 加 おさえ		在場 17C 頃
92	1384	D386	陶器	甕	D0 門首面遺構			(1.8)			ロクロ 鉄輪、 貫入有 白化粧	胎砂少 浅黄	ロクロ ナデ	ロクロ ケズリ		産?・黄 褐色
92	1385	D029	陶器	甕	C2 割路 埴輪区 C2 割路 埴輪区	11.4	4.7	7.9	6	12	ロクロ 鉄輪、 貫入有	形、 砂粒・ 産 白化粧	ロクロ ケズリ		割し目 高台、 豊山高 台	割分の吹き出し有
92	1386	D140	陶器	甕	C2 割路 埴輪区 C2 割路 埴輪区	12.2	4.4	(4.2)	1	12	ロクロ 鉄輪	産、胎砂 多、 胎砂定 産		下半ロ クロク ズリ		戻上復元
92	1387	D101	陶器	甕	C2 割路 埴輪区 C2 割路 埴輪区 C2 割路 埴輪区 C2 割路 埴輪区	10.8	4.7	7.8	2	12	ロクロ 鉄輪	胎砂多、空 腔有 黄褐色	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ		
92	1388	D273	陶器	甕	C3 割路 埴輪区 C3 割路 埴輪区	11.3		(6.1)	小片		ロクロ 鉄輪	胎砂少、空 腔少 灰	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ、 ロクロ ケズリ、 凹 窪		

第22表 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器観察表 16

図版	報告番号	実測番号	種別	器種	デリック 出土層位・遺構等	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	底径 (口) #/12	底径 (底) #/12	成形・彫形 輪郭 筋線等	胎土・色調 等	調整 (内)	調整 (外)	形状特 徴	産地・年代等 備考
	1389	8065	陶器	碗	C2 新路北側ワレン 埴地 C2 新路 埴地 C2 新路 Aトレン チ南アゼ C3 新路 埴地・黄地 C3 新路 南定アゼ 埴地	9.2	3.1	5.5	3	6	ロクロ 反輪 色絵(赤・緑・黒)	彫磨 灰白		下半ロ クロケ ズリ		京・信楽 被熱
	1390	8180	陶器	碗	B3 新路(南) 新路南側法面 埴地 C2 新路 埴地	9.7	2.8	5.4	1	2	ロクロ 反輪 色絵(赤・緑)	彫磨 灰白		下半ロ クロケ ズリ		京・信楽
	1391	8065	陶器	碗	C3 新路 黒灰・黄地		4.7	(4.8)		7	ロクロ 反輪	彫磨 赤黄	ロクロ ナゾ	ロクロ ナゾ ロクロ ケズリ	高台内 高台状 ケズリ 痕	京・信楽
	1392	8112	陶器	碗	C3 新路 埴地 C2 新路石垣(南) 南面 溝渠 溝渠 溝渠 溝渠	10.2	4.2	5.9	3	12	ロクロ 反輪、一部貫入有 筋線	砂粒やや多 く、全粒 浅黄緑				京・信楽 18C 埴 目跡が白、被熱に より輪が白濁
	1393	8020	陶器	碗	B3 新路 黒灰・黄地 C2 新路 Aトレン チ北アゼ 埴地 C2 新路 埴地 C2 新路 埴地 C2 新路 埴地	9.3	3.5	5.2	6	12	ロクロ 反輪、貫入有 筋線	彫磨 灰白		下半ロ クロケ ズリ	小鉢 黒	信楽 19C
	1394	8018	陶器	碗	C2 新路 Aトレン チ南アゼ 埴地・埴 地	10.2	3.7	6.0	1	4	ロクロ 反輪 染付、筋線	彫磨 灰白		下半ロ クロケ ズリ	小鉢 黒	信楽 18C 埴
	1395	8227	陶器	碗	C3 新路 黒灰・黄地	8.1	5.0	6.2	5	4	ロクロ 反輪、灰治貫入有 筋線(空目付)	彫磨 黒色の砂粒 多、灰白		下半ロ クロケ ズリ	平碗 輪高台	信楽 埴上復元
	1396	8086	陶器	碗	C3 新路、東西アゼ、 南定アゼ C4 新路 黒・黄地	9.3	4.9	7.2	4	7	ロクロ 反輪、貫入あり 筋線	彫磨 灰白 浅黄 緑			輪高台	
	1397	8064	陶器	碗	C4 新路 新断アゼ 黒・黄地		4.7	(4.2)		12	ロクロ 反輪、貫入有 筋線	彫磨少、黒 泥黄	ロクロ ナゾ	ロクロ ナゾ ロクロ ケズリ	高台内 高台状 のケズリ	京・信楽
	1398	8240	陶器	碗	C-B3 新路 黒・黄地		4.8	(1.8)			ロクロ 反輪、貫入有 筋線、刻印	彫磨 灰白				肥前 17C 中央～18C 高台、底面刻印(木 下張)
	1399	8035	陶器	碗	C4 新路 新断アゼ北 黒・黄地	12.4		(3.6)			ロクロ 長石粉、鉄粒、貫 入有 筋線、口溝	彫磨少 灰白	ロクロ ナゾ	ロクロ ナゾ	志野	
	1400	8243	陶器	碗	B3 新路 南定アゼ 砂利層	11.8	4.6	7.0	6	12	ロクロ 筋線、刻印	彫磨 灰白		新断ケ ズリ	赤黄、 輪高 帯状に刻印有(口)	瀬戸・美濃 18C 前 19C 前 帯状に刻印有(口)
	1401	8016	陶器	碗	C2 新路 Aトレンチ南アゼ 溝渠	9.5	4.2	5.7	4	12	ロクロ 反輪、鉄粒、貫入 有 筋線、分け、擦	彫磨若 浅黄緑				瀬戸・美濃 見込みと墨付きに磨 看有
	1402	8229	陶器	碗	C4 新路 黒・黄地	11.1	5.4	6.9	3	6	ロクロ 反輪、鉄粒、貫入 有 筋線	彫磨 灰白	ロクロ ナゾ	ロクロ ナゾ	輪高台	ハリ目跡有
	1403	8143	陶器	碗	C3 新路 南定アゼ 新路北 埴地 新路 黒・黄地	10.8	4.4	7.4	1	12	ロクロ 高明、貫入有 筋、位、網毛目 内：打ち網毛目	彫磨 灰白				肥前 網毛目漆津、外面輪 白濁、被熱か
	1404	8088	陶器	碗	C2 新路 埴地 C2 新路 埴地 C2 新路石垣南 面 溝渠 溝渠 溝渠	13.4		(5.3)		4	ロクロ 反輪 白沢網毛目	彫磨若 浅黄緑				瀬戸
	1405	8227	陶器	碗	C3-4 新路 黒・黄地	8.8	4.2	5.8	2	5	ロクロ 高明 内外面打ち網毛目	彫磨 埴地				肥前 網毛目漆津
	1406	8282	陶器	碗	B3 新路南側法面 石垣以 埴地	7.8		(5.2)		2	ロクロ 白濁輪 長石粉、鉄粒 筋線(ピツ掛け)	彫磨 灰黄	ロクロ ナゾ	ロクロ ナゾ ロクロ ケズリ		鉢
	1407	8139	陶器	碗	B3 新路 南定アゼ 南法面 埴地	8.3	2.5	3.5	3	12	ロクロ 反輪、貫入有 筋	砂粒並 に白濁、 灰白	ロクロ ナゾ	ロクロ ナゾ ロクロ ケズリ	輪高台	信楽 見込埴地か
	1408	8010	陶器	碗	C2 新路 埴地	3.9		(2.3)		10	ロクロ 長石粉、ピンホ ール有	彫少、空目 灰白				外道悲書「四月」日 跡(口) 口口、
	1409	8028	陶器	碗	C2 新路 埴地(北) 南面塚土 溝渠	4.0		(2.9)		8	ロクロ 反輪、貫入有、ピ ンホール有	彫磨、空目 有 浅黄		ロクロ ケズリ		19C 前 外道悲書「文武六年 秋」口口口、 口口、底面赤着色 有
	1410	8031	陶器	碗	C3 新路 埴地	4.3		(1.2)		11	ロクロ 反輪?	彫磨 浅黄緑		ロクロ ケズリ	高台内 高台状 のケズリ	京・信楽か 外道悲書「三三」 九、十、十一
	1411	8220	陶器	碗	C4 新路 黒・黄地	4.2		(1.35)		6	ロクロ 反輪、貫入有	彫磨多 浅黄～黄		ケズリ、 ロ クロ ナゾ		瀬戸・美濃 外道悲書「文」か、 被熱、高台部黒く変 色(口)

第24表 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器観察表 18

図版	発掘番号	実測番号	種別	器種	グリスコ 出土部位・遺構等	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	底存 (口) #/12	底存 (底) #/12	成形・整形 輪割 筋割等	胎土・色調 等	調整 (内)	調整 (外)	形状特 徴	産地・年代等 備考
98	1438	E306	陶器	鉢	C-D4 鉢路 磁器アゼ 北 黒・黄焼	21.4	13.2	10.05	4	3	ロクロ 反輪, 貫入有	緑少, 磁砂 多 灰黄	ロクロ ナダ ロクロ ナダ	ロクロ ナダ ロクロ ナダ		瀬戸・美濃 見込み内形の磁器部 分のみ以上
99	1439	E306	陶器	鉢	C4 鉢路 磁器アゼ 黒・黄焼	接 地 (8.5外 側 19.3)	8.5	8.0	3	3	ロクロ 反輪	磁砂, 磁砂 多 灰黄	ロクロ ナダ	ロクロ ナダ ロクロ ナダ		見込み胎土目3の西 残, 胎白濁
99	1440	E285	陶器	鉢	C2 鉢路 埴輪区 C3 鉢路 北側法田 検出 C4 鉢路 黒・黄焼	16.6	8.4	8.5	1	12	ロクロ 反輪, 貫入有	磁砂, 灰黄 含む 灰黄	ロクロ ナダ	ロクロ ナダ ロクロ ナダ		瀬戸 見込みハリ目跡3か 所, 胎着1か所, 胎 土黄濁
99	1441	E084	陶器	鉢	C2 鉢路 Aトレンチ 埴輪区	17.4		(4.3)	1		ロクロ 反輪	磁砂多 灰白		下半 口 ナダ		破損
100	1442	D047	陶器	鉢	C3 鉢路 (北) 南北アゼ 埴輪区		11.3	(7.6)		6	ロクロ 反輪	磁砂少 灰黄	ロクロ ナダ	ロクロ ナダ ロクロ ナダ		実定 内面白緑3の西残, 透肉内丁具痕有, 胎 土により胎白濁
100	1443	B111	陶器	鉢	D2 鉢路 埴輪区 D3 鉢路 (南) 埴輪区	22.6	14.6	7.4	2	3	ロクロ 反輪, 筋壁	磁砂多 に灰・硝, 灰	ロクロ ナダ	ロクロ ナダ ロクロ ナダ		破損 内面白緑3の西残, 透肉1か所残有 (注か れ)
100	1444	E068	陶器	鉢	C4 鉢路 磁器アゼ 北 黒・黄焼 鉢路 1層・2層	32.1		(7.5)	1		ロクロ 反輪 口唇部凹縁3条	磁砂多, 白 色和灰含む に灰・硝, ケントイッ チ灰	ロクロ ナダ	ロクロ ナダ		破損
101	1445	E190	陶器	鉢	D2 鉢路 埴輪区	31.0		(14.5)	3		ロクロ 反輪 口唇部凹縁3条	磁砂多, 硝 灰白	ロクロ ナダ	ロクロ ナダ		破損 口縁赤み有
101	1446	D018	陶器	鉢	C2 鉢路 Aトレンチ北アゼ 埴輪区	34.8		(8.8)	1		筋輪, 筋壁 口唇部凹縁3条	磁砂多, 硝 灰白	ロクロ ナダ	ロクロ ナダ		破損
101	1447	D030	陶器	鉢	C2 鉢路 Aトレンチ 1層 (砂石焼)	21.6		(7.5)	2		ロクロ 反輪, 筋壁	磁砂多, 灰, 硝	ロクロ ナダ	ロクロ ナダ		破損
102	1448	B011	陶器	蓋	C2 鉢路北側アゼ 埴輪区			(2.0)	6		ロクロ 反輪, 貫入有, 緑 二層	磁砂 に灰・硝	ロクロ ナダ		土瓶蓋 内面遺着	
102	1449	D063	陶器	蓋	C3 鉢路 黒・黄焼, 黒・黄 焼	9.6 つまみ 2.1	2.1	3.6	7		ロクロ 反輪, 貫入有	磁砂 灰白	ロクロ ナダ	ロクロ ナダ		土瓶蓋
102	1450	B015	陶器	蓋	C4 鉢路 磁器アゼ 北 黒・黄焼	9.8	4.7	2.5	7		ロクロ 反輪	磁砂少 灰白, 灰黄	ロクロ ナダ	ロクロ ナダ ロクロ ナダ		土瓶蓋 つまみ 花形
102	1451	D082	陶器	蓋	C3 鉢路 南北アゼ 砂利・砂	10.8		(2.4)	3		ロクロ 反輪 白灰 (刷毛状)	磁砂 灰区へに灰 白灰	ロクロ ナダ, 胎赤み あり	ロクロ ナダ		土瓶蓋
102	1452	E090	陶器	蓋	C3-4 鉢路 黒・黄焼	12.1	つまみ 3.4	2.5	3	12	ロクロ 反輪	磁砂 灰黄相				行平蓋
102	1453	D044	陶器	蓋	C4 鉢路 小五郎 C3 鉢路 南北アゼ 土管製方	17.8 つまみ 14.8	5.7	3.8	4	3	ロクロ 反輪, 筋壁 白灰筋置き, 菊付 筋	磁砂 に灰・硝	ロクロ ナダ	ロクロ ナダ ロクロ ナダ		土瓶蓋
102	1454	D090	陶器	蓋	D2 鉢路 埴輪区 C3 鉢路 南北アゼ 黒焼 D3 鉢路 南北アゼ 埴輪区 D4 鉢路 (南) 南北アゼ D5 鉢路 (南) 埴輪区	15.4	つまみ 4.2	4.7	6		ロクロ 反輪, 貫入有 丹土面施緑7条	磁砂少 灰黄	ロクロ ナダ	ロクロ ナダ		行平か 土瓶蓋 口縁部 輪割
102	1455	E268	陶器	蓋	C4 鉢路 黒・黄焼	3.8		0.9	12		反輪 色絵 (赤・緑)	磁砂多 に灰・硝				合子蓋 内面無輪
102	1456	B032	陶器	蓋	C3 鉢路 Aトレン チ南側 黒・黄焼 鉢路 埴輪区	7.0	4.4	0.95	11	12	ロクロ 反輪, 貫入有	磁砂 灰白				合子蓋 信楽
103	1457	B274	陶器	急須	C3 鉢路 黒・黄焼	7.4		(5.6)	3		筋壁 浅黄相, 菊 付	ロクロ ナダ	ロクロ ナダ			練り込み技法
103	1458	B067	陶器	急須	C3 鉢路 (北) 南北アゼ 埴輪区	10.8		(4.4)	3		ロクロ 反輪 白灰, 砂粒, 染付, 緑輪	磁砂 赤灰	ロクロ ナダ	ロクロ ナダ		
103	1459	E305	陶器	中水注	C3-4 鉢路 黒・黄 焼 C4 鉢路 磁器アゼ 北, 磁器アゼ北 黒・黄焼	9.2	6.6	12.35	2	4	ロクロ 反輪, 貫入多 砂粒, 染付, 菊付 文	磁砂 灰黄		下半 口 ナダ		蓋・信楽 肥前土黄濁
103	1460	E340	陶器	土瓶	C5 鉢路 磁器アゼ 北 黒・黄焼	6.8		(8.8)	5		ロクロ 反輪, 反輪 割部施線, 反輪施 土掛け	磁砂 灰白, 硝	ロクロ ナダ	ロクロ ナダ		そろばん 土瓶
103	1461	E308	陶器	土瓶の 注口	C4 鉢路 磁器アゼ 北 黒・黄焼			(4.2)			透明, 貫入有 白化粘土	磁砂 に灰・硝				
103	1462	B135	陶器	行平	D3 鉢路 南北アゼ 埴輪区	10.8		6.0	3		ロクロ 反輪, 筋壁 染付	磁砂多 砂粒灰黄	ロクロ ナダ	ロクロ ナダ		
104	1463	B127	陶器	行平	D2 鉢路 埴輪区	19.0	9.8	9.8	3	1	ロクロ 反輪, 反輪 染付	磁砂少 浅黄相	ロクロ ナダ	ロクロ ナダ ロクロ ナダ		

第25表 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器観察表 19

図版	報告番号	実測番号	種別	器種	グラフィック 出土部位・遺構等	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	底径 (口) * /12	底径 (底) * /12	成形・器形 輪郭 裝飾等	胎土・色調等	調整 (内)	調整 (外)	形状・用途	産地・年代等 備考	
104	1464	1032	陶器	行平	C2 斜路、御堂石組 南面 埋埋区 D3 斜路 南北アゼ 段差機灰	12.3		96.2	4		ロクロロ 灰輪。灰滑有。貫 刺不や多 灰有			下半ク ロケズリ	瀬戸・美濃		
104	1465	1041	陶器	行平	B4 斜路 黒・黄焼	(17.2)		(6.1)	1		ロクロロ 緑石中堅型合わせ 灰輪。貫人善しい 把手上面磨削	羅漢 灰	ロクロロ ナダ	ロクロロ ナダ		瀬戸(古輪郭)	
104	1466	1096	陶器	土瓶か 行平	C2 斜路 Aトレンチ 埋埋区	7.9		(1.8)	4		磨砕 外底刻印	磨砕少。磨 羅漢 灰白			3見か (1 割 残)	意・尾張 御印(首引)。外面 磨削有	
104	1467	1032	陶器	土鍋	C4 斜路 羅漢アゼ 黒・黄焼	16.6	6.7	7.1	1	2	ロクロロ 磨砕	磨砕少。磨 羅漢 灰白	ロクロロ ナダ	ロクロロ ナダ 切筋 ナダ	3見か (1 割 残)	見込ハリ目跡1か 所	
104	1468	1062	陶器	土鍋	C-03 斜路 黒・黄焼	15.4		(6.8)	6		磨砕	磨羅 黄灰			把手2 割(1 割残)	近世	
105	1469	0116	陶器	半月口 形水注	C2 斜路 南北アゼ 斜路・砂	割径6		(4.1)	不明	2	ロクロロ 白輪。貫人。有。ビ ンホルム有	磨砕少 灰白				瀬戸・美濃 注口径: 0.8cm	
105	1470	0270	陶器	灰次	C3 斜路 黒・黄焼			(4.5)	6		ロクロロ 磨明輪。貫人 赤面白灰配土	羅漢 黄灰	ロクロロ ナダ		割高台 (横口 6.5cm 分)		
105	1471	0233	陶器	灰次	C4 斜路 黒・黄焼			(4.55)	12		ロクロロ 磨明輪。貫人 有(緑。他)	磨砕 黄灰	ロクロロ ナダ	底面ケ ズリ	幕原底	内底面輪状の磨削痕	
105	1472	1022	陶器	灰次	C2 斜路 機灰			(3.9)	不明		長石軸。貫人 有磨砕	磨砕 黄灰	ロクロロ ナダ			瀬戸・美濃 志野焼	
105	1473	0328	陶器 土器	香炉	C3 斜路 黒・黄焼 C4 斜路 羅漢アゼ 黒・黄焼	10.8	7.2	6.95	6	12	ロクロロ 磨砕 印花文(菊花)	磨砕少 黄灰	ロクロロ ナダ	ロクロロ ナダ 底面流 切り後 ロクロロ ナダ	3見(円 磨削)		
105	1474	0334	陶器 土器	香炉	C3 斜路 羅漢アゼ 北・黄焼	6.3	5.2	3.75	2	3	磨砕 印花文(菊花)	磨砕少。赤 色転写 に広い痕	ロクロロ ナダ	ロクロロ ナダ 下半ク ロケズリ	3見(円 磨削) か(1 割残)		
105	1475	0676	陶器 土器	行灯籠	C3 斜路(北) 南北アゼ 機灰	20.0	20.0	1.6	2	2	ロクロロ 磨砕 赤絵。白泥。緑輪	磨砕少。赤 色転写 に広い痕	ロクロロ ナダ ロクロロ ケズリ				
105	1476	0664	陶器	灰次	C3 斜路(北) 南面埋埋区 A 斜路 東端 黒灰・黄焼	5.2	3.5	3.3	2	12	ロクロロ 磨砕	磨砕並。磨 羅漢 に広い痕	ロクロロ ナダ	ロクロロ ナダ 切筋 ナダ		内底面溝状の深い ナダ痕	
105	1477	10038	土器	不明	C3 御堂石組(北) 南面 黒灰・黄焼			(3.4)	11		ロクロロ 外面白灰(胎どは がれている)	磨砕多。赤 色転写 有	ロクロロ ナダ	ロクロロ ナダ			
105	1478	0154	陶器 土器	持子手	D3 斜路 黒灰・黄焼	最大幅 (11.4)		遺存長 (9.4)	(2.1)		手づくね 彩花彫付け。刃部 磨削	磨砕少 黄灰			ナダ 磨削さ え	近世	
105	1479	0689	陶器	甕	C3 斜路 黒灰・黄焼	12.6		(3.7)	2		ロクロロ	磨砕多。磨 羅漢 灰	ロクロロ ナダ	ロクロロ ナダ		信楽 陶灰	
106	1480	0380	陶器	甕	C4 斜路 羅漢アゼ 北・黄焼	14.4	12.2	(18.9)	3	3	ロクロロ 磨砕 口唇部沈澱土染	磨砕少。磨 羅漢 灰	ロクロロ ナダ	ロクロロ ナダ カギ目		口縁・内底磨削。外 底目跡2か所残。尚 上層灰	
106	1481	0239	陶器	甕	C3-4 斜路 黒・黄焼			(21.7)	不明		ロクロロ 磨砕	磨砕。磨 羅漢 に広い痕	ロクロロ ナダ	ロクロロ ナダ カギ目		近世	
107	1482	1017	陶器	鉢鉢	C3 斜路 黒灰・黄 焼。埋埋区。機灰 C2 斜路 Aトレン チ南アゼ 機灰 C2 斜路 Aトレン チ 斜路アゼ 黒灰・ 黄焼	29.4	11.2	11.8	2	4	ロクロロ 磨砕	磨砕並 機灰。機	ロクロロ ナダ	ロクロロ ナダ 切筋 ナダ		肥前 17C 黄 機焼的。白のみ磨削。 加し目16条か。使 用により内底面磨削	
107	1483	0329	陶器	鉢鉢	C4-5 斜路 羅漢アゼ之 黒・黄焼	34.6	14.4	12.5	1	5	叩き 磨砕	磨砕・磨 羅漢 に広い痕	ココナ ナダ	叩き。 ココナ ナダ		肥前 18C 黄～19C 前 加し目16条か。上 層ナダ消し 見込ハリ状の素白焼 き痕。底付磨削有	
108	1484	0015	陶器	鉢鉢	C2 斜路 北園ライ C2 斜路 Aトレン チ埋埋区 C2 斜路 南北アゼ 機灰 D2 石知第6段 磨 込め築石 埋埋区	35.0		(16.4)	2		叩き 磨砕	磨有。磨 羅漢 灰	ココナ ナダ	叩き。 ココナ ナダ		肥前 18C 黄～19C 前 加し目の上層ナダ消 し	
108	1485	10317	陶器	鉢鉢	C4 斜路 羅漢アゼ 之・黒・黄焼			(9.1)	5		叩き 磨砕	磨砕並。磨 羅漢 灰	加し目	叩き 切筋 ナダ		肥前 18C 黄～19C 前 見込ハリ状の素白 焼。底付磨削有。加し 目19条	

第26表 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器観察表 20

図版	報告番号	実測番号	種別	器種	ドリル記号 出土層位・遺構等	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	底径 (口) #/12	底径 (底) #/12	成形・整形 輪廊 筋部等	胎土・色調 等	調整 (内)	調整 (外)	形状特 徴	産地・年代等 備考	
	109	1486	B217	陶器	鉢鉢	C1 鈔路 黒・黄焼		13.2	(8.8)	9	叩きや 鉄輪	粗砂、細砂 透明焼	叩し目	叩削ケ ズリ		断面 高さ 約1.5cm。器口 に板目ワタ、器口 縁に板目ワタ、砂行巻 及び板目ワタの重なり が、内外底面無難	
	109	1487	B021	陶器	鉢鉢	C2 鈔路 北側ウイ 埴焼尻、埴焼 鈔路 埴焼尻、埴焼	{70}		(11.9)	1	ロクロ 挽締め	雑多、粗砂 多、細砂多 赤灰	ロクロ ナゲ 叩し目	ロクロ ナゲ ロクロ ケズリ	口縁内 面、口 縁外面 筋線2 条	断面 高さ 約1.5cm 叩し目多 条	
	110	1488	B011	陶器	鉢鉢	C1 鈔路 北側ウイ 埴焼尻	{54} 前後か ウ		(6.9)	小片	ロクロ 挽締め	粗砂多、空 洞や赤みの 埴焼尻	ロクロ ナゲ、 ロクロ ケズリか 、沈 降	ロクロ ナゲ 叩し目	口縁内 面、口 縁外面 筋線2 条	断面 高さ 約1.5cm 叩し目 13条か	
	110	1489	B382	陶器	鉢鉢	C4 鈔路内埋戻し	埋戻 33.3 外側 35.0		(5.8)	1	鉄輪	粗砂・粗砂 少 灰黄焼	ロクロ ナゲ 叩し目	ロクロ ナゲ	口縁内 面、口 縁外面 筋線2 条	叩し目 17条か、輪 が口縁に向かって直 列している。逆に して焼かれたか。	
	110	1490	B024	陶器	鉢鉢	C3 鈔路 南北アゼ 埴焼	30.9		(6.6)	1	ロクロ 鉄輪	粗砂赤 灰	ロクロ ナゲ、 叩し目	ロクロ ナゲ	口縁内 面、口 縁外面 筋線2 条	断面 高さ 約1.5cm 叩し目 13条か	
	111	1491	B011	陶器	南たん ば	C3 鈔路 黒・黄焼	最大幅 (23.3)	最大径 16.9	最大厚 13.6		鉄輪、貫入有	粗砂赤、磁 鉄 灰白	ロクロ ナゲ	ロクロ ナゲ		断面 高さ 約1.5cm 叩し目 13条か、輪 が口縁に向かって直 列している。逆に して焼かれたか。	
	112	1492	B078	陶器	甕	C3 鈔路 南北アゼ 埴焼 C2 鈔路 南北アゼ 埴焼 C1 鈔路 南北アゼ 埴焼 C4 鈔路 南北アゼ 埴焼 C5 鈔路 南北アゼ 埴焼	土管 断面 C1 C2 C3 C4 C5		(8.73) -(20.0)	小片	ロクロ 鉄輪	粗砂赤、粗 砂 灰～灰黄	ロクロ ナゲ	ロクロ ナゲ、 筋線		断面 高さ 約1.5cm 叩し目 13条か	
	112	1493	B033	陶器	甕	C3 鈔路 埴焼				小片	鉄輪	粗砂多 洗黄焼	ナゲ	ナゲ		断面 高さ 約1.5cm 叩し目 13条か	
	112	1494	B097	陶器	甕	B3 鈔路 南北アゼ 埴焼	53.2		17.3	2	輪轆み 鉄輪、鉄盤	粗砂赤 黄灰～灰黄	ナゲ、 筋線	ナゲ	口唇部 見込筋 線2条	断面 高さ 約1.5cm 叩し目 13条か	
	113	1495	B224	陶器	甕	C3 鈔路 黒・黄焼	約52.8 最大 58.6		(8.8)	3	輪轆み 鉄輪	粗砂多 灰、洗黄焼	ナゲ、 筋線	ナゲ		断面 高さ 約1.5cm 叩し目 13条か	
	113	1496	B043	陶器	大甕	C3 鈔路 黒灰・黄 焼 C2 鈔路 南北アゼ 埴焼 C1 鈔路 南北アゼ 埴焼 B3 鈔路 埴焼 B2 鈔路 埴焼 B1 鈔路 埴焼		22.0	(36.0)	7	輪轆み 鉄輪	雑多、粗砂 多	ヨコナ ゲ、 筋線	ヨコナ ゲ		断面 高さ 約1.5cm 叩し目 13条か、輪 が口縁に向かって直 列している。逆に して焼かれたか。	
	114	1497	B039	陶器	大甕	C3 鈔路 黒灰・黄 焼 A トレン チ 鈔路 黒灰・黄 焼		36.2	(25.7)	4	輪轆み 鉄輪	雑多、粗砂 多、赤色 灰に 赤焼	ヨコナ ゲ、 筋線	ヨコナ ゲ		断面 高さ 約1.5cm 叩し目 13条か	
	114	1498	B046	土器	土器 甕	C3 鈔路 南北アゼ 埴焼	14.8		2.0	1	手づくね	粗砂少 洗黄焼	ヨコナ ゲ	ヨコナ ゲ 叩削ケ ズリ	内面 筋線有	在埋 17C 内外面筋線有	
	114	1499	B123	土器	土器 甕	B3 鈔路 黒灰・黄 焼	13	8.0	2.5	2	6	手づくね	雑多、粗砂 多、海綿骨 針土、赤色 灰、赤 灰白	ヨコナ ゲ、 筋線	ヨコナ ゲ、 筋線		在埋 17C 内外面筋線有
	114	1500	B099	土器	土器 甕	C2 鈔路 埴焼尻	12.6	8.0	2.2	3		雑多、粗砂 多、海綿骨 針土、赤色 灰、赤 灰白	ヨコナ ゲ、 筋線	ヨコナ ゲ	C1 筋	在埋 17C 初	
	114	1501	B050	土器	土器 甕	C3 鈔路 南北アゼ 埴焼	11.7		2.35	2		粗砂少、赤 色 灰 洗黄焼	ヨコナ ゲ、 筋線	ヨコナ ゲ、 筋線		在埋 17C 中 内外面筋線有	
	114	1502	B218	土器	土器 甕	C4 鈔路 黒・黄焼	10.7	5.4	2.65	2	12	手づくね	粗砂赤、赤 色 灰、 雲母 層を含む 灰白	ヨコナ ゲ、 筋線	ヨコナ ゲ、 筋線	C2 1 筋	在埋 17C 前
	114	1503	B311	土器	土器 甕	C4 鈔路 黒断アゼ 南	(8.4)	(4.3)	1.75	5	5	手づくね	砂粒僅か に赤焼	ヨコナ ゲ	ヨコナ ゲ、 筋線	見込み 筋線	在埋 17C 中 外面に粘土層のよう な筋線と赤土のつ いていた筋に見える 。成形時の筋線か
	115	1504	B036	土器	土器 甕	C4 鈔路 黒断アゼ 北・黄焼	{15.3}	{6.9}	{2.7}	1	3	手づくね	粗砂少、赤 色 灰 洗黄焼	ロクロ ナゲ (摩 擦)。 ロクロ ケズリ	ロクロ ナゲ 叩削ケ ズリ		在埋 17C 末 内外面筋線有
	115	1505	B014	土器	土器 甕	C3-4 鈔路 黒・黄焼	11.0	3.6	2.25	11		粗砂少 に赤焼	ヨコナ ゲ、 筋線	ヨコナ ゲ、 筋線	見込み 筋線	在埋 17C 前 内外面筋線有	
	115	1506	B099	土器	土器 甕	C4 鈔路 黒・黄焼最下層	(11.2)		(2.15)	4	5	手づくね	粗砂少、赤 色 灰 洗黄焼	ヨコナ ゲ、 筋線	ヨコナ ゲ、 筋線		在埋 17C 末 内外面筋線有

第28表 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器観察表 22

図号	発掘番号	実測番号	種別	器種	グラフィック 出土部位・遺構等	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	遺存 (口) #/12	遺存 (底) #/12	成形・彫刻 輪郭 筋線等	胎土・色調 等	調整 (内)	調整 (外)	形状特徴	産地・年代等 備考	
117	1533	D080	土器	土器器蓋	C2 斜路 Aトレン 黒灰・黄焼	17.8		(2.8)	1		ロクロ	細砂少、雲 母・珪砂質 許有 灰黄焼	ロクロ ナダ ロクロ ケズリ	ロクロ ナダ ロクロ ケズリ	見込み 同輪	在池	
117	1534	D044	土器	土器器蓋	C2-3 斜路 埴焼灰 黒灰・黄焼	15.8	9.6	(3.5)	1	4	ロクロ	細砂多、珪 砂質・雲 母有 灰白	ロクロ ナダ ロクロ ケズリ	ロクロ ナダ ロクロ ケズリ	見込み 同輪	在池 内内黒色、外面 埴焼	
117	1535	D349	土器	土器器蓋	C5 斜路 断断アゼ 北 黒・黄焼	18.0		(3.8)		小片	ロクロ	細砂少、珪 砂質 灰黄焼	ロクロ ナダ ロクロ ケズリ	ロクロ ナダ ロクロ ケズリ	見込み 同輪	在池	
117	1536	D040	土器	土器器蓋	C3 斜路 Aトレン チ 黒灰・黄焼	11.9	5.3	3.0	2	2	ロクロ	細砂少、珪 砂質	ロクロ ナダ ロクロ ケズリ	ロクロ ナダ ロクロ ケズリ	上製カワラケ		
117	1537	D041	土器	土器器蓋	C3 斜路 Aトレン チ 黒灰・黄焼	14.0	7.8	2.7	2	4	ロクロ	細砂少、雲 母・珪砂 灰黄焼	ロクロ ナダ ロクロ ケズリ	ロクロ ナダ ロクロ ケズリ	外面埴焼		
117	1538	D233	土器	土器器蓋	C3 斜路 黒・黄焼	10.6	4.4	3.2	1	4	ロクロ	細砂多、非 色粘土、 雲母・ 珪砂質 に白・黄焼	ロクロ ナダ ロクロ ケズリ	ロクロ ナダ ロクロ ケズリ	内面に横行着		
117	1539	D234	土器	土器器蓋	C3 斜路 黒・黄焼	13.5	7.15	3.15	1	4	ロクロ	細砂非 に白・黄焼	ロクロ ナダ ロクロ ケズリ	ロクロ ナダ ロクロ ケズリ			
118	1540	D065	土器	土器器蓋	C4 斜路 断断アゼ 黒・黄焼	9.4		2.15	4		手づくね	細砂少、非 色粘土、 珪砂質 に白・黄焼	ロクロ ナダ ロクロ ケズリ	ロクロ ナダ ロクロ ケズリ	在池		
118	1541	D402	土器	土器器蓋	C3 銅鑿石川(北) 茶樹 法山準土	11.8	7.0	2.0	3	3	手づくね	細砂少、細 砂多、非 色粘土 灰黄焼	磨製 のたの み	指押さ え	在池 近世		
118	1542	D236	土器	土器器蓋	C4 斜路 黒・黄焼	7.7	3.4	1.9	8	12	ロクロ	細砂、細砂 多 灰黄焼	ロクロ ナダ ロクロ ケズリ	ロクロ ナダ ロクロ ケズリ	近世 全面横行着か		
118	1543	D025	土器	土器器蓋	C2 斜路 北側ライシ 焼灰	13.6	6.2	3.3	3	3	ロクロ	細砂少、細 砂多、非 色粘土 に白・黄焼	ロクロ ナダ ロクロ ケズリ	ロクロ ナダ ロクロ ケズリ	遺存部口縁全周埴 焼着、底面磨料着 し調整不明		
118	1544	D104	埴焼 土器	灯明器	D3 斜路 黒灰・黄 焼、埴焼灰、焼灰	12.4	3.4	2.9	8	12	ロクロ 鉤輪	細砂非、細 砂多 灰黄焼	ロクロ ナダ ロクロ ケズリ	ロクロ ナダ ロクロ ケズリ	内面 線8条	内内面埴焼	
118	1545	D151	埴焼 土器	灯明器	D3 斜路 埴焼灰	6.7	3.8	3.6	2	5	ロクロ 鉤輪	細砂、細砂 多 灰黄焼	ロクロ ナダ ロクロ ケズリ	ロクロ ナダ ロクロ ケズリ	内面 線7条	内内面埴焼(1 ヶ所)	
118	1546	D121	埴焼 土器	灯明器	D3 斜路 南北アゼ 段段焼灰 斜路 埴焼灰、黒灰・ 黄焼	13.0	4.0	2.9	4	12	ロクロ 鉤輪	細砂、細砂 多 灰黄焼	ロクロ ナダ ロクロ ケズリ	ロクロ ナダ ロクロ ケズリ	内面 線7条	内内面埴焼(2 ヶ所)	
118	1547	D145	埴焼 土器	灯明器	D2 斜路 焼灰	11.2	5.4	2.2	2	4	ロクロ 鉤輪	細砂多、非 色粘 土 灰黄焼	ロクロ ナダ ロクロ ケズリ	ロクロ ナダ ロクロ ケズリ	内面 線4条	遺存部口縁全周埴 焼着	
118	1548	D146	埴焼 土器	灯明器	D2 斜路 埴焼灰、 焼灰	11.2	5.0	2.2	5	3	ロクロ 鉤輪	細砂多、非 色粘 土 灰黄焼	ロクロ ナダ ロクロ ケズリ	ロクロ ナダ ロクロ ケズリ	内面 線4条	口縁部のみ埴焼、遺 存部口縁全周埴焼 着	
118	1549	D318	埴焼 土器	灯明器	C1 斜路 断断アゼ 北 黒・黄焼	13.5	5.9	2.7	2	5	ロクロ 鉤輪	細砂少、非 色粘、白 色 に白・黄焼	ロクロ ナダ ロクロ ケズリ	ロクロ ナダ ロクロ ケズリ	内面 線4条	近世 遺存部口縁全周埴 焼着	
118	1550	D213	埴焼 土器	灯明器	C3 斜路 黒・黄焼	12.1			2	3	6	ロクロ 鉤輪	細砂少、非 色粘 土 灰黄焼	ロクロ ナダ ロクロ ケズリ	ロクロ ナダ ロクロ ケズリ	内面 線5条	近世 つぎの1ヶ所、口縁 埴焼着、内面横行 着
119	1551	D275	埴焼 土器	灯明器	C3 斜路 黒・黄焼	12.9		(2.6)	2			ロクロ 鉤輪	細砂多 に白・黄焼	ロクロ ナダ ロクロ ケズリ	ロクロ ナダ ロクロ ケズリ	内面 線5条	内内面埴焼
119	1552	D279	埴焼 土器	灯明器	C4 斜路 黒・黄焼、 D4 臺所階段 9・10層	11.2	4.5	2.3	9	12		ロクロ 鉤輪	細砂、細砂 多 灰黄焼	ロクロ ナダ ロクロ ケズリ	ロクロ ナダ ロクロ ケズリ	近世 内内面埴焼着1ヶ 所	
119	1553	D091	埴焼 土器	灯明器	C2 斜路 焼灰 D2 斜路 焼灰、黒 灰 C3 斜路 南北アゼ 段段焼灰、焼灰、黒 焼	12.4 9.2	4.3	2.6	9	10		ロクロ 鉤輪	細砂少 灰黄焼	ロクロ ナダ ロクロ ケズリ	ロクロ ナダ ロクロ ケズリ	内内面埴焼(3 ヶ所)	
119	1554	D141	埴焼 土器	灯明器	D3 斜路 黒灰・黄 焼、埴焼灰	内9.4 外12.4	3.8	2.4	7	4		ロクロ 鉤輪	細砂多、細 砂多 灰黄焼	ロクロ ナダ ロクロ ケズリ	ロクロ ナダ ロクロ ケズリ	内内面埴焼(2 ヶ所)	
119	1555	D258	埴焼 土器	灯明器	D3 斜路 黒・黄焼	12.6	4.5	2.7	7	7		ロクロ 鉤輪	細砂、細砂 多、非 色粘 土 灰黄焼	ロクロ ナダ ロクロ ケズリ	ロクロ ナダ ロクロ ケズリ	近世 外面埴焼着しい、内 面横行着	

第29表 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器観察表 23

図版	報告番号	実測番号	種別	器種	グラフィック 出土位置・遺構等	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	底径 /口径	器高 /底径	成形・彫刻 輪郭 裝飾等	胎土・色調 等	調整 (内)	調整 (外)	形状・用途	産地・年代等 備考	
119	1596	D059	陶磁 土器	灯明受 皿	B3 斜路 黒・黄褐色	12.8	4.0	2.6	6	3	ロクロ 鉋輪	胎砂・細砂 少、赤色粒 にふい	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ ロクロ ケズリ		近世	
119	1597	D069	陶磁 土器	灯明受 皿	C4 斜路 磁器アゼ 北 黒・黄褐色	8.8	4.6	1.95	5	5	ロクロ 鉋輪	胎砂僅少 浅黄褐色	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ ロクロ ケズリ		近世	
119	1598	D017	土器	薬罫	B3 斜路南法面 埋地戻	5.5	2.7	3.2	10	12	手づくね	胎砂並、赤 色粒にふい	ヨコナ デ、指 押さえ	ヨコナ デ、指 押さえ		在地	
119	1599	D025	土器	薬罫	C3 斜路 黒・黄褐色	4.4	2.9	2.3	4	7	手づくね	胎砂少、赤 色粒有 浅黄褐色	ナデ、 指押さ え	ナデ		在地 近世 灯芯立て部分磨削痕	
119	1560	D037	土器	薬罫	C4 斜路 磁器アゼ 北 黒・黄褐色	4.50	3.2	2.1	6	12	手づくね	胎砂少、赤 色粒にふい	ナデ、 指押さ え	ナデ		灯芯立て部分磨削痕	
119	1561	D297	土器	薬罫	B3 御堂石層(南) 南面 黒・黄褐色	4.4	3.2	1.9	10	12	手づくね	胎砂並、赤 色粒にふい	ナデ、 指押さ え	ナデ、 指押さ え		たんこ形、灯芯立 て欠損	
119	1562	D115	土器	薬罫	B3 斜路 黒・黄褐色 南面 黒・黄褐色	4.5	2.2	1.5	5	7	ロクロ	胎砂、海砂 骨粉少	ヨコナ デ	ヨコナ デ、同 転糸留		在地 灯芯立て欠損、底部 に孔1か所あり	
120	1563	D281	土器	薬罫	B3 斜路 黒・黄褐色	5.6	4.3	2.5	5	5	手づくね	胎砂、磁砂、 雲母、海砂 骨粉にふい	ナデ、 指押さ え	ナデ、 指押さ え		在地 灯芯立て欠損	
120	1564	D012	陶磁 土器	薬罫	C4 斜路 磁器アゼ 北 黒・黄褐色	5.4	3.6	5.4	12	12	ロクロ 鉋輪	胎砂少 にふい	ロクロ ナデ、 指押さ え	ロクロ ナデ、 同転糸 留り		在地 近世 灯芯立てと口縁に磨 削痕有、底部輪孔有、 外面残付着	
120	1565	D055	土器	不明	C2 斜路 概灰	6.4		(3.8)	2		ロクロ	胎砂少、赤 色粒にふい	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ			
120	1566	D098	土器	灰器	C2 斜路 埋地戻	22.8		(4.8)	1			輪郭のみ・口縁付 外面に格子状の磨 削	胎砂少、細 砂並にふい	ヨコナ デ	ヨコナ デ		
120	1567	D210	土器	灰器小	C3 斜路 黒・黄褐色 C2 斜路 Aトレン チ南アゼ 埋地戻 C4 斜路 御堂石層(南) 南面 黄褐色	25.6	12.6	5.5	3	2	ロクロ	胎砂並、雲 母にふい	ロクロ ナデ	ロクロ 同転糸 留り		内面 凹眼	
120	1568	D013	土器	灰器小	C4 斜路 磁器アゼ 北 黒・黄褐色	18.8	10.0	4.6	1	2	ロクロ	胎砂少、赤 色粒にふい	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ ロクロ ケズリ		外面欠 損1案	
120	1569	D089	土器	灰器小	C4 斜路 磁器アゼ 北 黒・黄褐色	(19.7)		4.3	7		ロクロ	胎砂少、赤 色粒 浅黄褐色	ロクロ ナデ	浅黄1 案、ロ クロケ ズリ		外面欠 損1案	
120	1570	D280	土器	燈籠小	D3 斜路(南) 黒・ 黄褐色 C4 斜路 佐野橋戻 C4 斜路 笠笠着 レンガ基礎 埋地戻	(31.4)		(4.6)	3		ロクロ	胎砂・細砂 多、赤色粒 有	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ ロクロ ケズリ		口唇部に穿孔1か所	
121	1571	D021	土器	六人	C4 斜路 磁器アゼ 北 黒・黄褐色	7.2	7.6	8.2	6	2	ロクロ	胎砂少、赤 色粒にふい	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ ロクロ ケズリ、同 転糸留		内面残付着	
121	1572	D383	陶磁 土器	徳水小	C4 斜路 黒・黄褐色		10.0	(5.7)		4	ロクロ 鉋輪	胎砂少、赤 色粒 浅黄褐色	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ ロクロ ケズリ (ハラナ デ)		体部底のみ (3.5×4.2)	
121	1573	D128	陶磁 土器	鉢	C2 斜路 概灰 C3-B4 斜路 黒・ 黄褐色	20.4	14.8	8.3	小片	6	ロクロ 鉋輪	胎砂少 浅黄褐色	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ ロクロ ケズリ			
121	1574	D212	陶磁 土器	鉢	C3 斜路 概灰、黒・ 黄褐色 C2 御堂石層南面 黒・黄褐色 C4 斜路 黒・黄褐色	15.6	9.8	8.1	7	12	ロクロ 鉋輪 縁飾なし	胎砂少、赤 色粒にふい	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ 下半 ロクロ ケズリ		近世 内面一部磨削ムラあり 一部残付着	
121	1575	D062	陶磁 土器	鉢	C3 斜路 黒・黄褐色	15.7		(8.3)	6		ロクロ 鉋輪 縁飾なし	胎砂少にふい	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ ロクロ ケズリ		在地	
121	1576	D068	土器	焼塩釜 の蓋	C2 斜路 概灰	7.0 6.8× 5.4		6.8	6		型作り 上面に刻印	胎砂少、細 砂並、赤色 粒有	ナデ	ナデ		在地 埋地「七度口」焼き	
121	1577	D216	土器	焼塩釜	C4 斜路 黒・黄褐色 斜路 東西アゼ	5.6	7.4	2.8	9	10	型作り	胎砂少、赤 色粒少、赤 色粒多く含む にふい	ヨコナ デ、ナ デ、指 押さえ	ヨコナ デ、ナ デ、指 押さえ		在地 近世 型に入れた際の指押 さえ、胎土の継ぎ目 など見える	
122	1578	D014	土器	焼塩釜	C4 斜路 磁器アゼ 北 黒・黄褐色	3.2	3.2	17.4	5	12	手づくね	胎砂多、赤 色粒有、海 砂骨粉にふい	ナデ	ハラナ デ		在地 近世	

第30表 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器観察表 24

図号	報告番号	実測番号	種別	器種	グリスコ出土層位・遺物等	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	底径 (口径) * /12	底径 (底径) * /12	底径 (口径) * /12	底径 (底径) * /12	成形・彫形 輪郭 筋部等	胎土・色調 等	調整 (内)	調整 (外)	形状特徴	産地・年代等 備考
122	1579	B260	土器	樽	B3 斜路 黒・黄焼	3.8		(11.6)	12				手づくね	胎土・緑砂少 に多い黄焼	ナダ	ヘラミ ガキ	瓶形	在地 古瓦 一部残存
122	1580	B133	土器	樽	B3 斜路 南北アゼ 灰黒焼	4.0		(12.8)	3				手づくね	確念、胎砂 多、赤色 灰に多い黄焼	ナダ	ヘラミ ガキ	瓶形	在地
122	1581	B037	土器	樽	B3 斜路 北朝法面 焼	4.2		(10.1)	3				手づくね	胎砂多、海 綿骨針・雲 母に多い黄焼	ナダ	ヘラミ ガキ	瓶形	在地
122	1582	B107	土器	樽	B3 斜路 黒・黄焼	4.6		(12.7)	12				手づくね	胎砂・緑砂 多、赤色 灰、マープル 式に多い黄焼	ナダ	ヘラミ ガキ	瓶形	在地
122	1583	B242	土器	樽	B3 斜路 黒・黄焼	4.0		(10.2)	12				手づくね	胎砂少、緑 砂多 黄焼	ナダ	ヘラミ ガキ	瓶形	在地 古瓦
122	1584	B134	土器	大鉢	B2 斜路 樽焼 B3 斜路 南北アゼ 焼 B4 斜路 黒・黄焼	17.4	15.8	(11.0)	2	4			輪組み・回転台 製出黒底1か所	胎砂多、赤 色灰、米 草、ヨ コナダ	ミガキ	ミガキ、 外 面染 れ残り	飯炊器 (黒砂のみ)	
123	1585	B023	土器	大鉢	B2 斜路 樽焼 B3 斜路 Aトレン チ北アゼ 樽焼 B4 斜路 黒・黄焼 B5 斜路 南北アゼ 焼 B6 斜路 樽焼 B7 斜路 樽焼	16.6	12.6	9.7	1	1			輪組み・回転台 製出黒底1か所	緑砂多、胎 砂多、赤 色に多い黄焼	ヨコナ ダ	ヘラミ ガキ、 回転 台ナダ	飯炊器	在地 口唇端打傷、溝 底残1か所(標定3 か所)
123	1586	B118	土器	大鉢	B3 斜路 樽焼 B4 斜路 Aトレン チ南アゼ 樽焼 B5 斜路 樽焼		14.0	8.2		10			輪組み・回転台	胎砂甚、海 綿骨針・雲 母に多い黄焼	ヨコナ ダ	ヨコナ ダ、ミ ガキ、 ナダ	飯炊器	足焼2か所(標定3 か所)
123	1587	B072	土器	大鉢	B3 斜路 樽焼 B4 斜路 黒・黄焼 B5 斜路 樽焼 B6 斜路 北朝法面 焼		18.0	(7.1)		4			輪組み・回転台	胎砂甚、緑 砂多、赤 色に多い黄焼	ヨコナ ダ	ヨコナ ダ、ミ ガキ、 ナダ	飯炊器	在地 赤瓦 内面打傷、3足、 外面黒染少し残る
124	1588	B223	土器	大鉢	B3 斜路 樽焼 B4 斜路 南北アゼ 焼 B5 斜路 黒・黄焼 B6 斜路 樽焼	25.3	19.3	16.85	1	10			輪組み・回転台	胎砂、緑砂 多、赤色 灰、印文 花(菊)	ヨコナ ダ	ヘラミ ガキ、 ナダ	円柱状	在地 赤瓦 内面打傷、3足、 外面黒染少し残る
124	1589	B384	土器	大鉢	B4 斜路 緑砂アゼ 焼 黒・黄焼	22.0	8.3		4			輪組み・回転台	緑砂少、赤 色灰多 印文花(菊)	ヨコナ ダ	ヨコナ ダ	円柱状	在地 3足か(1か所残る、 1か所所残る)	
125	1590	B078	土器	大鉢	B4 斜路 緑砂アゼ 焼 黒・黄焼	13.4	8.85		6			輪組み・回転台	胎砂少、赤 色灰 に多い黄焼	ヨコナ ダ	ヨコナ ダ	円柱状	在地 3足(2か所残る、1 か所所残る)	
125	1591	B385	土器	大鉢	B4 斜路 緑砂アゼ 焼 黒・黄焼 B5 斜路 緑砂アゼ 焼	25.0	8.0		1			輪組み・回転台	胎砂少、赤 色灰 黄焼	ヨコナ ダ	ヨコナ ダ	円柱状	在地 3か所か(1か所 残)足には径0.3cm の孔が外面から内 面まで貫通している	
125	1592	B277	土器	大鉢	B4 斜路 黒・黄焼	21.0		8.7	1				輪組み・回転台	胎砂細砂多、 海綿骨針 に多い黄焼	ヨコナ ダ	ヨコナ ダ	円柱状	在地 赤瓦 口縁端打傷あり、 口縁内面打傷
126	1593	B060	土器	大鉢	B3 斜路 樽焼	25.0		(7.2)	2				輪組み・回転台	胎砂多、赤 色灰少 に多い黄焼	ヨコナ ダ	ヘラミ ガキ		在地
126	1594	B007	土器	大鉢	B2 斜路 南北アゼ 焼 黒・黄焼	28.2		(7.2)	1				輪組み・回転台	確念、胎砂 多、赤色 灰、印文 花(菊)、 外面赤染	ヨコナ ダ	ヨコナ ダ		在地
126	1595	B058	土器	風鈴	B2 斜路 Aトレン チ北アゼ 樽焼 B3 斜路 Aトレン チ樽焼			8.2	不明				輪組み・回転台	確念、胎砂 多、赤色 灰、雲 母に多い黄焼	ヨコナ ダ	ヨコナ ダ	消耗の ため不明	在地 残存者
126	1596	B138	土器	大鉢	B2 斜路 砂石層 B3 斜路 南北アゼ 焼 砂利・砂質土	21.4		(7.2)	3				縦の線目状縦筋、 円形の溝いぼけに 交差する縦筋、 外面赤染	胎砂多、赤 色灰、海 綿骨針・雲 母に多い黄焼	ヨコナ ダ	ヨコナ ダ	縦状で 色に上 るナダ	在地 外面打傷
127	1597	B069	土器	大鉢	B3 斜路 黒・黄焼			(7.7)					タタラ作り	胎砂多、赤 色灰、海 綿骨針・雲 母に多い黄焼	ケズリ、 ナダ	ケズリ、 ナダ	角型	在地
127	1598	B074	土器	大鉢	B3 斜路 Aトレン チ東端 黒・黄焼	25.2		(4.9)	1				輪組み・回転台	胎砂多、海 綿骨針・雲 母に多い黄焼	ナダ	ミガキ		在地
127	1599	B294	土器	蓋	B3 斜路 黒・黄焼	15.3	大径径 15.6	(2.2)	4				輪組み・回転台	胎砂多、赤 色灰、雲 母に多い黄焼	回転ナ ダ	回転ナ ダ	大径蓋	在地 古瓦 外面に黒染、つまみ 欠陥
127	1600	B041	土器	蓋	B3 斜路 東アゼ 焼 黒・黄焼	15.6		(3.0)	2				ロタロ	胎砂少、緑 砂多、赤 色灰、 黄焼	ロタロ ナダ	ロタロ ナダ、 ケズリ	大径蓋	在地 古瓦 残存者
127	1601	B109	土器	蓋	B3 斜路 樽焼 黒・黄焼	14.2 小径径 11.0		2.35	1					胎砂・緑砂 多、赤色 灰に多い黄焼	ナダ、 ヨコナ ダ	ナダ、 ヨコナ ダ	円筒 形	在地 古瓦

第31表 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器観察表 25

図版	報告 番号	実測 番号	種別	器種	アクリル 出土部位・産地等	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	底存 (口) * /12	底存 (底) * /12	成形・形状 輪郭 裝飾等	胎土・色調 等	調整 (内)	調整 (外)	形状特 徴	産地・年代等 備考			
128	1602	1015	土器	楕木鉢	C2 銅鑿石垣南面 C3 銅鑿石垣南面 C4 銅鑿石垣南面		8.9	0(1)	7		ロクロロ	胎砂少 にぶい黄緑	ロクロロ ナデ	ロクロロ ナデ		在遺 類例ナ			
128	1603	0130	楕木 土器	楕木鉢	D2 銅鑿石垣南面 D3 銅鑿石垣南面 D4 銅鑿石垣南面 D5 銅鑿石垣南面 D6 銅鑿石垣南面 D7 銅鑿石垣南面 D8 銅鑿石垣南面 D9 銅鑿石垣南面 D10 銅鑿石垣南面 D11 銅鑿石垣南面 D12 銅鑿石垣南面 D13 銅鑿石垣南面 D14 銅鑿石垣南面 D15 銅鑿石垣南面 D16 銅鑿石垣南面 D17 銅鑿石垣南面 D18 銅鑿石垣南面 D19 銅鑿石垣南面 D20 銅鑿石垣南面 D21 銅鑿石垣南面 D22 銅鑿石垣南面 D23 銅鑿石垣南面 D24 銅鑿石垣南面 D25 銅鑿石垣南面 D26 銅鑿石垣南面 D27 銅鑿石垣南面 D28 銅鑿石垣南面 D29 銅鑿石垣南面 D30 銅鑿石垣南面 D31 銅鑿石垣南面 D32 銅鑿石垣南面 D33 銅鑿石垣南面 D34 銅鑿石垣南面 D35 銅鑿石垣南面 D36 銅鑿石垣南面 D37 銅鑿石垣南面 D38 銅鑿石垣南面 D39 銅鑿石垣南面 D40 銅鑿石垣南面 D41 銅鑿石垣南面 D42 銅鑿石垣南面 D43 銅鑿石垣南面 D44 銅鑿石垣南面 D45 銅鑿石垣南面 D46 銅鑿石垣南面 D47 銅鑿石垣南面 D48 銅鑿石垣南面 D49 銅鑿石垣南面 D50 銅鑿石垣南面 D51 銅鑿石垣南面 D52 銅鑿石垣南面 D53 銅鑿石垣南面 D54 銅鑿石垣南面 D55 銅鑿石垣南面 D56 銅鑿石垣南面 D57 銅鑿石垣南面 D58 銅鑿石垣南面 D59 銅鑿石垣南面 D60 銅鑿石垣南面 D61 銅鑿石垣南面 D62 銅鑿石垣南面 D63 銅鑿石垣南面 D64 銅鑿石垣南面 D65 銅鑿石垣南面 D66 銅鑿石垣南面 D67 銅鑿石垣南面 D68 銅鑿石垣南面 D69 銅鑿石垣南面 D70 銅鑿石垣南面 D71 銅鑿石垣南面 D72 銅鑿石垣南面 D73 銅鑿石垣南面 D74 銅鑿石垣南面 D75 銅鑿石垣南面 D76 銅鑿石垣南面 D77 銅鑿石垣南面 D78 銅鑿石垣南面 D79 銅鑿石垣南面 D80 銅鑿石垣南面 D81 銅鑿石垣南面 D82 銅鑿石垣南面 D83 銅鑿石垣南面 D84 銅鑿石垣南面 D85 銅鑿石垣南面 D86 銅鑿石垣南面 D87 銅鑿石垣南面 D88 銅鑿石垣南面 D89 銅鑿石垣南面 D90 銅鑿石垣南面 D91 銅鑿石垣南面 D92 銅鑿石垣南面 D93 銅鑿石垣南面 D94 銅鑿石垣南面 D95 銅鑿石垣南面 D96 銅鑿石垣南面 D97 銅鑿石垣南面 D98 銅鑿石垣南面 D99 銅鑿石垣南面 D100 銅鑿石垣南面		9.0	(11.2)	3		ロクロロ 約輪 江線	胎砂多 浅黄緑	ロクロロ ナデ	ロクロロ ロクロロ ナデ					在遺 外土器類書
128	1604	1070	土製 品	土人形	C2 銅鑿 A トレン チ 埴埴	最大長 (2.4)	最大幅 (3.0)	最大厚 (3.5)			削作り 鉤輪	胎砂量 少	胎押さ え、ナ デ		人物生 像	孔1か所有。透明 釉。鼻輪・縁輪一部 にあり。胴部欠。重 量(13.2) g			
128	1605	1024	土製 品	土人形	C4 銅鑿 龍網アゼ 黒・黄緑	最大長 (4.1)	最大幅 (3.25)	最大厚 (2.4)			中実型合わせ	胎砂少 にぶい黄緑			人物半 像	胎押さ。底面から穿 孔。全体に雲母片着。 重量(28.5) g			
128	1606	1033	土製 品	土人形	C4 銅鑿 龍網アゼ 黒・黄緑	最大長 (4.95)	最大幅 (4.1)	最大厚 (4.05)			手づくね	胎砂少。顔 面灰白。黒			人物生 像	頭部・手足欠損。底 面に草花。重量 (50.1) g			
128	1607	1052	土製 品	土人形	C5 銅鑿 1層	3.6		0.9	6		削作り 鉤輪	胎砂少。非 彩色胎 浅黄緑			土人形 の空	色の変わっている 筋あり(1人形とくっ ついていた部分)。 重量(4.7) g			
128	1608	1026	土製 品	土人形	C5 銅鑿 黒・黄緑	最大長 (5.7)	最大幅 (2.7)	最大厚 (2.5)	12		中実型合わせ	胎砂少 にぶい黄			鳥	底面に雲母片着。 重量18.90g			
128	1609	1022	土製 品	土人形	C4 銅鑿 東西アゼ 黒・黄緑	最大長 (3.35)	最大幅 (2.7)	最大厚 (1.2)			中実型合わせ 宝珠形浮文	胎砂少。雲 母片	ナデ		太鼓	表面に雲母片着。 重量 96.79) g			
128	1610	0126	土製 品	土鈴	D2 銅鑿石垣(南) 南面 黒灰・黄緑	(3.5)	3.4	3.1			手づくね	胎砂・胎砂 量浅黄緑	ナデ	ミガキ		重量(12.9) g			
128	1611	1000	土製 品	碁石	C4 銅鑿 小石碁	最大長 (1.95)	最大幅 (1.9)	最大厚 (0.55)	12		手づくね?	胎砂少。 にぶい黄緑				重量1.06 g			
128	1612	1025	陶製 品	陶鐘	C4 銅鑿 龍網アゼ 黒・黄緑	最大長 (6.95)	最大幅 (6.8)	最大厚 (3.9)			手づくね	胎砂多。 灰				在遺 高熱により破損し、 一部黒色多孔質に なる。重量114.6 g			
128	1613	1028	土製 品	土鐘	C4 銅鑿 黒・黄緑	最大長 (4.0)	最大幅 (4.9)	最大厚 (4.05)			手づくね	胎砂多。 灰				在遺 高熱により破損し、 一部黒色多孔質に なる。重量 86.70 g			
128	1614	1022	陶製 土器	深鉢	C3 銅鑿 黒・黄緑	最大長 (4.8)				小片	手づくね 平織竹管文	胎砂多。端 部浅黄緑	ナデ	ナデ。 注輪による 文様		在遺 調文中期			
128	1615	1026	土製 品	網	C3 銅鑿 黒・黄緑	9.2	3.8	2.3	3	8		胎砂量。端 部浅黄緑	ロクロロ ナデ	ロクロロ ナデ。 注輪による 文様		在遺 古代			
128	1616	0149	泥製 品	撫子杯	D2 銅鑿石垣南面 埴埴	(10.6)	(1.2)		3			胎砂少。胎砂 多。灰	ヨコナ デ、ナ デ	ヨコナ デ、ナ デ		高松 灰 産 へう型号ナ			
128	1617	1097	泥製 品	盃	C4 銅鑿 龍網 黒・黄緑 路面直上			(3.3)		小片	胎砂多 灰	ヨコナ デ	ヨコナ デ		南加賀 灰産				
128	1618	0131	泥製 品	盃	D2 銅鑿 法面出土	14.5		(1.5)	2		ロクロ	胎砂多。 灰	ロクロロ ナデ。 ナデ	ロクロロ ナデ ナデ		口縁付足被熱 破損品としたが、陶 器である可能性が高い			
128	1619	0413	陶製 品	網	E3 香所西辺外 氏 香所西辺外石組 灰焼・灰泥灰焼	10.4	4.7	7.7	7	9		約輪 網	胎砂 灰		下半ロ クロケ ズリ	胎面 石製			
128	1620	0404	陶製 品	魚形	E3 香所西辺外石組 灰焼 E4 香所西辺外石組 灰焼 E5 香所西辺外石組 灰焼	8.2	6.8	6.7	12	10		胎押し 灰焼(内面ののみ)	胎砂。微細 砂粒付 灰黄	胎押さ え	胎押さ え		近世 外産圧縮土(中央部 と外側は別製)		
128	1621	1001	陶製 品	網	D4 香所西辺 8・9 段付足 B・C間	11.8	4.4	4.35	9	12		ロクロ 灰焼。貫入有	胎砂多 灰	ロクロ ナデ	ロクロロ ナデ ナデ		肥前川 見込みナリ目録3か 所		
130	1622	0125	陶製 品	網	D4 香所西辺 8層 E4 近代埴埴土製 方 近代埴埴土	11.4	2.2	6.95	5	12		ロクロ 約輪。ラウのふ輪。 貫入多	胎砂量 浅黄緑		下半ロ クロケ ズリ	瀬戸 19C 高内 類書			
130	1623	1045	陶製 品	網	D4 香所西辺 C層		5.4	(4.1)	6		ロクロ 約輪	胎砂・胎砂 量浅	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ		内面白化土製で いる。胎貫入			
130	1624	1067	陶製 品	土鍋	D4 香所西辺 9層、11層	15.2 (取付径 17.6)		(6.4)	3		ロクロ 約輪	胎砂多。顔 面 胎	ロクロロ ナデ ナデ	ロクロロ ナデ ナデ		組立の 双耳	備付書		
130	1625	1099	陶製 品	高台 小皿	D3 香所西辺 9・ 10層 D4 香所西辺 8層	7.8		(7.4)	6		ロクロ 灰焼	胎砂多 浅黄緑	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ ナデ		口縁部輪削ぎ			
130	1626	1065	陶製 品	合子	D4 銅鑿 黒・黄緑 香所西辺 8層、11	6.2	4.2	3.15	3	4		ロクロ 灰焼。貫入有	胎砂 灰白		下半ロ クロケ ズリ				
130	1627	1044	陶製 品	盃	D3 香所西辺 13・14層	8.6 か 6.4	つまみ 1.9	3.1	8		つまみ 12	ロクロ 透明。ゼンロール 多。貫入有 白灰。胎砂。縁輪	砂粒や小多 灰	ロクロ ナデ		土製 備付書			

第32表 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器観察表 26

図版	発掘番号	実測番号	種別	器種	グリスコ 出土層位・遺構等	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	底径 (口) #/12	底径 (底) #/12	成形・彫形 輪郭 装飾等	胎土・色調 等	調整 (内)	調整 (外)	形状特 徴	産地・年代等 備考	
130	1628	B298	陶器	甕	D3 香西階段 9・10 D3 軒廊 南北アゼ 時利層・砂質土 灰層 D3 コーン 灰層 D3 軒廊 壁面剥離	(17.1) 14.2 4.6	つまみ	5.0	5	12	ロクロ 鉄輪、鉄輪 白灰の染地き(砂 敷)2か所、染付 斑	細砂少、網 砂少、空割有 機	ロクロ ナダ ロクロ ロクロ ナダ	土織素	近世		
131	1629	B302	陶器	甕	D4 香西階段 8・9 段 B層、B-C間段 D4 香西階段 8・9 段付土 B層 D4 香西階段の上の層 D3 香西階段 S81 間 接内西辺外 灰層、 近代製土 D3 S81 東側壁方 家壁上面 近代製土 D3 香西辺外 石 組壁 灰地	21.9	11.3	22.0	2	11	ロクロ 鉄輪	細砂少 にぶい赤黄	ロクロ ナダ	ロクロ ナダ ロクロ ナダ	肥前 内側の輪、一部黄		
131	1630	B377	土器	六鉢	D4 香西階段 8・9 段 B層、C層 D4 香西階段 B 層、C層 D4 香西階段 南北 D4 香西階段西 石 敷面上層 D3 香西階段 B層 D3-D4 香西階段 灰表層地		14.8	(11.0)	5		輪組み・回転台	細砂、粗砂 少、赤色紅、黄 緑にぶい黄緑	ヨコナ ダ	ヘラミ ガキ、 回転サ ズリ	板状形	在池 内面埋付着、 足取2か所(埋定3 か所)	
131	1631	E007	土製品	不明	D4 香西階段 8・9 段 B-C間段	最大長 2.15	最大幅 0.95	最大厚 0.3			製作り	縹赤 灰白			片面に彫刻(文字小)		
131	1632	E068	灰土器	甕	D3+4 香西階段 にぶい黄褐色地			(5.3)			輪組み	粗砂少 灰白	同心内 当見軌	格子タ タキ	径口 8cmか		
131	1633	E093	陶器	碗	D4 香西階段 S81 間 接層の上の層 B層	9.9	4.4	7.05	1	4	ロクロ 灰輪	細砂少、網 砂少 灰黄		下半口 タロク ナダ	筋・ 襷形着		
131	1634	E066	陶器	碗	D4 香西階段 S81 間 接層の上の層 B層、 段層の上の層 D3 近代建物東側壁 方壁土	10.4	5.0	7.2	1	11	ロクロ 鉄輪	細砂多 灰白	ロクロ ナダ	ロクロ ナダ ロクロ ナダ	拳骨形		
132	1635	E005	陶器	鉢	D4 香西階段 S81 間 接層の上の層	(10.6)	(4.4)			以下	ロクロ 鉄輪	細砂並 灰白	ロクロ ナダ	ロクロ ナダ ロクロ ナダ	襷形、襷形着		
132	1636	B395	陶器	甕	D4 香西階段 S81 間 接層の上の層 B層 近代建物北側 壁方	最大 9.6/接 地7.4	最大 7.6/接 地3.4	2.35	1	7	ロクロ つまみ 平づくね 灰輪、貫入有 白灰、染付	縹赤 黄緑	ロクロ ナダ	土織素 大ウツミ	肥前 襷形着		
132	1637	E003	土製品	碁石	D4 香西階段 S81 間 接層の上の層	最大長 1.8	最大幅 1.95	最大厚 0.6			完形 平づくね	細砂少 灰白			重量 1.8g		
132	1638	E004	土製品	碁石	D4 香西階段 S81 間 接層の上の層	最大長 1.85	最大幅 1.95	最大厚 0.65			ほぼ 完形 平づくね	細砂少 灰白			重量 1.9g、片面に 赤正黄有		
132	1639	D412	陶器	碗	D3 香西辺外 灰地	8.7	4.3	5.25	4	6	ロクロ 灰輪・鉄輪	細砂少、網 砂少 灰白		下半口 ロクロ ナダ	再黄九谷(若杉) 19c 灰 灰輪に黒線状染 し、襷形		
132	1640	D414	陶器	碗	D3 香西辺外 灰地	10.5		(6.4)	2		ロクロ 鉄輪	縹赤 黄緑にぶい 灰白			拳骨形	美濃 19C	
132	1641	B412	陶器	急須	D3 香西辺外 灰地	7.9	6.2	5.3	1	3	ロクロ ヒラ掛け	縹赤 黄緑			筋		
132	1642	D411	陶器	土瓶	D3 香西北西隅石列 外 礎石土	10.9	9.2	(11.4)	3	4	ロクロ 灰輪、鉄輪	細砂少 白灰、鉄輪			下半口 ロクロ ナダ	襷形着、図上覆元	
132	1643	B421	土製品	碁石	D3 香西辺外 灰地	最大長 3.0	最大幅 2.2	最大厚 0.7			平づくね	細砂少 明赤輪			ナダ、 指押さ え	近世 重量 2.3g、表面に 黒色の付着あり	
132	1644	B429	土製品	碁石	D3 香西辺外 灰地	最大長 2.1	最大幅 2.0	最大厚 0.7			平づくね	細砂少 明赤輪			ナダ、 指押さ え	近世 重量 2.3g、表面に 黒色の付着あり	
132	1645	B428	土器	円筒形 土製品	D3 香西北西 近世製土	最大長 2.6	最大幅 (1.55)	最大厚 0.9			平づくね	細砂少 灰黄	ナダ	ナダ	近世 重量 2.25g、襷形、 指首状輪?		
132	1646	D410	陶器	向付	D3 香西南 黄褐色	12.3	(2.4)			小片	ロクロ噴打ち 長石粒、貫入有	細砂少 灰白			襷形	瀬戸 17c 初 志野焼地	
133	1647	B408	陶器	透徳利	樽石上面 藍線 器内側 樽石上面	2.6	12.0	32.0	12	6	ロクロ 鉄輪 鉄輪	縹赤 灰白				瀬戸・美濃 19c 末～20c 初 段彩(金沢通船の 倉?) (図18)・長 七・三	
134	1648	B406	陶器	鉢	D4+5 紀東部③ 近世製土		(2.3)			小片	ロクロ 長石粒、貫入有	細砂少、網 砂少 灰白				瀬戸 17c 初 志野焼	
134	1649	D415	陶器	2邊方	D4+5 紀東部③ 近世製土		(4.65)				ロクロ	細砂少、網 砂少 地灰				近世 重量 3.6g	
134	1650	D405	土器	土器器 蓋	D4+5 紀東部③ 近世製土	10.5	7.0	2.3	4	5	平づくね	細砂、粗砂 少、赤色紅、黄 緑にぶい黄緑	ヨコナ ダ、ナ ダ	ヨコナ ダ、ナ ダ	C2 11 箱	在池 17c 前 内外面漆喰着	
134	1651	D416	土器	土器器 蓋	D4+5 紀東部③ 近世製土	9.9	7.2	2.2	3	3	平づくね	細砂並、粗 砂少、赤色 紅にぶい黄緑	ヨコナ ダ	ヨコナ ダ、指 押さえ	C2 11 箱	在池 17c 前 内外面漆喰着 再取皿状襷形か?	

第33表 鼠多門調査区出土遺物 陶磁器・土器観察表 27

図版番号	報告番号	実測番号	種別	器種	アクリル 出土部位・遺構等	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	底存 * /12	底存 (底) * /12	成形・彫刻 輪割 裝飾等	胎土・色調 等	調整 (内)	調整 (外)	形状・寸 法	産地・年代等 備考
134	1652	D407	土器	土師器 皿	D4-5 近畿部⑤ 近世多量土層	10.2	7.6	2.2	3	3	手づくね	細砂・粗砂 少量、赤色 鉄、雲母 にぶい異趣	ヨコナ ダ、ナ ダ	ヨコナ ダ、ナ ダ	口21 幅	在地 17C 前 内外面滑漉痕有
134	1653	D408	土器	土師器 皿	D4-5 近畿部⑤ 近世多量土層	11.4	9.2	2.2	2		手づくね	浅黄	ヨコナ ダ、ナ ダ	ヨコナ ダ、ナ ダ	口21 幅	在地 17C 前
134	1654	D403	土器	土師器 皿	D5 近畿部⑤ 近世整地土	9.6		1.85	5	8	手づくね	粗砂少、粗 砂少量、赤色 鉄にぶい異趣	ヨコナ ダ、ナ ダ	ヨコナ ダ、ナ ダ	口11 幅	在地 17C 前 内外面滑漉痕有
134	1655	D418	土器	土師器 皿	D5 近畿部⑤ 近世整地土	10.2	6.8	2.1	3	3	手づくね	細砂少	ヨコナ ダ、ナ ダ	ヨコナ ダ、ナ ダ	口11 幅	在地 17C 前
134	1656	D417	土器	土師器 皿	D5 近畿部⑤ 近世整地土	10.4	5.2	2.3	2	2	手づくね	細砂・粗砂 少、雲母	ヨコナ ダ、ナ ダ	ヨコナ ダ、ナ ダ	口11 幅	在地 17C 前 内外面滑漉痕有
134	1657	D003	陶器	甗	院 1 トレンテ 現代層	16.8	15.4	3.9	12	12	口クロ 口縁部印線文、口 縁外由直文陰刻	粗砂少 焼色	口クロ ナダ	口クロ ナダ	口15 高、脚 部持ち 3.5cm	丸1.5 高、脚 部持ち 3.5cm
135	1658	H053	土器	七層の ヤシ	院 1 トレンテ 現代層	14.8		2.3	5		透明	粗砂多、空 隙多 灰白				外面に輪紋、孔の内 面にも輪紋、外面中 心部に花弁の文様有
135	1659	H001	陶器	甗	院 1 トレンテ 現代層	11.3 高さ 9.6	つまみ 2.5	3.5	11		口クロ、管押し 焼色鉄、貫入有 管押し花唐草文	粗砂少、空 隙多 灰白				20C 1660-1602の蓋
135	1660	H002	陶器	蓋物	院 1 トレンテ 現代層	10.4		(4.9)	2		口クロ、管押し 焼色鉄、貫入有 管押し花唐草文	粗砂少、空 隙多 灰白				20C 1659-1601の身
135	1661	D002	陶製品	陶師 現代層	院 1 トレンテ 現代層	5.2	4.8	3.7	12		手づくね 自然焼	粗砂・細砂 少量		粗研さ ぎ		在地 重量 68.37 g
135	1662	D006	陶器	鉢鉢 鉢	院 1 現代層	24.6		(5.2)	1		口クロ	粗砂少、粗砂 少量	口クロ ナダ、 ナダ	口クロ ナダ、 ナダ		鉢面 刻し目9条
135	1663	D005	土器	土師器 皿	院 1 近代整地土	11.4	7.5	2.1	3		手づくね	粗砂並 にぶい異	ヨコナ ダ、ナ ダ	ヨコナ ダ、ナ ダ		在地 内外面全体に漆行 着、一部地の付着、 割れ口にも付着
135	1664	H073	土師器	甗	院 1 近代整地土			(3.2)			縦溝、粗砂 並、赤色鉄 浅黄焼	ヨコナ ダ、ナ ダ	縦回 轉、ヨ コナ ダ		在地 外面暖付着か	
135	1665	H039	土製品	土人形	院 08 近現代層	最大長 (4.5)	最大幅 2.65	最大厚 2.6			中空型合わせ	粗砂少 浅黄焼	粗研さ ぎ		■	
135	1666	H056	陶器	甗	C5 覆瓦					作部 小片	粗砂多 灰、灰黄焼	タタキ ナダ	タタキ ナダ		珠洲地	
136	1667	H208	陶器	甗	E3-4 近現代層	9.9		(5.2)	2		口クロ 灰焼、貫入有 鉄粒	粗砂多 灰焼				
136	1668	H256	陶器	甗	E3-4 近現代層	9.4		(5.1)	2		口クロ 灰焼、鉄粒	粗砂多 灰白、にぶ い異				西原九谷(若杉) 19C 焼熟
136	1669	H153	陶器	皿	D0 新緑以南 近代層(黄褐色土焼 出)			(1.4)		小片	口クロ 赤石焼 鉄粒	粗砂少 灰白				瀬戸・美濃 16~17C 野野地
136	1670	H108	陶器	皿	D2 近代整地土 E2 器焼焼出	13.4	6.6	3.7	1	12	口クロ 灰焼、貫入多、気 泡少	粗砂並 灰白				瀬戸・美濃
136	1671	H086	埴器 陶器	甗	院 1 石知部 近代層			(1.9)		小片	透明、貫入多 脚部彫写(青銅)	粘土並、や や甘灰 灰白				ヨーロッパ? 19C
136	1672	H121	陶器	甗	院 1 近代整地土	10.4 高さ 9.2		2.1	3		口クロ 透明、気泡少、貫 入多 白灰、緑鉄、鉄粒	粗砂少 にぶい異趣	口クロ ナダ	口クロ ナダ		土師系 重おき焼着有
136	1673	H257	陶器	甗	院 2 近代整地土	8 高さ 5.8		3.4	6		口クロ 緑鉄 白線文様	整焼 灰白	口クロ ナダ			土師系 孔あり
136	1674	H245	陶器	鉢	院 2 近代整地土	16.6 高さ (20.8)		7.0	2		口クロ 灰焼、貫入有 白灰一液焼	粗砂や多 にぶい異趣		下平口 クワ ズリ	輪切状 反刻の 持ち手	外面僅付着
136	1675	H110	陶器	合子	院 2 近代層 (817 以 降整地土)	6.2	4.2	2.5	5	6	口クロ 灰焼、貫入並、気 泡並	粗砂並 浅黄焼		口クロ クワ ズリ		口唇部輪切、底面 漆着有
136	1676	H284	陶器	灯明籠	院 1 トレンテ 褐色土(灰黄)	11.8	4.0	2.5	6	2	口クロ 灰焼、貫入有 内面陶師刻	整焼 灰白	口クロ ナダ、 口クロ クワ ズリ			信濃 目録有、内外面深い 滑漉有、図上原産
136	1677	H283	陶器	甗	D0 1 トレンテ 褐色土(灰黄)戸室 大テップ直上	11.6	6.5	6.1	2	3	口クロ 灰焼/緑鉄 口縁緑線焼戻し	粗砂多 灰色	口クロ ナダ	口クロ ナダ、 口クロ クワ ズリ、指 押さへ	■	見込ムネリ目録有、 図上原産
136	1678	H090	陶器	甗	E4 器焼焼出			(4.9)		作部 小片	粗砂少、鐵 器 灰焼	口クロ ナダ	口クロ ナダ、 タタキ		肥前 焼熟	
136	1679	H153	埴器	甗	院 2 近代整地土(土 師土層直上)			(3.8)		不明	粗砂多 灰	タタキ ナダ	タタキ ナダ (平打) タタキ			

第40表 鼠多門調査区出土遺物 瓦7

図号	発掘番号	瓦番号	出土層	形状・寸法	瓦質	胎土	体積 (cm)												備考・封印
							a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	
160	2096	T23	0×E5 北平	唐式 瓦	灰白・緑 黄色	灰白・緑 黄色	27.5	20.7					15.4	2.0				胎土 灰白・緑 黄色	
161	2097	T25	0×E5 北平	唐式	灰白・緑 黄色	灰白・緑 黄色	26.8	114.0						1.9				胎土 灰白・緑 黄色	
161	2098	T26	01 北平	唐式	灰白・緑 黄色	灰白・緑 黄色	20.1	20.4					(2.0)	1.9				胎土 灰白・緑 黄色	
161	2099	T25	01 北平	唐式	灰白・緑 黄色	灰白・緑 黄色	15.1	8.85	8.0	2.1								胎土 灰白・緑 黄色	
161	2100	T21	03 北平	唐式	灰白・緑 黄色	灰白・緑 黄色												胎土 灰白・緑 黄色	
162	2101	T149	04 北平	唐式	灰白・緑 黄色	灰白・緑 黄色	38.0	2.7	4.4	2.6	2.0	(22.0)	10.9					胎土 灰白・緑 黄色	
162	2102	T236	03 北平	唐式	灰白・緑 黄色	灰白・緑 黄色	21.43											胎土 灰白・緑 黄色	
162	2103	T122	04 北平	唐式	灰白・緑 黄色	灰白・緑 黄色												胎土 灰白・緑 黄色	
162	2104	T223	03 北平	唐式	灰白・緑 黄色	灰白・緑 黄色	30.1	15.0	2.6	12.7	7.0	1.9	4.5					胎土 灰白・緑 黄色	
163	2105	T126	03 北平	唐式	灰白・緑 黄色	灰白・緑 黄色	26.5	14.0	2.8	(11.0)	6.4	1.85	3.8					胎土 灰白・緑 黄色	
163	2106	T144	03 北平	唐式	灰白・緑 黄色	灰白・緑 黄色	(25.9)	(4.8)	(3.2)	(8.2)	8.1	2.15	(4.3)					胎土 灰白・緑 黄色	
163	2107	T143	03 北平	唐式	灰白・緑 黄色	灰白・緑 黄色	28.9	(6.0)	3.8	14.6	6.9	1.75	4.1					胎土 灰白・緑 黄色	
164	2108	T154	04 北平	唐式	灰白・緑 黄色	灰白・緑 黄色	(21.5)					7.5	2.0					胎土 灰白・緑 黄色	
164	2109	T128	04 北平	唐式	灰白・緑 黄色	灰白・緑 黄色	(15.0)	(14.0)					7.5	1.6				胎土 灰白・緑 黄色	

第43表 鼠多門調査区出土遺物 瓦10

調査区	調査番号	瓦の位置	出土状況	瓦の形状	瓦の材質	瓦の寸法 (cm)										瓦の厚さ (cm)	瓦の重量 (g)	瓦の断面	瓦の用途	瓦の位置	瓦の形状									
						瓦の長さ (cm)					瓦の幅 (cm)											瓦の厚さ (cm)								
						a	b	c	d	e	f	g	h	i	j							k	l	m	n	o	p	q	r	s
171	2137	T212	瓦の位置 土表層	瓦の形状 瓦	瓦の材質 灰白 硬質 リ ン																2.2			灰白、粗砂 硬質 瓦	瓦の位置 土表層	瓦の形状 瓦	瓦の材質 灰白 硬質 リ ン	瓦の断面 断面は、瓦の 中央部から 中央部まで		
172	2138	T199	瓦の位置 土表層	瓦の形状 瓦	瓦の材質 灰白 硬質 リ ン																2.2			灰白、粗砂 硬質 瓦	瓦の位置 土表層	瓦の形状 瓦	瓦の材質 灰白 硬質 リ ン	瓦の断面 断面は、瓦の 中央部から 中央部まで		
172	2139	T193	瓦の位置 土表層	瓦の形状 瓦	瓦の材質 灰白 硬質 リ ン																2.15			灰白、粗砂 硬質 瓦	瓦の位置 土表層	瓦の形状 瓦	瓦の材質 灰白 硬質 リ ン	瓦の断面 断面は、瓦の 中央部から 中央部まで		
172	2140	T190	瓦の位置 土表層	瓦の形状 瓦	瓦の材質 灰白 硬質 リ ン																2.2			灰白、粗砂 硬質 瓦	瓦の位置 土表層	瓦の形状 瓦	瓦の材質 灰白 硬質 リ ン	瓦の断面 断面は、瓦の 中央部から 中央部まで		
173	2141	T201	瓦の位置 土表層	瓦の形状 瓦	瓦の材質 灰白 硬質 リ ン																2.1			灰白、粗砂 硬質 瓦	瓦の位置 土表層	瓦の形状 瓦	瓦の材質 灰白 硬質 リ ン	瓦の断面 断面は、瓦の 中央部から 中央部まで		
173	2142	T130	瓦の位置 土表層	瓦の形状 瓦	瓦の材質 灰白 硬質 リ ン																2.4			灰白、粗砂 硬質 瓦	瓦の位置 土表層	瓦の形状 瓦	瓦の材質 灰白 硬質 リ ン	瓦の断面 断面は、瓦の 中央部から 中央部まで		
173	2143	T173	瓦の位置 土表層	瓦の形状 瓦	瓦の材質 灰白 硬質 リ ン																2.2			灰白、粗砂 硬質 瓦	瓦の位置 土表層	瓦の形状 瓦	瓦の材質 灰白 硬質 リ ン	瓦の断面 断面は、瓦の 中央部から 中央部まで		
173	2144	T196	瓦の位置 土表層	瓦の形状 瓦	瓦の材質 灰白 硬質 リ ン																2.2			灰白、粗砂 硬質 瓦	瓦の位置 土表層	瓦の形状 瓦	瓦の材質 灰白 硬質 リ ン	瓦の断面 断面は、瓦の 中央部から 中央部まで		
174	2145	T205	瓦の位置 土表層	瓦の形状 瓦	瓦の材質 灰白 硬質 リ ン																2.0			灰白、粗砂 硬質 瓦	瓦の位置 土表層	瓦の形状 瓦	瓦の材質 灰白 硬質 リ ン	瓦の断面 断面は、瓦の 中央部から 中央部まで		
174	2146	T116	瓦の位置 土表層	瓦の形状 瓦	瓦の材質 灰白 硬質 リ ン																2.0			灰白、粗砂 硬質 瓦	瓦の位置 土表層	瓦の形状 瓦	瓦の材質 灰白 硬質 リ ン	瓦の断面 断面は、瓦の 中央部から 中央部まで		
174	2147	T191	瓦の位置 土表層	瓦の形状 瓦	瓦の材質 灰白 硬質 リ ン																2.0			灰白、粗砂 硬質 瓦	瓦の位置 土表層	瓦の形状 瓦	瓦の材質 灰白 硬質 リ ン	瓦の断面 断面は、瓦の 中央部から 中央部まで		
174	2148	T198	瓦の位置 土表層	瓦の形状 瓦	瓦の材質 灰白 硬質 リ ン																2.0			灰白、粗砂 硬質 瓦	瓦の位置 土表層	瓦の形状 瓦	瓦の材質 灰白 硬質 リ ン	瓦の断面 断面は、瓦の 中央部から 中央部まで		
175	2149	T172	瓦の位置 土表層	瓦の形状 瓦	瓦の材質 灰白 硬質 リ ン																1.9			灰白、粗砂 硬質 瓦	瓦の位置 土表層	瓦の形状 瓦	瓦の材質 灰白 硬質 リ ン	瓦の断面 断面は、瓦の 中央部から 中央部まで		
175	2150	T207	瓦の位置 土表層	瓦の形状 瓦	瓦の材質 灰白 硬質 リ ン																2.1			灰白、粗砂 硬質 瓦	瓦の位置 土表層	瓦の形状 瓦	瓦の材質 灰白 硬質 リ ン	瓦の断面 断面は、瓦の 中央部から 中央部まで		

第46表 鼠多門調査区出土遺物 金属観察表1

図例	報告番号	発掘番号	品種	材質	グラッド 遺構等・出土層位	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考	
	183	3001	M003	鉋瓦	C3 青布柱礎北取裡瓦内	8.04	14.5	0.15	136.1	孔3個	
	183	3002	M261	釘	鋼・銅合金	C3 中央大柱(北)礎礎盤盤方	2.2	頭1.1 軸0.2	0.9 0.2	2.1	
	183	3003	M266	鉄鍍玉	鉋	C3 側壁石垣(北)東隅内面取縁	1.4	1.4	1.4	12.4	
	183	3004	M001	瓦葺片	C3 南東部 南北アゼ(石垣第4段側) 母腹瓦	(7.4)	2.1	2.0	32.1	遺書文	
	183	3005	M225	釘	鉄	B2 石垣第1段 裏込め	13.4	頭1.2 軸0.7	頭1.37 軸0.6	24.95	貝割釘
	183	3006	M224	釘	鉄	B2 鼠多門北側南側溝内	14.8	頭1.6 軸0.8	頭1.1 軸0.7	26.98	
	183	3007	M028	釘	鋼・銅合金	C2 北槽内 近代整地土	14.3	頭1.5 軸0.65	頭2.05 軸0.5	27.3	貝割釘
	184	3008	M022	釘	鋼・銅合金	E3 SR1 北側盤方内	13.2	頭1.4 軸0.75	頭1.7 軸0.55	24.26	貝割釘
	184	3009	M035	手洗鉢	鉄	C4 馬屋レンガ基礎	5.4	14.55	5.5	140.87	軸1.15×1.15cm
	184	3010	M148	水溝	鋼・銅合金	C4 監獄署レンガ基礎 整地土	4.6	4.6	2.1	20.2	底面欠
	184	3011	M128	排管(股口)	鋼・銅合金	C4 レンガ基礎 斜路 黒灰・黄焼	0.77 股口3.5	1.1	0.85	4.36	扉字残る
	184	3012	M228	釘	鋼・銅合金	C4 レンガ基礎 近代整地土	0.65	1.0	0.02	0.38	
	184	3013	M216	釘	鉄	B2 門部№3	5.25	頭0.45 軸0.3	頭0.40 軸0.25	1.84	
	184	3014	M217	釘	鉄	B2 門部№3	5.0	頭0.5 軸0.35	頭0.4 軸0.3	1.89	
	184	3015	M142	釘	鉄	B2 橋南上面瓦葺	9.1	頭1.3 軸0.55	頭0.6 軸0.4	7.76	頭巻釘
	184	3016	M145	釘	鉄	B2 橋南上面瓦葺	0.4	頭1.4 軸0.55	頭0.8 軸0.5	12.30	頭巻釘
	184	3017	M141	釘	鉄	B2 橋南上面瓦葺	6.2	頭1.3 軸0.6	頭0.7 軸0.3	6.07	頭巻釘
	185	3018	M143	釘	鉄	B2 橋南上面瓦葺	6.3	頭1.1 軸0.5	頭0.7 軸0.5	4.93	頭巻釘
	185	3019	M147	釘	鉄	B2 橋南上面瓦葺	6.2	頭1.1 軸0.55	頭0.8 軸0.5	5.34	頭巻釘?
	185	3020	M138	釘	鉄	B2 橋南上面瓦葺	5.6	頭1.0 軸0.55	頭0.43 軸0.45	3.66	頭巻釘
	185	3021	M139	釘	鉄	B2 橋南上面瓦葺	5.4	頭0.8 軸0.45	頭0.7 軸0.3	2.55	頭巻釘
	185	3022	M146	釘	鉄	B2 橋南上面瓦葺	5.3	頭0.9 軸0.45	頭0.5 軸0.3	2.08	頭巻釘
	185	3023	M140	釘	鉄	B2 橋南上面瓦葺	5.1	頭1.1 軸0.45	頭0.5 軸0.4	3.13	頭巻釘
	185	3024	M144	釘	鉄	B2 橋南上面瓦葺	4.5	頭0.9 軸0.45	頭0.4 軸0.3	2.12	頭巻釘
	185	3025	M187	葉巻	鉄	B2 橋南上面瓦葺	(2.15)	2.6	1.9	9.3	
	185	3026	M163	ホック (受け)	鉄	B2 橋南№1内ビット(東半分)	1.4	1.0	0.18	0.48	
	185	3027	M164	ホック (受け)	鉄	B2 橋南№1内ビット(東半分)	1.4	1.1	0.17	0.51	
	185	3028	M165	ホック (受け)	鉄	B2 橋南№1内ビット(東半分)	1.4	0.9	0.15	0.46	
	185	3029	M039	手洗鉢	鉄	E2 二重窓 石積直上	6.1	2.0	1.9	10.0	軸0.5×0.6cm
	185	3030	M010	鉋瓦	鉋	C2 斜路 Aトレンチ北アゼ 母腹瓦	(5.6)	(10.1)	0.2	101.73	孔3個、うち1個貫通 せず
	185	3031	M006	鉋瓦	鉋	C2 斜路埋土	(5.3)	(7.2)	0.2	23.97	孔1射が残る(長さ 2.36cm、軸0.25× 0.3cm)
	186	3032	M029	鉋瓦	B3 斜路南側 尻腹機尻	8.9	10.8	0.5	164.3		
	186	3033	M149	釘	鋼・銅合金	C3 斜路北側法面 栗石礎	12.7	頭1.2 軸0.6	頭1.8 軸0.5	18.96	貝割釘
	186	3034	M027	釘	鋼・銅合金	C2 斜路埋土 母腹瓦	13.4	頭1.0 軸0.6	頭1.4 軸0.55	17.99	貝割釘
	186	3035	M132	釘	鋼・銅合金	D4 南側法面 明瓦機	14.25	頭1.26 軸0.67	頭1.4 軸0.57	27.19	貝割釘
	187	3036	M176	釘	鋼・銅合金	D4 黄灰粘土(橋土渠)	13.5	頭1.4 軸0.8	頭1.55 軸0.6	27.04	貝割釘
	187	3037	M127	釘	鋼・銅合金	C4 斜路 埋土小石礎	13.4	頭1.4 軸0.65	頭1.9 軸0.55	26.23	貝割釘
	187	3038	M033	釘	鋼・銅合金	C3 斜路 黒灰・黄焼	3.5	頭1.1 軸0.55	頭1.0 軸0.35	2.5	
	187	3039	M034	釘	鋼・銅合金	C3 斜路 黒灰・黄焼	3.3	頭1.1 軸0.35	頭0.9 軸0.4	2.2	
	187	3040	M188	釘	鋼・銅合金	D4 南側法面 明瓦機	3.96	頭0.83 軸0.29	頭0.83 軸0.24	1.39	
	187	3041	M189	釘	鋼・銅合金	D4 南側法面 明瓦機	3.34	頭0.83 軸0.24	頭0.84 軸0.24	1.03	
	187	3042	M190	釘	鋼・銅合金	D4 南側法面 明瓦機	2.49	頭0.75 軸0.29	頭0.77 軸0.3	0.98	
	187	3043	M191	釘	鋼・銅合金	D4 南側法面 明瓦機	3.08	頭0.58 軸0.33	頭0.45 軸0.355	0.96	
	187	3044	M192	釘	鋼・銅合金	D4 南側法面 明瓦機	3.21	頭0.69 軸0.33	頭0.8 軸0.29	1.11	
	187	3045	M038	刀子の鞘	D2 斜路 Aトレンチ 母腹瓦 (内部に欠)	9.1	1.3	0.5	21.12	表面に線刻	
	187	3046	M237	排管(扉首)	鋼・銅合金	C4 斜路 最新アゼ 黒・黄焼	4.25	穴径1.5 体径1.2	2.0	5.1	
	187	3047	M129	排管(扉首)	鋼・銅合金	C4 黒・黄焼	3.6	穴径1.3 体径0.95	1.7	4.37	
	187	3048	M126	排管(扉首)	鋼・銅合金	C3 斜路 南北アゼ 黒灰・黄焼	5.3	穴径1.3 体径1.05	1.7	6.24	

第 47 表 鼠多門調査区出土遺物 金属観察表 2

図録	報告番号	発掘番号	品種	材質	グラッド	遺構等・出土層位	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備 考
187	3049	M032	棒首 (短口)	銅・銅合金	B3	斜路 南北アゼ 砂利・砂	10.35	1.2	1.25	19.7	
187	3050	M158	棒首 (短口)	銅・銅合金	C3	斜路 黒・黄褐色	5.94	1.03	1.09	4.88	
187	3051	M130	棒首 (短口)	銅・銅合金	C4	斜路 埋立小石層より上	5.6	1.1	1.1	5.98	
187	3052	M031	棒首 (短口)	銅・銅合金	C3	斜路 埋立→黒炭	4.6	1.1	1.0	4.3	
187	3053	M159	棒首 (短口)	銅・銅合金	C3	斜路 黒・黄褐色	(2.52)	0.38	0.45	1.49	
188	3054	M160	釧	銅・銅合金	C4	斜路 黒・黄褐色	(10.7)	0.4	0.4	3.3	頭部耳かき状
188	3055	M002	拍輪	銅・銅合金	B3	斜路 南北アゼ 黒炭	0.8	2.15	0.15	1.6	
188	3056	M212	銃	鉄	C3	斜路 黒・黄褐色	a(12.5) b(2.6) c(4.5)	1.7	0.4	a(13.28) b(2.42) c(5.2)	
188	3057	M185	鍔金具か	銅・銅合金	C3	斜路 南北アゼ 黒・黄褐色	1.6	(2.3)	0.07	1.21	
188	3058	M125	鍔金具	銅・銅合金	C3	斜路 黒炭・黄褐色	1.6	4.2	0.8	3.63	
188	3059	M235	刺ピン	銅・銅合金	C4	斜路 埋断アゼ北 黒・黄褐色	1.55	1.6	0.1	0.4	
188	3060	M161	鍔首	銅・銅合金	C4	斜路 黒・黄褐色	3.5	0.6	0.3	1.4	釘穴3個
188	3061	M162	鍔首の把手か	鉄	C4	斜路 黒・黄褐色	4.4	1.2	0.6	11.3	
188	3062	M150	鍔金具	銅・銅合金	C3	斜路 黒・黄褐色	1.1	1.2	0.6	2.3	
188	3063	M239	鍔金具	銅・銅合金	C4	斜路 埋断アゼ 黒・黄褐色	1.05	1.05	0.6	1.5	僅かに厚みが違う
188	3064	M239	不明	銅・銅合金	C4	斜路 黒・黄褐色	3.4	1.5	0.24	1.94	
188	3065	M019	鍔首	銅・銅合金	C2	斜路埋断石垣南面埋土 溝埋戻	3.9	2.2	2.2	8.13	紙巻
188	3066	M213	鍔首	銅・銅合金	C3	斜路 土油層出土	(12.5)	2.0	2.0	6.03	
188	3067	M214	鍔首	銅・銅合金	C3	斜路 土油層出土	(11.05)	1.9	1.85	5.22	
188	3068	M215	鍔首	銅・銅合金	C3	斜路 土油層出土	(1.1)	2.9	1.9	4.29	
188	3069	M024	鍔首	銅・銅合金	B2	斜路 埋土 (黒炭)	0.85	1.64	1.64	4.83	
189	3070	M218	手渡し鍔	鉄	B3	埋断石垣(南) 踏踏面土	4.7	16.4	4.5	105.84	体部 1.35 × 0.75cm
189	3071	M030	鍔首護身か	鉄	B3	斜路南側 炭灰層出土	5.5	3.5	1.05	69.4	
189	3072	M037	鍔首	銅・銅合金	C3	斜路 黒炭・黄褐色	(6.7)	8.2	4.1	212.9	
189	3073	M244	加工銅板	銅・銅合金	C4	斜路 黒・黄褐色	8.9	3.8	0.7	12.9	
189	3074	M219	不明	鉄	B3	斜路 南側法面石垣切	27.2	5.7	5.6	866.47	錆のない鋼3.6 × 3.7cm、体部断面径 2.1cmの円筒
190	3075	M233	加工銅板	銅・銅合金	C4	真鍮土 黒・黄褐色	5.8	2.15	0.05 ~ 0.08	5.6	
190	3076	M223	不明	銅・銅合金	B4	斜路 黒・黄褐色	26.6	5.6	5.0	763.98	
190	3077	M020	鍔金具か	銅・銅合金	B4	管理溝 南北アゼ 南側法面 炭灰層出土	2.9	4.15	0.15	3.2	
190	3078	M271	釘爪	鉄	B3	巻石西の外石組溝内	3.6	9.8	0.35	53.8	釘穴2個
190	3079	M263	ペンダントか	銅・銅合金	B4	巻石西の外石組溝内 炭灰層	2.9	2.2	1.2	4.4	中に何か入っているようだが、頭で覆かかっている
190	3080	M266	不明	銅・銅合金	B3	巻石西の外石組溝内 戻土	2.0	1.2	0.3	0.4	
190	3081	M262	鍔頭玉	鉄	B3	巻石北西側溝底	1.5	1.5	1.55	19.1	型の遺残
190	3082	M180	釘爪	鉄	B3+4	巻石階段 土に黄褐色粘	4.2	(3.7)	0.15	36.0	軒平瓦
191	3083	M136	釘爪	鉄	B4	巻石階段 8層	4.6	(11.2)	0.2	55.13	軒平瓦、釘穴2個
191	3084	M230	釘爪	鉄	B4	巻石階段 8層	3.2	8.35	0.25	42.18	方面の釘穴1個あり
191	3085	M255	釘爪	鉄	B4	巻石階段 5層 8層	2.2	(2.5)	0.2	50.3	製品か不明、素材かも
191	3086	M241	釘板	鉄	B3+4	巻石階段 土に黄褐色粘 28の7層	(7.6)	(4.05)	0.13	38	釘穴あり、巻釘1個残る
192	3087	M177	釘	銅・銅合金	B4	巻石階段 11層	13.1	頭1.4 軸0.75	頭1.8 軸0.55	20.79	貝折釘
192	3088	M178	釘	銅・銅合金	B4	巻石階段 11層	13.1	頭1.3 軸0.6	頭1.6 軸0.64	26.84	貝折釘
192	3089	M131	釘	銅・銅合金	B3	巻石階段 9・10層	13.3	頭1.3 軸0.6	頭1.45 軸0.45	21.1	貝折釘
192	3090	M221	釘	銅・銅合金	B3	巻石階段 9・10層	13.65	頭1.5 軸0.65	頭1.65 軸0.5	23.35	貝折釘
192	3091	M222	釘	銅・銅合金	B3	巻石階段 9・10層	12.95	頭1.4 軸0.65	頭1.50 軸0.49	23.13	貝折釘
192	3092	M134	釘	銅・銅合金	B4	南北アゼ 巻石階段埋土 9・10層	13.7	頭1.35 軸0.5	頭1.2 軸0.5	23.0	貝折釘
193	3093	M180	釘	銅・銅合金	B4	巻石階段 8層	14.6	頭1.5 軸0.8	頭(0.9) 軸0.55	28.43	貝折釘
193	3094	M137	釘	銅・銅合金	B5	巻石階段 8層	14.9	頭1.3 軸0.65	頭1.7 軸0.55	24.1	貝折釘
193	3095	M135	釘	銅・銅合金	B5	南北アゼ 巻石階段埋土 7・8層	14.25	頭1.55 軸0.6	頭1.5 軸0.5	26.7	貝折釘
193	3096	M243	釘	銅・銅合金	B3+4	巻石階段 土に黄褐色粘 28の7層	14.1	頭1.4 軸0.65	頭1.45 軸0.7	31.3	貝折釘
193	3097	M247	釘	銅・銅合金	B3+4	巻石階段 炭灰層粘	13.5	頭1.2 軸0.5	頭1.55 軸0.45	24.1	貝折釘
193	3098	M251	釘	銅・銅合金	B3+4	巻石階段 炭灰層粘	13.5	頭1.48 軸0.5	頭1.8 軸0.6	28.4	貝折釘
194	3099	M166	釘	銅・銅合金	B3	巻石階段 8層	2.9	頭0.8 軸0.3	頭0.8 軸0.35	1.4	
194	3100	M187	釘	銅・銅合金	B3	巻石階段 8層	3.7	頭0.8 軸0.25	頭0.7 軸0.35	1.7	
194	3101	M168	釘	銅・銅合金	B3	巻石階段 8層	2.3	頭0.9 軸0.3	頭0.9 軸0.3	1.1	
194	3102	M169	釘	銅・銅合金	B3	巻石階段 8層	2.0	頭0.8 軸0.3	頭0.8 軸0.35	0.7	
194	3103	M170	釘	銅・銅合金	B3	巻石階段 8層	2.2	頭0.8 軸0.3	頭0.9 軸0.3	1.2	
194	3104	M171	釘	銅・銅合金	B3	巻石階段 8層	3.4	頭0.8 軸0.3	頭0.8 軸0.4	1.8	
194	3105	M172	釘	銅・銅合金	B3	巻石階段 8層	3.4	頭0.9 軸0.4	頭0.9 軸0.45	1.9	

第48表 鼠多門調査区出土遺物 金属観察表3

国庫 報告番号	発掘番号	品種	材質	グラウンド 遺構等・出土層位	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備 考	
194	3106	M173	釘	銅・銅合金	D3 香洲階段 8層	2.2	頭0.6 軸0.25	頭0.6 軸0.3	0.7	
194	3107	M174	釘	銅・銅合金	D3 香洲階段 8層	2.6	頭0.6 軸0.25	頭0.6 軸0.35	1.1	
194	3108	M175	釘	銅・銅合金	D3 香洲階段 8層	2.0	頭0.9 軸0.3	頭0.8 軸0.3	1.3	
194	3109	M248	釘	銅・銅合金	D3・4 香洲階段 R28の7層	2	頭0.65 軸0.25	頭0.6 軸0.25	0.7	
194	3110	M249	釘	銅・銅合金	D3・4 香洲階段 R28の7層	3.3	頭0.7 軸0.25	頭0.65 軸0.25	1.2	
194	3111	M250	釘	銅・銅合金	D3・4 香洲階段 R28の7層	3.85	頭0.9 軸0.3	頭0.75 軸0.35	2.9	
194	3112	M252	釘	銅・銅合金	D3・4 香洲階段 R28の7層	3.42	頭0.95 軸0.2	頭0.75 軸0.2	1.2	
194	3113	M253	釘	銅・銅合金	D3・4 香洲階段 R28の7層	3.78	頭0.75 軸0.25	頭0.68 軸0.25	1.7	
194	3114	M254	釘	銅・銅合金	D4 香洲階段西 戸室テラス石敷直上層	4.2	頭0.9 軸0.2	頭0.95 軸0.2	1.6	
194	3115	M256	釘	銅・銅合金	D4 香洲階段西 戸室テラス石敷直上層	1.7	頭(0.33) 軸0.2	頭(0.33) 軸0.2	0.2	
194	3116	M254	針金	銅・銅合金	D3・4 香洲階段 R28の7層	2.95	2.75	0.6	1.5	
194	3117	M259	針金	銅・銅合金	D3・4 香洲階段 R28の7層	7.9	6.1	0.1	2.1	
194	3118	M234	不明	銅・銅合金	D4 香洲階段 8・9段 B層	3.7	2.05	0.09	8.8	
194	3119	M258	不明	銅・銅合金	D4 香洲階段 8・9段 B層	3.4	1.6	0.95	3.2	
194	3120	M238	留瓦	銅・銅合金	D3・4 香洲階段 C層	0.95	1.35	0.9	4.7	
194	3121	M260	留瓦	銅・銅合金	D4 香洲階段 B・C層間灰層	1.2	1.3	1.3	6.5	
194	3122	M133	留瓦	銅・銅合金	D4 香洲階段土 橋(炭素)	1.4	頭1.4 軸0.75	頭1.4 軸0.65	5.96	
194	3123	M179	留瓦	銅・銅合金	D4 香洲階段 11層	1.2	1.3	0.76	4.15	
194	3124	M232	鉄棒	鉄	D4 香洲階段 8・9段 B層	2.75	1.45	1.45	34.7	
195	3125	M242	鉄棒	鉄	D4 香洲階段 8・9段付近 B・C層間灰層	12.05	14.45	4.85	524.9	
195	3126	M267	釘	銅・銅合金	D3 香洲西切外 段直灰層	12.7	頭1.1 軸0.7	頭1.9 軸0.45	22.0	具折釘
195	3127	M270	釘	銅・銅合金	D3 香洲西切外 段直灰層	2.3	頭0.55 軸0.3 木質含1.8	頭0.5 軸0.3 木質含0.6	1.0	本質部分残る
195	3128	M265	釘	銅・銅合金	E3 香洲 遺構検出 近代土	12.5	頭1.55 軸0.6	頭1.75 軸0.45	18.3	具折釘
195	3129	M264	銅板	銅	糖倉石垣上面(監視塔の基礎コンクリート)	24.4	18.8	0.15	572.2	釘で留まっている
196	3130	M268	釘	鉄	糖倉石垣上面	14.1	頭1.3 軸0.65	頭1.7 軸0.75	33.8	
196	3131	M269	釘	鉄	糖倉石垣上面	16.7	頭1.15 軸0.7	頭1.7 軸0.6	33.3	
196	3132	M449	下駄	鉄	B2 1トレンチ 現代層	23.7	13.0	3.0	210.0	鼻緒の穴3個のうち1 個は縫で埋まっている
196	3133	M650	細鉄(馬蹄)	鉄	B2 1トレンチ 現代層	13.3	12.2	1.5	376	一部が残る
196	3134	M226	刃の跡	銅・銅合金	B3 近代堆積土	4.2	3.2	0.4	25.94	雲々の文庫あり
196	3135	M231	棒管(板口)	銅・銅合金	OV 遺構検出 (木)13.45)	3.6	1.3	1.3	19.5	継手あり
197	3136	M193	釘	銅・銅合金	D3 1トレンチ 黄灰粘シルト(褐色土層)	3.97	頭0.88 軸0.38	頭0.87 軸0.42	3.33	
197	3137	M194	釘	銅・銅合金	D3 1トレンチ 黄灰粘シルト(褐色土層)	2.16	頭0.75 軸0.25	頭0.74 軸0.22	0.62	
197	3138	M195	釘	銅・銅合金	D3 1トレンチ 黄灰粘シルト(褐色土層)	1.73	頭0.52 軸0.29	頭0.54 軸0.3	0.53	
197	3139	M265	釘	銅・銅合金	D3 1トレンチ 橋(炭素)	2.5	頭0.6 軸0.35	頭0.7 軸0.3	1.1	
197	3140	M266	釘	銅・銅合金	D3 1トレンチ 橋(炭素)	2.9	頭0.8 軸0.35	頭0.8 軸0.3	1.3	
197	3141	M267	釘	銅・銅合金	D3 1トレンチ 橋(炭素)	4.9	頭0.8 軸0.35	頭0.8 軸0.3	2.02	
197	3142	M196	不明	銅・銅合金	D3 1トレンチ 黄灰粘シルト(褐色土層)	5.30	0.35	0.1	0.67	
197	3143	M197	不明	銅・銅合金	D3 1トレンチ 黄灰粘シルト(褐色土層)	5.81	0.3	0.1	0.71	
197	3144	M198	不明	銅・銅合金	D3 1トレンチ 黄灰粘シルト(褐色土層)	5.4	0.35	0.1	0.78	
197	3145	M199	不明	銅・銅合金	D3 1トレンチ 黄灰粘シルト(褐色土層)	8.1	0.35	0.15	3.30	
197	3146	M201	葉莖	銅・銅合金	D3 1トレンチ 黄灰粘シルト(褐色土層)	(1.7)	2.1	2.9	6.9	
197	3147	M202	葉莖	銅・銅合金	D3 1トレンチ 黄灰粘シルト(褐色土層)	(3.3)	2.5	1.9	7.3	
197	3148	M203	葉莖	銅・銅合金	D3 1トレンチ 黄灰粘シルト(褐色土層)	(2.45)	3.05	2.1	9.1	
197	3149	M208	不明	銅・銅合金	D3 1トレンチ 橋(炭素)	4.1	0.6	0.25	1.5	
197	3150	M204	不明	銅・銅合金	D3 1トレンチ 橋(炭素)	1.3	1.3	0.7	3.2	
197	3151	M223	不明	銅・銅合金	D2 Bトレンチ 埴土層より上位層	1.45	1.03	0.22	0.53	
197	3152	M018	磨蝕玉	鉛か	D2 遺構検出	2.35	1.55	1.5	30.75	先端が潰れている
197	3153	M012	釘	銅・銅合金	D2 遺構検出	1.7	頭0.49 軸0.2	頭0.5 軸0.2	0.32	
197	3154	M013	釘	銅・銅合金	D2 遺構検出	2.4	頭0.8 軸0.35	頭0.7 軸0.25	1.15	
197	3155	M014	釘	銅・銅合金	D2 遺構検出	2.9	頭0.9 軸0.3	頭0.8 軸0.25	1.32	
198	3156	M015	釘	銅・銅合金	D2 遺構検出	3.5	頭1.1 軸0.3	頭0.7 軸0.3	1.86	

第49表 鼠多門調査区出土遺物 金属観察表 4

国検 報告番号	実測番号	器種	材質	グランド 遺構等・出土層位	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考	
198	3157	M016	釘	銅・銅合金	D2 遺構検出	2.6	頭0.7 軸0.25	頭0.8 軸0.25	1.0	
198	3158	M017	釘	銅・銅合金	D2 遺構検出	3.5	頭0.8 軸0.25	頭0.9 軸0.3	1.6	
198	3159	M015	釘	銅・銅合金	E2 遺構検出	2.6	頭0.9 軸0.25	頭1.0 軸0.3	1.3	
198	3160	M046	釘	銅・銅合金	E2 遺構検出	2.1	頭0.5 軸0.2	頭0.5 軸0.25	0.4	
198	3161	M047	釘	銅・銅合金	E2 遺構検出	2.0	頭0.7 軸0.25	頭0.7 軸0.2	0.5	
198	3162	M048	釘	銅・銅合金	E2 遺構検出	3.1	頭0.8 軸0.3	頭0.8 軸0.25	1.0	
198	3163	M004	釘	鉄	D2 地土層直上 (Bトレンチより南側)	4.6	頭1.0 軸0.45	頭0.7 軸0.45	3.97	
198	3164	M005	釘	鉄	D2 地土層直上 (Bトレンチより南側)	5.8	1.95 軸0.4	1.83 軸0.4	11.3	鉛印者
198	3165	M006	釘	鉄	D2 地土層直上 (Bトレンチより南側)	7.65	頭1.35 軸0.55	頭0.6 軸0.4	6.53	
198	3166	M007	釘	鉄	D2 地土層直上 (Bトレンチより南側)	9.3	頭1.35 軸0.55	頭0.81 軸0.4	6.0	
198	3167	M008	釘	鉄	D2 地土層直上 (Bトレンチより南側)	10.9	頭1.3 軸0.5	頭1.11 軸0.5	11.01	
198	3168	M009	釘	鉄	D2 地土層直上 (Bトレンチより南側)	(12.8)	頭1.65 軸0.6	頭1.5 軸0.6	20.2	貝形釘
198	3169	M011	釘	鉄	D2 遺構検出	2.2	頭0.55 軸0.2	頭0.55 軸0.2	0.43	須巻釘
198	3170	M040	釘	鉄	D2 遺構検出	5.6	頭1.3 軸0.5	頭0.6 軸0.4	3.5	須巻釘
198	3171	M041	釘	鉄	D2 遺構検出	6.02	頭0.9 軸0.35	頭0.4 軸0.25	2.6	須巻釘
198	3172	M042	釘	鉄	D2 遺構検出	7.53	頭0.65 軸0.45	頭0.9 軸0.4	4.84	須巻釘
198	3173	M043	釘	鉄	D2 遺構検出	7.9	頭1.5 軸0.5	頭0.8 軸0.45	9.5	須巻釘
198	3174	M044	釘	鉄	D2 遺構検出	7.85	頭0.9 軸0.55	頭0.55 軸0.45	6.74	須巻釘
198	3175	M021	釘	銅・銅合金	E3 近代層 (割路以南)	13.2	頭1.4 軸0.6	頭1.7 軸0.5	23.36	貝形釘

第50表 鼠多門調査区出土遺物 金属(銭貨) 観察表

国検 報告番号	実測番号	器種	材質	グランド 出土層位・遺構等	計測部位 (cm)						厚さ (mm)	重量 (g)	備考	
					A	B	C	D	E	F				
199	3176	C002	銅銭	銅・銅合金	C2 石垣1-27 裏込め	2.44	2.42	1.96	2.01	0.64	0.63	0.1	2.55	裏水通室
199	3177	C125	銅銭	銅・銅合金	E4 SD16	2.4	2.42	2.11	2.05	0.55	0.56	0.14	2.7	裏水通室
199	3178	C001	硬貨	銅・銅合金	B3 馬場庫コングリ床面下 層部	2.29	2.3	2.13	21.4			0.15	3.49	一銭(銅・銭銅)、「大 正十年」
199	3179	C005	銅銭	銅・銅合金	C4 馬場レンガ基礎 層下	2.17	(1.93)	1.76		0.68	0.66	0.8	1.99	裏水通室
199	3180	C126	銅銭	銅・銅合金	D4 レンガ基礎V 型方下 地土層	{2.5}	{2.5}					0.11	(0.5)	裏水通室
199	3181	C110	硬貨	銅・銅合金	D4 レンガ基礎内 近代埋土	2.8	2.8	2.45	2.45			0.21	6.8	一銭(銭銅)、「明治十三年 昭和十三年」
199	3182	C107	硬貨	銅・銅合金	D4 レンガ基礎内 近代埋土	2.36	2.37	2.05	2.10			0.14	4.5	10円 昭和五十六年
199	3183	C116	銅銭	銅・銅合金	C4 コングリ基礎内	2.42	2.42	1.99	1.99	0.60	0.61	0.11	2.8	裏水通室
199	3184	C003	銅銭	銅・銅合金	C2 割路 Aトレンチ南アゼ 基内〜地底	21.4	21.5	17.7	17.4	4.7	6.7	0.8	1.59	裏水通室
199	3185	C004	銅銭	銅・銅合金	C3 割路 機灰	23	22.8	18.7	18.3	6.2	6.1	0.1	1.53	裏水通室
199	3186	C111	銅銭	銅・銅合金	C4 割路 1層	2.44	2.43	2.04	1.99	0.60	0.58	0.12	3.3	裏水通室
199	3187	C103	銅銭	銅・銅合金	C4 割路 小石層	2.30 2.37	2.29 2.35	1.89 1.82	1.84 1.82	0.61 0.69	0.59 0.49	0.2 0.09	4.34	裏水通室、2枚重なって いる
199	3188	C104	銅銭	銅・銅合金	C4 割路 黒・黄褐色	2.37	2.37	1.96	1.94	0.66	0.65	0.1	1.91	裏水通室
199	3189	C105	銅銭	銅・銅合金	C4 割路 黒・黄褐色	2.40	2.40	1.86	1.90	0.60	0.59	0.1	2.42	裏水通室
199	3190	C112	銅銭	銅・銅合金	C4 割路 黒・黄褐色 裏面アゼ北	2.48	2.49	2.00	2.00	0.62	0.63	0.1	2.4	裏水通室
199	3191	C113	銅銭	銅・銅合金	C4 割路 黒・黄褐色 裏面アゼ北	2.31	2.35	1.84	1.84	0.60	0.58	0.9	2.4	裏水通室
200	3192	C118	銅銭	銅・銅合金	C4 割路 裏面アゼ北 黒・黄褐色	2.36 最大 2.62	2.33 最大 2.49	1.76	1.78	0.50	0.50	0.67	16.1	裏水通室、5枚重なって いる
200	3193	C120	銅銭	銅・銅合金	D4 割路 裏面アゼ北 黒・黄褐色	2.53	2.53	2.05	2.04	0.56	0.57	0.14	3.3	裏水通室、文銭
200	3194	C119	銅銭	銅・銅合金	C4 番所階段8・9段 8層	2.3	2.27	1.90	1.88	0.64	0.64	0.1	2.1	裏水通室
200	3195	C115	銅銭	銅・銅合金	D4 番所階段南アゼ 8層	2.3	2.3	1.89	1.90	0.65	0.65	0.08	2.0	裏水通室
200	3196	C121	銅銭	銅・銅合金	D3 番所中央 近代整地土	2.42	2.45	1.95	1.96	0.60	0.59	0.14	2.4	裏水通室
200	3197	C114	銅銭	銅・銅合金	D3 番所北辺 近代整地土	2.31	2.27	1.93	1.91	0.64	0.63	0.11	1.6	裏水通室
200	3198	C122	銅銭	銅・銅合金	D3 番所西辺外 段田灰地	2.5	2.49	2.10	2.06	0.63	0.62	0.13	2.4	裏水通室
200	3199	C123	銅銭	銅・銅合金	D3 番所西辺外 段田灰地 (2.5)	(2.5)	(2.5)					0.15	0.9	裏水通室、別個作
200	3200	C127	銅銭	銅・銅合金	D3 番所 遺構検出 近代埋 土	2.31	2.29	1.70	1.70	0.55	0.58	0.1	2.0	裏水通室
200	3201	C114	銅銭	銅・銅合金	B5 土平状遺構上面 近代埋土	2.42	2.42	1.92	1.94	0.50	0.52	0.16	3.5	裏水通室
200	3202	C102	銅銭	銅・銅合金	D3・4 近代層	2.33	2.34	1.82	1.82	0.63	0.63	0.11	2.2	裏水通室
200	3203	C117	銅銭	銅・銅合金	B5・6 近代成層土	2.50	2.49	1.92	2.00	0.52	0.50	0.14	2.9	裏水通室
200	3204	C106	硬貨	銅・銅合金	C5 濠内側切取 検出面	1.89	1.9	1.70	1.70			0.14	2.3	五十銭、昭和二十三年
200	3205	C108	硬貨	ニッケル	C5 濠内側埋設電圧管層方 遺構検出	2.49	2.49	2.25	2.25			0.15	5.2	50円、昭和二十一年
200	3206	C109	硬貨	銅・銅合金	B5 遺構検出	2.25	2.25	2.02	2.02			0.16	4.8	100円、昭和54年

第51表 鼠多門調査区出土遺物 石製品観察表1

図版番号	実測番号	器種	材質	グリッド 遺構等・出土層位	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備 考	
201	4001	15003	鉢	凝灰岩	B2 石垣第5段 裏込め築石	(18.7)	18.3	11.2	2,600	方形・4足の鉢。底面4足のうち2個欠、 外面平滑、内面ツル肌残る
201	4002	15001	鉢	凝灰岩	C2 石垣第7段 裏込め築石	21.2	(13.5)	(15.2)	3,700	方形・4足の鉢を半分に切っているが、 外面平滑、内面ツル肌残る
201	4003	5010	茶臼		C2 石垣第8段 裏込め	(11.5)	(8.5)	(6.3)	806.69	
201	4004	15147	石臼		近代雑物S01 東側屋敷内	(18.4)	(11.2)	(10.7)	2,220	
202	4005	5001	硯	高島石	B1 貯留庫増設アゼ(石垣第4段裏) 原面焼灰	(14.0)	6.4	1.95	277.2	近江高島硯、幅2寸の長タイプか
202	4006	5117	硯	虎斑石	E4 土管新方	16.9	6.2	2.4	416.9	裏面線刻「口九尺十八日」か 近江高島硯、寸寸長、190か
202	4007	5301	硯	高島石	B2 斜路埋土 黒焼・黄焼 斜め堆積層	(15.2)	7.6	2.9	627.87	再加丁途中か
202	4008	5118	砥石		C5-6 近代建物基礎南側方形遺構	(7.9)	5.5	1.4	101.2	4面使用
202	4009	5113	石筆	礫石	B4 コンクリ基礎埋込	2.95	0.7	0.6	2.2	
203	4010	5103	硯	高島石	C3 斜路 黒・黄焼	10.8	5.8	1.5	154.59	近江高島硯、裏面線刻「上々高島石」
203	4011	5002	硯		B2 斜路南側 灰取焼灰	12.3	5.8	1.95	173	全面磨建
203	4012	5127	硯	高島石	C4 縦断アゼ北 黒・黄焼	(3.7)	6.9	(1.2)	26.7	近江高島硯、幅2寸の長タイプか、焼 物により着色化
203	4013	5123	硯	高島石	C3 斜路 縦断アゼ北 黒・黄	(3.3)	4.8	1.3	20.8	近江高島硯、幅1寸6分(細タイプ)、 平石クラス。
203	4014	5125	硯	高島石	C4 縦断アゼ北 黒・黄焼	(12.0)	(4.2)	1.6	109.1	近江高島硯、中石クラスか
203	4015	5102	硯		C4 斜路 黒・黄焼	7.6	2.5	0.61	20.28	側面に整形時の擦痕多く残る
203	4016	5114	砥石	滑石	C3 斜路 黒・黄焼	(5.7)	(2.8)	1.7	42.95	擦痕多く残る
204	4017	5119	砥石	滑石	C1 斜路 縦断アゼ北 黒・黄焼	(4.7)	(3.7)	1.8	53.2	両面から穿孔
204	4018	5104	砥石	滑石	C1 斜路 黒・黄焼	(6.6)	(4.2)	1.7	59.75	擦痕多く残る
204	4019	5003	砥石		C2 斜路 焼灰	7.1	5.7	1.7	88.9	
204	4020	5126	砥石	注貫用石	C4 斜路コンクリ基礎部	(4.65)	(2.95)	0.4	8.1	南屋敷 中山か
204	4021	5105	砥石		C4 斜路 黄焼	7.9	5.9	1.1	60.5	裏面線刻「村」? 転用か
204	4022	5116	人形	礫石	C4 斜路 縦断アゼ北 黒・黄焼	4.8	3.2	3.3	30.4	背中に線刻(花・鳥形)
204	4023	5008	石筆	礫石	B2 斜路 上面	3.8	0.55	0.48	1.9	
204	4024	5009	石筆	礫石	B2 斜路埋土 上面	3.6	0.55	0.55	2.2	
205	4025	5121	不明	凝灰岩	C4 斜路 踏面直上 黒・黄焼	(11.4)	(14.9)	(8.2)	768.4	一両色(焼熱)
205	4026	5106	石鉢	凝灰岩	C2 斜路 床面直上 黒焼	口径 (40.0)		器高 (8.1)	335.1	外面ノミ痕(幅3cm程度の平方か) 内面は使用により平滑、ノミ痕残る
205	4027	5107	石鉢	凝灰岩	C4 斜路 黄焼	口径 (25.5)		器高 (9.1)	307.9	外面平方ノミ痕 内面は磨建
205	4028	5112	石臼	凝灰岩	C4 斜路 黒・黄焼	口径 (31.3)		器高 (10.9)	2,970	一部腹付番(M17火災時か)
205	4029	5128	不明	埴野石	C5 斜路近代踏面直上	(8.1)	(9.9)	(6.45)	497.7	
205	4030	5108	不明	凝灰岩	B3 斜路 黒・黄焼	(11.1)	4.8	4.3	180.3	棒状か
206	4031	5141	硯		B3 善清西の石石組溝内 灰取焼灰	15.35	6.26	2.17	250	膝部に「村松平太郎内侍」の線刻有 腕面に墨を塗っている
206	4032	5109	墓石(圓)		B3 善清階段 6・7層	2.2	2.2	0.4	3.5	
206	4033	5122	不明	凝灰岩	B4 善清階段南アゼ 8層	18.7	16.35	8.8	1,860	外側は丸角付で平滑に仕上げているが、 内側は丸く削り込まれて、ツル肌が多く 残る
206	4034	5124	硯	高島石	B4 善清階段 301間 8層	(6.1)	4.6	(9.9)	36.5	近江高島硯、細タイプ、筆石か 裏面と両側面に染みあり、切跡しよとし たか
206	4035	5120	不明	凝灰岩	B4 善清階段東コンクリ基礎掘り	(8.3)	(12.55)	(6.7)	308.2	焼熱、傷付き
206	4036	5005	墓石(圓)		B3 近代増地土	2.15	2.2	0.5	3.5	
206	4037	5006	墓石か(白)		B4 近代増地土	1.7	1.65	0.45	2.1	

第52表 鼠多門調査区出土遺物 石製品観察表2

図取番号	実測番号	器種	材質	オリジナル遺物名・出土層位	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (kg)	備考
207	4038	S007	埋没側面の蓋石か	凝灰岩 C2 石垣第9段 裏込め	(16.2)	(12.8)	7.8	1.45	ツル根・チャウナ根残る。一部保存着
207	4039	L8009	礎石	赤戸室石 C1 築家部北アゼ(石垣第2段裏) 側溝	34.9	25.9	14.1	1.6	底面も平滑に仕上げているので粗目の石の下の石も同様。断面がらら。背の面によっている面の調整が粗い
207	4040	L5010	不明	赤戸室石 C1 築家部北アゼ(石垣第2段裏) 砂利・砂	23.1	24.9	15.0	8.5	上面・内面平滑。他はツル根残る
208	4041	L5004	不明	赤戸室石 C1	25.4	18.4	14.9	9.9	チャウナ根残る
208	4042	L5110	側溝か	凝灰岩 C3 S02 取り上げ跡・⑦	67.3	(28.1)	23.3	14.4	下部側面一部保存着。正面・裏面平滑。左側面・両側面は平滑。裏面・全面保存着
208	4043	L5109	埋没側面の蓋石か	凝灰岩 C3 S02 取り上げ跡	(35.0)	(35.3)	8.35	6.35	ツル根・チャウナ根残る
209	4044	L5115	礎石	赤戸室石 C3 S02 取り上げ跡	14.5	45.7	14.6	1.54	上面平滑。焼熟か
209	4045	L5111	不明	赤戸室石 C3 S02 取り上げ跡・⑧	41.4	70.25	15.3	70.45	上面及び側面の上面側一部平滑で残存。上面と側面にはツル根が多く残る
210	4046	S129	不明	赤戸室石 C5 斜路北側面 S04 採取埋土 石96	41.4	56.2	13.0	29.2	ツル根。チャウナ根残る
210	4047	L5121	不明	赤戸室石 C5 斜路 S09	34.5	51.5	9.4	19.2	一部焼熟。ツル根多く残る
211	4048	L5148	不明	凝灰岩 E4 S016 近代埋土	(19.7)	15.4	8.7	2.76	上面及び側面の上面側一部平滑。ツル根。チャウナ根残る
211	4049	L5113	門礎石	赤戸室石 C2 門礎No.2	26.8	37.5	13.9	34.7	表面・側溝付着。表面・両側面・背面は断面に変色。焼熟か。裏面・側面が丸く
212	4050	S138	側溝	凝灰岩 B3 門背面 石材1	40.5	(91.5)	24.0	23.65	ツル根。チャウナ根残るが、外側面は平滑。側面上端を丸く加工
213	4051	S132	側溝	凝灰岩 C3-B1 門背面No.14	(42.3)	(93.2)	21.5	17.0	ツル根。チャウナ根残るが、外側面は平滑。側面上端を丸く加工
213	4052	L5141	蓋石か	赤戸室石 B3 門背面側溝	(35.1)	37.5	9.1	16.85	平滑な面・使用によるもの。巾が広い。断面は平滑。側面は平滑。側面上端を丸く加工
214	4053	L8008	側溝	凝灰岩 C3 北側門後柱尻内	(24.6)	(38.9)	23.4	13.15	ツル根。チャウナ根残るが、外側面は側面上端を丸く加工
214	4054	L5145	不明	赤戸室石 C4 レンガ・A・B2・Q基礎	15.7	19.7	12.3	5.6	平滑に調整しているが、ツル根。チャウナ根残る
214	4055	L5134	不明	凝灰岩 C4 レンガ・コンクリ基礎下	(15.5)	18.0	13.7	4.15	上面と側面2か所は平滑。裏面と側面1か所はツル根多く残る。6×3cm程度の切り込みあり
215	4056	L5132	礎石か	砂野石 C4 レンガ・コンクリ基礎・A・B2・Q下	16.7	(22.1)	14.5	9.55	上面と側面の上面側は平滑。他はツル根。チャウナ根残る。上面は3.4×3.6cm、深さ3.3cmの四角い窪みがある
215	4057	L5133	礎石	赤戸室石 C4 レンガ・コンクリ基礎下	(15.4)	15.6	13.5	4.6	上面と側面の上面側は平滑。他はツル根。チャウナ根残る。上面は4.5×4.5cm、深さ1.7cmの四角い窪みがある
215	4058	L5120	不明	赤戸室石 C4 レンガ・コンクリ基礎下	(21.0)	24.5	18.4	8.35	焼熟。側溝付着
215	4059	L5129	蓋石か	凝灰岩 C4 レンガ・コンクリ基礎下	15.0	(3.07)	8.0	3.6	ツル根・チャウナ根残る
216	4060	L5136	側溝	赤戸室石 C1・5 斜路 黒・黄褐色	41.4	48.6	23.4	42.4	底面と外側面はツル根が多く残る。他は平滑に調整している
216	4061	L5135	埋没石か	赤戸室石 C1・5 斜路 黒・黄褐色	63.7	8.5	19.6	15.25	平滑に調整しているが、ツル根。チャウナ根残る。底面はツル根多く残る
217	4062	L5136	不明	赤戸室石 C1・5 斜路 黒・黄褐色	(12.2)	(30.7)	12.4	4.9	平滑に調整している
217	4063	L5109-1	蓋石か	凝灰岩 C4 斜路 黒・黄褐色	47.9	(39.2)	(20.4)	(35.30)	一部焼熟
217	4064	L5109-2	蓋石か	凝灰岩 C4 斜路 黒・黄褐色	(19.3)	(25.8)	(18.0)	(6.95)	一部焼熟
218	4065	L5130	側溝	赤戸室石 C1・5 斜路 石84・85・90他 黒・黄褐色	49.4	71.2	22.1	44.1	底面と外側面はツル根が多く残る。他は平滑に調整している
219	4066	S094	不明	凝灰岩 B2 斜路 埋没穴	(13.9)	(14.5)	6.3	6.84	内面ツル根残る
219	4067	L5137	不明	C4 斜路 埋没穴由緒出	(32.7)	42.3	12.2	12.85	平滑に調整しているが、ツル根。チャウナ根残る
219	4068	L5104	不明	赤戸室石 B3 南側法面	25.2	22.3	16.3	14.4	側面にツル根少し残る
219	4069	L5105	不明	赤戸室石 B3 南側法面	26.0	22.4	16.2	14.6	側面にツル根多く残る。チャウナ根あり
220	4070	L5106	不明	赤戸室石 B3 南側法面	25.9	21.8	16.3	14.85	側面にツル根多く残るが、上方は平滑に調整している
220	4071	L5107	不明	赤戸室石 B3 南側法面	26.4	21.9	15.3	13.95	側面にツル根多く残り、片方には切り込みがある
220	4072	L5138	敷石か	赤戸室石 B3 塀基石組の後ろ	(28.6)	37.8	8.4	11.85	焼熟している。一部焼熟か
221	4073	L5119	埋没石か	赤戸室石 B1・4 事務所段 二のび・黄褐色 R29の7層	20.3	37.2	11.0	20.35	ツル根。チャウナ根残る
221	4074	L5140	敷石	赤戸室石 B1・4 事務所段 二のび・黄褐色 R29の7層	(53.2)	18.95	11.75	18.55	上面は焼熟している。片方の側面はかなりの厚さで残っている。反対側の側面はほぼ見えていない。上面はやや焼熟しているが側面は元のままになっている
221	4075	L5142	埋没石	凝灰岩 B3・4 事務所段 灰黄褐色	18.2	32.2	15.0	11.95	裏面は側面が細かい調整なし
222	4076	L5144	側溝	赤戸室石 B1・4 事務所段 灰黄褐色	(20.6)	61.6	(21.1)	23.05	ツル根。チャウナ根残る。底面？に凹みの切り込みあり
222	4077	L5101	石基石	赤戸室石 斜路	69.8	32.0	22.1	63.65	側面は焼熟により表面(約7cm厚)。粗い調整。三角穴で削っている。ツル根の残る面にアスファルトで3cm厚のアスファルトで1cm厚のものを貼る。上面の面は、平滑に調整しているが、他はツル根が多く残るか。調整。14×6cm、深さ1.5cm程度の切り着。保存着
223	4078	L5006	礎石	赤戸室石 斜路	51.8	21.3	17.5	27.80	

第53表 鼠多門調査区出土遺物 石製品観察表3

図版	報告番号	発掘番号	器種	材質	グリッド 遺物等・出土層位	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (kg)	備考	
	223	4079	13007	礫石	赤戸室石 斜路		50.4	24.3	18.0	34.15	アスファルトで「ハ」状、正面から裏面まで覆れる。接合部分 平滑に調整しているが、奥縁はほぼ未調整、11.5×6.5cm、深さ1.5cm程度の持ち角
	224	4080	13002	不明	赤戸室石		24.8	22.0	16.5	13.45	平滑に調整しているが、下面と両端面にツルむねが残る
	224	4081	13005	不明	赤戸室石		25.2	21.6	16.5	14.9	平滑に調整しているが、下面と両端面にはツルむねが残る
	224	4082	13123	礫石か	青戸室石 調査区一括		34.7	31.1	23.5	35.1	一面焼物、チャウナ焼残る
	225	4083	13102	礫石か	青戸室石 馬橋塚礫石		37.3	37.0	27.8	58.9	フル顔・チャウナ焼残る。孔の周囲は平滑。側面の大きな割れ目はサラサラしているため、新しい(馬橋塚産同種か)ものか、底面は全体的に磨削している

第54表 鼠多門調査区出土遺物 ガラス観察表

図版	報告番号	発掘番号	器種	材質	種類	グリッド 遺物等・出土層位	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	色調	年代等 備考	
	226	6001	G136	乳棒	ガラス	その他	C4 斜路 銀断アゼ以前 1層	6.60	2.0	(1.9)	44.8	淡青緑	古物 上層欠
	226	6002	G135	玉	ガラス	その他	B4 番河階段 B・C層間段階	1.5	1.6	(1.5)	7.1	淡青緑	上下面にすり取った痕跡が見られる
	226	6003	G137	瓶	ガラス	その他	C5 遺構検出	6.9	3.4	口径1.0 底径3.15	37.2	無色透明	200 スタリューン1号、銅板底面付近に磨削で「25」、 底面に「6」刻あり

第55表 鼠多門調査区出土遺物 海鼠漆喰観察表

図版	報告番号	発掘番号	器種	材質	グリッド 出土層位・遺構等	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	色調 (外面)	色調 (内面)	粘土	年代等 備考
	226	6004	B427	海鼠漆喰	B2 鼠多門上土蔵の間 B17 年の礎土等の敷地土より下	15.05	5.7	2.7	12.5	灰	灰白	細砂多	近世
	226	6005	B431	海鼠漆喰	B2 鼠多門上土蔵の間 3 B17 年の礎土等の敷地土より下	11.1	5.9	3.15	100.0	灰	灰白	細砂多	近世
	227	6006	B432	海鼠漆喰	B2 鼠多門上土蔵の間 B17 年の礎土より下層	4.7	5.65	2.5	50.0	灰	灰白	細砂多	近世
	227	6007	B425	海鼠漆喰	B2 馬橋塚内 近代敷地土	09.30	7.8	2.9	94.4	灰	灰白	細砂多	近世
	227	6008	B426	海鼠漆喰	B3 近代建物3001西側築方東壁 近代敷地土	06.20	5.65	2.9	44.4	灰	灰白	細砂多	近世

第56表 鼠多門調査区出土遺物 ボタン観察表

図版	報告番号	発掘番号	器種	材質	グリッド 出土層位・遺構等	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	色調	年代等 備考	
	227	6009	B420	ボタン	磁器	銅壁石組 (南) C 壁裏込め	1.15	1.15	0.25	0.4	白	近代 ブロッカーボタン、4つ穴
	227	6010	B423	ボタン	磁器	銅壁石組 (南) C 壁裏込め	1.1	1.1	0.3	0.4	白	近代 ブロッカーボタン、4つ穴
	227	6011	B424	ボタン	磁器	B4 番河南東瓦葺北平	1.1	1.1	0.3	0.5	白	近代 ブロッカーボタン、4つ穴、5 (11 製) で録取り
	227	6012	B419	ボタン	骨・貝	銅壁石組南東隅 表側・並納	1.5	1.5	0.25	(0.1)	灰白	近代 5つ穴

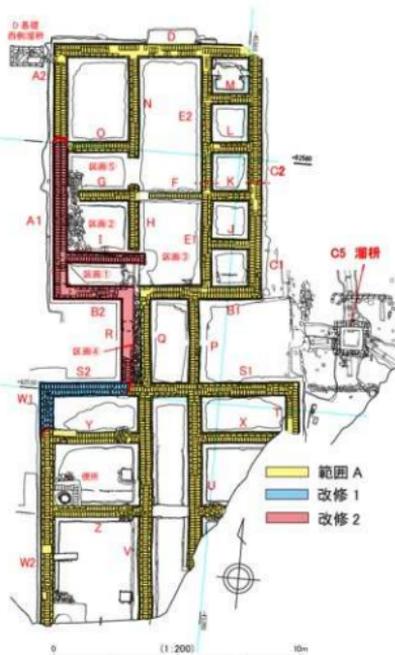
(6) レンガ

1) 旧金沢陸軍監獄署のレンガ

旧金沢陸軍監獄署のレンガ基礎について、総数約9,500点のレンガを取り上げ、このうち8,994点について、計測を行った。取り上げは列ごとに行っている(第228図)。改修境を把握できたものは、確認以降A1、A2のように分別した。旧監獄署は明治32年(1899)に建築されており、特に範囲Aのレンガの多くが当時のものと考えられるが、改修部分については、新規製作のレンガも使われた可能性がある。また、レンガの観察では、平の様相が面により大きく異なることを確認した。旧大阪府庁舎跡調査での分類(市村2012)を参考に α 面と β 面に分け報告する。 α 面は比較的平滑で、整美な直角形状を呈す。 β 面は、平滑さに欠け、表面が粗くなっており、横断面形が若干盛り上がる。また、長辺端部付近に、「線状凹み」と呼ばれる縦線がある。また、長手面に見られる褶曲した皺は β 面を上にして、凸状・凹状と区別したが、ほとんどが凸状であった。

文字資料(第230・231図)は9点出土している。6013は非常に硬質に焼成されたレンガで、 α 面に朱墨で「泉州界 上品」の記載がある。胎土分析では、他のレンガの要素と異なる点が多く、文字に従えば、和泉国の堺周辺地域から搬入された可能性がある。長手には薄い朱墨があり判別が難しいが「七百四拾□(内々)」の記載が推定される。6014は α 面に2字の文字がある。1文字目は「羽」であるが、2文字目は「場」の可能性があり、「羽場」という人名の可能性がある。6015とも共通するが、字は黒色であるものの非常に細く、チョークのような固形状用具で書いた可能性がある。6015は β 面に「松尾」の字があり、人名と推定される。6016には「三百」と数字の墨書がある。6017は α 面に刻書「吉田」がある。6018は α 面に「木」が3文字あり「木林」又は「森」と人名を記載していると考えられる。6019にも同じ文字がある。6020は、 β 面に「足羽郡 福井 □(内々)」があり、 α 面に逆向きで「八木又治郎」と記載され、それぞれ生産地名と、製作者を示していると考えられる。6021は α 面に「八木煉化」が記載される。さらに解説困難な1文字があり、「製」として「八木煉化製」となる可能性がある。6020、6021は共通する「八木」により産地が同一と考えられる。足羽郡福井で生産され、搬入された可能性が高い。なお、6021は角が全て面取りされ丁寧に成形される。

刻印資料(第231・232図)は、合計157点出土している。レンガ出土数の約2%になる。ほぼ α 面に施される。「IEI」と「×」(又は「十」)の2種類のみである。「IEI」は、屋号(社印)等と考えられるが、該当不明のため、仮に「IEI」と表記して報告する。「IEI」は合計98点出土している。6022は刻印面(α 面)にハケ工具が押し込まれて、その痕跡が明瞭に残る。ハケ工具は水野(1999)の「撫で板」に相当するものと推定される。6023は平(α 面)と小口の2箇所に刻印がある希少な例である。6024は、 α 面に明瞭な刻印が観察できる。「IEI」の「E」を縦にすると「山」に見えることから「一」山「一」の組み合わせの刻印である可能性もある。6025は α 面に刻印がある。6026～6029は「×」刻印である。合計59点出土している。「×」



第228図 レンガ基礎 全体図 (S=1/200)

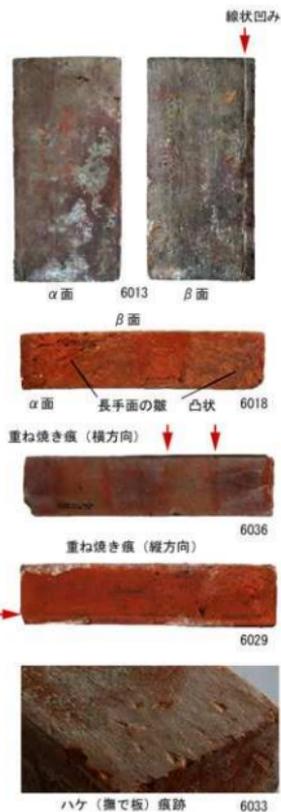
は、岸和田レンガに特徴的にみられる刻印であるが、胎土分析では6013「泉州堺」レンガと共通点は多くなく(第6章参照)、生産地の比定には検討を要する。6026は α 面に刻印があるが、重ねた製品の一部が溶着している。6027は α 面に刻印があるが、製作時に強く押しすぎて刻印工具の基部が方形の痕跡となって残る。6028は α 面に刻印がある。長手の縦方向(長軸)に、重ねたレンガの一部が溶着している。反対側の長手は横(短軸)方向(2本置き)である。長手付着の目地材を元素マッピング分析した結果、セメント物質としてポルトランドセメントに漆喰も併用されたモルタルである可能性が高い、との所見が出されている。6029は、長手の半円状の皺の向きから、 β 面に刻印があると判断される。 β 面の刻印は少なく希少な例である。又、「線状凹み」も α 面にある。長手の重ね焼きは、両面で方向が異なっている。刻印資料の出土傾向を第234図で示す。刻印資料は、範囲A北側に偏在しており、南側は改修1のW1基礎内部における1点のみの出土。範囲A北側と範囲A南側で建築の時期差があるのであろうか。ただし改修境は未確認。

6030は β 面に斜行するカキ目が残る。旧大阪府庁舎跡の101・107に類似する特徴である。6031は α 面に波状のカキ目があり、旧神戸外国人居留地遺跡に出土例(北山2012 図2の8)がある。6032は β 面に10条程度の縦方向の圧痕が残る。6033は α 面に径9.8cmの円形の沈線がある。

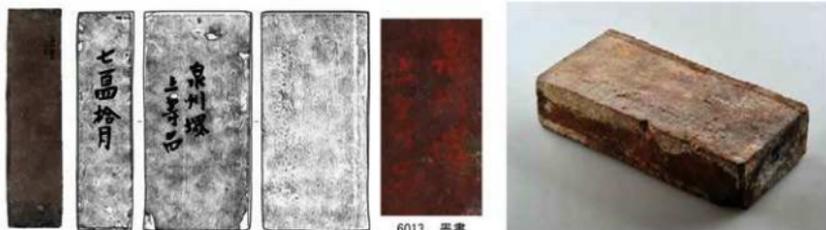
今回報告のレンガには長手に弧状に褶曲した皺が顕著にみられる例があった(第229図6018)。型枠に粘土を押し込んだ際に生じたものと推定され、調査区全体で約23%のレンガで観察できた。

その他、長手には、第229図6036・6029のように横方向や、割合的には少ないが縦方向に色調の変化部分又は段差が生じているものが確認できた。全体では約37%にあたる。方向別では、横方向が圧倒的に多く、長手を井桁状に組んで焼成していたことがわかる。

線状凹み(第233図)は、関西地方の手抜き成形レンガで特徴的にみられる痕跡である。今回の調査でも、約1,600点弱、約18%のレンガで見られた。ほとんどが β 面にある。6036~6043を掲載する。6036には幅3~7mm、深さ1~3mmの凹みが長手から約5mmのところを、長手とほぼ並行な形で存在する。6037の凹みは幅が2mmと狭いが、V字に深く凹んでいる。6038の凹みは、平の中央側が湾曲(断面形)し、縦方向の皺が多数みられ圧痕の可能性もある。6039の凹みは中央に凸状の皺があり、圧痕の可能性もある。6040は幅が3mm前後と細く、V字状の断面になる。ハケの方向が凹みを境に変わる。6041の凹みは、断面形が6038と逆に、端部側が湾曲している。6042の凹みは、内部に直行方向のハケ状工具痕がある。6043は β 面にあるハケの始点が残っている貴重な資料である。ハケ工具痕の端部が凹んで、凹線状にみえる。



第229図 レンガに見られる痕跡



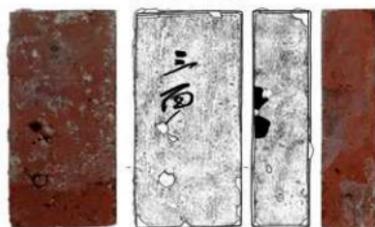
6013 土書



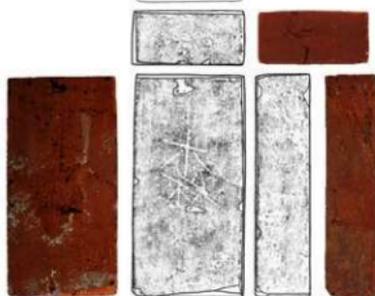
6013



6014



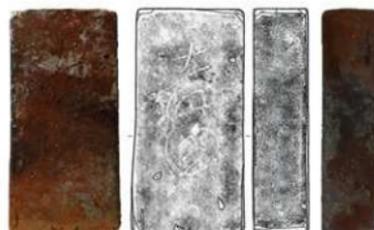
6016



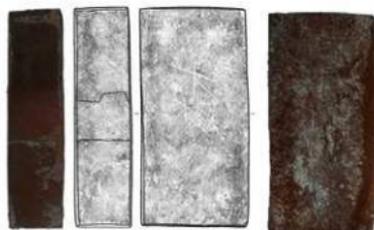
6018



6015



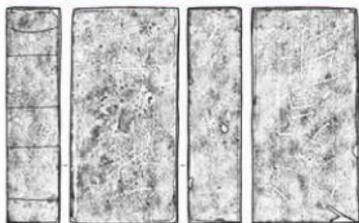
6017



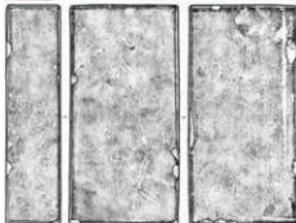
6019



第230図 レンガ(文字)



6020

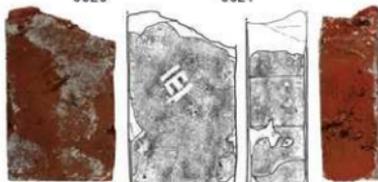


6021



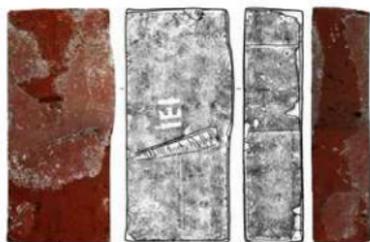
6020

6021



6023

6022 調整痕



6022



6024

6025

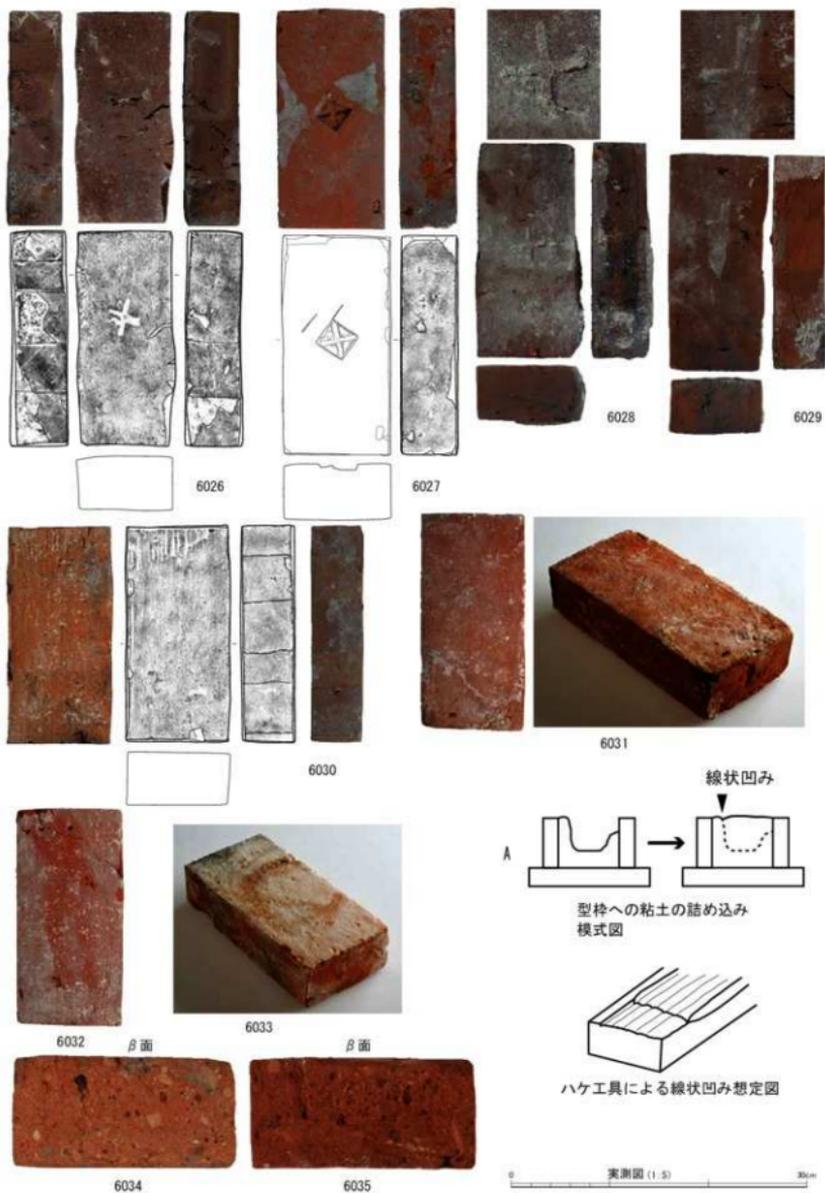


6024 刻印

6025 刻印



第 231 図 レンガ (文字・刻印)



第 232 図 レンガ (刻印ほか)



6036

6037

6036

6039



6037



6038



6039



6040



6041

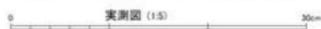


6042



6043

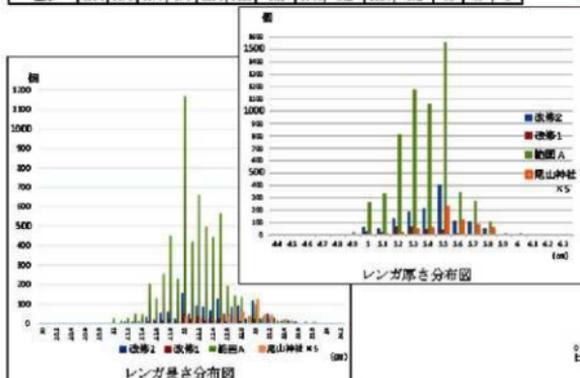
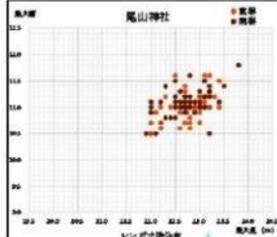
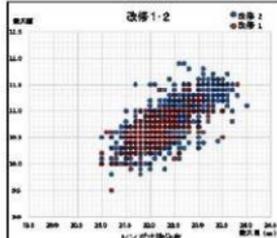
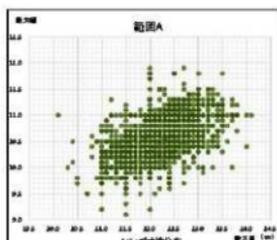
凹み部分拡大



第 233 図 レンガ (線状凹み)

第57表 レンガ集計表

判	高数	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	縁状 回割	(比割)	長手 割	(比割)	長手 端割	(比割)	加印 E1	加印 X	文字
A1	477	22.5	10.9	6.4	2368	112	23%	76	16%	151	40%	0	0	0
A2	252	22.2	10.7	6.3	2178	71	28%	97	26%	142	52%	0	0	1
A	4	22.6	10.9	6.5	2241	9	0%	1	25%	6	9%	1	0	0
B1	953	22.1	10.6	6.3	2388	49	14%	74	21%	119	34%	3	4	0
B2	280	22.5	10.9	6.5	2326	31	12%	24	10%	62	25%	0	0	0
B	214	22.5	10.7	6.4	2369	27	13%	7	2%	16	6%	2	0	0
C1	826	22.2	10.6	6.5	2231	50	22%	201	36%	264	54%	15	4	1
C2	319	22.2	10.6	6.4	2317	41	13%	108	30%	224	72%	7	7	2
C	29	22.8	10.7	6.6	2252	1	3%	1	2%	4	14%	22	7	0
D	476	22.1	10.6	6.4	2180	60	19%	60	16%	222	47%	9	10	0
D1	261	22.2	10.6	6.4	2230	50	20%	28	11%	92	37%	0	3	0
D2	136	22.4	10.6	6.5	2161	19	14%	16	12%	32	24%	7	0	0
E	22	22.8	10.6	6.6	2256	0	0%	1	6%	2	9%	14	8	0
F	19	22.3	10.9	6.4	2203	0	0%	0	0%	3	16%	0	0	0
G	196	22.1	10.6	6.5	2236	22	11%	28	14%	66	34%	8	4	1
H	113	22.1	10.6	6.5	2217	16	14%	8	7%	46	41%	5	0	0
I	169	22.9	10.8	6.4	2217	27	14%	12	6%	61	31%	0	0	0
J	114	22.1	10.6	6.5	2204	12	10%	3	2%	50	43%	1	2	0
K	197	22.1	10.7	6.5	2266	16	8%	1	3%	15	8%	0	6	0
L	64	22.9	10.9	6.5	2294	4	6%	0	0%	0	0%	0	1	0
M	100	22.1	10.7	6.6	2287	17	17%	17	17%	13	13%	0	0	0
N	79	22.9	10.6	6.9	2282	29	37%	24	30%	31	39%	1	1	0
O	23	22.2	10.6	6.3	2087	7	30%	1	4%	11	48%	0	0	0
P	301	22.1	10.7	6.3	2243	68	23%	101	34%	70	23%	0	0	0
Q	336	22.2	10.7	6.4	2272	36	29%	119	33%	203	78%	0	0	2
R	399	22.3	10.6	6.4	2377	71	18%	94	21%	175	44%	0	0	0
S1	325	22.3	10.7	6.3	2204	101	31%	161	50%	207	64%	0	0	0
S2	118	22.3	10.6	6.3	2481	9	6%	1	1%	3	3%	0	0	0
T	214	22.1	10.7	6.3	2261	40	19%	71	32%	61	29%	0	0	0
W	428	22.1	10.7	6.3	2264	45	11%	16	4%	19	4%	0	0	0
Y	372	22.1	10.7	6.3	2288	57	15%	20	7%	28	7%	0	0	0
W1	171	22.1	10.7	6.3	2240	25	15%	12	7%	44	26%	0	0	1
W2	967	22.2	10.7	6.3	2277	222	23%	456	46%	561	58%	0	0	1
X	185	22.9	10.6	6.4	2269	25	14%	9	5%	31	17%	0	0	0
Y	149	22.2	10.6	6.3	2264	4	4%	13	5%	1	3%	0	0	0
Z	107	22.3	10.8	6.4	2458	12	17%	3	2%	4	4%	0	0	0
笠間神社	91	22.3	10.9	6.5	-	18	21%	31	34%	33	36%	0	0	0
宿務中司	128	22.7	10.9	6.5	2261	-	-	-	-	-	-	0	0	0
宿務中司	130	22.5	10.9	6.5	2484	26	20%	28	21%	61	47%	0	2	0
宿務中司 上部	50	22.4	10.8	6.4	2278	5	10%	7	14%	2	4%	0	0	0
W1 内蔵	4E	-	10.8	6.4	-	-	-	-	-	-	-	1	0	0
宿務	8	22.6	11.1	6.4	2271	3	38%	0	0%	2	25%	0	0	0
W 基礎埋込部	14	22.5	10.8	6.4	2492	3	21%	1	7%	3	21%	0	0	0
宿務上部埋込	19	22.1	10.7	6.3	1942	4	4%	2	2%	6	30%	0	0	0
その他	4	21.7	10.6	6.5	1987	1	25%	0	0%	1	25%	2	0	0
全体	8994	22.3	10.7	6.4	2294	1488	16%	2044	23%	3324	37%	96	59	9



第234図 レンガ出土位置・分布図

2) 尾山神社本殿の玉垣のレンガ

鼠多門に隣接する金谷出丸には、明治6年(1873)に尾山神社が建立される。同じ頃、本殿の周囲に塀が設けられたとされる(「尾山神社誌」(1973)・「尾山神社神門保存修理工事報告書」(2003))。また同書では金沢産のレンガが使用されたとの言い伝えが紹介される。平成30年10月に本殿屋根の工事等に伴い、塀の一部を解体する工事が行われた。旧監獄署レンガとの比較検討のため、解体したレンガの内、その一部について計測・観察を行った。計測に当たっては尾山神社・金沢市文化財保護課・松浦建設の協力を得た。計測点数は119点(内、観察88点)である。

レンガ塀の積み方については、現状では南塀は外面が全て長手積み。内面は東端下部がイギリス積みで、改修痕跡を境に東端上部が長手積みとなっている。東塀、北塀は、内外面ともイギリス積みとなっている。よって、南塀の長手積み部分が新相を呈すと考えられる。神社誌によると、明治13年に南方のレンガ塀が崩壊、明治14年に本殿後のレンガ塀が崩壊、との記事があり、雪害等による倒壊で、度々改修を受けているものと考えられる。

6044には刻印状の凹みがあるが、意図的なものか不明確。6045の線状凹みは幅2mm前後でV字状に施されている。6046は長手に褶曲した皺がある。これにより判明した β 面も平滑である。6048は長手に横方向の重ね焼き痕が両面にある。2本と半分のレンガが重ねられている。

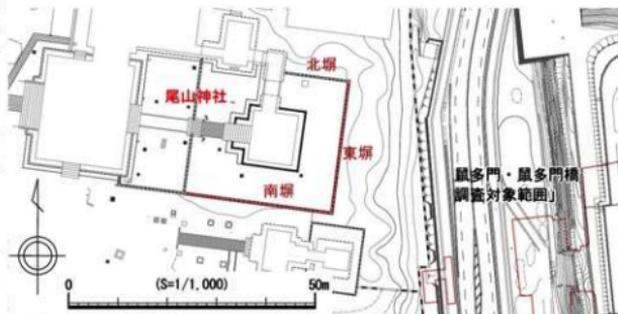
全体を通してみると、寸法は第234図のとおりである。南・東塀で差はほとんどない。旧監獄署資料と比較して厚さは差がないが、長さ・幅が大きい。旧大阪府庁舎跡でも明治初期のものは、大正期のものより長さが長く共通する。また、平にハケやナデ調整痕が観察でき、全て手抜き成形であることがわかる。また、平は両面とも丁寧に、平滑に調整されており、 α 面と β 面の区別がつきにくく、これも庁舎跡の明治初期のレンガと共通する。線状凹みは全体の約1割程度で確認された。長手の褶曲した皺はナデで消されているためか確認例は少数であった。長手に見られる重ね焼きは全体で38点、約5割の資料で確認している。焼成は非常に良好かつ硬質で、全体の約8割が赤や暗赤褐色を呈す。同色のレンガは、旧監獄署資料では約4割にとどまる。

目地材は、現状では東塀、南塀とも外面表層に厚さ3~5mm白色の化粧材が施されている。その内部に灰色の目地材が充填されている。東塀の目地材について元素マッピング分析を行ったところ、白色のものは、漆喰モルタル、灰色のものはセメントモルタルとの結果が出されている。

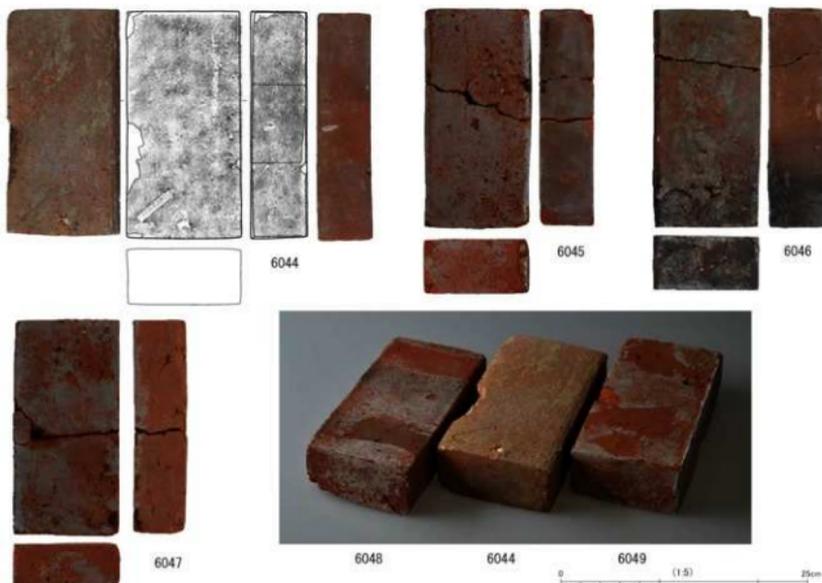
3) レンガまとめ

旧監獄署・尾山神社レンガは、全て手抜き成形であった。機械抜き成形に見られる縮縮状の痕跡は確認されなかった。

α 面・ β 面で平を区別したが、基本的には型枠に粘土を詰め込む際の下面が α 面、上面が β 面と考えられる。粘土を詰め込んだ際、上部からの押し込みで粘土下部が直方体に近い形に仕上がると想定され、 α 面の平滑さがこれに相当する。一方上面は、はみ出た粘土を切り取る際、表面が緩く



第 235 図 尾山神社レンガ調査 位置図 (S=1/1000)



第236図 尾山神社レンガ

波打つ事が想定され(北山2012)、 β 面の状況がこれに相当する。

粘土の詰め込みについては、A～Cの方法等が想定されている。Aは庁舎跡で確認されたもので、まずL字又は凹字状に粘土を詰め、角や辺を押し込んだ後、凹んだ中央部を粘土で充填させるものである。線状凹みは、粘土の接合部に対応するものがある(第232図)。Bは旧神戸外国人居留地遺跡(2011)で確認されたもので、型枠内の中央部に原土を置き、最後に四隅に押し込んでいくものである。Cは塊状にした原土を型枠に叩き込むものである(水野1999)。Aのように2段階で粘土を充填する方法は角や辺に、しっかり粘土を押し込められるという利点がある。旧監獄署レンガの一部について断面観察したところ、粘土の接合線が不明確なものが多かったが、6035のように凹状に粘土の詰め込みが確認できるもの(A方法)が10点確認できた。内6点は粘土の接合部が線状凹みに連続する。また6034のように凸状な断面形をとるものもあり、B又はC方法に近い製作が窺える。粘土詰め込み方法も複数存在することが想定される。

線状凹みについては、①粘土の接合部(府庁舎跡)、②布圧痕(旧神戸外国人居留地遺跡)、③型枠を避けて調整具を走らせた結果とする藤原(秋枝・藤原・杉本1999)などの考え方があり。旧監獄署資料では①を少数確認した他、③の類例としては、6043のようにハケ調整の際、工具の端部が深く入った例があり、線状凹み資料の内約100点はこれと同類と確認した。しかし、線状凹みのほとんどが上面の β 面にあることから、余分な粘土を切り取る際の工具痕の可能性もある。ただし、6038のように皺状のものは圧痕の可能性があり、凹みの成因については複数あるものと推定される。

レンガ寸法の明治期から大正期にかけての大きな流れは、厚さが次第に増し、逆に長さ、幅を減じていく(水野1999)。明治初期のレンガを含む尾山神社資料の寸法はこの流れに合う。旧監獄署資料は改修により逆にレンガが大型化している。ただし、線状凹みなどの要素は引き続き持っている。同じく大

型のC5溜桁のレンガは、仕上げは丁寧で α 面、 β 面が区別しにくい。

以上、尾山神社資料に関しては、明治初期レンガの特徴を持っており、今後、同時期資料との比較検討により、評価していくべきと考えられる。旧監獄署資料は、多くの点で関西方面のレンガと関係が深いことを確認した。この点、監獄署が建築される前年の明治31年(1898)に、鉄道(北陸線)が金沢まで開通したことが大きく関わっている可能性があり、今後の課題と考えられる。

第58表 レンガ総括表

列	点数	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	縦状 凹凸	(比率)	長手縦 凹凸	(比率)
尾山神社	116	22.8	11.0	5.5	2213	9	* 12%	5	* 6%
期間 A	5976	22.2	10.7	5.4	2272	1051	18%	1509	25%
改修 1	289	22.2	10.7	5.3	2374	37	13%	13	4%
改修 2	1325	22.4	10.9	5.4	2363	241	18%	196	15%
C5溜桁	130	22.5	10.9	5.5	2484	26	20%	28	22%
旧監獄署全体	8994	22.2	10.7	5.4	2294	1588	18%	2044	23%

* 縦状凹凸は観察を行った78点中、長手縦は89点中の比率

第59表 レンガ観察表

列	報告 番号	実測番号	産地等・出土層位	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	色調	成形	平凸	長手縦	縦状 凹凸	長手重 凸凹凸	備考		
230	6013	1095	C1基礎 №87	22.5	10.0	5.6	2590	D	手 A	凸	縦	縦	横	朱色(染付) 上巻品、「七角凹口(1内)」 B面に工具痕多数、長手正面、分析試料№2		
230	6014	1099	Q基礎 №138	22.6	11.2	5.6	2114	A	手 A	凸	縦	縦	横	「羽溝」?、小口正面?		
230	6015	1093	W1基礎 下から5段目	22.0	10.8	5.5	1810	B	手 A	-	-	縦	横	「墨溝」?、小口正面?		
230	6016	1091	G基礎 下から2段目	22.4	11.1	5.9	2090	C	手 A	-	-	-	-	「墨溝」「三凸」、墨痕、小口正面		
230	6017	1096	C1基礎 下1~2 №39	23.0	11.5	5.5	2300	A	手 A	-	-	-	-	割傷「吉田」、小口正面		
230	6018	1094	Q2基礎 下から2段目	22.7	11.5	5.6	2000	A	手 A	凸	-	横	2	割傷「木村」又は「森」、互利金の人が入り込んだ、 小口正面		
230	6019	1097	C1基礎 №107	22.5	11.0	5.8	2150	D	手 A	-	-	-	-	割傷「木村」又は「森」、長手正面		
231	6020	1092	G基礎 下から1段目	22.2	10.9	5.4	2146	C	手 A	凸	縦	縦	横	割傷「八木田路」「足利郡 福井」、長手正面、 分析試料№1		
231	6021	1098	A2基礎 №257	22.6	11.1	5.5	2170	B	手 A	凸	縦	縦	横	割傷「八木田路」、長手正面、分析試料№3		
231	6022	1093	C1基礎 下から6段目	24.0	11.0	6.0	3410	C	手 A	-	-	-	-	有 割傷「E」、小口正面、B5・C5?」 平と小口に割傷「E」、長手正面、分析試料 №4 B5・C5?」		
231	6023	1095	C1基礎 下から2段目	(18.1)	11.1	6.1	(1640)	C	手 A	-	-	-	-	有 割傷「E」、長手正面、分析試料 №5		
231	6024	1091	C1基礎 下から3段目	23.1	10.8	5.6	2238	B	手 A	-	-	-	-	割傷「E」、小口正面、分析試料№5		
231	6025	1094	E基礎 下から4段目	23.4	11.0	6.3	2325	A	手 A	-	-	縦	横	割傷「E」、小口正面		
232	6026	1092	E基礎 下から5段目	22.0	10.1	5.9	1980	B	手 A	-	-	-	-	有 割傷「X」、長手正面等、H4・C4?」 割傷「X」、小口に墨痕、小口正面、分析試 料№6、C4・C5?」		
232	6027	1091	H1基礎 下から3段目	21.5	11.2	5.8	2120	C	手 A	-	-	-	-	有 割傷「X」、小口に墨痕、小口正面、分析試 料№6、C4・C5?」		
232	6028	1092	E基礎 下から5段目	22.3	9.7	5.2	-	D	手 A	凸	-	縦・横	横	割傷「X」、自磨材を分析、分析試料№10、 片割に磨きあり、小口正面		
232	6029	1093	E基礎 下から2段目	23.0	10.5	5.4	-	C	手 A	凸	縦	縦・横	横	割傷「X」、分析試料№7		
232	6030	1094	Q2基礎 下1~2 №211	22.2	10.7	5.5	2060	C	手 A	-	-	縦	横	2半平に斜行の工具痕		
232	6031	1093	C1基礎 下1~2 №101	22.4	10.9	5.8	2095	C	手 A	-	-	横	3	平面上に凹状の調整痕、小口正面?		
232	6032	1093	C1基礎 下1~2 №96	22.0	10.9	5.7	2065	C	手 A	-	-	横	2	平面上に幅広浅凹の凹痕?、小口正面		
232	6033	1092	S1基礎 №151	22.2	10.9	5.6	2130	B	手 A	凸	-	-	-	有 凹部の沈着物、小口正面		
232	6034	1092	区画 4 №10	16.3	10.9	5.1	1385	B	手 A	凸	-	-	-	横	2半平	
232	6035	1093	W1基礎 下1~2 №4	(12.0)	10.6	5.25	1063	C	手 A	凸	-	-	-	-	横	2半平
232	6036	1095	S1基礎 下1~2 №138	22.2	10.8	5.6	2030	B	手 A	凸	縦	縦	横	有 縦割り		
232	6037	1091	Q2基礎 下1~2 №186	22.6	10.6	5.4	2160	D	手 A	凸	縦	縦	横	有 長手正面		
233	6038	1094	Q2基礎 №698	22.6	11.0	5.8	2135	A	手 A	凸	縦	縦	横	有 縦割り		
233	6039	1092	A1基礎 №292	22.8	11.1	5.6	2000	C	手 A	-	-	縦	横	3 長手正面		
233	6040	1092	S1基礎 №60	23.0	11.2	5.5	2300	C	手 A	凸	縦	縦	横	縦割りを境にして両面の方向異なる、長手正面		
233	6041	1092	Q2基礎 下1~2 №173	22.5	10.9	5.6	2025	B	手 A	凸	縦	縦	横	2 小口正面		
233	6042	1092	Q2基礎 №678	22.4	10.9	5.6	2140	C	手 A	凸	縦	縦	横	縦割りの中に横筋あり、2cm以上の縦割り、 長手正面		
233	6043	1093	S1基礎 №116	22.0	10.7	5.5	2195	C	手 A	-	-	縦	横	2 工具痕が凹み、縦割りになる、小口正面		
236	6044	1093	尾山神社 南側39	23.1	11.0	5.5	2230	D	手 A	有	-	-	-	分析試料№8 割傷状の凹みあり「一」か 長手正面		
236	6045	1092	尾山神社 東側10-9内側	23.1	11.1	5.7	2150	D	手 A	-	-	縦	-	長手正面		
236	6046	1092	尾山神社 南側19内側	23.5	11.4	5.7	2295	D	手 A	-	-	-	-	長手正面		
236	6047	1092	尾山神社 東側11-6内側	23.3	11.2	5.6	2200	C	手 A	凸	-	-	-	長手正面 横筋は凸状の粗土詰め込みか		
236	6048	1092	尾山神社 東側6-1内側	22.7	10.9	5.5	2165	C	手 A	凸	-	横	-	平に5mm程度の凹部の工具痕2個あり		
236	6049	1092	尾山神社 東側13-7内側	23.0	11.0	5.5	-	C	手 A	-	-	縦	-	長手正面		

色調 A: 橙色、B: 明赤褐色、C: 赤、D: 暗赤褐色 成形 手: 手抜き成形 平ハケ A: 平の両面をハケ又はナゲ調整
長手縦 凸: β 面を上面にした状態での褶曲の方向 縦状凹凸 縦: 縦状 横: 横状 縦: 縦状
長手重凸焼き 縦: 長軸方向 横: 短軸方向 数字は重なっている本数 2半は2本と半分 () は遺存痕

(7) 腰瓦について

鼠多門等を写した明治初年の写真(第247図)を見ると、鼠多門はもちろんのこと、その両脇にあった土蔵の壁面も海鼠壁で、その間にあった二重塀もそうであった。

今回の調査では、海鼠壁に使用される「腰瓦」がまとめて出土した。腰瓦は、斜路の埋土中からも出土しているが、近代の瓦敷遺構や番所遺構の東側で検出した近代の土坑内に多量に廃棄されていた。その腰瓦を観察したところ、破片が大きく、被熱も受けていないことから、鼠多門が焼失する前に、鼠多門や土蔵の海鼠壁から外され、瓦敷遺構として利用されたり、廃棄されたものと考えられる。

第60表は、未実測の腰瓦についてその四辺の中央に設けられている凹みをも、第237図の中央凹分類表に従ってその破片数と重量について計測したものである。参考に、実測した個体数を右端に示した。A類が最も多く、続いてD類、C類、B類の順になる。実測した個体数についても同様な傾向がうかがえる。未実測品の個体数は、破片数を単純に4で割った値である。両方を足すと477枚となる。腰瓦として分類した重量は1,465kgで、384枚で割ると3.81kgとなるので腰瓦1枚の重量よりも若干重い、ある程度量が多く個体識別が難しい場合に、単純に重量を計測しても腰瓦のおよその枚数は求めることが可能と考えられる。ちなみに477枚という数字は、鼠多門の復元に使用された1,290枚には足りない数量である。

A類やB類は、平面形状が半円形となり、断面の形状で類別しているものである。いずれも円筒形の工具を使用して粘土を取り除くが、A類はその工具の先端部の痕跡が腰瓦に残る。B類はそれがみられないという違いがある。C類は方形の工具を用いて粘土を取り除いているものとみられるが、方形の凹みの周囲がさらに円形に若干凹んでいるという特徴があり、調整が丁寧である。D類は粘土を取り除くのではなく、先端の円いへら状の工具で凹みを作っている。丁寧さという観点から言えば、C類・A類、B類、D類という順に生産年代を想定することもできる。消費年代ということ言えば、A～D類のすべてが、廃棄土坑内から一括で出土しているので、おそらく同時に使われていたとみられる。このことは、腰瓦の両面を使用しているものも確認できることから言えそうで、日に当たらない部分は生産当時の黒色の色を保っており、裏面を使用することで、新品と色調を合わせているものとみられる。

刻印についてみると、C類として分類したもののなかで、刻印が確認できたものについては、ほぼ例外なく「塀」の刻印となっている。「塀」刻印の腰瓦が大阪の堺で産されたものとすると、今回の計測値では約20%を占め、ある時期大量に搬入されたものとみられ、成形・整形の丁寧さや再利用率も高い印象があるので、最初の鼠多門、土蔵、二重塀に使用された海鼠壁の腰瓦の一つと推定する。

今回の調査で出土した腰瓦のサイズについてもみてみると、大きく3つに分けることが可能である(第237図)。いずれもほぼ正方形で、Lサイズは約31cm、Mサイズは約28.5cm、Sサイズは約26cmで、厚さは2cm前後となっている。海鼠漆喰の裏面には腰瓦と接合していた痕跡等が認められる。腰瓦の痕跡と痕跡の間は、ちょうど目地になっていた箇所とみられ、3.5cmの幅を測る。明治初頭の写真から、鼠多門の正面側の横方向に使用された腰瓦の数は69.5枚を数え、鼠多門の長さは22.483mであることから、海鼠漆喰の間隔は32.4cmとなる。目地の幅を満たすMサイズの腰瓦が使用されていた可能性が高い。

調査では、海鼠壁の隅に使われた腰瓦も一定量出土している。現存している石川門や三十間長屋は、隅に金属板が取り付けられているが、鼠多門や土蔵は腰瓦が覆い、柱が見えない大壁構造となっている。宝暦9年(1759)の大火で焼失していないとされる鼠多門は、江戸前期の創建段階からの古い形態が残ったのかもしれない。ただし、C類の凹みは、建物の隅に用いられた腰瓦には存在しない。創建の段階から、凹みの種類は一つではなく混合していた可能性もある。

第60表 腰瓦計測表

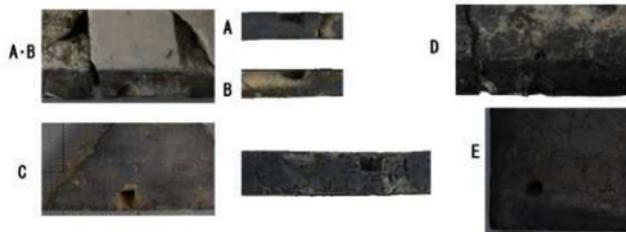
分類	破片数	個体数	重量(kg)	実測個体数
A	550	138	159.770	26
B	227	57	54.867	17
C	337	85	79.226	18
D	408	102	121.118	30
E	3	1	0.674	1
その他	3	1	0.352	1
不明	9,011		1,049.518	
総計	10,539	384	1,465.525	93

腰瓦備辺中央凹部分類表

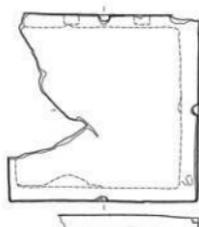
大分類(平面系)	小分類(断面形)	特徴
A 円形凹		底面が平らになっている ※二次調整するものも含む
B 円形凹		底面を平らにしない
C 方形凹		底面が平らに調整されている ※「塙」の刻印が多い
D 縦長凹		小型で断面は強い屈曲を示す 平面形状で細分できるが、今回は見逃している。
E 円形貫通(取付)		円形あるいは方形の孔、側縁ではなく中央による
その他	上記に当てはまらない特殊なもの	



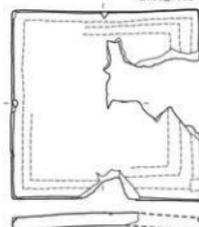
海風凌壊の表面



L サイズ

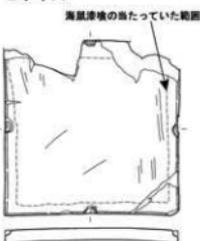


30.5×30.7 cm 厚さ 2.3 cm
2196_T106

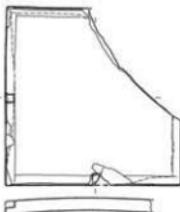


30.8×30.8 cm 厚さ 2.1 cm
2002_T005

M サイズ

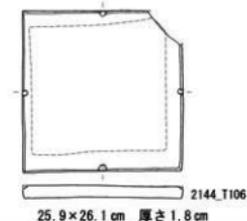


28.2×28.2 cm 厚さ 1.9 cm
2034_T105

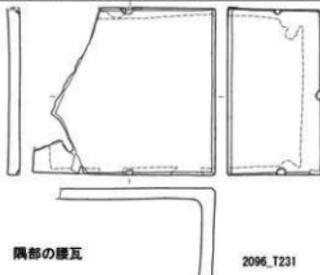


28.8×28.8 cm 厚さ 2.0 cm
2139_T103

S サイズ



2144_T106
25.9×26.1 cm 厚さ 1.8 cm



隅部の腰瓦 2096_T231
縦: 27.5cm 横: 29.7 cm 縦: 15.4cm 厚さ 2.0 cm

※隅部に使われていた腰瓦。縦幅は27.5cmでMサイズに近い。

図のスケールはすべてS=1/8

第 237 図 腰瓦の凹みの分類とサイズ

(8) 土管

前節で明治32年に建設された監獄署建物等に付随する排水遺構として、排水枡と土管があったことを報告した。土管については、完形で出土したものの18本を取り上げ、その一部について写真計測を実施した。その成果についてここで報告する。

取り上げた18本のうち10本は、鼠多門の開口部を塞いだ、閉塞石垣上部から城外に配水していたもので、枡1の方へ向かって組み合わさって検出したものである。残る8本は、枡6から北方向に延びていたもの4本、東南方向2本、西北1本、西南1本となっている。

枡1に延びていた土管10本のうち4本について、オルツ写真を作成した。1は写真計測から実測図も併せて作成した(第238図1~4)。枡6に接続していた土管については、北方向に延びていたもの2本(第238図6・7)と東南方向に延びていた1本についてオルツ写真を作成し掲載した。

枡1に延びていた10本については、常滑産と考えられる。いずれも全面施釉されているが、受口部と差込部が組み合わさる内面の平坦部については、釉が薄いか掛けられていない。受口部と差込部にはモルタルが残っているものもみられた。枡6から延びているものについては、今回示した5は釉調と形態等から常滑産とみられるが、6・7など残る5本については、常滑以外の産地の可能性もある。

釉については、1~4でも違うように見えるが、焼成温度の微妙な違いによって、釉がしっかりと溶ければ3のような艶のある赤銅色になるが、溶けが悪ければ1のような褐色になるものとみられる。釉薬はベンガラに炭酸鉛を混合したもので、鉛を混ぜることによって溶ける温度が下がるので、土管の内側に用いられたのだという(柿田1994)。鉛が混ぜられているかは不明だが、色調から言えば、いわゆる鉄釉ということになる。ほかの6本についてもほぼ同じである。枡6に接続する土管もおおむね同じような釉だが、6はどれよりも艶があり違うかもしれない。受口部の上端に重ね焼きの痕跡が見られるなど、少し異なる。2~4は受け口の上端面に刻印があり、それぞれ2は「ㄇキ」の下に「イ」、3は「ㄇキ」の下に「ロ」、4は「〇」のなかに不明であるが文字を入れている。

実測図を作成した1については、受口の外側は28.5cm、内側は23cmを測る。長さは66.7cmを測り、受口部は縦方向に6.2cmを測る。差込口の直径は20.4cmを測る。受口内面と下の差込口には「くし目」が8本入れられている。くし目の全体の幅は4.2cmとなっている。差込口の下端から上に32.4cmの箇所は接合痕跡が見られる。これは2本の筒をその部分で接合した痕跡で、タタラ作りといわれる。

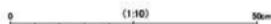
その方法は、タタラ粘土板を内型に巻いて筒状にし、ある程度乾燥させたのちに2本を重ねて接合するものである(内藤2006)。1~4の土管の外側には、対角に縦方向の接合痕跡が残るので、タタラ粘土板を2枚使用して、内型に巻いて筒を作ったと考えられる。この痕跡は、差込口から受け口の方までほぼ繋がるので、接合痕跡を目当てとして合わせているようにも見える。内側は幅の広い工具で円を描くように調整をしてあり、内型の痕跡はよく分からない。外側にはヘラ状工具を使って縦方向に整形を行っている。これらの特徴は、枡1に延びていた10本で共通する。受け口の大きさも外側を測ると28.2~29.9cmとなりばらつきが少ない。長さは63.7~66.9cmとなっている。枡6に接続するものについては、上下の接合痕跡もタタラ板の接合痕跡も分からない。別の方法で作っている可能性もある(内藤2006)。長さに関しては、5の59cmを除けば64.1~65.7cmと枡1に延びる10本とほぼ変わらない。受口部の口径が16~21.1cm、差込口の口径が15~18.2cmと若干小さい。

枡1に延びていた10本については、「くし目」が上部の受け口の内側と下部の差し口の外側に付けられている。「くし目」は、土管の接合部分の接着を良くするために入れられたもので、出土した土管の中には受け口の部分にモルタルが残っているものもある。枡6に接続するものには5のみにみられる。

「くし目」が常滑製品に付けられるようになったのは、明治20年頃のこととされ(柿田1994)、土管の設置が明治32年以降と推定できるので、それとも合致する。



斜路埋土上位層で検出された、橋1から玉泉院丸西面石垣外へ排水のため使用された土管



橋6に接続していた土管



今回の調査で出土した土管（完形品）

第238図 土管オルソ写真等

(9) 算用数字染付磁器について

金沢城玉泉院九庭園整備に伴う広場整備において、平成25年3月に植栽工事に伴う立会調査を実施した。その際、染付で算用数字を書いた磁器碗・皿が多量に出土した。工事で重機を用いて、地表面から約90cm程度掘削したが、遺物はもう少し上位のレベルから掘削土と共に出土している。掘削停止した面では、遺物を多量に含む円形プランの土坑が確認できたことから、さらに下方に遺構が延びると想定されたが、必要以上の掘削は行わず立会調査を終了した。遺物の出土状況は、同一器種を重ねて口縁部を上にした状態であった。壊れて廃棄されたというよりは、使用しなくなったので廃棄したのではないかとと思われる。遺物の出土地点を図面上に落としたのが第239図となる。これは、現況図に明治15年に設置された旧金沢陸軍監獄署の建物の位置を入れたものである。出土した地点は、建物の前面ないし下になることから、監獄署設置以前に廃棄したものではないかとみている。

算用数字を入れた磁器の碗・皿は、金沢城跡では染付のほかに、赤や青で上絵付をするものも存在する(第240図)。立会調査で出土した磁器は、8・12・14・15の碗については青の上絵付となるが、そのほかは染付で、6・23については染付が流れていることから、生掛けではないかと推測している。

算用数字が入れている碗・皿で、染付・上絵付ともに主体となるのは、外面と内面に圏線を入れ、それを1〜3本1組の縦線で三分割し、その区画の中に1〜4の算用数字1種類を入れるものである。見込みの様は、あるものもないものがある。今回報告しているものは、縦線1本では1〜4、縦線2本では1〜3、縦線3本では4の組み合わせになっている。この組み合わせが意図しているところはまだよく分かっていないが、明治の軍制では1大隊は4中隊からなるので、それを表している可能性もある。

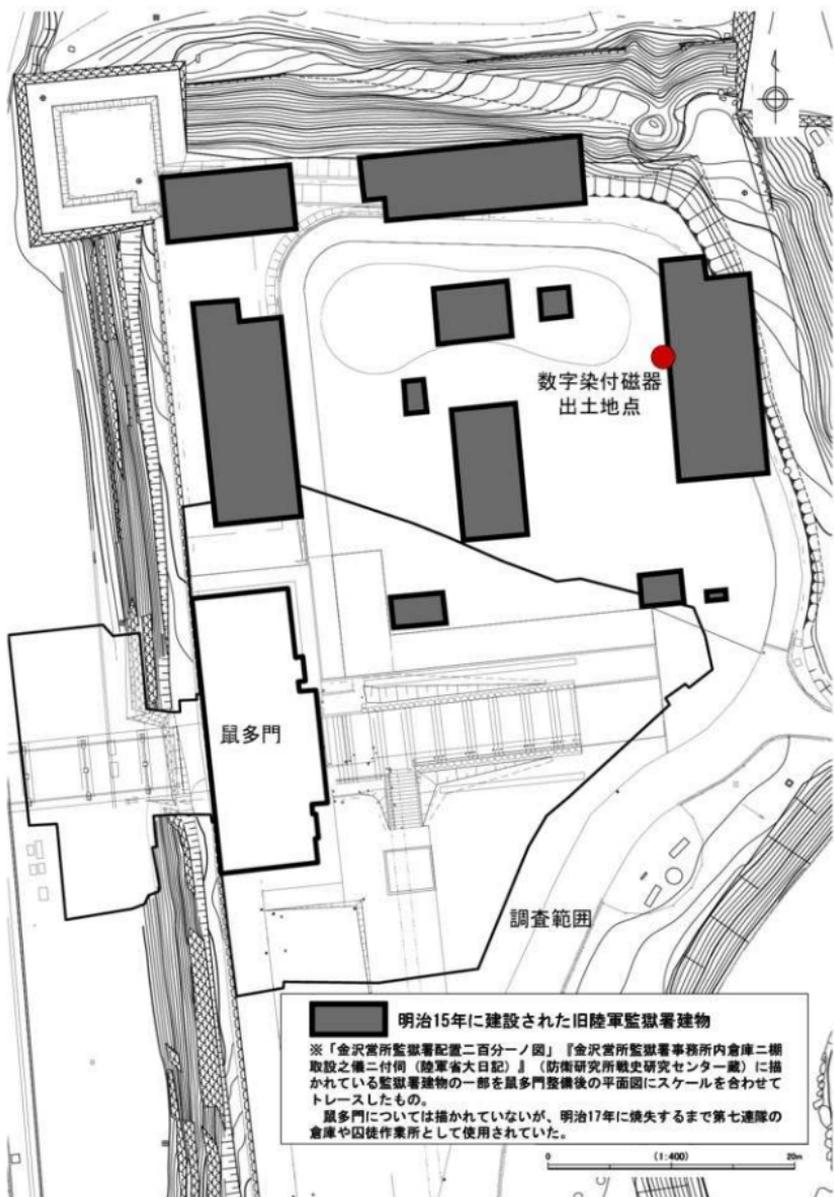
出土した碗・皿についてその形態をみると、碗は口縁端部が外反する端反り形で、高台は削り出しによる輪高台となっている。高台のどの部分が設置するかで分類すると、外端接地するものが1〜5、内端接地するものが15となり、それ以外は外端で設置するか内端で設置するかは顕著ではない。高台内を高く削っているものは12〜15で、それ以外は高台の内も外もほぼ同じ高さとなっている。

皿は一タイプで、いずれも体部から口縁部にかけてまっすぐに立ち上がり、口縁端部も外反しない。高台は削り出しによる幅広の輪高台で、外端が接地する。高台の内側は施釉されている。

それぞれの大きさについては、碗は口径が10.4〜11.8cm、底径が4.4〜5.0cm、器高が5.3〜6.0cmを測る。皿は、口径が14.0〜14.8cm、底径が6.4〜7.4cm、器高が3.3〜3.9cmを測る。碗も皿も規格がほぼそろっている。産地はおそらく在地産で再興九谷と推定したが、確証はなく今後の課題である。

鼠多門調査区では斜路埋土から、第240図のような高台内に算用数字を入れたものが出土している。1216は皿で、体部外面に縦方向の区画はあるが、算用数字が入っていない。1139・1140には体部外面に何も入っていない。斜路埋土は明治17年の鼠多門焼失直後のものと考えている。斜路埋土の直上ないし、それ以後の遺構からは第240図下段のような瀬戸・美濃製品に赤を上絵付するものは出土している。斜路埋土中からも、上絵付をされていない瀬戸・美濃製品の碗・皿は多く出土している。立会調査で出土したものにも29や図化していないが碗の口縁部が出土している。

瀬戸・美濃製品に赤上絵付したものから、染付で算用数字を書くものへ変わると考えているが、鼠多門調査区の出土状況から、染付の方が古い可能性も想定しておきたい。二ノ丸菱櫓の調査では、染付製品で焼けた破片が1点出土している(石川県金沢城調査研究所2012b)ので、少なくとも染付をした製品は二ノ丸御殿が焼失した明治14年までには出現している。見込み中央に「〇」が染付されており、今回報告した12と同じである。旧陸軍の部隊が置かれた城は多いが、算用数字を染付ないし上絵付した事例はほとんどなく、当時の本部である名古屋城での出土も知られていないことから、算用数字の意味するところを含めて今後の検討課題である。金沢では墓所の調査で、縦線3本で2を赤上絵付した瀬戸・美濃の皿が出土している(石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター2017)。



第 239 図 算用数字染付磁器出土地点 (S=1/400)



玉泉院丸広場植栽工事



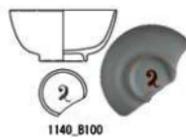
算用数字染付磁器出土状況



1216_B076



1139_B138



1140_B100

斜路埋土から出土した算用数字を上絵付ないし染付した磁器



201204-B023 P037



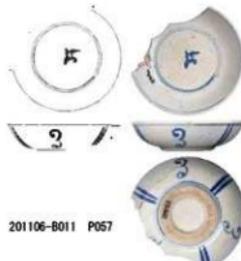
201106-B019 P039



201106-B023 P038



201204-B019 P055

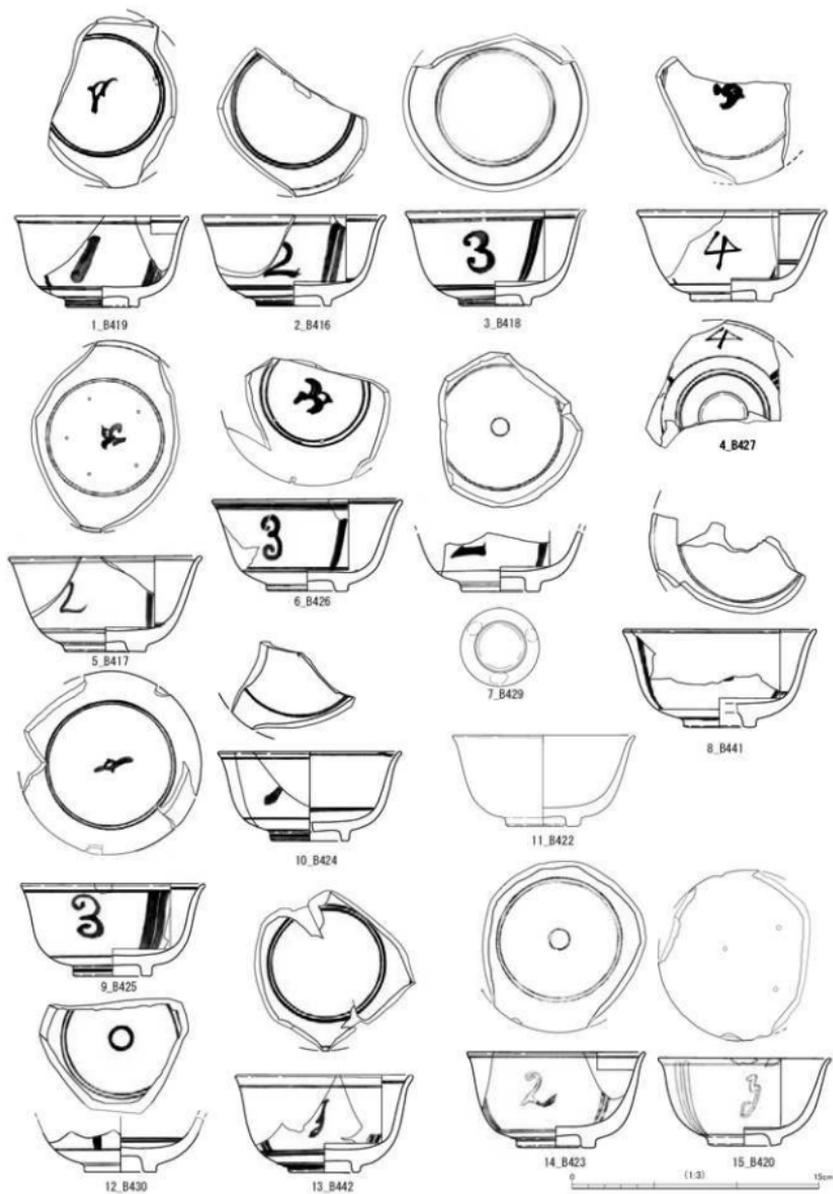


201106-B011 P057

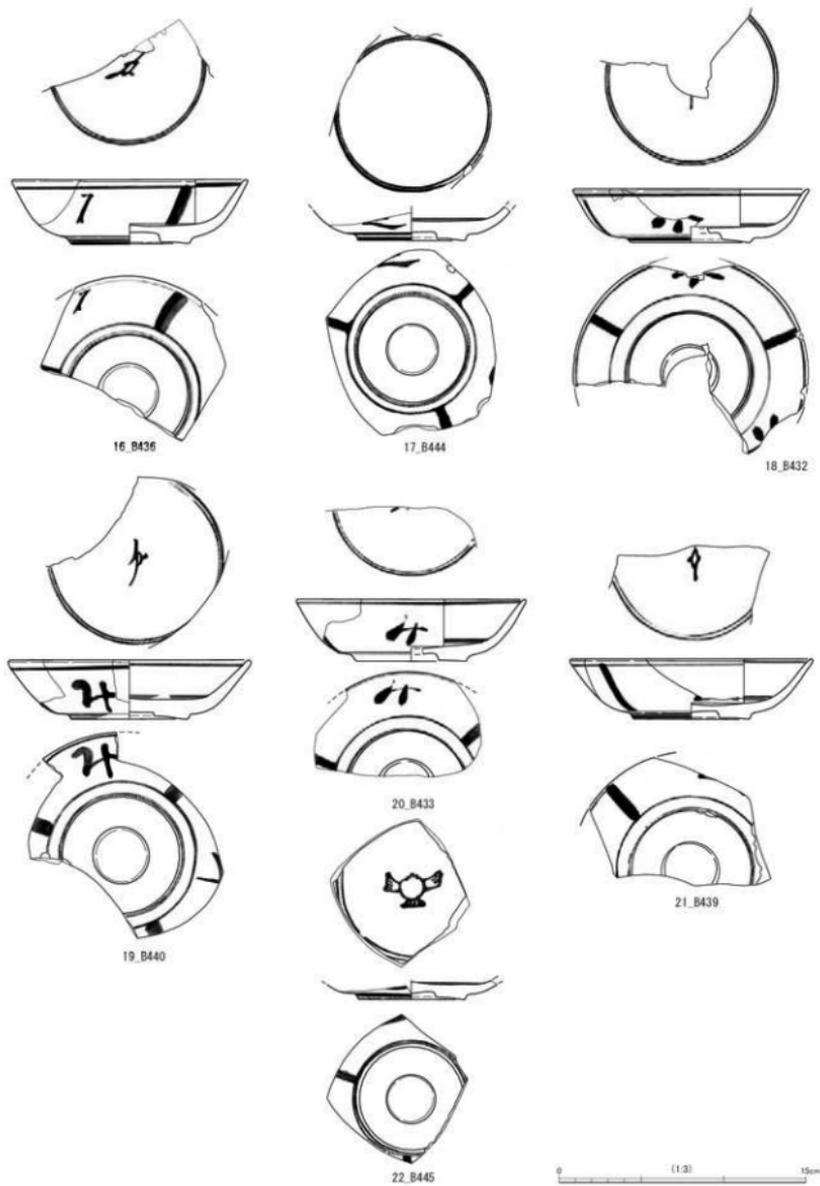
玉泉院丸庭園調査で 色紙短冊積石壇前面から出土した算用数字を上絵付ないし染付した磁器 (石川県金沢城調査研究所 2018d から転載)



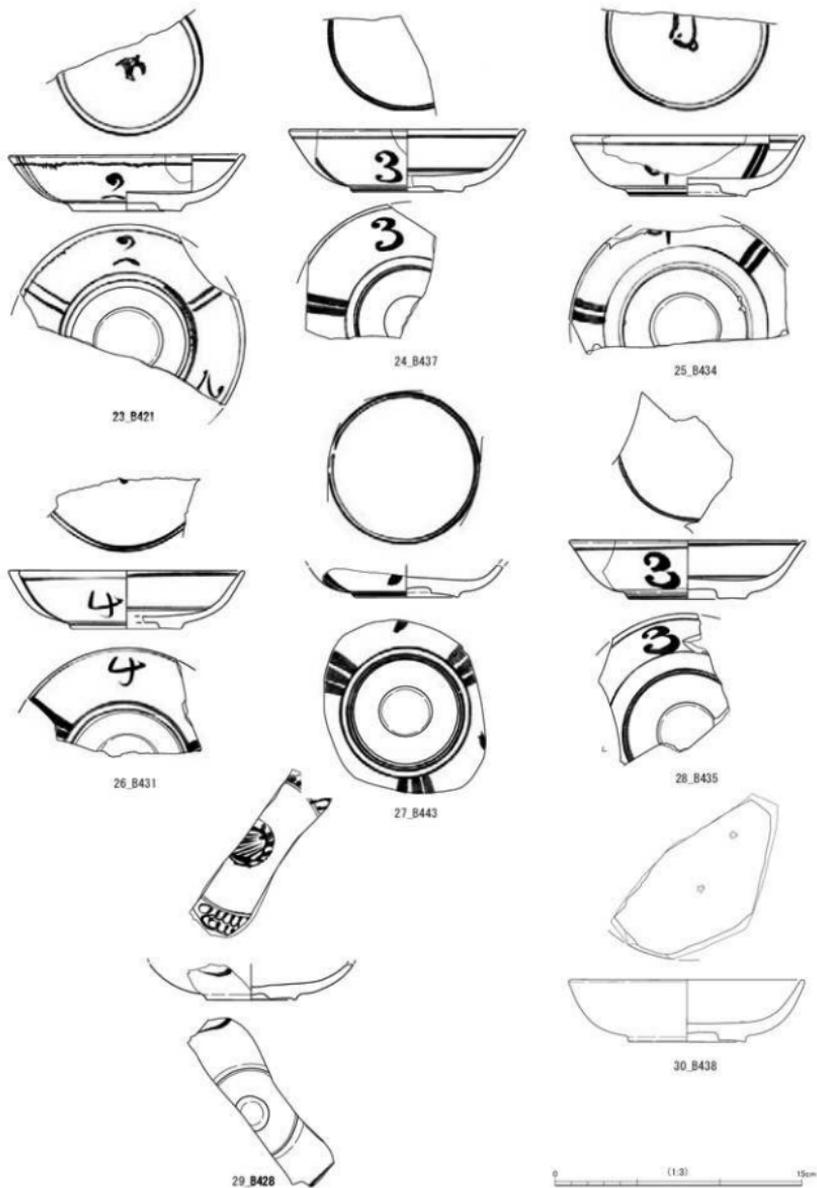
第 240 図 玉泉院丸から出土した算用数字を上絵付ないし染付した磁器



第 241 图 算用数字染付磁器 1



第 242 图 算用数字染付磁器 2



第 243 图 算用数字染付磁器 3



第 244 图 算用数字染付磁器 4



第 245 图 算用数字染付磁器 5

第 61 表 玉泉院九広塲整備立会調査出土遺物 算用数字染付磁器観察表

図版	番号	実測番号	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	底径 (口) ϕ / 12	底径 (底) ϕ / 12	成形・形状	釉薬	装飾等	胎土色調等	形状特徴	産地	年代等	備考
241-244	1	B419	碗	10.6	4.5	5.6	1	12	ロクツ	透明	染付	肌懸白	碗反形、輪高台	西興九谷? 19C末 外周: 磁線6条、磁線2本1組、算用数字「1」 内周: 磁線3条、見込み文		
241-244	2	B416	碗	11.2	4.6	5.6	1	9	ロクツ	透明	染付	肌懸灰白	碗反形、輪高台	西興九谷? 19C末 外周: 磁線6条、磁線2本1組、算用数字「2」 内周: 磁線3条		
241-244	3	B418	碗	11.0	4.4	5.9	8	12	ロクツ	透明	染付	肌懸白	碗反形、輪高台	西興九谷? 19C末 外周: 磁線6条、磁線2本1組、算用数字「3」 内周: 磁線3条 磨付き砂付着		
241-244	4	B427	碗	11.6	5.0	5.6	1	6	ロクツ	透明	染付	肌懸白	碗反形、輪高台	西興九谷? 19C末 外周: 磁線4条、磁線3本1組、算用数字「4」 内周: 磁線3条、見込み文		
241-244	5	B417	碗	11.8	5.0	5.9	2	12	ロクツ	透明	染付	肌懸灰白	碗反形、輪高台	西興九谷? 19C末 外周: 磁線6条、磁線2本1組、算用数字「2」 内周: 磁線3条、見込み文		
241-244	6	B426	碗	11.6	5.0	5.6	3	8	ロクツ	透明	染付(生剥江)	肌懸白	碗反形、輪高台	西興九谷? 19C末 外周: 磁線4条、磁線2本1組、算用数字「3」 内周: 磁線3条、見込み文、ハリ目跡3ヶ所残		
241-244	7	B429	碗		4.8	(3.7)		12	ロクツ	透明、白濁	染付	肌懸灰白	輪高台	西興九谷? 19C末 外周: 磁線3条残、磁線1本1組、算用数字「2」か 内周: 磁線2条残、見込み文、陶灰磨付き砂付着		
241-244	8	B441	碗	11.8	4.4	6.0	1	7	ロクツ	透明、青目入有	上絵(青)	肌懸白	碗反形、輪高台	西興九谷? 19C末 外周: 磁線4条、磁線1本1組、算用数字不明 内周: 磁線3条		
241-244	9	B425	碗	11.2	4.8	5.7	7	12	ロクツ	透明	染付	肌懸白	碗反形、輪高台	西興九谷? 19C末 外周: 磁線2条、磁線2本1組、算用数字「3」 内周: 磁線3条、見込み文		
241-244	10	B424	碗	11.2	4.8	5.5	1	4	ロクツ	透明	染付	肌懸白	碗反形、輪高台	西興九谷? 19C末 外周: 磁線6条、磁線不明、算用数字「1」か 内周: 磁線3条、見込み文		
241-244	11	B422	碗	11.2	4.6	5.6	1	12	ロクツ	透明		肌懸白	碗反形、輪高台	西興九谷? 19C末		
241-244	12	B430	碗		4.4	(3.4)		12	ロクツ	透明	上絵(青)	肌懸灰白	輪高台	西興九谷? 19C末 外周: 磁線3条残、磁線1本1組 内周: 磁線2条残、見込み文		
241-244	13	B442	碗	10.8	4.4	6.0	1	12	ロクツ	透明、ビシボール有	染付	肌懸灰白	碗反形、輪高台	西興九谷? 19C末 外周: 磁線6条、磁線2本1組、算用数字「3」か 内周: 磁線3条 磨付き砂付着		
241-244	14	B423	碗	10.8	4.8	5.9	2	12	ロクツ	透明	染付	肌懸灰白	碗反形、輪高台	西興九谷? 19C末 外周: 磁線5条、磁線2本1組、算用数字「1」 内周: 磁線3条、見込み文		
241-244	15	B420	碗	10.4	4.4	5.3	5	12	ロクツ	透明	上絵(青)	肌懸灰白	碗反形、輪高台	西興九谷? 19C末 外周: 磁線2条、磁線2本1組、算用数字「3」 内周: 磁線3条、見込み文、焼成不全不貫		
242-245	16	B436	皿	14.4	7.4	3.9	2	7	ロクツ	透明	染付	細かい空眼有 肌懸灰白	輪高台	西興九谷? 19C末 外周: 磁線4条、磁線1本1組、算用数字「1」 内周: 磁線3条、見込み文 口唇部釉剥落		
242-245	17	B444	皿		6.6	(2.1)		12	ロクツ	透明、青目入有	染付	肌懸白	輪高台	西興九谷? 19C末 外周: 磁線3条残、磁線1本1組、算用「2」 内周: 磁線2条残 磨付きに削り痕		
242-245	18	B432	皿	14.2	7.3	3.3	5	8	ロクツ	透明	染付	肌懸灰白	輪高台	西興九谷? 19C末 外周: 磁線4条、磁線1本1組、算用数字「4」か 内周: 磁線3条、見込み文 口唇部釉剥落		
242-245	19	B440	皿	14.8	7.2	3.6	1	8	ロクツ	透明、青目入有	染付	肌懸灰白	輪高台	西興九谷? 19C末 外周: 磁線4条、磁線1本1組、算用数字「4」 内周: 磁線3条、見込み文 口唇部釉剥落		
242-245	20	B433	皿	14.0	6.8	3.8	2	5	ロクツ	透明	染付	肌懸白	輪高台	西興九谷? 19C末 外周: 磁線4条、磁線1本1組、算用数字「4」 内周: 磁線3条、見込み文 口唇部釉剥落		
242-245	21	B439	皿	14.8	7.2	3.7	1	6	ロクツ	透明、青目入有	染付	肌懸灰白	輪高台	西興九谷? 19C末 外周: 磁線4条、磁線1本1組、算用数字「2」か 内周: 磁線2条残、見込み文 口唇部釉剥落		
242-245	22	B445	皿		6.6	(1.2)		8	ロクツ	透明、青目入有	染付	肌懸白	輪高台	西興九谷? 19C末 外周: 磁線3条残、磁線1本1組、算用数字「2」か 内周: 磁線2条残、見込み文		
243-245	23	B421	皿	14.4	6.6	3.5	5	7	ロクツ	透明	染付(生剥江)	肌懸白	輪高台	西興九谷? 19C末 外周: 磁線3条、磁線2本1組、算用数字「2」 内周: 磁線3条、見込み文		
243-245	24	B437	皿	14.4	6.8	3.8	2	4	ロクツ	透明	染付	肌懸灰白	輪高台	西興九谷? 19C末 外周: 磁線4条、磁線2本1組、算用数字「3」 内周: 磁線3条 口唇部釉剥落		
243-245	25	B434	皿	14.2	7.2	3.7	2	7	ロクツ	透明、青目入有	染付	肌懸灰白	輪高台	西興九谷? 19C末 外周: 磁線4条、磁線2本1組、算用数字「4」 内周: 磁線3条、見込み文 口唇部釉剥落		
243-245	26	B431	皿	14.4	6.8	3.6	3	5	ロクツ	透明	染付	肌懸灰白	輪高台	西興九谷? 19C末 外周: 磁線3条、磁線2本1組、算用数字「4」 内周: 磁線2条残		
243-245	27	B443	皿		6.4	(2.0)		12	ロクツ	透明	染付(部)	肌懸白	輪高台	西興九谷? 19C末 外周: 磁線3条残、磁線3本1組、算用数字不明 内周: 磁線2条残		
243-245	28	B435	皿	14.4	7.2	3.6	2	5	ロクツ	透明	染付	肌懸灰白	輪高台	西興九谷? 19C末 外周: 磁線4条、算用数字「3」、磁線不明 内周: 磁線3条 口唇部釉剥落		
243-245	29	B428	皿		5.4	(2.2)		5	ロクツ	透明	染付	肌懸灰白	輪高台	西興九谷? 19C末 見込ハハリ目跡2ヶ所残		
243-245	30	B438	皿	14.4	7.2	3.8	1	5	ロクツ	透明	空眼有 灰白	輪高台	西興九谷? 19C末 見込みハハリ目跡2ヶ所残			